

岡本綺堂日記

昭和六年一月—昭和七年十二月

岡本綺堂日記

昭和六年一月～昭和七年十二月

昭和六・七年の岡本綺堂について	横山泰子	2
早稲田大学演劇博物館旧蔵岡本綺堂日記および綺堂日記研究会について	赤井紀美	6
凡例		12
昭和六年		13
昭和七年		147

昭和六・七年の岡本綺堂について

横山泰子

演劇博物館には大正十二（一九二三）年七月から昭和十三（一九三八）年十二月までの岡本綺堂の自筆の日記が所蔵されている（昭和十三年十月～十二月は岡本経一氏の筆）。ノートに縦書きで記されており、一年で一冊、計三十冊ある。関東大震災により多くの蔵書と、それまで書き続けてきた日記を焼失した綺堂だが、震災時に持ち出した荷物のなかనికి書きかけの日記を見つけ、書き継ぐことにしたという。亡くなるまでの十六年間、その日の天気、気温、行動、仕事の進行、面会者などが細かに記されている。大正十二年から昭和五（一九二七）年までの日記は、岡本経一氏が『岡本綺堂日記』『岡本綺堂日記・続』（青蛙房）として、翻刻し出版したが、残りの昭和六（一九三一）年から昭和十三年までの八年間分は未公開・未翻刻である。

日記の未公開部分は、高齢となった綺堂の生活や、当時の劇壇の様子を知る上で貴重な資料である。そこで、岡本綺堂日記に関心のある研究者を中心に「岡本綺堂日記研究会」を組織し、二〇二五年現在日記の全部をデジタル化した。さらに未公開部分の翻刻作業を開始、昭和六・七年分の翻刻を完了して本書を作成する運びとなった。研究会の活動内容と今後の計画は、次章に譲り、昭和六・七年当時の岡本綺堂について簡単に記しておきたい。

明治五（一八七二）年生まれの岡本綺堂は、昭和六年に六十歳となった。翌七（一九三二）年十月に、文壇・劇壇人の発起により還暦祝賀会が開かれた。十月十六日の日記には「震災にも逢ひ、病氣にもかゝつたが、幸に今日まで生きて来て、さらに再び還暦の賀筵を開かれることになったのは、私に取つては実に望外の幸と云はなければならない。いはゆる今昔の感に堪へずとはこれである」と記されている。震災で家財蔵書を失い、多病に苦しんだ五十代を経て、体の衰えに悩まされながらも還暦を迎えられたことへの幸福をかみしめていた時期が綺堂にとつての昭和六・七年であつた。本書収録分の綺堂の人生のトピックとして、注目点を三点挙げておきたい。

① 雑誌「舞台」 岡本綺堂は新人作家の戯曲発表の場を作るべく雑誌「舞台」を創刊した。初号は昭和五年一月であり、昭和六・七年の日記にも雑誌関連の記述が散見される。岡本経一『綺堂年代記』は、当時の雑誌刊行の難しさを述べたうえで「綺堂の統率力と嫩会会員の協力、取分けて額田六福の献身的努力は特筆しておかなければならない」と書いている。昭和六年以降の綺堂日記を丁寧に見えていくことで、岡本綺堂の指導者としての側面や、雑誌編集者としての面が見えてくるであろう。『綺堂年代記』は「綺堂自身としても、自分の雑誌を持つことは予ての希望であつたらしい」「老後に及んで自分の好きな雑誌を作り、依頼原稿でなくて自分の好き勝手な作品を書いてみたいといふ希望が再燃したのかも知れない」とある。綺堂が苦勞をあえて背負い込みながらも、雑誌作りに尽力していた時期の記録として、昭和六・七年の日記を読むことができる。

②

上目黒の別宅 病気がちの綺堂はしばしば転地療養をしていたが、その煩雑さを避けるため、目黒に別宅を持った。落成は昭和七年四月であった。『綺堂年代記』によると、綺堂は普請に興味を持っており、自分で図面を引いて好みの設計を楽しんでいたという。また、園芸が好きで、庭仕事を楽しむ人でもあった。昭和七年の段階では、二拠点居住をしていたが、八（一九三三）年には長年住み慣れた麹町区元園町の住まいを引き払い、目黒に移転する。具体的な転居までの経過が、この頃の日記の記述から読み取ることができるであろう。

③

衰えぬ執筆意欲 昭和三（一九二八）年を境に、綺堂の作品数は少なくなった。本人の老化もあるが、不景気が深刻化し、劇界も混乱して往年の作家が活動しにくい時期になっていた。この頃の綺堂の新作戯曲を挙げておく。昭和六年は「人狼」、「名古屋の清正」、「青蛙神」、七年は「とん平地蔵」、「東京の昔話」、「続編尾伊平八」、「夢」である。この時期の新作は未上演も目立つ。未上演の「青蛙神」を高く評価したのは文芸評論家の東雅夫である。東によれば、「青蛙神」は中国志怪由来の物語のように見えるが、英国の作家ジェイコブズの「猿の手」に基づいているという。そして「日本怪談の名手・綺堂が、西洋怪談を代表する名作の翻案に真正面から取り組んだ」という意味でも、歴史的異義を有する一般といっても過言ではなからう」と述べている（『岡本綺堂怪異小品集 お住の霊』平凡社、二〇二二年 編者解説）。作品数は減ったとしても、品質の高い作品を書くよう、綺堂はつとめていたと思われる。

以上、筆者の視点から三点を挙げた。岡本綺堂日記が多くの読者の目に触れることで、異なる視点で多くの発見がなされるのを期待する。

早稲田大学演劇博物館所蔵岡本綺堂日記および岡本綺堂日記研究会について

赤井紀美

岡本綺堂は明治五年に生まれ、新聞記者を経て劇作家・小説家として活躍。昭和十四年三月に六十八歳で亡くなるまで、劇評や随筆も含め数多くの著作を残した。この綺堂が記した自筆の日記（通称「岡本綺堂日記」）は、綺堂の養子の岡本経一氏より昭和三十九年に早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（以下、演劇博物館）に寄贈された。『早稲田学報』（昭和四十年一月号）に菊池明「演博に寄贈された『岡本綺堂日記』」という短文が日記の画像とともに掲載されており、短いながらも寄贈の経緯などが詳細に記されているため、全文を転載したい。

演劇博物館ではこのたび岡本経一氏から『綺堂日記』のご寄贈を頂いた。綺堂研究には欠くことの出来ないまことに貴重な資料で、そのご好意には全く感謝のほかはない。

経一氏は綺堂の養嗣子で、現在出版社青蛙房の経営者として江戸時代風俗、演劇関係の図書を出版しており、また自ら筆をとって『綺堂年代記』ほかの著書をもつ方である。

この日記は全三十冊、16.7×21.2（cm）の部厚なノートを用い、大正十二年七月から昭和十三年十二月までの十六年間で、ほとんど一日の休みもなくペン書の細字で整然

と書き綴られている。それ以前の分がないのは、勿論関東大震災によるものであって、十七歳からの三十五冊分は惜しくも焼失し、その後書きつがれたものが残ったわけである。

まことにこくめいなもので、その日の天気気温にはじまり、一日のすべての行動——起床、散歩、仕事の進行状況、劇場側との相談、客の出入り、贈答、来信、返信、入浴、就寝まで、いちいちその時刻を付して書きこまれ、それが家族の行動にまで及んでいる。経一氏のお話によると、「実に時間と天気には気をつかっており、自宅の各部屋には時計と寒暖計が置いてあり、毎朝自らそのゼンマイを捲いて歩いた」という。さこそとうなずかれる。

また来信には必ずその場で返事をかく、門下生の作品はすぐに読んで批評と注意を与えて送り返す、人の呼び方——氏、君、さん、呼び捨てなどに知人、友人、女性、門下生の判然たる区別がある。そして他人についての批判がましい記事はただの一行も記されていない。綺堂の勤勉、几帳面、穩健円満な人柄が如実に浮び上っている。このように『綺堂日記』は汲めども尽きない興趣と資料にみちている。今後綺堂の研究はもっと深める必要があるが、その際はこの『綺堂日記』が大いに活用されると信じ、その利用を待っている。

菊池明氏は演劇博物館に長らく勤務された学芸員で、逍遙協会の理事も務めた人物である。岡本綺堂日記寄贈の翌年から、次の通り日記の一部を翻刻公開している。

菊池明「岡本綺堂日記Ⅰ」（『演劇博物館紀要 演劇研究』創刊号 昭和四十年十二月）

※大正十二年～昭和四年の日記の抜粋

菊池明「岡本綺堂日記Ⅱ」（『演劇博物館紀要 演劇研究』二号 昭和四十二年四月）

※昭和五年～昭和八年の日記の抜粋

菊池明「岡本綺堂日記Ⅲ」（『演劇博物館紀要 演劇研究』三号 昭和四十三年十月）

※昭和十二年～昭和十三年の日記の抜粋

この約二十年後の昭和六十二年十二月、経一氏が『岡本綺堂日記』として青蛙房から日記の一部の翻刻出版を行った。「はじめに」で経一氏は次のように述べている。

このたび綺堂五十年忌に際して、この日記を本にして配りたいと思い立った。いったん寄贈したものを当方の勝手で借り出すのは憚られるので、菊池君に相談して演博の諒解を得た上で、コピーを取ってもらった。大正末期から昭和の初年までに限ったのであるが、読み返してみても到底収容しきれないと判ったので、震災以後から大正十五年末までの三年半にしぼることにした。

この『岡本綺堂日記』には大正十二年から大正十五年の日記の翻刻が収められているが、大正十二年七月一日から九月一日までの日記のあと、中断して九月二十三日からはじまっている。九月一日の日記には関東大震災により被災した際の状況が記されているが、これは後に記したものであろう。

再開した二十三日の日記に「予は十七歳より毎日の日記をつけはじめて、昨年までの分三十五冊、すべて灰燼に帰した。それに懲りて最早日記を廃さうかとも思つたが、やはり

年来の習慣でそれも何だか寂しく感じられるので、今日から再び日記の筆を執ることにした。こゝへ来てから三週間、そのあひだに色々のこともあり、色々の人もたづねて来てくれたが、それを一々記すに堪へない」と記されている。

ここから亡くなる約三か月前の昭和十三年十二月十四日まで綺堂は日記を書き続けた（最終日は日付と天気、気温のみ記載）。なお、昭和十三年十月一日から十二月十四日までには綺堂が病床で手帖に鉛筆で書いたものを後に経一氏が書き写した。

平成元年三月、同じく経一氏の手によって『岡本綺堂日記・続』が青蛙房から出版されるが、こちらは昭和二年から五年までの日記の翻刻が所収されており、これにより岡本綺堂日記十六年分のうち、約半分が全文公開されたことになる。

残りの八年間は未公開・未翻刻となっており、この度岡本綺堂日記研究会にて翻刻を行うこととなった。

岡本綺堂日記研究会は、早稲田大学演劇博物館演劇映像連携研究拠点（<https://pij-kyodo-empaku.waseda.jp/index.html>）の公募研究のチームとして活動するものであり、研究課題「岡本綺堂旧蔵資料に関する基礎的研究」（代表者：横山泰子）として、二〇二四・二〇二五年度の二年間の活動を予定している。

岡本綺堂日記研究会の参加者は次の通りである（五十音順、敬称略、肩書は二〇二五年七月現在）。

赤井紀美（東北大学文学研究科准教授）、阿部菜々香（中央大学大学院博士後期課程）、今藤晃裕（日本女子大学高等科教諭）、加瀬桃子（中央大学大学院博士後期課程）、勝倉明以（名古屋市立東丘小学校教諭）、小松史生子（早稲田大学文学学術院教授）、杉本裕樹（法政大学大学院博士後期課程）、鈴木彩（愛知教育大学国語教育講座講師）、鈴木優作（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島近代」教育研究センター特任助教）、原辰吉（世田谷文学館学芸員）、東雅夫（文芸評論家、アンソロジスト）、中坪有羽（中央大学大学院博士前期課程修士）、松田祥平（大谷大学文学部任期制助教）、三浦達尋（文学研究者）、横山泰子（法政大学理工学部教授）、脇坂健介（学習院高等科教諭）

このうち、若手を中心としたメンバーで翻刻を行い、今回は昭和六年一月から、昭和七年十二月の日記を公開する運びとなった。翻刻は一か月ごとに担当し、担当者については各月の末尾に記載している。翻刻のデータおよび綺堂日記原本の撮影画像は、今後早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点のHPや、早稲田大学文化資源データベースなどで公開予定だが、そちらに先んじて今回は冊子形態のものを刊行することとした。

また、二〇二四年度中には演劇博物館所蔵の綺堂関連資料二点のデジタル化も行っている。綺堂の作品は海外でも上演されており、昭和二年六月にパリのオデオン座で「修禪寺物語」が上演された際の「在フランス日本大使館発行の岡本綺堂宛上演許可書類」が演劇博物館に所蔵されている。戦前の海外上演の具体的な資料であり、綺堂作品の幅広い受容を考えるうえで重要な資料と考える。

次に、綺堂没後すぐの昭和十四年三月十四日から演劇博物館では岡本綺堂を偲ぶ展覧会

が開催されており、三月二十五日には記念講演会が行われた。池田大伍、浜村米蔵、岡鬼太郎、木村錦花、川村花菱、田村西男、河竹繁俊らが登壇し綺堂について語ったが、その際に筆記された速記録が演劇博物館に残されている。館内記録としてとられたもののようで、一般に公開はされてこなかったが、明治期から昭和期にいたるまでの主に劇界と綺堂の関わりが語られており、貴重な談話である。以上二点の資料も今後翻刻を行い公開する予定である。

最後に、岡本綺堂日記研究会のメンバーの多くが所属している怪異怪談研究会について記しておきたい。

怪異怪談研究会は、一柳廣孝、谷口基、近藤瑞木を発起人として二〇一二年八月に発足した研究会で、「近代に生じた文化規範の劇的な変化を意識しながら、江戸時代から近・現代における怪異へのまなざし、怪談に集約された物語の内実を明らかにすることを目的」（一柳廣孝「はじめに」、一柳廣孝監修、今井秀和・大道晴香編著『怪異の時空1 怪異を歩く』青弓社 二〇一六年）としている。研究会発足当初の主な課題のひとつに、「文学における怪異表象の研究」が挙げられており、岡本綺堂の再評価も目論まれていた。

今回、演劇博物館連携研究拠点のチームとして岡本綺堂日記研究会を立ち上げるにあたり、怪異怪談研究会のメンバーを中心に参加者を募ったが、院生を含む多くの若手研究者の方々に参加いただくこととなった。これにより当初の想定よりも早いスピードで翻刻作業が進んでいる。改めて、現代表の大道晴香氏および研究会の皆様にご依頼申し上げたい。

なお、本書の編集作業を阿部菜々香氏、加瀬桃子氏にお手伝い頂いた。記して感謝申し上げます。

【凡例】

・底本は早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に所蔵されている岡本綺堂の日記。当該資料の資料番号は 8114-001～8114-030 で、そのうちの 8114-015 以降が未翻刻となっている。今回は 8114-015・016（昭和六年）・8114-017・018（昭和七年）の翻刻を行った。

・原則として、一部の人名や作品名、地名をのぞいて漢字は新字・通行の字体に改めた。原文を損なわないよう、表記の統一を行うことはせず、同一の意味で異なる漢字があった場合も、原本に従い記載した。仮名遣いも原文に従った。人名や綺堂独自のくずし字の翻字については岡本経一編『岡本綺堂日記』（青蛙房 昭和六十二年）、岡本経一編『岡本綺堂日記続』（青蛙房 平成元年）を参照。明らかな誤字と認められる字句についてはルビでママの文字を入れたが、送り仮名も含め、ルビの記載は最小限に留めた。

・改行、句読点は原則として底本に従った。ただし、行の空白は適宜省略し、日付ごとに読みやすいようにレイアウトを行った。原本に関する注記は※で付した。

・本文中で用いられている「」の二種類の記号に関しては原本に従い記した。書籍・雑誌名に括弧が付されていない場合があるが、これらの表記も原本に従った。

・欄外に鉛筆書きで記号（○や×など）が記されている箇所があったが、綺堂の筆によるものか判断がつかないため記載しなかった。

・判読不能、削除、加筆については次の通り記号を用いた。

■ ↓判読不可能な文字を示す。

◇ ↓加筆された表現を示す。削除箇所の訂正や挿入のために、行間や欄外に書き加えられた表現を示す。

□ ↓削除された表現を示す。削除に際し文字が塗りつぶされることが多いが、可能な限り表記した。削除した文字が判読できない場合は「■」とした。

「◇」は加筆後に削除された表現を示す。

・翻刻された日記の文中には現在から見れば人権擁護の観点から不適切な表現も含まれるが、日記が書かれた当時の事情を考慮し、そのまま記載した。

昭和六年（一九三一年）六十歳

昭和六年一月

一日（木曜）陰、雪（四十八度）

午前七時半起床。

一家打寄つて屠蘇雜煮を祝ふこと例のごとし。森部に名刺を持たせて、近隣廿一軒を回礼させる。朝から陰つて寒い。

年賀状郵便四百余通到着。それに対して当方より追加のハガキ三十九枚をかく。

十時頃に中野が年賀に来て、三十分あまり話してゆく。

午後十二時頃に山下が来て、つゞいて鈴木千枝雄君が来る。額田夫婦が子供をつれて来る。それらが去ると、佐久間、鈴木余志子、海野が年賀に来た。一時半頃から雪が降り出して、次第に烈しく、四時半に佐久間等三人が立寄る頃には、家根も往来も一面に白くなつた。

午後にも年賀郵便が二百余通到着、それに対する追加廿二枚をかく。ほかに年賀客十一人、いづれも門口で帰る。

六時半ごろ入浴。雪はます／＼降りしきる。元旦にこれほどの降雪はめづらしい。

読書。十時就寝。

二日（金曜）晴、陰（五十度）

午前八時起床。朝は晴れたが、やがて陰る。きのふの雪は五寸を越えた。

年賀状郵便二百余通到着、それに対する追加ハガキ四十枚をかく。毎年のことながら、新春は年賀郵便の追加をかくに忙がしい。

けふは明治座の初日であるので、午後二時頃から支度して出ようとすると渡辺の博が年賀に来た。

明治座は二時半開場。中野と佐久間はもう来てゐた。あとから山下も来た。三ヶ日だけあつて、各等満員の盛況。第一「水滸伝の林冲」第二「寿の門松」第三「佐々木高綱」第四「巷談籠釣瓶」の序幕まで見物して、十時廿分ごろ帰宅。暮れて寒気やゝ弛む。

留守中に年賀客八人、年賀郵便百十二通到着。入浴。十一時半就寝。

三日（土曜）晴（五十六度）

午前八時半起床。今朝は快晴。寒気弛む。

年賀状郵便八十余通到着。それに対する追加は昨日の分をあはせて五十四枚。宛名を書くだけではあるが、なか／＼煩はしい。

十二時半頃から森部同道で帝劇見物にゆく。こゝも満員。佐久間も来てゐた。午後一時開場。第一「カルメン」第二「牡丹燈記」まで見物して、四時（半）頃帰宅。森

部はあとに残つて、夜まで見物。

留守中に松村松僊君、塚原富江君、歌沢相模、市川松延、ほか七人の年賀客が来たといふ。年賀郵便六十余通到着。

七時半ごろ入浴。年賀ハガキの追加十七枚をかき、更に知人宿所帳を訂正。姉とおえい、おとく、おたい等はあつまつて双六などする。

十時過るころに森部帰宅、夜の部も満員で補助椅子が出るほどであつたといふ。

十一時就寝。

四日（日曜）晴れ（五十四度）

午前八時起床。

年賀郵便五十三通到着、それに対する追加ハガキ八枚をかく。十時頃に山崎が年賀に来て、三十分ほど話してゆく。

午後、四谷を散歩。晴れてゐるが、風が寒い。

三時頃に東儀が年賀に来て、三十分ほど語る。つづいて林二九太君が来て、一時間ほど話してゆく。

おえいは元旦以来への歯痛で、けふは小田切医師のもとへ治療を受へけにゆく。左の奥歯の齧が少しく化膿したのであるといふ。

六時頃に正岡君が年賀に来て、七時半頃まで語る。そ

れから入浴。

年賀郵便廿五通到着。その返信六通をかく。それから津村君の戯曲「鼠小僧」を読む、「舞台」の原稿である。十時半就寝。

〔四〕（五）日（月曜）晴（六十度）

午前八時起床

年賀郵便十六通到着。その返信七通をかく。

おえいはけふも小田切医師の治療を受けにゆく。津村君の「鼠小僧」をよみ終る。

朝から晴れて風なく、寒気大いに弛む。

十二時半頃に額田がその門下生の前田、吉川の二人をつれて来た。前田は神戸の人、吉川は大阪の人、いづれも正月の休暇を利用して上京したのであるといふ。三人は二時頃まで話してゆく。

つづいて上松君が年賀に来て、四時頃まで語る。そのあひだに大野君も年賀に来て、門口で帰る。

年賀郵便十二通到着、その返信に五通をかく。

六時半入浴。読書。夕刊をみると、けふの温度は異例、九州の宮崎地方は五六月頃の氣候であつたといふ。

大村から郵書が来て、元日以来、越中の温泉にあるといふ。

十時半就寝。咽喉の工合が少しく悪いので含嗽する。

六日（火曜）雨（五十四度）

午前九時起床。朝から細雨。

年賀郵便七通到着、その返信五通をかく。菅原君の戯曲「研辰崇る」を編集し終る。

おえいは小田切医師へゆく。森部は額田宅に同郷人の新年会があるとして午後から出てゆく。きのふに引きかへて寒く、午後には曇まじりの雨。

大黒活版所の山田君が来て年玉をくれ、二月号の戯曲の原稿を受取つてゆく。

読書。三時過る頃に小林が年賀に来て、一時間あまり話してゆく。左団次の細君が年賀に来て、門口で帰る。六時半ごろ入浴。読書。九時半頃に森部帰宅。十時半就寝。

七日（水曜）晴（五十五度）

午前八時起床。

年賀郵便十一通到着。その返信五通をかく。森部が昨夜額田の手紙を持参したので、その返事を発送。

吉川君の戯曲「階級闘争史余話」を編集し終る。これも「舞台」の原稿である。

おえいは午後から隣家の近藤君と紀尾井町の小林君方へ年賀にゆく。わたしの家へも細野多知子と富塚秀子が年賀に来て、いづれも門口で帰る。

四時頃に岸井が来て、五時頃まで話してゆく。年賀郵便八通到着、その返信五通をかく。俵木も年賀に来て、門口で帰る。

七時半頃入浴。八時頃に大野君が年賀に来て、羊の玩具と菓子をくれ、十時頃まで語る。

十一時就寝。午前二時頃まで眠れなかつた。

八日（木曜）雪（五十度）

午前九時起床。あかつきから雪、家根も庭も白くなつてゐた。

年賀郵便八通到着その返信四通をかく。

正月気分もやうやく去つたので、新しい戯曲を書かうと思ひ立ち、その材料などを調査。

午後二時頃に小林の細君が雪を冒して年賀に来て、四時頃まで話してゆく。

読書。六時半ごろ入浴。森部は今夜から学校へゆく。雪は夜に入つても止まない。十時半就寝。

九日（金曜）陰、雨（四十八度）

午前八時半起床。

陰つてをり／＼に細雨。春來第一の寒気である。

額田から郵書が来たので、返書。大村から帰京の通知があつたので、これにも返書。年賀郵便の返信六通。

けふから戯曲を起稿。午後二時頃までに五枚。

山下が来て結婚問題のために明日出発帰京するといふ。あとから佐久間も来た。山下は三時半頃に去り、佐久間は四時半頃まで話してゆく。

宇野信男君の戯曲「家」をよむ。鵜沼の岡田君から郵便が来たので、返書。岡田君は先日細君を亡つたといふ、気の毒のことである。

須賀川の管野君から奈良漬を送つて来たので、大野君方へ分配。

暮れて雨降りしきる。七時半ごろ入浴。読書。

十時半頃就寝。十二時頃から眼がさめて、午前三時半頃まで眠られなかつた。

十日（土曜）晴、風（五十度）

午前八時起床。湯川君から郵便が来たので、返書。神戸の前田喜朗君から郵便が来たので返書。

戯曲をかきつづける。おえいは小田切医師へゆく。

午後、四谷を散歩。風が寒い。

夕方までに原稿六枚をかく。三時四時頃には風がいよ／＼強くなる。夕刊をみると、東北および九州地方は暴風「雨」〈雪〉であるといふ。

六時半頃入浴。読書。十時就寝。

十一日（日曜）晴（四十五度）

午前九時起床。風は止んだが、寒気は強い。

戯曲を書きつづける。おえいはおとくとおたいを連れて、午後から帝劇見物に出てゆく。

十二時半頃に正岡君が来て、一時間ほど語る。ついで大村が年賀に来て、三十分ほど話してゆく。又そのあとへ大野君の娘が姑の山崎君の老母同道で年賀に来て、門口で帰る。

大村の戯曲をよむ。額田から郵便が来たので、返書。五時半頃におえい等帰宅。けふは終日寒い日であつた。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十二日（月曜）晴（四十六度）

午前八時起床。朝は三十八度。流石に寒中である。

森部に命じて、駿河台の市川升六君方へ年賀の品をとけさせる。おえいは小田切医師へゆく。

戯曲をかきつづける。午後、四谷を散歩。帰つて再び原稿をかきつづける、夕方までに十枚。

大村の戯曲に批評を添へて返送。去る四月額田が漫談社へ発送した戯曲原稿が途中で紛失したといふので、大村の原稿も書留便で発送することにした。

前田喜朗君の戯曲「彼等の行く道」をよむ。額田から郵送が来たので、返書。

六時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

十三日（火曜）晴（四十八度）

午前九時起床。

十時半頃に湯川君が久しぶりで来訪、午餐を喫して午後一時半まで話してゆく。湯川君は本年還暦ださうであるが、老健喜ぶべきである。

二時頃から四谷を散歩。三時ごろ帰宅。

昨日森部を駿河台の升六君方へ遣はした処、一家不在であつたといふので、今日午後再び出して遣るとへ、やはり不在であつたとて空しく戻つて来た。或は夫婦づれで何処へか旅行したのかも知れない。何分にも両隣はビルディングであるので、問ひ合せても判然しないといふ。木村富子から「舞台」原稿の件について問ひ合せの郵便書が来たので、返書。三時半頃に佐久間が来て、一時間ほど話してゆく。

おえいは午後から町内の大野君と浦岡君方へ年賀にゆく。

読書。七時頃入浴。大野君方から迎ひが来たので、おえいは出てゆく。文吾君が活動写真を映写するといふのである。

少しく感冒の気味であるので、服薬。九時半頃からおとくも大野君方へ出てゆき、十時半ころにおえい同道で

帰宅。

十一時就寝。

十四日（水曜）晴（五十度）

午前九時起床。寒気やゝ弛む。

朝から戯曲をかきつゞける。感冒気味であるので、外出しない。

大村から原稿うけ取りの礼状が来た。湯川君からも郵便書が来た。

へおえいは菓子折をたづさへて、大野君方へ昨夜の礼にゆく。へ

夕方までに原稿十二枚。これで兎も角も第一幕を脱稿、併しよほど訂正しなければなるまいと思はれる。

読書。今夜は入浴をやすみ、九時頃から服薬して、就寝。

十五日（木曜）晴（四十六度）

午前八時半起床。

おえいは早朝から青山へ墓参にゆく。

戯曲第一幕を訂正。慶応の学生二人が来て、例の如く歌舞伎劇研究会に出席しへてくれといひ、一時間ほど話してゆく。その講演は廿四日午後一時から決める。大野君の細君が果物を持参、門口で帰る。

午後、四谷辺を散歩。晴れてはゐるが、風が寒い。
夕方までに戯曲十五枚を訂正し終る。感冒のために、
今夜も入浴を休む。

読書。九時半就寝。

十六日（金曜）陰（四十六度）

午前九時起床。陰つて寒い。

木村富子が舞踊劇「蚊相撲」の原稿を送つて来たので、
返書。伊勢の山田市の神山路周君から俳句の選をたのみ、
併せて私の俳句を焼き付けた徳利四個を送つて来た。徳
利とはいへ、一輪ざしにも用ゐられるので、その一個を
木村富子に、一個を横浜の高橋に発送。

戯曲第一幕を訂正。午後一時過る頃に上松武雄が年賀
に来て、二時半頃まで話してゆく。三時半頃に気賀君子
が年賀に来て、これも一時間あまり話してゆく。そのあ
ひだに、淀橋もおさだも子供をつれて年賀に来た。

第一幕を訂正し終る。廿九枚である。それから木村富
子の「蚊相撲」を編集し終る。

今夜は七時頃入浴。読書。十時半就寝。

十七日（土曜）晴（四十八度）

午前「七」九時起床。

正岡君にたのまれ色紙一枚と短尺三枚に揮毫して郵

送。京都の太田といふ人から頼まれた短尺三枚に揮毫。
伊勢の山本君から頼まれた俳句を選了、あはせて小判の
白紙五枚に揮毫。いづれも郵送。

おえいは深「山」川の山本君方へ年賀にゆき、十一時
過る頃帰宅。

午後一時頃に正岡君が来た。恰もわたしの郵送と行き
違ひとなつたのである。つゞいて時事新報の山本君が来
た。正岡君は三時半頃に去り、山本君は三時半頃まで話
してゆく。

静岡の山本君から寒中見舞の郵書が来たので、返書。
五時半頃に久保栄君が来て、新興戯曲に何か寄稿して
くれといひ、一時間ほど話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。十时就寝。

夜半におびたゞしく発汗。起きて寝衣を着かへる。感
冒がまだ癒えないとみえる。

十八日（日曜）陰（五十度）

午前九時起床。おとくは宿下りに出てゆく。

十時半頃に立正大学の学生中島末治が坪内土行君と
額田の紹介状を持参。わたしの門下に加へてくれといふ。
見たところ温順さうな人物であるが、何分初対面である
から直ぐに返事も出来ない、いづれ額田とも相談の上で
返事をする云ひ聞かせて帰しやる。

戯曲第二幕をかく。先日十二三枚書いたのであるが、どうも面白くないので、殆ど全部をかき換へることにした。夕刻までに十四枚脱稿。

感冒が癒えないので、けふも外出しない。終日陰つて寒い。

今朝の中島が持参の喜劇を一読、先づ相当に書いてないやうである。

七時ごろ入浴。鳥居清忠君の老母死去の通知が来た。読書。九時半頃におとく帰宅。神奈川の兄をたづねて来たさうである。

十時半就寝。今夜も少しく発汗した。

十九日（月曜）晴（五十二度）

午前八時起床。

額田から郵書が来て、その作「仔鷺」は東京劇場で上演することになるらしいといふ。返書。花田ひで子から寒見舞いの郵書が来たので、返書。畑君の未亡人が眼病に罹つてゐるといふので、おえいは菓子折をたづさへて見舞にゆく。鳥居君方の葬儀には森部を名代に出してやる。

十二時半頃に小林が逗子の鯛とさじえを持参、三十分ほど話してゆく。ついでに額田が来て、東京劇場はいよいよ上演に決定したといひ、二時半頃まで語る。

けふは寒気も弛んだので、三時頃から四谷を散歩。四時過ぎるころ帰宅。

額田と相談の結果、彼の中島を嫩会に加入させることにしたので、その旨を渋谷の中島方へ通知。木村富子と高橋から焼物の礼状が来た。

四時半に黒川君が来て、帝劇の二月興行に「浪華の春雨」を上演したいといひ、一時間ほど話してゆく。昨今は感冒流行で、松竹も四五人仆れたといふ。現に黒川君夫妻も一週間ほど枕をならべて臥床したさうである。

七時頃入浴。読書。十時就寝。

二十日（火曜）晴（五十度）

午前九時起床。おたいは宿下りに出てゆく。

十時頃に浜松の土屋君来訪、四十分ほど話してゆく。

午後から風が吹き出した。

戯曲第二幕を訂正。第一幕廿九枚、第二章十五枚、題は「人狼」と決める。これで「舞台」三月分を済ませ、第三幕は四月号に掲載することにする。

風はいよ／＼強くなつたので、けふは散歩にも出ない。宮森君から郵書が来たので、返書。六時頃に佐久間が来て、七時頃まで話してゆく。その話によると、二月号は少しく遅れるかも知れないといふ。

七時頃入浴。読書。九時頃におたい帰宅。

十時半就寝。風の音が強いので眠られず、午前三時頃から奥の六畳に寝床をかへて、ややよく眠る。

二十一日（水曜）晴（四十八度）

午前九時起床。けふも風吹く。けふは大寒の入であるといふ。

額田から郵書が来て、山本君の老父死去に付、夫婦同道で静岡へ出向くといふ。額田一家もなか／＼多事である。

去年から預かつてみた宇野信男君の戯曲三種をよみ、その批評を添へて返送。正岡君から郵書が来た。

午後二時頃に佐久間が来て、一時間ほど語る。前田君の戯曲「彼等の行く道」を訂正。舞台の原稿である。

風は夕より止む。「六」「七」時頃に中野が来て、一時間ほど話してゐるところへ、山下も来た。山下は一昨夜帰京したとて土産をくれ、八時半頃に二人は連れ立つて去る。それから入浴。

読書。十時半就寝。

二十二日（木曜）晴、陰（四十八度）

午前九時起床。

富塚の戯曲「たゞ一人の犠牲者も無し」を一読、その批評を添へて返送。畑君からその著「場所があるのだ」

を送つて来たので、返書。正岡君は感冒臥床中であるといふので、見舞状を発送。

前田君の「彼等の行く道」を訂正し終る。

午後二時過る頃から四谷を散歩。帰つて大村の戯曲「虫めづる姫」を編集し終る。これも「舞台」の原稿である。

講談社の矢部君の使が来て、喜劇集の上巻をとゞけてゆく。

七時頃入浴。読書。九時頃から細雨。十時半就寝。

二十三日（金曜）晴、陰（五十五度）

午前八時起床。

おえいは森部同道で湯島四丁目の山崎君方へゆく。大野の文吾君の実家である。兎角に無沙汰をしてゐるので、遅まきの年賀ながらに訪問、十一時過る頃に帰宅。陰晴定まらず、寒気やゝ弛む。

新東京劇団から初日の入場券を送つて来たので、中野に発送。講談社の矢部君に喜劇全集受取りの返書を送る。森部は午後から油粕を買つて来て、庭の植木に寒肥をやる。

田郷君の戯曲「退屈追放」を編集し終る。山下の父から山下結婚の通知が来たので、返書。

三時頃から町内の永田理髪店へ髪を刈にゆく。

讀書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十四日(土曜)晴(五十七度)

午前九時起床。風はあるが、暖い朝である。

「人狼」第三幕をかく。午前中に三枚。

十二時半頃に慶応の内田君が自動車で迎ひに來たので、同行。

校内の教室で講演。例の座談会の積りであつたところ、けふは聴衆が多いので、近松半二について何か講演をしてくれといふ注文が出たので、別に調べても行かなかつたが、自分の知つてゐるだけのことを一時間あまり話した。それから近所の東洋軒へ行つて、茶菓を喫しながら雑談。

自動車に送られて、四時四十分頃帰宅。留守中に東京日日の中山君が來たといふ。

うしろの関口君方では今日から建物を取毀しにかゝつた。まだ五六年にもならない家屋をなぜ取毀すのかと訊けば、白蟻が発生した為に改築するのであるといふ。東京のまん中にも白蟻が続々発生しては困る。

宇野信男君から原稿うけ取りの返事が來た。岸井から郵書が來て、明夜の嫩会は欠席するといふ。

七時ごろ入浴。讀書。十時半就寝。

二十五日(日曜)陰(五十五度)

午前八時起床。

慶応の内田君、渡辺君が昨日講演の礼に來て、一時間ほど話してゆく。

午後二時頃に津沢の寿子が年賀に來た。寿子は津沢君の義兄の子三橋久夫君を同伴、これも慶応の学生で、この三月に仏文科を卒業するのであるといふ。矢はり文学者志願の青年であるらしい。

三時頃に東京日日の中山君來訪、左団次が「三」(二月)の帝劇で「シラノ・ド・ベルジャック」を上演するに付、その談話を聞きに來たのである。それを相手に話してゐるうちに、寿子等は帰る。中山君は四時半頃まで話してゆく。

額田から速達便が來て、静岡から帰京後、感冒で臥床、今夜の嫩会には欠席するといふ。

朝から陰つて雪を催し、底寒い日である。

六時頃から山崎が先づ來た。ついで中野、中島が來た。中島は今度から出席することになつたのである。他は大村、山下、佐久間の三人で、額田、岸井、小林は欠席。「舞台」四月号は春季特別号とすることを議決、それから雑談、九時頃散会。

入浴。十時半就寝。夜半に雨の音。

二十六日（月曜）陰（五十六度）

午前九時起床。朝は細雨、やがて止んで陰る。

おえいは四谷の丸尾君方へ年賀にゆく。「舞台」二月号を山本、清水、原田、林、高橋、東儀、鈴木、難波、富塚の諸家へ発送。

近藤紫岳君から郵書が来て、江沢春霞君が根岸病院に入院中のところ、昨今危篤の状態に陥つたので見舞金をあつめてゐるといふので、直ぐに小為替を作らせて見舞金を発送。

森部の兄から寒中見舞の郵書が来たので、返書。華千代会の武田君が巡業先から桑名の蛤を送つて来たので、返書。額田にも見舞状を発送。

十一時頃におえい帰宅。丸尾君の兄は去八日郷里で死去したといふので、取りあへず見舞状を発送して置く。兄が死去の結果、丸尾君は東京を引払つて帰国することになるかも知れないといふ。

三時頃から近所を散歩。帰ると、やがて三木君が中村福助と児太郎同道で年賀に来て、一時間ほど話してゆく。読書。六時頃に大野君が来て、亀戸の鷲と浮人形をくれ、八時半まで語る。大野君は短尺二枚の揮毫をたのんで行つた。

それから入浴。十時半就寝。夜半に雨の音、それが止むと更に強風が吹き出して、門口をゆする音さわがしく、

午前四時頃まで安眠することが出来なかつた。

二十七日（火曜）晴、風（五十度）

午前九時起床。

戯曲をかきつゞける。第二幕はむづかしいので、どうも捗取らない。

夜半の風吹きやまず、寒気も頗る強い。

午後二時頃に博文館の岡戸君が来て、一時間あまり話してゆく。

夕方までに原稿六枚。大衆文芸社から原稿料を送つて来たので、返書。

おたいは午後から実家へゆき、夕方に姉同道で戻つて来た。おえいから姉にみやげ物を遣る。夕より風やむ。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（水曜）晴（五十度）

午前九時起床。

山本久三郎君から郵書が来た。娘の戯曲が「舞台」二月号に掲載された礼状である。浜松の土屋君からも帰郷の通知が来た。

大野君に頼まれた短尺二枚に揮毫。森部に命じて大野君方へ届けさせる。

朝から快晴。十一時半頃から神田辺を散歩。風はない

が、なか／＼寒い。三省堂の食堂で喫茶。二時頃帰宅。

午後六時頃までに戯曲十枚を書く。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（木曜）晴（五十度）

午前九時起床。

大阪の堀から自作の戯曲を送つて来たので、返書。

戯曲を書きつゞける。昨日の分十枚は何分面白くないので、全部書きかへることにした。

寒気の強いためか、持病の神経性リウマチスが又痛み出した。左の肩の下と右の腰のあたりである。けふは散歩にも出ない。

四時頃に佐久間が来て、五時半頃まで話してゆく。

六時半頃までに原稿十一枚、これで第三幕を脱稿。

七時頃入浴。読書。リウマチスいよ／＼痛む。

十時半就寝。

三十日（金曜）晴（五十四度）

午前九時起床。

高橋と難波から「舞台」二月号の礼状が来た。

けふも散歩に出ない。午後二時頃までに「人狼」第三幕を訂正し終る。あはせて廿五枚である。大野君の娘が来て、菓子をくれた。

大阪の堀から喜劇「煙突大将」を送つて来たので、一読。その批評を添へて返送。江沢君の細君から見舞金の礼状が来た。

三時頃に黒川君が来て大入袋をくれ、一時間ほど話してゆく。五時頃に富森君が来て、六時過る頃まで話してゆく。丸「■」尾君から先日のお礼状が来た。

七時頃入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は人狼（三幕、七十枚）だけである。

三十一日（土曜）陰、晴、陰（五十五度）

午前九時起床。

文芸家協会の林田君から郵書が来たので、返書。豊田君から郵書が来て、男児分娩、すぐに死去したといふので、返書。

京都府下熊野郡の太田溪雪君から丹後土産このしろ鮓を送つて来たので、大野君方へ分配。大野君夫妻も感冒で臥床中であつたといふ。

舞台の誌友田潤太君の戯曲「わしが村の出来事」を編集、投稿は頗る多いが「舞台」誌上に紹介するやうなもののは極めて少い。これも佳作ではないが、兎も角も纏まつてゐる。

帝劇から初日の入場券をとゞけて来たので、その一枚を佐久間に発送。

昭和六年二月

二時頃に小林が来て、三時頃まで話してゆく。

読書。市村座からも入場券を郵送して来た。

七時頃入浴。八時頃に宮戸座の斎藤君が来て、市村座の八百蔵、小太夫等はかけ持で同座に出勤、わたしの「唐人塚」を上演したいといひ、三十分ほど話してゆく。

十時半就寝。

(翻刻担当…赤井紀美)

一日(「二日曜」陰、雨(四十八度))

午前八時半起床。陰つて寒い。

太田君に頼まれた短尺四枚に揮毫、返送。

雑用も一先ず片付いたので、終日読書。午後から雨。けふは帝劇の初日であるが、寒気とリウマチスのために見物にゆくのを見合せた。

七時頃入浴。読書。額田から郵書が来て、感冒も快癒したといふ。返書。本田君にも郵書を発して、ワシントン・スクエア小劇場の脚本集を持合せてあるかどうかと聞き合せる。そのうちの何かを翻訳してみようかと思ふのである。九時頃から雨やむ。

十一時就寝。

二日(月曜)晴(五十六度)

午前八時半起床。

十時頃に大京堂の神谷泰治君が来て、「半七捕物帳」の合本が出来したといひ、取りあへず一千部だけの奥付捺印を求めてゆく。

甲州の河野君から漬物一缶を送つて来たので、返書。午後、四谷を散歩。二時頃帰宅。

三時過る頃に鈴木千枝雄君が戯曲の原稿持参、四時半

頃まで語る。

つゞいて佐久間が来たので、市村座の入場券をやる。そこへ又、岸井が来た。岸井は一足先に去り、佐久間は五時半頃まで話してゆく。

山下から郵書が来て、杉並町成家三十八に一戸を構へることにしたといふ。

七時頃入浴。読書。十時半就寝。

三日（火曜）陰、雨（五十五度）

午前九時起床。

十時頃に額田が来て、感冒も先ず快癒したといひ、十二時頃まで話してゆく。江沢君葬儀の通知が来た。江沢君は一月廿九日遂に死去したのである。この七八年は掛けがつて逢はなかつたが、廿年来の知人、今やその訃音に接して暗然たらざるを得ない。

森部は衆議院の議會を傍聴するとて、午前から出てゆく。

「舞台」の誌友園とよ子の喜劇をよみ、所々訂正。更に山下の喜劇「小菅調草店」をよむ。須賀川の菅野君から葱を送つて来た。

本田君から郵書が来た。佐久間からも郵書が来て、昨日の市村座は不入であつたといふ。猿之助の春秋座も第二回は思はしくないと見える。

七時頃入浴。読書。九時頃から雨。

十時半就寝。午前二時半頃まで眠られなかつた。

四日（水曜）陰、雨（五十四度）

午前八時起床。

須賀川から貰つた葱を町内の大野君と紀尾井町の小林君方へ分配。

読書。大阪の堀から返書が来た。

江沢君の告別式で午後三時から築地の本願寺へゆく。こゝで知人諸君に逢つた。型のごとく焼香して退出、それから東京劇場へゆく。額田の作「子鷺」見物のためである。木村君、辻村君、博文館の田村君等も来た。

「子鷺」三幕と、第二の「第一歩」を見物して、八時頃に同座を出ると、いつの間にか雨がふり出してゐた。帰宅して直ぐに入浴。

十時半就寝。今夜も三時過る頃まで眠られなかつた。

五日（木曜）雨（五十五度）

午前十時起床。

わたしが始まる前に、三橋久夫君が短尺を持参、揮毫をたのんでゆく。

十一時頃に木村君が来て、東京劇場の三月興行に「人狼」を上演したいといふので、舞台三月号のゲラ刷が出

来次第に廻してやるやうに答へて置く。木村君は一時間ほど話してゆく。

取りあへず其旨を額田と中野に通知、ゲラ刷を廻してくれるやうに頼んで遣る。大阪の山上から郵書が来たので、返書。

「人狼」第三幕を訂正しながら浄書。夕方までに九枚。

七時頃入浴。読書。十時就寝。今夜も幾たびか眼がさめた。

六日（金曜）雪、陰（五十二度）

午前九時起床。雪紛々と降りしきつてゐる。

「人狼」第三幕を訂正しながら浄書。

午後から雪やむ。二時頃に中野が来て、「人狼」を三月の東劇に上演するならば「舞台」三月号に戯曲全部を掲載したいといふ。就てはページの都合もあるので、三月号の他の戯曲を入れかへる事とし、その打合せを済ませて中野は三時頃に去る。

午後六時頃までに第三幕を浄書し終る。あはせて廿四枚。

七時半ごろ入浴。やがて額田が来て、自分も東劇三月興行の二番目を書くことになったと云ひ、九時頃まで話してゆく。

十時就寝。空は晴れて星が出た。

七日（土曜）晴（五十二度）

午前八時半起床。

「人狼」第三幕の原稿を速達便で大黒活版所へ郵送。佐久間にもその旨を通知。森部が庭の紅梅を折つて花筒に生ける。

午後、四谷辺を散歩。二時頃帰宅。

信州の宮沢君と三橋君にたのまれた短尺に揮毫。本田君から郵書が来たので、返書。和歌山の「本」庄野といふ人から郵書が来たので、返書。

本位田君から実話雑誌の談話を頼まれたので、五枚ほど書く。題は「海坊主を見た話」

七時半頃入浴。読書。そこらの家根で恋猫の声が頻りに聞える。

寒いと云つてももう春である。

十時半就寝。今夜も二時頃まで眠られなかつた。

八日（日曜）晴（四十八度）

午前九時起床。朝から風が吹く。

豊田君の戯曲「仇討輪廻」を訂正、編集。「舞台」の原稿である。

けふは初午。おえいは午後から豊川稲荷へ参詣にゆく。わたしも二時頃から四谷を散歩。三時頃帰宅。留守中に中村孝子が来たといふ。

五時頃までに豊田君の戯曲を編集し終る。

七時頃入浴。読書。十時半就寝。

九日（月曜）晴、陰（四十三度）

午前九時起床。朝は晴れたが、やがて陰る。

横浜の内田君から母堂七々日の祀り物をとどけて来たので、返書。中村孝子にも返書。

読書。午後一時頃、国民文芸会の末広君が講話をたのみに来たが、断る。末広君は三十分ほど話してゆく。ついで俵木が来て、自作戯曲の添削をたのみ、これも三分余り話してゆく。

おえいは菓子をつまみへて、紀尾井町の小林君方を訪問。

読書。四時頃に大黒活版所から「人狼」の校正刷をとどけて来たので、一応校正。第三幕の浄書をあはせて、松竹の木村君へ発送することにする。

終日陰つて寒い。夕刊をみると、各地暴風雪であるといふ。

七時半入浴。俵木の戯曲をよむ。

十時半就寝。夜半より雪。

十日（火曜）雪（四十三度）

午前九時起床。雪降りしきる。

佐久間から返書が来て、感冒臥床中であるといふので、見舞状を発送。海野からも郵書が来たので、返書。

午後二時頃に佐久間が雪を冒して来て、感冒ももう全快したといひ、三時過る頃まで話してゆく。

中野から速達便でその戯曲「風」を送つて来たので、すぐに一読、編集し終る。俵木の戯曲に批評を添へて返送。

七時過る頃入浴。雪やむ。けふの雪は五寸を越え、東京としては近來の大雪である。

八時過る頃に三橋君が来て、揮毫の短尺を渡してやる。三橋君は九時半頃まで話してゆく。額田から郵書が来た。十時半就寝。

十一日（水曜）晴（四十二度）

午前八時起床。けふは紀元節。朝より快晴。

読書。森部は午後から額田を訪問するといふので、昨夜の返書を持たせてやる。

午後二時頃散歩。大通りは格別、横町などの雪はまだ一面に白い。春の雪としては珍しいことである。

三時頃帰宅。留守中に鈴木千枝雄君が来て自作の戯曲を置いて行つた。ほかに山梨の河野君も来たといふ。河野君は来訪ごとに、いつも不在で気の毒である。

鈴木君の戯曲「雪の家」を一読、先日預かつてゐた戯

曲「兄弟」と共に、その批評を添へて返送。

読書。七時半ごろ入浴。八時過る頃に森部帰宅。

森部の話によると、額田方には恰も高垣君が来合せて、高垣君が主幹となつて近々発行する雑誌に、森部を雇つてくれるといふ話があつたさうである。さうなれば至極好都合であると思ふ。

十時半就寝。

十二日（木曜）晴（四十二度）

午前九時起床。

十一時半頃に黒川君が来て、モントサンといふ独逸製の薬をくれた。風呂桶に入れて沸かして入浴すると湯冷めがせず、頗る愉快であるといふ。黒川君は午後一時頃まで話してゆく。宇野四郎君死去の通知が来た。

二時頃に鈴木千枝雄君が来て、三時半頃まで語る。

読書。けふは頗る寒い日である。氣象台の報告によると、近日又もや雪を見るかも知れぬといふ。

七時過る頃入浴。試みに黒川君に貰つた薬を風呂に入れてみる。松の葉を以て製したものであるので、湯は松の香を放つて緑色となつた。

読書。十時半就寝。

十三日（金曜）陰、雪（四十度）

午前九時起床。陰つて寒い。

読書。信州の宮沢君から短尺の礼状が来た。

午後一時過る頃から雪。先日の雪がまだ解けない上に降り積る。

五時半頃に講談社出版部の矢部君が雪を冒して来訪、喜劇全集の下巻にわたしの「能因法師」を編入したいと云ひ、三十分ほど話してゆく。

七時過る頃入浴。読書。雪はます／＼降りしきる。十時就寝。

十四日（土曜）晴、陰（四十五度）

午前八時半起床。きのふの雪は六寸ほど積つた。こんなに雪の降りつくことは近年めづらしい。

戯曲「名古屋の清正」を書かうと思ひ立つて、参考書などを調査。

鈴木余志子から戯曲「蔵前駕籠」を送つて来たので、一読。中野から郵書が来て、舞台三月号も戯曲の分は全部校正を終つたといふ。

午後三時頃に佐久間が来て、五時頃まで語る。

七時半入浴。読書。俵木から原稿うけ取りの礼状が来た。

八時頃に雨の音、寒気やゝ弛む。

十時半就寝。雨やむ。やがて戸を叩いて速達便をとど

けて来た。宮森君から支那小説について問合せて来たのである。

十五日（日曜）晴（四十二度）

午前九時起床。

けふから戯曲「名古屋の清正」を起稿。

宇野君の告別式があるので、午後から森部を代理に出してやる。式場は中根岸の西蔵院である。

三時頃町内の理髪店へゆくと、客がこみ合つてゐるので其のまゝ引返して来た。横町の雪はまだ解けない。

夕方までに原稿十四枚をかく。鈴木千枝雄君が自作の原稿を持参、門口で帰る。

読書。七時半から入浴。八時頃に宮森君が原稿を持参、明日までに見てくれと頼んで去る。取りあへず燈下でその原稿を一読。
十時半就寝。

十六日（月曜）陰、雨（四十三度）

午前九時起床。

宮森君の原稿に加筆、速達便で返送。

戯曲をかきつゞける。三時頃に奥田君が来て、口取りをくれ、一時間ほど話してゆく。

黒川君から速達便が来て、「人狼」は明治三月興行上

演に決定したと云ひ、併せて木村君の用件として、歌右衛門のために歌舞伎座の四月狂言をかいてくれといふので、返書。

木村君にも郵書を発して、目下起稿中の「名古屋の清正」でよければ間に合せる旨を通知。中野にも郵書を発して「人狼」上演決定のことを通知。

夕方までに原稿六枚。七時ごろ入浴。やがて雨の音。読書。十時就寝。

十七日（火曜）陰（四十二度）

午前九時起床。陰つて寒い風が吹く。

戯曲を書きつゞける。本田君から過日の返書が来て、感冒で四五日臥床してゐたといふ。いづ方にも感冒大流行である。

「夕」わたしの家でもおえいが感冒で臥床。

夕方までに原稿十二枚をかく。五時半頃に三木君が来て、三十分ほど話してゆく。歌右衛門の脚本の件である。

七時頃入浴。読書。

十時半就寝。今夜はどうしてか眼が冴えて眠られなかつた。

十八日（水曜）陰、雪（四十二度）

午前八時起床。

陰つて寒く、をり／＼に細かい雪が降る。おえいはけふも臥床。

「名古屋の清正」をかきつづける。昨夜不眠のために頭が重い。

十二時頃に額田の細君が来て、よせなべの折詰をくれ、一時間ほど話してゆく。

三時頃に中村吉蔵君の紹介で、物集芳子と福永重勝君が来た。今度出版業を始めるに付、何か私の原稿を貰いたいといふのである。三十分ほど話してゆく。

夕方までに原稿六枚。宮森君から郵書が来たので、返書。山下からも郵書が来たので、返書。

五時半頃に佐久間が来て自作の原稿の添削をたのみ、一時間ほど語る。つづいて山崎が来て、門口で帰る。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

十九日（木曜）陰（四十四度）

午前九時起床。

「清正」を書きつづけて、午後二時頃までに六枚。これで兎も角も第二幕を脱稿。

市川松蔭の使が来て、明治座の「人狼」の女主人公を勤めるに付、明日午後一時頃に打合せに来るといふ。

町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。横町の雪はまだ消えない。

五時頃に中野が来て、婦人倶楽部の方へ見せたいからとて自作の戯曲「風」の原稿をうけ取り、六時頃まで話してゆく。

七時過る頃入浴。読書。

十時就寝。今夜も午前三時頃まで眠られなかった。

二十日（金曜）晴（五十度）

午前九時起床。けふはめづらしく晴れた。

「清正」を訂正しながら浄書。

午後一時頃に松蔭が来て、「人狼」のおいよの役について色々相談あり、二時頃まで話してゆく。

それから四谷を散歩。晴れてはあるが風が身にしてみても寒い。今年の春寒異常、感冒が頻りに流行するさうである。

鈴木千枝雄の戯曲「兄弟」を訂正し終る。「舞台」の原稿である。

七時半ごろ入浴。読書。わたしも感冒の気味で頭が重い。

十時半就寝。今夜も午前四時頃まで不眠。

二十一日（土曜）陰（四十一度）

午前十一時頃に眼をさましたが、感冒と神経衰弱の気味であるので、顔を洗って再び臥床。

終日陰つて寒く、をり／＼に微雪を飛ばした。

午後一時頃に服部宗治君が来た。内裏に雑誌「筋書」を発行すると云つて中止した人である。病中と聞いて門口で帰る。

三時頃に佐久間が来て、これも門口で帰る。鈴木余志子から戯曲原稿の追加を送つて来た。ほかに郵書五通到着。

今夜は入浴せず。十一時頃から安眠。

二十二日（日曜）雪（四十二度）

午前九時ごろ一旦起床。顔を洗つて再び臥床。

朝から雪、時々止んで又降りしきる。

午後二時頃に鈴木余志子が来たが、病中と聞いて門口で帰る。

今夜も入浴せず、幸に熱度は七度三分ぐらゐに下つた。十二時頃から眼がさめて、四時頃まで不眠。

二十三日（月曜）陰（四十二度）

午前八時頃起床。活版所から「舞台」三月号をとどけて来た。

熱も降下したので、けふは床の上に起き直つて「清正」の浄書をつづける。岸井の使が来て、半ぺんをくれた。陰つて寒く、をり／＼に微雪が飛ぶ。

夕方までに浄書十三枚。郵書六通到着。

八時ごろ入浴して、直ぐに寝る。今夜もよく眠られなかった。

二十四日（火曜）晴、陰（四十三度）

午前八時半起床。

けふも床の上で「清正」の浄書をつづける。熱が又少し出て、頭が重いやうである。「舞台」三月号を例の如く発送。

午後二時頃に佐久間が来て大阪鮓をくれ、門口で帰る。五時頃に岡君が来て、明治座の「人狼」の舞台監督をたのまれたと云ひ、その打合せながら一時間ほど話してゆく。岡君は病氣見舞の菓子をくれた。

そのあひだに山下が来て、役所の仕事忙しいので、明夜の嫩会には欠席するといひ、門口で帰る。午後から陰つて、寒い風が吹き出した。

夕方までに浄書十四枚。八時頃入浴して又寝る。

日本エスペラント会の三宅君が「修禪寺物語」のエスペラント訳本十部を持参、病臥中と聞いて、門口で帰る。今夜は午前一時頃から安眠。

二十五日（水曜）晴（四十五度）

午前八時半起床。

けふも床の上に坐つて「清正」の浄書をつづける。

武田萬兵衛君から富山の干柿を送つて来たので、隣家の近藤君方へ贈る。カステラ一箱を小包み便にして、須賀川の管野君方へ発送。

午後二時頃までに浄書を終る。第一幕十四枚、第二幕三十枚、題は「名古屋の清正」ときめる。

それから「舞台」の原稿二三種を訂正。床の上の仕事はどうも捗取らないので困る。

三越の日比翁助君の告別式が青山斎場で営まれるといふので、森部を代理に出してやる。日比君は初めて三越のデパートメント・ストアを経営した人である。

今夜はふたば会例会で、六時頃に山崎が先づ来た。

ついでに額田、小林、中島、中野、大村、佐久間が来たので、わたしも床を出て応接間へゆく。岸井は帝劇見物に行つたとて後れて来た。例に依て「舞台」四月号の相談あり、今夜はわたしが病中であるので、九時頃に散会。それから入浴。十一時就寝。夜半に発汗したので、起きて寝衣を着かへた。

二十六日（木曜）晴（五十度）

午前八時半起床。今朝は気分も快いので、床払ひをして二階の書斎に移る。けふから雛をかざる。

明治座初日の入場券を送つて来たので、中野、佐久間、

中島に郵送。

横浜の高橋から郵書が来たので、返書。

東京日日新聞の大塚君が来て、同新聞創刊六十年記念号を発行するに付、わたしにも在社当時の談話をしろといひ、三十分ほど話して去る。

日記が一週間分ほど畳まつたので購入。「名古屋の清正」の脚本二冊を速達便で松竹の木村君に発送。

陸軍大佐秘書官の名を以て、陸軍記念日晚餐会の招待状が来たが、不参の返書。帝劇から本年度の優待券を送つて来たので、返書。エスペラントの三宅君にも先夜の礼状を発送して置く。

上野つぎ子の舞踊劇「夢の朝妻」をよむ、舞台の原稿である。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。今夜も安眠。

二十七日（金曜）晴（五十四度）

午前八時起床。

大阪の山上から蕪の千枚漬一樽を送つて来たので、吉岡医師のもとへ持たせてやる。山上にも返書。

大村の筋書を訂正して、返送。森田から郵書が来たので、返書。

天気がよいので、十一時頃から四谷を散歩。新宿の布袋屋百貨店で雛二組と雑貨をかひ、食堂で昼餐。こゝら

は近來ます／＼繁華になつたが、車馬の雑踏と河麩の甚しいには頗る閉口した。

二時半ごろ帰宅。額田から郵書が来た。

松竹の脇屋君の戯曲をよむ。明治座の桜井君から速達便が来て、明日の舞台稽古は都合によつて、廿四孝、瞼の母、人狼、奇物変物といふ順序で行ふことになつたから、其積りで来てくれといふ。さうすると、人狼の稽古は夜に入るわけである。

六時（半）頃に原田君が来て、八時過るまで話してゆく。それから入浴。

十時半就寝。

二十八日（土曜）雨、雪、陰（五十度）

午前九時起床。あかつきに雨、更に雪となり、又雨となる。

大村から筋書受取りの返書が来た。中島から明治座入場券の礼状が来た。横浜の高橋から豆雛を送つて来たので、返書。

午後一時頃に額田の細君が来て牛肉をくれた。細君に嫩会二月分の会費を渡してやる。

午後から雨やんで陰る。明治座の舞台稽古で二時半頃から出てゆくと、「瞼の母」の第二幕が明いてゐる所であつた。こゝで長谷川伸、北沢楽天、鳥居言人の諸君に

逢つた。「人狼」の稽古は八時頃から始まつて、十時四十分頃に終る。

十一時頃帰宅。入浴。十二時半就寝。

留守中に横浜の飯田九一君が来て、旧冬約束の揮毫画幅をくれ、ほかに菓子をくれた。富塚と難波から「舞台」の礼状が来た。

本月の仕事は名古屋の清正（二幕、四十五枚）である。

（翻刻担当…勝倉明以）

昭和六年三月

一日（日曜）晴（四十三度）

午前九時起床。晴れて風吹く。

飯田君に昨日の礼状を発送。物集芳子にも郵書を送る。

彼の「過ぎにし物語」の件である。

森田が桃の花を買つて来て、雛壇に供へる。豆い「けり」を作つたので、紀尾井町の森君方へも贈る。

明治座の初日で、午後二時半頃から支度して出ようとする所へ鈴木余志子が来て切り花をくれ、門口で帰る。

明治座は三時開場。中野、佐久間、中島も来た。こゝで松村松僊君にも逢つた。第一「人狼」第二「廿四孝」第三「臉の母」の第一幕まで見物して、八時廿分頃に同座を出で、同四十分頃帰宅。

留守中に植村君が来て、若狭蝶をくれ、短尺の揮毫をたのんで行つた。山下から病氣見舞の郵書が来た。

入浴。十時半就寝。

二日（月曜）晴（四十四度）

午前八時半起床。けふも風が寒い。

松村君と額田に郵書。山下にも返書。湯河原の湯河原会館に郵書を発して、五日午前にゆく旨を通知。

鈴木戯曲「蔵前駕籠」に批評を添へて返送。おえい

はおとくを連れて、午後から四谷へ買物にゆく。

一時頃に木村君と黒川君同道で来訪。「名古屋の清正」はどうも歌右衛門が納まらないらしいので、他の狂言に搦きかへるといふ。黒川君は「人狼」の上演料をくれ、二時過ぎ頃まで話していく。

ついで中野と小林が来て、「舞台」四月号の表紙について相談あり、これも一時間あまり話してゆく。そのあひだに、おえい等帰宅。

三時過ぎ頃に、講談社の矢部君が来て、喜劇全集下巻にわたしの「能因法師」を掲載したとて、その謝礼をくれ、三十分ほど語る。ついで岸井が松山崇君ほか一人同道で来て、これも三十分ほど話してゆく。又そのあとへ大村が来て雛菓子をくれ、三十分あまり話してゆく。それからそれへと来客つゞきで、午後はなんにも手に着かなかつた。

三十間堀のふたばから雛の料理をとどけてくれた。七時半頃入浴。読書。十時半就寝。

三日（火曜）晴れ（五十二度）

午前八時起床。

植村君にたのまれた短尺四枚に揮毫して返送。森部に命じて、額田方へ「午後」（雛）菓子を持たせてやる。午後、久しぶりで築地の池田君を訪問。菓子折を持参。

池田君在宅、三時頃まで閑談。帰途、銀座を散歩。伊東屋で文房具などを買つて、四時過る頃に帰宅。けふは風なく、晴れて暖い日であつた。

脇屋君の戯曲「これが夫婦生活」を編集し終る。鈴木千枝雄君が自作の戯曲を持参。門口で帰る。

七時半入浴。読書。十時就寝。

四日（水曜）雨（五十―四）度

午前八時半起床。

松村君から郵書が来たので、返書。横浜の高橋から俳句雑誌「葵」に句を寄せてくれと云つて来たので、五六句をかいて送る。鈴木君にも郵書。

大西君結婚祝として縮緬の服紗を小包み便にして郵送。

明日から湯河原へゆくので、その仕度をする。午後二時頃に物集芳子が福永君同道で来た。わたしの作物出版（の件）であるが、婦人のことゝて、何を出版しようかと迷つてゐるらしい。

報知新聞社から帝劇見物の案内状が来たので、佐久間に発送。額田から郵書が来て、中野と佐久間と三人連れで湯河原へ来るといふ。

七時半頃入浴。読書。

十時半就寝。今夜は目が冴えて、午前三時頃まで眠ら

れなかつた。

五日（木曜）陰

午前八時起床。

松原から宮森君寄贈の果物籠をとりけて来た。

十時廿分頃から森部に送られて東京駅へゆく。十時五十五分発車。午後一時八分湯河原駅着。曇天ながら風無く、暖い日である。

おなじみの番頭西沢君に迎へられて、湯河原会館に入る。二階の十八番で、八畳と四畳の二間。女中はおふちさん。

五月ばかり来ないうちに、こゝの奉公人も随分変つた。おなじみの秋代さん、およしさんも去り、お鈴さんもこの十五日で暇を取るさうである。風呂番の藤さんも旧冬暇を取つて小田原へ行つたといふ。温泉場の奉公人などは出入繁きが習ではあるが、こゝの人たちはみな比較的に長く勤め通してゐて、私などもよく識つてゐただけに、その人たちが去つたと聞くと何だか心ざびしいやうにも思はれた。

入浴。昼餐は椀もり、蝦の金ぶら、イタリアフキツシユ。

おえいと森部、池田君、松村君にハガキを送る。宮森君に今朝の礼状を発送。それを投函ながら散歩。町のさ

まは別に変らないが、子供に駄馬を貸す商売が一つ殖えた。一時間五十銭であるといふ。

晚餐は椀もり、白魚のフライ、野菜煮。

読書。こゝは長座敷であるので、水の音もきこえない。

九時頃入浴。九時半就寝。

六日（金曜）晴

午前八時起床。入浴。

朝食は根芋の味噌汁、ヲムレッツ、菜のひたし物。

大阪の坪内君、横浜の飯田君、東京の鈴木君と富塚に発信。

藤嶋誠夫といふ人の戯曲「兄と弟と」とを編集し終る。

「舞台」の原稿である。

昼餐は椀もり、あま鯛のしほ焼、白魚のフライ。

午後一時頃から町を散歩。途中で秋代さんとおりえさんに逢った。おりえさんは流感で一月余りも寝てゐたさうである。竹細工や椿の油などを買つて、二時廿分頃寄宿。

山下から郵書が来たので、返書。厚田君、物集芳子、横浜の高橋にも郵書を送る。宿からは茶菓子として団子をくれた。

岸井の喜劇「甘円の貸間あり」を訂正し終る。晚餐は茶碗むし、蝦の金ぷら、野菜煮。

けふは終日晴れて暖く、山色水声漸く春意あるをおぼえた。

読書。九時頃入浴。九時半就寝。

夜半俄に大雨。午前一時から二時までのあひだに二回の地震。それやこれやで幾たびか眼がさめて、二時頃まで安眠することが出来なかつた。

七日（土曜）晴

午前七時半起床。暁より晴れる。入浴。

朝食は三つ葉の味噌汁、蒲鉾、茄子の味噌煮。

隣室の婦人客が感冒で発熱、医師を呼んだ。「東京」〈横浜〉で流感に罹り、全快して昨日からこゝへ転地したのであるが、やはり本当に快癒してゐなかつたものとみえる。

佐久間の戯曲「伊助の捕物」を訂正、なか／＼手がかる。昼餐は椀もり、白魚のうに焼、野菜煮。

午後一時頃散歩。晴れて暖い。帰つて読書。

六時過る頃に三木君が来た。逗子に歌右衛門を訪ひ、その帰途に立寄つたのである。その話によると、歌右衛門が「名古屋の清正」を演じないと云つたのは木村君の誤解で、この役は頗る研究を要するから、四月興行には上演できないと云つたのである。したがつて、それを他の俳優に上演されては困る。やはり自分が上演したいの

であるから、その旨を私に伝えてくれと頼まれたといふのである。私はどちらでも好いから、木村君とよく相談してくれと答へて置く。

三木君は私と共に晚餐（鯛のうしほ、あま鯛のてり焼、白魚のうま煮）を喫して雑談。九時四十七分の上り列車で帰京。三木君はみやげに菓子くれた。

それから入浴。十時半ごろ就寝。今夜も午前二時頃に地震。

八日（日曜）晴

午前七時起床。入浴。

朝食は豆腐のみそ汁、玉子焼、菜のひたし物。

隣室の婦人は容態依然として宜しからず。今朝から看護婦を雇ひ入れた。感冒以外に胃潰瘍の疑ひがあるといふ。十六番の座敷にゐる男の兄も感冒で発熱したさうである。

八時四十分頃に地震。こゝらは毎日二三回の地震が絶えないのである。

改造社の高平君から郵書が来て、文学大全集のうち私の分の第一冊には「半七捕物帳」を編入してくれといふ。森部から郵書が来て、東京でも六日の夜半には可なりの地震があつたといふ。

昼餐には腕もり、あま鯛のてり焼、蝦のフライ。

午後一時頃散歩。日の出屋で喫茶。二時廿分頃帰宿。宿からは茶菓子としてカステラを呉れた。

四時頃までに佐久間の「伊助の捕物」を訂正し終る。随分これには手が懸つた。

空ををり／＼に陰つて、きのふよりも風が寒い。晚餐は腕もり、蝦の鬼がら焼、野菜煮。

読書。俳句など作る。九時ごろ入浴。九時半就寝。

九日（月曜）晴

午前六時四十分起床。入浴。朝から晴れて春めく。

朝食は根芋の味噌汁、蒲鉾、菜の卵とぢ。

横浜の飯田君より支那の菓子を送ってくれたので、礼状を発送。高橋からも返書が来た。八時四十分ごろ軽震。十時頃から散歩。三木君に貰つた菓子折をたづさへて、おりえさんの見舞にゆくと、おりえさんはその後ます／＼快方に向つたといふ。門口で立話しをして別れる。歸つて読書。

昼餐は腕もり、小鯛のしほ焼、蝦のボイル。

高平君に返書。東京の自宅へも郵書を発して、十二日帰京の旨を通知。その郵便を投函ながら、午後一時頃から再び散歩。

二時頃帰宿。読書。隣家の婦人のところへは東京から医師が来たさうである。宿からは茶菓子として草餅をく

れた。

晚餐は椀盛、蝦の具足煮、ビーフカツレツ。
読書。九時入浴。九時半就寝。

十日（火曜）陰

午前六時半起床。入浴。今朝は陰つて寒い。

朝食は三つ葉の味噌汁、玉子焼、菜のひたし物。

「過ぎにし物語」を訂正。昼餐は椀もり、白魚のフライ、竹の子と烏そばろ。

額田から郵書が来て、中野は感冒、自分は多忙であるので、湯河原へは来られないといふ。岸井からも郵書が来て、新宿の紀国屋書店に雇はれることになったといふ。ほかに大村と鈴木千枝雄君から郵書が来た。いづれも返書。

午後一時ごろ散歩。みやげ物の梅干と七色漬を買つて、二時頃帰宿。

宿からは茶菓子として阿部川餅をくれた。六時頃までに「過ぎにし物語」第十九回までを訂正、約二百枚分である。

陰つてゐるが風なく、寒気も弛む。晚餐は椀もり、茄子の亀甲焼、ビーフカツレツ。

読書。九時入浴。九時半就寝。

十一日（水曜）陰

午前七時起床。入浴。

朝食は小蕪の味噌汁、ヲムレツ、菜の胡麻にごし。隣家の婦人はやゝ快方に向ひ、今朝は重湯を啜つたさうである。

十時頃から散歩。日の出屋で喫茶、あはせて土産用のきび餅四箱を買ひ、更に魚仙といふ魚屋で鰯の干魚四籠をかひ、十一時半ごろ帰宿。

昼餐は椀もり、鯛茶、ビーフステーキ。午後一時頃から再び散歩。楽焼の店に立寄つて、大小四枚の掛皿「を」へに」俳句をかく。

二時過るころ帰宿。二時頃までに「過ぎにし物語」第三十一回までを訂正し終る。宿からは茶菓子として団子をくれた。

晚餐は椀もり、蝦の金ぷら、野菜煮。明日帰京の予定であるので、荷ごしらへなどをする。

九時入浴。九時半就寝。十時頃に大雨、降雹、雷鳴。一時間ほどで止む。

十二日（木曜）晴

午前七時起床、入浴。

朝食は若メの味噌汁、若サギの煮物、菜のひたし物。朝から快晴、気候もめつさり春めいた。十時頃におり

えさんが尋ねて来て、生椎茸一籠をくれた。

十一時廿七分発の上り列車で帰京の途に就く。大船駅で鯛めしの弁当。午後一時三十四分東京駅着、森部に迎へられて帰宅。

三時頃に佐久間が来て、一時間あまり話してゆく。おえいはみやげの干鰯一籠を小林君方へ持参。

留守中に訪問客十余人。郵書「四」〈三〉十通ほど到着。その郵書を一々披見するだけでも一仕事である。夕から寒い風が吹き出した。

七時過る頃入浴。燈下で湯河原の話などする。

九時半就寝。

十三日（金曜）晴れ（五十四度）

午前八時起床。

九時半頃に小林君が来て菓子をくれ、あはせて内裏に〈表装を〉依頼して置いた飯田君揮毫の画幅をとゞけてくれ、一時間ほど話してゆく。

森部に命じて、吉沢君と大村方へ湯河原の土産物をとゞけさせる。おとくは淀橋のおさだ方へみやげ物をとゞけにゆく。

額田から夕書が来たので、返書。ほかに留守中の返書八通をかく。

午後一時半頃に中野が来て、三十分あまり話してゆく。

三島の家政女学校から頼まれた色紙二枚と短尺三枚をかく。更に蕉影会の斎藤君にたのまれた短尺十枚をかく。それから又、留守中の返信十一通をかく。わづか一週間ばかり旅行したのであるが、留守中に種々の用件が堆積してある「の」〈に〉は閉口する。

五時半頃に額田が来て、七時頃まで語る。それから入浴。

九時半頃に森部帰宅、これで卒業試験を終ったといふ。十時就寝。暮れて寒い風が吹き出した。

十四日（土曜）晴（五十三度）

午前八時起床。今朝も寒い風が吹く。

吉沢君と大村から昨日の礼状が来た。焼海苔の缶詰を小包み便にして、湯河原のおりえさんに発送。

三木君から郵書が来たので、返書。蕉影会の句集を選ぶ。句数が多いので、非常に暇取れた。

「過ぎにし物語」第三十七回までを訂正し終る。これで完結である。あはせて三百九十枚余。それから町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。

那須俊宣（前名鈴木鼓村）君死去の通知が来たので、悔み状を発送。越後の北陸文学会から短尺の揮毫をたのんで来たので、揮毫返送。

名古屋の木太刀支部から俳句の選を頼んで来たので、

選了。

七時過るころ入浴。読書。十時就寝。

十五日（日曜）晴（五十八度）

午前八時起床。

十時頃に渡辺の博が来て、第二学年の試験を終わったといひ、十二時頃まで話してゆく。

午後二時頃から神田を散歩。けふは晴れて暖い。

四時頃帰宅。それから旧作の「青蛙堂鬼談」を訂正、文学大全集の原稿である。なにしろ一冊に七千枚ぐらゐの原稿をあつめるのであるから、一仕事である。

当分はこれに没頭しなければならない。

大西君から結婚祝物の礼状が来た。山上からも郵書が来た。

七時頃入浴。読書。十時就寝。

十六日（月曜）晴（五十八度）

午前八時起床。

山形県大山町の本間八右衛門君から私の旧作「妹」「鳥籠」「暁」「雁の翅」「極楽」の新聞切貼り帳を送つて来てくれた。文学全集の原稿用である。その厚意は頗る有難い。取りあへず礼状を送り、あはせて短尺十枚に俳句をかいて発送。

「近代異妖編」を訂正、午後三時頃に終る。

おえいは森部同道で、三時半頃から明治座見物に出てゆく。

「絵絹」を訂正、これは長編小説で先年も一度訂正したのであるが、更に少しく訂正を加へることにしたのである。

八時頃入浴。大村から郵書が来て、兄が高等学校へ入学するために、山形まで送つていったといふ。

読書。十一時頃におえい等帰宅。十二時就寝。

十七日（「月」〈火〉曜）陰、晴、雨（五十八度）

午前八時半起床。一丁目の小川君から草花の鉢植えをくれた。

「絵絹」を訂正し終る。更に「五色筆」を訂正。

午後一時頃から四谷を散歩。二時頃帰宅。

三時頃に佐久間が来たので、本間君から貸して貰つた「雁の翅」の謄写をたのむ。佐久間は三十分ほど話してゆく。四時過る頃に小林が来て、自作の戯曲の添削をたのみ、これも三十分ほど話してゆく。山形の大村から林檎を送つて来た。

七時頃までに「五色筆」を訂正し終る。宵から雨。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。風雨の音。

十八日（水曜）晴（五十七度）

午前八時起床。けふから春の彼岸に入るといふ。寒気は弛んだが、風が強い。

大村から送つて来た林檎を近藤、大野、小川、坂元の諸家に分配。

けふから「近松物語」を訂正。文芸家協会の林田君から郵書が来たので、返書。森部の兄から郵書が来たので、これにも返書。

午後一時半頃に岸井が来た。ついで大村が来て、昨夜山形から帰京したといひ、みやげの人形や菓子をくれた。大村は先づ去り、岸井はあとに残つて二時四十分頃まで話してゆく。大野君から先刻の返礼として菓子をくれた。

六時半頃まで「近松物語」を訂正したが、まだ半分も終らない。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。夕から風やむ。

十九日（木曜）陰、雨、陰（五十四度）

午前八時起床。

けさは文学大全集に編入すべき戯曲を整理、第一巻に四十余种、第二巻第三巻もほど同様で、その選定に殆ど一日を費した。

おえいは姉と共に青山へ墓参にゆき、十一時過るころ

帰宅。

森部は午後から額田方へゆく。一時頃から細雨、やがて止む。三時半頃に森部帰宅。その談によれば、恰も郷里から老母危篤の急電が到着したので、額田は細君子供同伴で今夜帰郷するといふ。

四時半頃に二宮君が来て、博文館の森下君に紹介状をかいてくれといひ、三十分あまり話してゆく。

森部は額田を見送るとて、東京駅へ出てゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

二十日（「木」へ金曜）陰、晴（五十八度）

午前八時半起床。

郷里の額田家に見舞状を発送。それと行きちがひに、額田からも郵書が来て、留守中を頼むといふ。

文学大全集の第一巻戯曲の分だけを整理し終る。四十三種で、二千七八百枚である。それから更に「支那怪奇小説集」を訂正。

隣家の近藤君から白魚をくれた。岸井の使が来て、誕生日の強飯をくれた。

渥美君に郵書を発して、明治三十五年一月発行の文芸倶楽部臨時増刊を持つてゐるかと思ひ合せ。

森部は夕方から額田の留守宅を見まはりに行く。

七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

二十一日（土曜）晴（五十八度）

午前八時起床。けさは春季皇霊祭。朝から快晴。

山形の本間君から更に雑誌ボケット三冊を送つて来た。わたしの「女教師」と「眼科医院」が掲載されてゐるのである。取りあへず返書。森部にたのんで右二種の小説を謄写させる。

「近松物語」を訂正。午後一時ごろ散歩。三時頃帰宅すると、森部のところへ下山君が来て、額田の母は十九日午後四時死去したといふ。額田が出発前、已に世を去つたのである。直ぐに勝間田の額田次郎君あてに悔み状を出して置く。二宮順一君が久しぶりで来訪、一時間あまり話してゆく。

川原小枝子から郵書が来たので、返書。渥美君から返書が来て、文芸倶楽部の臨時増刊は手もとにあるといふ。斎藤きよ子から秀一君一週年記念として「おもかげ」といふ遺稿を送つて来たので、返書。

森部は下山君同道で、夕刻から額田方へ泊りにゆく。午後七時頃まで机に向つてゐたが、「近松物語」の訂正がまだ終らない。

七時半ごろ入浴。今夜は眼が疲れたので読書せず。十時半就寝。

二十二日（日曜）晴（六十度）

午前八時起床。森部は早朝に帰宅。

額田の実家へ香典を郵送。

午後、森部を渥美君方へつかはして、文芸倶楽部の増刊を借りる。わたしも神田を散歩。古本二冊を買つて、二時ごろ帰宅。

三時頃に山下が来て、三十分ほど話してゆく。額田から郵書が来て、母は廿日の午後二時死去したといふ。下山君の報告とは少し相違してゐるが、いづれにしても臨終の間に合はなかつたらしい。

午後七時頃までに「近松物語」を訂正し終る。それから入浴。

夕刊をみると、けふの日曜は好晴のために、市内も郊外もおびたゞしい人出であつたといふ。

読書。十時半就寝。

二十三日（月曜）晴（六十八度）

午前七時起床。

「江戸戯曲物語」を訂正。十時頃に中島が来て、学校の卒業試験も終つたに付、一先づ帰阪して一家を整理し、来る十月頃に母を連れて上京すると云ひ、十一時過る頃まで話してゆく。

午後には「十番随筆」を訂正。これで文学大全集の第一巻を終つたので、その目次をかく。戯曲四十三編のほ

かに、「絵絹」「青蛙堂鬼談」「半七捕物帳」「近代異妖編」「支那怪奇小説集」「近松物語」「江戸戯曲物語」「五色筆」「十番随筆」の九種、あはせて六千余枚である。去十四日から訂正を始めて、けふまでに恰も十日間を費した。

森部はポケットの「女教師」と「眼科医院」を謄写し終つたので、その雑誌六冊を小包み便にして、山形の間君に返送。

四時過る頃に鈴木千枝雄君来訪、一時間あまり語る。氣候はいよゝ暖くなつたが、南風が強く吹く。

森部は更に他の原稿を謄写するといふので、矢はり本間君から借りた新聞切抜きの中から時事新報所載「妹」の謄写をたのむ。百四十回の長編である。

七時ごろ入浴。風吹きやまず、大粒の雨がはら／＼と降り出した。

読書。十時就寝。

二十四日（火曜）晴（五十二度）

午前八時起床。今朝も風が吹きつゞけてゐる。

伊勢の亀山の上川碧衣から頼んで来た句集を選了。あはせて短尺三枚に揮毫して返送。更に飯田君にたのまれてゐた絵絹十五枚に揮毫、一々その画面に相当するやうな俳句を作らなければならないので、やゝ面倒であつた

が、兎も角も午後一時頃までに揮毫し終る。

一時半頃に高垣君来訪、共同印刷会社の大橋君が新に雑誌を発行する事となり、高垣君がその編集をひき受ける筈であるので、それが決定すれば、編集助手として森部を雇ひ入れると云ひ、一時間ほど話してゆく。

つゞいて三橋久夫君が来る、キングの西原君が来る。西原君はキングへ戯曲か小説を寄稿してくれとの事であつたが、多忙であるから断る。

そこへ又、佐久間が来た。三橋君は五時半頃に去り、佐久間は六時廿分頃まで話してゆく。佐久間の話によると、大隈君の新興戯曲は四月号を休むといふ。劇に関する雑誌の経営困難はいづ方も同様と察せられた。

七時半ごろ入浴。北西の風は終日吹き暴れて、暮れてもまだ止まない。

読書。十時半就寝。風の音烈しく、それがために幾たびか眼がさめて、終夜碌々に安眠できなかった。

二十五日（水曜）晴（六十度）

午前七時起床。昨夜不眠のために頭が重い。

風は漸く衰へて、氣候もやゝ暖くなる。

「舞台」四月号を清水、原田、林、難波、鈴木、高橋、東儀、富塚の諸家へ発送。坪内士行君の戯曲「二人の傀儡師」をよむ。

午後一時半頃に改造社の高平君が来て、文学大全集の原稿を受取つてゆく。都合によつては、一卷のページ数を減じ、三巻の予定を四巻に増すかも知れないとの事であつた。

三時頃から四谷を散歩。四時過るころ帰宅。岸井から郵書が来て、感冒のために今夜の嫩会は欠席するといふ。坪内君の戯曲を編集し終る。中村孝子から郵書が来たので、返書。

今夜はふたば会で、山崎が先づ来た。つゞいて大村、小林、中野、佐久間が来た。額田、山下、中島、岸井は欠席。例によつて五月号編集の相談などしてゐると、七時半頃に紀尾井町の小林君方から使が来て、老母が本日午後四時過るころに突然仆れて死去したといふ。十年以来の病人ではあつたが、かう突然に世を去らうとも思はなかつた。

この訃報におどろかされて、雨とおえいは森部同道で小林君方へ駆け付ける。それがために、今夜のふたば会も八時頃に散会。

私もつゞいて紀尾井町へ行く。親戚二三人がもう詰めてゐた。老母は突然に仆れたまま起きず、二回の注射もその効がなかつたといふ。

姉とおえいと私は十一時頃帰宅。それから入浴。十二時就寝。

森部はあとに残つて、諸方へ通知のハガキを書き、十二時半ごろ帰宅。今夜は風のない暖い夜であつた。

二十六日（木曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

森部は早朝から紀尾井町へ手伝ひにゆく。姉も供花をたづさへてゆく。

額田から香典の礼状が来たので、返書。

おえいはおとくを連れて、午後から紀尾井町へ出てゆく。私もあとから行く。

小林君の郷里からは弟の覚太郎君が出て来てゐた。武内桂舟君もあとから来た。おとくを手伝に残して、おえいと私は四時頃帰宅。

長谷川伸君の戯曲「新説大晏寺堤」を編集、舞台の原稿である。紀尾井町へは通夜の人々のために鮎をとゞけさせる。おえいも五時頃から再び出てゆく。

読書。六時頃から雨。八時頃におえい帰宅。夕方から吊客が続々押掛けて来て、狭い家一杯になつてゐるといふので、私は再び行くことを見合せる。

八時半ごろ入浴。雨はやんで、風が強く吹き出した。十時半就寝。十二時頃におとく帰宅。夜もすがら風の音。

二十七日（金曜）晴、陰（五十四度）

午前八時起床。

森部とおとくは朝から小林君方へ出てゆく。姉もゆく。おえいも行く。

私も十二時頃から出てゆく。朝は晴れたが、やがて陰る。気候も薄寒くなつた。

告別式は午後一時から始めて、二時に終る。それから遺骸を幡ヶ谷の火葬場へ送ることになつて、小林君兄弟のほかに男四人、女子供六人、自動車に分乗してゆく。三時頃に火葬場へ着し、四時二十分頃に火葬を終る。近來は電氣を以て死体を焚くことが専ら行はれるので、再び骨揚げにゆくまでもなく、茶屋に暫く休憩してゐるあひだに一切を終るのである。

四時四十分頃紀尾井町に帰着。晚餐の馳走になつて、七時三十分ごろ帰宅。

留守中に文芸春秋社の川崎君が原稿をたのみに來たといふ。富塚から「舞台」の礼状が來た。

八時頃入浴。十時半就寝。

二十八日（土曜）陰、晴（五十四度）

午前八時半起床。

十時頃に小林君が覺太郎君同道で來訪、葬儀中彼れ是れ世話になつた挨拶である。覺太郎君はみやげ物をくれ

たので、おえいからも土産物を贈る。両君は一時間ほど話してゆく。

小林宗吉の戯曲「女優の裁判」を訂正。

午後十二時半頃に豊田君が來て、三十分ほど話してゆく。そのあひだに小林が田郷君同道で來て、門口で帰る。田郷君は雑誌「改造」の四月号をくれた。田郷君の戯曲「印度」が掲載されてゐるのである。

明治演劇年表その他の雜文を取纏めて、中野に発送。横浜の高橋から舞台の礼状が來た。

法政大学の卒業式で森部は午後から登校、六時ごろ帰宅。無事に卒業証書を貰つて來た。これで先づ森部も学校生活を終つて、いよいよ実世間へ乗出すのである。切にその成功を祈る。

田郷君に雑誌の礼状を発送、小林にも郵書を送る。深川の鴉田といふ青年から郵書が來たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（日曜）晴（六十度）

午前八時起床。

横浜の飯田君から揮毫の礼状が來た。難波から舞台の礼状が來た。

横浜の高橋から京都と鳥取の玩具を送つて來たので、返書。

小林の戯曲を訂正し終る。これで「舞台」五月号の戯曲六種をまとめ終つた。午後、四谷を散歩。

「明治演劇年表」の三十八年以後がまだ纏まつてゐないので、夕方までに五枚ほど書く。種々の参考書をあさるので、頗る面倒である。

七時ごろ入浴。八時頃に岸井が来て、「舞台」四月号を受取り、門口で帰る。

読書。十時半就寝。

三十日（月曜）陰（五十八度）

午前九時起床。

小林君が来て、母の逮夜に相当するので、今夕五時から夫婦同道で四谷見附外の料理店魚金へ来てくれといひ、門口で帰る。

「明治演劇年表」をかきつゞける。午後二時頃に文芸春秋社の川崎君が来て、同社発行のオール読物に寄稿してくれといひ、廿分ほど話してゆく。

四時頃までに年表六枚、これで明治四十五年まで完結。

四時四十分頃からおえい同道で魚金へゆく。来会者は小林君夫婦と親戚知人、私等をあはせて十人、酒飯の馳走になつて八時頃帰宅。

留守中に佐久間が来て、舞台五月号の原稿をうけ取つてゆく。ほかに田郷君も来さうである。

森部は今夜も額田方へ泊りにゆく。
入浴。十時半就寝。

三十一日（火曜）陰、雨（五十六度）

午前八時起床。

小林君母の初七日に付、九時半頃から花をたづさへて訪問。他にも来客があつたので、一時間ほど帰宅。その節、絵絹や唐紙に揮毫をたのまれたので、自宅へ持ち帰つて直ぐに揮毫、おとくに命じて届けさせる。

午後一時過る頃から細雨。愛媛の岡田禎子から子規せんべいといふのを送つて来た。ほかに鳴雪羊羹もあるという。俳人の出生地だけにこんな物を売出したとみえる。「眼科病院」を訂正。森部に浄書させたものである。それから旧作「探偵夜話」を訂正。文学大全集の原稿である。

五時頃に鳥居清忠君の使が来て、その著「劇雅集」と菓子をとゞけてくれた。それには私の和歌と俳句が写真版にして掲げられてある。

七時頃に森部帰宅。今朝額田方から青梅の高垣君方へまはり、雑誌の件について種々打合せて来たといふ。

七時半ごろ入浴。読書。森部は今夜も額田方へ泊りにゆく。

十時半就寝。

本月は文学大全集の原稿整理以外に、これといふ仕事

もしなかった。

(翻刻担当：杉本裕樹)

昭和六年四月

一日(水曜)雨(五十四度)

午前七時起床。細雨。

やがて森部帰宅。額田は本日帰京するといふ。

鳥居君に昨日の礼状を発送。鈴木千枝雄が転居したといふので、これにも返書。海野の弟の一週忌も近いたので、郵書を送る。

おえいはおとくを連れて、銀座へ買物にゆく。

午後十二時半頃に田郷君が来て、その作「印度」の当選祝賀会を開くに付、わたしにも発起人の一人となつてくれといひ、一時間ほど語る。ついで岸井が来る。渡辺のおしげが来た。おしげがあとに残つて話してゐると、二時過る頃におえい等帰宅。

旧稿の随筆類を訂正。更に森部に謄写させた時事新報連載小説「妹」を訂正。なか／＼面倒である。

長野の小林覚太郎君から郵書が来たので、返書。愛媛の岡田楨子にも礼状を発送。

七時半入浴。読書。十時半就寝。

二日(木曜)晴、陰(五十八度)

午前八時起床。

額田から帰京の通知が来た。福島石井から郵書が来

たので、返書。

「妹」を訂正。

午後一時頃から四谷を散歩。二時頃帰宅すると、額田が来てゐた。母葬儀の話などあつて、三時半頃まで語る。

つゞいて改造社の高平君が来て、いよ／＼私の全集を四巻に増すことにしたに付、一卷分のページを少しく減じてくれといふので、戯曲十二種と小説「絵絹」「支那怪奇小説集」「江戸戯曲物語」「十番随筆」を見合せることとし、その代りに「半七捕物帳」全部を編入することに決定、四時半頃まで話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。夕から寒い風が吹き出した。おとくは宵から巢鴨の植田君方へゆきて、九時ごろ帰宅。その話によると、植田家の娘は先頃から精神に異状を生じ、夕方からどこへか飛び出したまゝ帰宅しないといふ。それは困つたことである。

十時半就寝。

三日（金曜）晴（六十度）

午前八時半起床。けふは神武天皇祭。

文学大全集の目次を訂正、それに「半七捕物帳」の下巻を添へて、改造社の高平君に発送。

海野の細君が来て菓子をくれ、一時間ほど話してゆく。午後二時頃から神田辺を散歩。風なく、日も暖く、世

間も俄に春めいた。古書二冊をかつて三時半ごろ帰宅すると、額田嘉晴君が来てゐた。母死去の際に、私から吊辞や香典を貰つた挨拶である。一時間ほど話してゆく。「妹」を訂正。なにしろ十七八年前の旧稿であるから、手を入れるところが多い。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

四日（土曜）晴（六十五度）

午前八時起床。けふも快晴。

九時半頃から森部同道で青山へ墓参にゆく。こゝらの桜はもう開いたのもある。往復ともに散歩ながら徒歩。帰途、四谷で昼餐。午後一時ごろ帰宅。それから花壇を整理。

横浜の高橋と森部の兄から郵便が来たので、返書。高平君からも原稿受取りの返書が来た。

二時半頃に小林が来て、三十分あまり話してゆく。それから「妹」を訂正。

七時半ごろ入浴。読書。吉祥寺の松沢君の使が来て、ウドをくれた。

十時就寝。

五日（日曜）晴、陰、雨（五十八度）

午前八時起床。

松沢君に頼まれた短尺十二枚に揮毫して返送。それから「妹」を訂正。

おえいは朝から世田ヶ谷の上松方へゆく。

朝は晴れたが、やがて陰り、十一時頃から雨。折角の日曜もさん／＼である。

十二時半頃におさだが野菜を持参、一月下旬から三月初旬まで感冒で寝てゐたさうである。女中部屋で二時頃まで話してゆく。

岡君が来て、わたしの端唄「夢のあと」が節付けになったといひ、門口で帰る。つゞいて物集芳子が来て、いよ／＼「過ぎにし物語」の出版に着手するといひ、その原稿を受け取つてゆく。

三時ごろにおえい帰宅。四時過る頃から雨晴れる。

八王子の大室君から郵書が来て、先月廿八日卒業したといふ。返書。山崎からも郵書が来たので、返書。

六時頃までに「妹」五十回までを訂正し終る。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。

六日（月曜）晴（六十二度）

午前八時半起床。

「妹」を訂正。午後二時頃から四谷を散歩。三時半ごろ帰宅。

五時頃に山下が新婦文字同道で来た。山下はみやげを呉れたので、おえいからも祝ひの品を贈る。

六時半頃までに「妹」十五回分を訂正し終る。植田の細君から郵書が来て、娘は無事に帰宅したといふ。先づは安心である。

七時半頃に大野君が菓子を持参、九時頃まで話してゆく。

それから入浴。十一時就寝。夜半に強い風が吹き出した。

七日（火曜）陰、晴（五十六度）

午前八時半ごろ起床。八時頃俄に陰つて雪を降らしたといふ。

新聞をみると、山形を始め東北各地方は暴風雪であつたといふので、山形の本間君に見舞状を發送。菊池曉汀死去の通知が来たので、悔み状を發送。松沢君から短尺の礼状が来た。

越後のしぐれ社から俳句の選をたのんで来たので、選了、返送。尾張の長谷川君から短尺七枚を送つて来たので、揮毫返送。大阪の山上から嫩会の会費を送つて来たので、これにも返書。

けふは父の祥月命日に相当するので、仏前に供物をさ^さげて焼香。姉とおえいは午後から青山へ墓参にゆく。

夕方までに「妹」廿回分を訂正。終日寒い風が吹く。七時頃に中野が来て、十日の夜に嫩会員の小集会を新宿の白十字堂に開くといひ、九時頃まで話してゆく。

それから入浴。十一時就寝。

八日（水曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。花見時としては薄寒い陽気である。横浜の飯田君が「■」ら郵書が来て、十七日に桃の花見物に來いといふので、その案内をたのむといふ返書を出して置く。

午後四谷を散歩。一時半ごろ帰宅すると、坪井のおたほさんが久しぶりで来てゐた。おたほさんは麹町七丁目の横町に住む「■」へ轉へ松富雄といふ中学生を私の門下にくれといひ、それから雑談、三時半頃に去る。「妹」十五回分を訂正。七時頃に佐久間が来て、一週間ほど大阪を旅行して來たといひ、九時頃まで話してゆく。

入浴。十一時頃就寝。

九日（木曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。今朝も寒い風が吹く。不順の陽気である。

「妹」を訂正。

午後一時頃に額田の細君が来て、三十分ほど話してゆく。つゞいて樽松富雄といふ青年が來た。昨日坪井から頼まれた文学志願者である。そこへ又、俵木が来て、河竹繁俊君に紹介状をかいにくれといひ、一時間ほど語る。樽松はあとに残つて、更に三十分あまり話してゆく。

六時頃に飯田君が来て、十七日には必ず桃花見物に來てくれといふ。紀尾井町的小林君も同行するさうである。飯田君は八時頃まで語る。

入浴。読書。十時半就寝。

十日（金曜）晴（六十五度）

午前八時半起床。氣候もやうやく春めく。

大阪の中島から結婚の通知が來たので、返書。田郷虎雄君の「印度」記念会に出席の返書。読売新聞の村上君が來た。

「妹」を訂正。飯田君に貰つた支那菓子を大野君と近藤君方へ分配。

午後三時頃に大村が来て、廿分ほど語る。つゞいて三橋君が来て、五時頃まで話してゆく。この頃は毎日來客が多い。

森部は今夕刻までに「妹」を謄写し終る。あはせて六百五枚。

山形の本間君から返書が来て、風雪何の被害もなかつ

たといふ。浜松の土屋君から郵便が来たので、返書。

改造社の使が来て「修禪寺物語」増版の捺印を求めてゆく。

七時半入浴。読書。十時半就寝。

十一日（土曜）陰、雨（六十四度）

午前八時半起床。

「妹」を訂正。午後零時半頃から麹町通りを散歩。細雨が降り出したので、早々に帰宅。

おたいの姉が来て、おたいの暇を取つてゆく。

二時半頃までに「妹」を訂正し終る。一種の旧作の訂正にこれほどの時間を費しては大仕事である。

志摩の岡紫石君から短尺の揮毫をたのんで来たので、四枚かく。朝鮮の学生金義波君に頼まれた短尺六枚にも揮毫。

山崎の喜劇「鷺鳥」石井の戯曲「百万石の墨付」をよむ。後者は長編である。

暮れて雨いよ／＼降りしきる。七時ごろ入浴。読書。

十時就寝。十二時頃から風も吹き加はつて暴れ模様となる。咲き揃つた桜花もこれで吹き散されるのであらう。今更ではないが、春は短い。この風雨におどろかされて、幾たびか眼がさめた。

十二日（日曜）陰（五十四度）

午前九時起床。

「過ぎにし物語」の広告文をかく。けふも陰つて寒い。

花盛りの日曜もこれでは差したる人出もあるまいと思はれた。

二時半頃に鈴木余志子が来て、四時過る頃まで話してゆく。

石井の戯曲「百万石の墨付」を訂正。文芸家協会から郵便が来て、昨年改造社から発行した現代日本文学全集の印税寄付として五十円を寄贈してくれといふ。承諾の返書。

七時半頃入浴。読書。十時半就寝。今夜も眠られなかつた。

十三日（月曜）陰、雨（五十八度）

午前八時半起床。

おとくは横浜の親戚をたづねるとて、朝から出てゆく。岩谷君の紹介で、小田原の守屋源次らといふ人が来て、修禪寺における頼家の事蹟について問合せがあり。一時間ほど話してゆく。

藤沢清造君から三島霜川君寄贈演芸会の入場券二枚を送つて来たので、右入場料を郵送して置く。石井から又もや自作の戯曲を送つて来たので、返書。

午後、四谷を散歩。二時半頃帰宅。それから町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。帰る頃に細雨、間もなく止む。四時半頃に佐久間が来て、祖父を湯河原会館へ送つてゆくに付、わたしに紹介状をかいてくれといふ。ついで小林が来て、五時過る頃に帰る。

七時過る頃入浴。読書。九時頃から又もや雨。九時半頃におとく帰宅。

十時半就寝。

十四日（火曜）晴（六十五度）

午前八時半起床。

文芸家協会の使が来て、文学全集の印税寄付金を受取つてゆく。大村から帝劇の劇評を送つて来たので、一読の上、大黒活版所へ郵送。

晴れて暖くなる。午後からペンキ屋の職人が来て、門扉のペンキを塗りかへ、木柵に洪を塗る。

雇人請宿から新しい女中を連れて来た。山本おさき、廿二歳。

石井の戯曲を訂正。更に堀川肇子の喜劇「晴着はなけれど」を編集し終る。これで「舞台」六月号の戯曲は六種纏まる。

須賀川の管野君から郵書がきて、近日一家をあげて東京に移住するといふので、返書。山形の本間君からも郵

書が来た。

六時頃に山崎が来て、七時頃まで話してゆく。入浴。読書。十時半就寝。今夜も午前二時過る頃まで眠られなかつた。

十五日（水曜）陰（六十度）

午前六時起床。昨夜不眠のために頭が重い。リウマチスのために左腕が痛む。頗る不愉快である。

午前はぼんやりして暮らしてしまつた。午後は森部に指図して、花壇に草花の種子をまく。あはせて三十種。

午後一時頃に慶応の渡辺君が来て、来月五日の午後二時半頃から例の劇研究会に出席してくれといひ、三十分ほど話してゆく。

二時頃に額田が来て、三時頃まで語る。

田郷虎雄君の「印度」発表記念会で、七時頃から内幸町大阪ビルヂングの地下室レインボウ・グリルへゆく。嫩会からは額田、中野、山下、佐久間、小林、鈴木等も出席した。七時から食卓に就き、私は発企者の一人として挨拶を述べ、松居君、印度人ボース氏ほか数人のテール・スピーチがあり、記念撮影を終つて九時半ごろ散会。

十時ごろ帰宅。入浴。十一時半就寝。

十六日（木曜）晴（六十八度）

午前八時半起床。

九時半頃に星野麦人君が早稲田文科の真川君同道で来訪。真川君は舞台の隈取りを研究したいといふので、鳥居言人君宛の添書をかいてやる。星野君は木太刀十句選の原稿をたのんでゆく。

ついで正岡君が来て、二時間ほど話してゆく。

森部に謄写させた文芸倶楽部の「東京風俗」を訂正。文芸春秋社の川崎君に速達便を発して、オール読物の原稿執筆を断つてやる。不眠症と氣候のせゐで頭が重く、新しいものを書くやうな心持にならないからである。

三時頃に田郷君と中山君同道で、昨夜の挨拶に来た。

けふは晴れて暖く、氣候もやうやく本順に復したやうである。庭の海棠が盛に開く。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜も午前二時頃まで眠られなかつた。

十七日（金曜）陰、晴（六十五度）

午前八時起床。

けふは飯田君の案内で綱島の桃花見物にゆく日であるので、九時頃から自動車に乗つて紀尾井町の小林君方へ誘ひにゆくと、小林君は門前に出て待つてゐた。それから同乗して渋谷駅着、更に東横電鉄に乗りかへて、九

時五十分ごろ綱島駅に下車すると、飯田君が迎ひに来てゐた。

それから飯田君に案内されて、北綱島町の本宅に休憩。こゝで成島柳北の碑を一見。更に自動車に乗つて停車場付近へ引返し、温泉旅館琵琶園といふに入つて入浴。ラヂウム鉱泉といふのであるが、沃度のやうに真黒な湯である。

横浜から今村次郎といふ彫刻家も来て、昼餐を俱にし、旅館の主人も来て午後五時半頃まで雑談。こゝらの桃はみな畑に栽えてあるので、樹は低いが花は今や満開である。

六時頃にこゝを出て、更に電車に乗つて横浜駅着。山下町の支那町に入つて、成昌号といふ支那料理屋で晚餐。それから伊勢佐木町辺を散歩。私は震災後初めてこゝらを見物したのであるが、伊勢佐木町の大通りは銀座界限よりも繁昌してゐた。

九時ごろ桜木町で飯田君と今村君に別れ、省線電車に乗込んで有楽町着。麴町三丁目目で小林君に別れて、十時ごろ帰宅。

入浴。十一時半就寝。

十八日（土曜）陰（六十二度）

午前八時半起床。

木太刀社の十句選を選了、あはせて短尺十五枚を揮毫。飯田君に昨日の礼状を發送。中村孝子が来て菓子をくれ、門口で帰る。

姉は森部を連れて花見に出てゆく。

文芸倶楽部の「東京風俗」を訂正。午後二時頃に佐久間が来た。三時頃に森部等帰宅。

五時半頃に額田、山下、中野が来て、八時頃まで話してゆく。

入浴。読書。十時半就寝。

十九日（日曜）晴（六十六度）

午前八時半起床。

おえいは蒲田の渡辺方へ出てゆく。晴れてはゐるが、風が薄寒い。

「東京風俗」を訂正。浦和の江口福来君から窮状を訴へて来たので、小為替券を發送。

四時頃におえい帰宅。渡辺のおしげと愛子同道で花月園へ行つたが、こゝもおびたじしい人出であつたといふ。今年の花見もけふの日曜が最終であらう。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十日（月曜）晴（六十八度）

午前九時起床。

森部に命じて文芸倶楽部を渥美君方へ返却、あはせて菓子折をといけさせる。

十一時半ごろから神田を散歩。三省堂の食堂で喫茶。古本二冊を買つて二時半ごろ帰宅。靖国神社の八重桜も散りかゝつてゐた。

「東京風俗」を訂正し終る。江口君から礼状が来た。星野君からも選句の礼状が来た。

額田から郵書が来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十一日（火曜）晴（六十八度）

午前九時起床。

「東京風俗」のうちへ湯屋の一項を加へるために起稿。

午後零時半頃に黒川君が来て、二時頃まで話してゆく。

「東京風俗」十枚を脱稿、あはせて百一枚である。それから翁久允君の戯曲「成経と康頼」をよむ。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。この頃は毎夜午前二時頃まで眠られぬのが例となつてしまつた。

二十二日（水曜）陰（七十二度）

午前八時半起床。

多田芳枝の戯曲「夏逝く」をよむ。婦人としては整つた作である。これで「舞台」六月号の戯曲七種を選定し

終わる。

朝から南風強く、温度俄に騰る。

森部に謄写させた萬朝報連載小説「極楽」を訂正。

おえいは三時半頃から新歌舞伎座見物にゆく。五時頃に佐久間が来た。六時頃まで話してゆく。

七時半ごろ入浴。額田から郵書が来た。読書。

十時頃におえい帰宅。十一時就寝。風は終夜吹きつけてゐた。

二十三日（木曜）晴、陰（六十二度）

午前九時起床。

「極楽」を訂正。これは年代が新しいだけに訂正の個所も少く、比較的早く片付きさうである。

午後、四谷を散歩。けふはやゝ風が寒い。まことに不順の候である。

大阪の中島から四月分の会費を送つて来たので、返書。七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。今夜も二時を聞いて眠る。

二十四日（金曜）陰（六十度）

午前七時起床。今朝も薄寒い。

九時半頃からおえい同道で銀座の松屋へゆき、海野と奥田君に送るべきタオル各一箱、神奈川の飯田君に送る

べき焼海苔一箱をかひ、いづれも同店より発送をたのむ。それより雑品数点をかひ、更に銀座の三越へまはつて、こゝで数点の買物あり。食堂で昼餐をすませて、十二時ごろ帰宅。

おさだが野菜類を持つて来たので、松屋で買つて来たみやげ物を分けて遣る。隣家の関谷氏方から蟹をくれたので、それもおさだに分配。

三宅君から郵書が来たので、返書。飯田君、奥田君と海野にも郵書。

「極楽」を訂正。七時過るころ入浴。暮れて雨の音。今夜は九時半頃から就寝。安眠。

二十五日（土曜）晴（六十五度）

午前八時起床。姉とおえいは小林君方へ供物を持参、老母の命日である。

新潮社の日本文学講座の旧稿「黙阿弥研究」を訂正。午後一時頃に東京朝日新聞の新延君が来て、来月から文芸欄を拡張するに付き何か寄稿してくれとのことであつたが、多忙であるので断る。それでは近頃の感想と題して一枚ぐらゐの物をかいてくれといふので、承諾。

「舞台」に連載の旧稿「歌舞伎談義」を訂正。

三時頃に三宅周太郎君が来て、明治時代の劇談家について問合せあり、五時頃まで話してゆく。

嫩会例会で、六時頃に山崎が来た。つゞいて小林、中野、大村、岸井、山下、佐久間、額田が来た。鈴木余志子も嫩会に加入して、今回より出席。例の如く劇談。殊に来月十日午後から「舞台」誌友会第二回を新宿の白十字堂で開催する筈であるので、その打合せなどして、十時ごろ散会。

入浴。十二時就寝。今夜は殆ど曉まで眠られなかった。

二十六日(日曜)晴(六十五度)

午前六時起床。朝の風は寒い。

文芸春秋社の川崎君から重ねてオール読物の原稿をたのんで来たので、おなじく断りの返書。

「舞台」五月号を横浜の高橋を始め、難波、東儀、清水、林、原田、岡田、富塚の諸家へ発送。

昨夜不眠のために頭が重い。十一時頃から神田を散歩。一時半頃帰宅。

麹町区民会が麹町公会堂で開かれるので、おとくが行つて余興を見物、折詰などを貰つて帰る。

「舞台」七月号の戯曲二種をよむ。長崎の武田萬兵衛君からカステラを送つて来た。

七時半ごろ入浴。九時半就寝。今夜は安眠。

二十七日(月曜)陰、晴(七十二度)

午前八時起床。陰つてをり／＼に細雨。晴れて温度昇る。

海棠はちり尽して、庭の躑躅が咲き出した。チューリツプも盛りである。

森部に命じて、長崎カステラを大村方へ持たせてやる。飯田君と海野から届け物の礼状が来た。

「此頃の感想」一枚をかく。午後零時半頃に額田が来て、嫩会の会費をうけ取り、一時間ほど話してゆく。つゞいて東京朝日の新延君が来て、感想文の原稿を受取り、これも一時間ほど話してゆく。

つゞいて小林の細君が老母三十五日の配りものを持参。三時頃まで語る。

又そのあとへ岸井が弟同道で来訪、これも一時間ほど雑談。

清見陸郎君の戯曲「浪人苦物語」をよむ。

灰野庄平君死去の通知が来た。近年多病の由は聞いてゐたが、突然その訃音に接しようとは思はなかつた。

七時ごろ入浴。読書。十時就寝。今夜も幾たびか眼がさめた。

二十八日(火曜)陰(七十三度)

午前六時起床。

浦和の清水君から富山の干魚を送つて来たので、礼状

を発送。その干魚を小包み便で上松君方へ分配。

清見君の戯曲を編集し終る。南風が強く吹き出して、温度いよ／＼昇り、頗る不愉快の日である。殊に昨夜不眠のために頭が重い。

三宅君から先日 of 礼状が来たので、返書。大村からもカステラの礼状が来た。

午後一時頃に額田の細君が来て佃煮をくれ、一時間ほど話してゆく。つゞいて額田からも郵書が来たので、返書。

灰野君の告別式は午後四時から小石川の喜運寺で執行されるので、森部を代理に出してやる。気候はいよ／＼蒸暑くなる。

小菅君の戯曲「廿日正月」を編集し終る。それから「極楽」を訂正。

大阪の中島から自作の戯曲「恋を観る人々」を送つて来たので、一読。どうも面白くない。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

二十九日（水曜）雨（六十三度）

午前七時起床。けふは天長節。

森部は早朝から庭の若葉を刈り込む。朝は陰、やがて雨。折角の祭日も降り籠められてしまった。それでも雨中に靖国神（社）祭典の花火の音がきこえる。

中村孝子の戯曲「山の悲劇」を編集。中島の戯曲に批評を添へて返送。

午後は「極楽」を訂正。雨は終日やまない。

静岡の山本君から郵書が来たので、返書。七時ごろ入浴。

読書。十時就寝。

三十日（木曜）晴、陰（六十五度）

午前七時半起床。けふから五月人形をかざる。

「極楽」を訂正。旧作の訂正にも少しく倦きたが、兎も角も片付けて仕舞はなければならない。

午後、四谷を散歩。けふも陰晴定まらず、風も強い。

夕方までに「極楽」の訂正百四十枚余。

おえいはおとくとおさきを連れて、六時頃から靖国神社へ参詣。

七時ごろ入浴。読書。八時半頃におえい等帰宅。

奥田君から松屋のとゞけ物の礼状が来た。

十時就寝。夜半に雨の音。

本月の仕事は旧稿「妹」六百枚、「東京風俗雑題」百余枚、「極楽」五百枚の訂正。舞台の戯曲七編の編集など。

（翻刻担当…鈴木優作）

昭和六年五月

一日（金曜）雨、晴、雨（六十五度）

午前八時起床。細雨。

「極楽」を訂正。十一時頃に中野が細君同道で来訪、一時間ほど話してゆく。

雨は午後から止んで、三時頃から快晴。三時半から千鳥ヶ淵公園を散歩。一時間ほどして帰宅すると、恰も佐久間が来て、五時過る頃「から」まで話してゆく。中野の話によると、十日の誌友会は午後二時から開会の予定のところ、会場の都合で午後五時に延期しなければならぬまいといふので、その旨を佐久間にも通知。

七時半ごろ入浴。八時半頃から驟雨。森部は原稿紙を買ひながら靖国神社参詣にゆき、この雨にぬれて帰る。読書。十時半就寝。雨は晴れて月が出た。

二日（土曜）晴（六十四度）

午前七時半起床。朝から快晴、わか葉を吹く風が寒い。姉とおえいは青山へ墓参にゆく。帰途銀座にまはつたとて、午後一時ごろ帰宅。

神田の大京堂の使が来て、「半七捕物帳」の増版一千部を求めゆく。

一時半頃から四谷を散歩。二時半ごろ帰宅。

北海道の春月君、大分の嶽堂君にたのまれて短尺に揮毫、返送。三橋君から仏「■」蘭西戯曲の原稿を送つてきたので、中野に郵送。三橋君にも返書。

鈴木君の戯曲二種をよむ。「極楽」を訂正。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三日（日曜）晴（六十五度）

午前六時半起床。花壇にまいた草花の種子がおひ／＼に芽をふいた。今年は沢山の種子を播いたので、何がどれなるかまだ判らない。

十時半頃から神田を散歩。古書三冊をかひ、三省堂の食堂で昼食。午後一時過るころ帰宅。

森部は横須賀の友人をたづねるとて、午後から出てゆく。

「極楽」を訂正。四時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。日曜日で混雑してゐるために、少し待たされて五時半ごろ帰宅。

七時半から入浴。読書。森部から電報が来て、今夜は帰宅しないといふ。十時就寝。

四日（月曜）晴（六十六度）

午前七時半起床。

戸塚の山崎君から郵書が来て、武田の伯母は死去したといふので、取りあへず悔み状に香典を添へて発送。いづれ本葬は東京で営むといふ。

八百屋から菖蒲をとどけて来たので、床に生ける。菖蒲湯は明日である。

旧作「玉藻前」を訂正。これも全集の原稿である。更に「極楽」六十余枚を訂正。

午後三時から近所を散歩。元園町の坂下から五番町をぬけて、英国大使館下を通過する新道を、今日開鑿中である。かうして、ここの町の姿も昔とは著るしく變つてしまふのである。

六時頃に森部帰宅。額田と中野から郵書が来た。

八時ごろ入浴。読書。

十時就寝。十一時四十八分頃に地震、それから眼がさめて、眠られなかつた。

五日（火曜）晴（七十三度）

午前六時起床。

大阪の坪井から郵書が来たので、返書。額田にも返書。昨夜不眠のために頭が重い。

午後二時頃に慶応の内田君が自動車で迎ひに来たので、打連れてゆく。会場は三田の東洋軒、来会者は歌舞伎研究会員廿余名、劇に関する種々の雑談があつて、四

時五十分ごろ散会。五時ごろ帰宅。

学習院教護の岩田といふ人が来て、大日本読本といふ中等教科書に私の「修善寺」を編入したいと云つて行つたさうである。

七時半入浴。今夜は菖蒲湯。

神戸の前田君から郵書。あはせて牛肉一樽を送つて来た。

昨夜不眠のために、今夜は九時頃から就寝。

六日（水曜）晴（六十二度）

午前八時起床。

姉とおえいはおとくを連れ、豊島園に遊ぶとて九時過ぎ頃から出てゆく。

前田君に礼状を発送。岩田君に承諾の返書。改造社から「修禪寺物語」増版の印税を送つて来たので、返書。

「極楽」を訂正し終る。あはせて七百十六枚。晴れてはゐるが、風が吹く。

おえい等は午後二時ごろ帰宅。

四時頃に小林が来て、その作「女優の裁判」が十四日から新歌舞伎座で上演されるといひ、三十分ほど話している処へ、慶応の内田君が菓子折をたづさへて昨日の礼に来た。小林は先づ去り、内田君は六時頃まで話してゆく。

山崎君から香典の礼状が来た。横浜の高橋から「舞台」の礼状が来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

七日（木曜）晴（七十三度）

午前八時起床。けふも風吹く。

朝から読書。午後には俳句など作る。なんだか頭が重い日である。

岩田（君）から昨日の礼状が来た。福島石井からも郵書が来て、十日の誌友会には上京するといふ。

六時頃に中野と岸井が来て、白十字堂における誌友会の準備は総て整ったといひ、七時過る頃まで話してゆく。

それから入浴。読書。菅野（君）から郵書が来て、先月廿三日出京、王子の下十条に一戸をかまへたといふ。十時就寝。

八日（金曜）雨、晴（六十四度）

午前八時起床。細雨。

静岡の山本君から八十八夜摘み新茶一缶を送つて来たので、返書。

「戯曲と江戸の言葉」をかく。これは十日の「舞台」誌友会席上で講演をこころみ、更に「舞台」の誌上に掲載する為である。

三時頃に放送局の小林君が来て、十三日の夜、荒次郎、長十郎等が「能因法師」を放送するといひ、三十分あまり話してゆく。

雨は午後から晴れて日光を洩らしたが、温度は降つて風が冷たい。

四時過る頃に山下が来て、一時間ほど語る。六時頃までに原稿十枚をかく。

七時半ごろ入浴。大阪の中島から自作の喜劇を送つて来た。

読書。十時就寝。

九日（土曜）雨、晴（六十度）

午前七時起床。雨。

「戯曲と江戸の言葉」の続稿をかく。けふもやはり薄寒い。

午後二時頃に福島石井が来て、みやげへの菓子をくれ、一時間あまり語る。石井は明日の舞台誌友会に出席、その後も病疾治療のために当分在京するといふ。雨は午後から止む。

松村君から小冊子「文供養」を送つて来た。昨年水死した子息の追悼句集である、又今更に気の毒の感が深い。取りあへず返書。

新聞をみると、市川団十郎の未亡人おますさん、八十

五歳にて昨日死去。団十郎は明治三十六年死去。爾来廿八年を送つたのである。

六時半頃に額田が来て、七時半頃まで話していると、海野も来た。二人は九時三十分頃まで話して帰る。

それから入浴。十一時ごろ就寝。今夜は午前四時頃まで眠られなかった。

十日（日曜）雨、陰（六十六度）

午前六時起床。細雨。やがて止む。

何分にも睡眠不足であるので、朝食後、八時半頃から再び臥床。十二時過ぎに起きた。それでもまだ頭がぼんやりしてゐる。

けふは「舞台」誌友会の当日であるので、四時半頃から仕度して、新宿の白十字堂へ出てゆくと、定刻の五時前から已に二三十人も到着してゐた。

来会者は男女あはせて八十余名。六時から額田が開会の辞を述べ、次に小林、次に私、（次に矢島梨花君、次に川村花菱君の順序で講演。八時から食卓について晚餐、更に茶菓を饗して雑談。十時半頃に大抵退散したので、私も帰宅。陰りながらも雨ともならず、まことに好都合であつた。来会者も第一回に比ぶれば殆ど⁴倍数であつた。

入浴。十二时就寝。

十一日（月曜）陰、雨（六十八度）

午前八時起床。

森部は野球見物ながら高垣君に逢ふ筈で、朝から出てゆく。

正岡君は痔疾に悩んでゐるといふので、見舞状を發送。山形の渡辺君から郵書が来たので、返書。

十一時半頃「から」に小菅一夫君が来た。伊井一座の文芸部員である。小菅君は宮戸座にも関係してゐるので、市川小太夫が「半七捕物帳」を上演したいといひ、一時間ほど話してゆく。そのあひだに雨が降り出した。

姉とおえいは管野君の新宅をたづねるとて、午頃から出てゆく。

中島の喜劇「宣伝写真」と、山崎の喜劇「鷺鳥」を訂正。三時過る頃におえい等帰宅。四時頃に森部も帰宅。

六時過る頃に佐久間が来て、さきに膳写をたのんでいた読売新聞の連載小説「雁の翅」三百枚だけを届けてくれた。昨夜の誌友会は十一時半頃に全部退散したといふ。なにしろ予想以上の来会者があつたのは、好都合であつた。佐久間は八時過る頃まで話してゆく。

入浴。読書。十時半就寝。

十二日（火曜）雨（六十度）

午前八時半起床。

けふも温度降つて、雨ふりしきる。

佐久間が写してした「雁の翅」を訂正。

十二時半ごろに山形の本間君来訪。先日誌友会出席のために上京、池袋の叔父のもとに滞在中であるといひ、一時間あまり話してゆく。

夕方までに原稿八十枚ほど訂正。弘津千代子から誌友会の礼状が来たので、返書。大村からも郵書が来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。午前二時頃まで眠れなかつた。風まじりの雨の音。

十三日（水曜）雨、晴（六十一度）

午前八時起床。

堀越家未亡人の葬儀に付、十一時頃から青山斎場へゆく。時刻が早いせみか、余り混雑してゐなかつた。柩をさげ参拝。十一時四十分ごろ帰宅。朝は細雨、やがて陰り、午後から晴れた。

午後一時半頃に中野が来る。ついで額田が来た。先日誌友会の報告などあつて、三時頃まで話してゆく。

「雁の翅」八十余枚を訂正。三橋君から再び仏国劇壇消息の原稿を送つて来た。

七時半入浴。読書。氣候がやはり薄寒い。

十時半就寝。午前二時頃から眠る。

十四日（木曜）晴（六十八度）

午前九時起床。

森部は町内の中川君方へ菓子を持つてゆき、万寿菊の苗を貰つて来た。

横浜の高橋から郵書が来たので、返書。前橋の藤嶋君から誌友会の礼状が来たので、返書。三橋君にも原稿うけ取りの返書。大阪の中島にも原稿受取りの返書。

午後零時半頃に塚原洪柿園氏未亡人が鈴木千枝雄君同道で来訪。

あらためて千枝雄君をわたしの門下に加へてくれといふのである。ほかならぬ塚原未亡人の頼みであるから断るわけにも行かず、結局承諾。未亡人は一時間あまり話してゆく。

「雁の翅」六十余枚を訂正。晚餐後、五番町の堀端を散歩。

佐久間の祖父から郵書が来て、佐久間が「舞台」の用事をかこつに昼夜出あるいて困るから、嚴重に叱つてくれといふ。兎角に世話を焼かせて困る男である。

川村花菱君からも郵書が来た。額田から誌友会講演の謝礼をといけた礼状である。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜も眼が冴えて暁方まで眠られなかつた。

十五日（金曜）晴、陰（七十度）

午前六時起床。

顔を洗ひ、あさ飯を食つて、再び寝る。

十一時ごろ「■」起床。寝ている間に川上君が来て、団十郎の河内山の錦絵をくれたので、礼状を出して置く。川村君にも返書。

額田の郷里から母五十日祭の残り物をとじて来たので、返書。額田からも郵書が来たので、返書。小林君がきて「能因法師」の放送料をくれた。

「雁の翅」四十枚余を訂正、晚餐後、散歩。

おとくとおさきは花電車を見るとき、日比谷へ出てゆく。

七時ごろ入浴。読書。九時半ごろにおとく等帰宅。

十時半ごろ就寝。やがて大雨。

今夜は眠られないので、午前二時頃に起きて葡萄酒のみ、二時半頃からやう／＼眠りに就いた。

十六日（土曜）晴、風（七十度）

午前十時起床。雨は晴れたが、南風が強く吹く。

教科書屋二軒から「修禪寺物語」と「清正の槍」を編入したい云つて来たので、返書。いづれ中等教科書である。

山形の本間君から帰郷の通知が来たので、返書。あは

せて大京堂出版の「半七捕物帳」一部を発送。石井から神田の東洋肛門病院入院の通知が来たので、これにも返書。

午後三時頃から新戯曲を起稿。静岡の山本君から又もや新茶を送つて来たので、礼状を発送。額田から郵書が来て、舞台社の新歌舞伎座観劇会は廿四日に決定といふ。晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。暮れて風はいよ／＼強くなる。

読書。十時半就寝。

十七日（日曜）晴、陰（七十度）

午前八時起床。

戯曲をかきつゞける。おえいは午後から東京劇場のレビュウを見物にゆく。

午後一時頃に山本の未亡人が息子同道で来訪、二時頃まで話してゆく。木村富子から自作の戯曲集「銀扇集」を送つてきたので、返書。大坂の堀から郵書が来たので、返書。

三時頃に寺田鼎君が来て、短尺に揮毫をたのみ、四時半頃まで語る。そのあいだにおえい帰宅。

六時頃までに戯曲十枚をかく。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（月曜）晴、陰（七十度）

午前八時起床。

十時頃に岸井が来て、けふは自宅が大掃除であるので、朝から出て来たといふ。十一時頃まで雑談。天気が好いので、連れ立って銀座辺を散歩することになり、伊東屋で文房具をかひ、松屋で置時計その他をかひ、銀座のヤマトで昼餐。尾張町で岸井に別れて、二時半ごろ帰宅。やがて富塚が来て、自分も嫩会に加入させてくれといふ。鈴木も岡田も入会した以上、富塚も拒むわけもないので、承諾。富塚は自作の戯曲の添削を求め、四時頃まで話してゆく。

富塚が帰ると、間もなく驟雨、三十分ほどで止む。

七時半ごろ入浴。読書。森部は宵から額田方を訪問、九時頃帰宅。

十時半就寝。今夜も午前一時過る頃まで眠れなかつた。

十九日（火曜）晴（六十七度）

午前八時起床。

十時頃に大阪の中島が来た。何か所用があつて一昨日上京、明日帰阪するといひ、一時間あまり話してゆく。富塚の戯曲「伊右衛門と長兵衛」を訂正。更に戯曲五枚をかく。

小菅君から郵書が来て、小太夫の「半七捕物帳」は見合せになつたといふ。開成館から中等教科書に「修禪寺物語」を編入したいと云つて来たので、承諾の返書。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。今夜も午前二時頃から眠る。

二十日（水曜）晴（七十一度）

午前八時半起床。

十時半頃から森部同道で新宿の三越と二幸へゆき、万年筆、草花、その他の雑品をかひ、午後一時ごろ帰宅。晴れて暑くなる。

戯曲五枚をかく。四時頃に鈴木余志子が来て、今度俄に前田といふ画家と結婚することになつたと云ひ、一時間あまり話してゆく。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。今夜も午前三時頃から眠る。

二十一日（木曜）晴（七十二度）

午前八時半起床。

戯曲をかきつゞける。午後一時頃に小林が来て、新歌舞伎座の「舞台」観劇会はいよいよ廿四日に決定したといひ、三十分あまり話してゆく。

以前松竹の電気部にゐた小池といふ人が来て、昨今失

業して困るといふので、幾らかの金を遣る。

四時頃までに戯曲第一幕を脱稿。山形の本間君から同地名産の粕漬を送ってきたので、礼状を発送。

晩餐後、散歩。七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。夜半大雨。午前一時頃から眠る。

二十二日（金曜）晴（六十八度）

午前八時半起床。

工業倶楽部座談会から来る六月一日正午から講話に來てくれと云つて來たので、承諾の返書。額田から郵書が來て、その作「幕末俠盜伝」が來月の東京座に上演されるといふ。これにも返書。

戯曲第一幕を訂正し終る。三十一枚。題は「青蛙神」といふ。兎も角も第一幕だけを「舞台」七月号に掲載する筈である。これで七月号の戯曲九種が纏まつた。

四時半頃に中野、山下、岸井が來て、六月号は全部校了になつたといひ、六時頃まで話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。宵から晴れて、星が出た。十時半就寝。午前二時頃から眠る。

二十三日（土）晴（土曜）晴（七十二度）

午前八時起床。

帝劇の山本君がその娘の細野多智子を同伴して來訪。

多智子の戯曲を見てくれといふのである。三十分ほど話してゆく。

上州の里見といふ人から俳句の揮毫をたのんで來たので、白紙二枚をかく。山形の渡辺君からも頼まれてゐるので、短尺二枚をかく。

午後一時頃に小林が來て、新歌舞伎の入場券二枚をくれ、三十分ほど語る。それから町内の永田理髮店へ髪を刈りにゆく。

読書。晩餐後、散歩。大阪の中島から郵書が來たので、返書。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。午前一時頃から眠る。

二十四日（日曜）晴（七十二度）

午前七時半起床。

大阪松竹会社の雑誌「道頓堀」から左団次一座が京都南座で上演する「室町御所」と「鳥辺山心中」について何か作談を寄稿してくれと云つて來たので、三枚ばかり書いて発送。

少しく仕事が付いたので、旧作の漢詩を訂正。こんなことでもしたら、頭が些とは休まるかと思ふ。

「女優奈々子の裁判」の観劇会であるので、午後四時頃から新歌舞伎座へゆく。嫩会員を除いて、誌友の來会

者六十余名。おえいもあとから来た。

第一「国定忠治」第二「女優の裁判」第三「紋三郎の秀」の中、第三だけを見残して、おえいと共に九時四十分ごろ帰宅。

入浴。十一時就寝。午前四時頃まで眠られなかった。

二十五日（晴）（月曜）晴（七十四度）

午前八時起床。

戯曲「青蛙神」第一幕を再び訂正。昨夜不眠のためか、頭が重い。

十時半頃に佐久間が来て「舞台」六月号をとどけ、一時間あまり話してゆく。

文芸春秋社の菅君からオール読物号の原稿を頼んで来たが、何分にも不眠症が祟つてゐるので、断りの返書。午後二時頃に博文館の野坂君が来て、これも寄稿を頼むとのことであつたが、同じく断る。野坂君は三十分ほど話してゆく。

けふも旧作の漢詩を訂正。

嫩会例会であるが、会員が殖えたので、在来の応接間では少しく狭い。今度からは下座敷の八畳と六畳を開け放して会場に充てることとし、森部と女中等に指図して、その準備をさせる。

夕刊をみると、大谷竹次郎君の老母が京都で死去した

とあるので、取りあへず悔みの電報を発送。

六時頃に塚原が先づ来た。ついで大村、鈴木、中野、小林、岸井、岡田、山崎、富塚、額田、山下、佐久間が来た。例に依て劇談、雑談。十時半ごろ散会。

入浴。十一時半就寝。今夜は安眠。

二十六日（火曜）晴（七十二度）

午前九時起床。

昨夜中野等の話によれば銀座の教文館に新刊の洋書が来たといふので、十一時半頃から森部同道で行つてみたが、別にめづらしい書物も見当たらなかった。それから日本橋丸善へも行つてみたが、こゝにも差して新しい書物も見当たらなかった。それでも丸善で洋書三冊をかひ、帰途銀座の松屋に立寄つて雑品三四点をかひ、二時半ごろ帰宅。

「舞台」六月号を清水、東儀、高橋、難波、林、原田の諸家へ発送。

読書。晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。

森部は宵から額田方へ行つて、九時過るころ帰宅。十時半就寝。今夜も安眠。

二十七日（水曜）晴（七十二度）

午前七時半起床。けふは大掃除で、早朝から家内混雑。

伊坂君が幹事で、丸子多摩川の歌舞伎荘で旧友談話会を催すといふので、九時半頃から家を出で、渋谷駅から横浜行電車に乗り込み、途中に田園調布駅下車、先ず岡君宅を訪問すると、岡君は大谷君母の葬儀に参列するとて京都に赴き、不在であつた。細君に逢つて一時間ほど語る。

それから再び電車に乗つて、丸子多摩川駅下車。歌舞伎荘へたづねてゆくと、誰も来てゐない。暫く待つてゐるうちに、主人に頼まれて色紙二枚をかく。午後一時半に伊坂君が来て、松居君も伊「■」原君も差支へがあつて不参といふ。岡君も勿論不参。結局伊坂君と午後五時頃まで雑談。多摩川で此頃捕れたといふ白魚をみやげに貰つて帰る。

電車で目黒まで帰着。更に伊坂君に誘はれて築地の中ぜんへ立寄り、晚餐の馳走になる。中ぜんは小さい店ながら、旨いものを喰はせる家であるといふ。こゝで伊坂君に別れて、八時半ごろ帰宅。

留守中に小菅君の細君が傘をかへしに来て、みやげの菓子くれたといふ。

入浴。十時半就寝。

二十八日（木曜）晴、風（七十四度）

午前八時起床。朝から南風が温い。

伊坂君に昨日の礼状を発送。小菅君に礼状を出さうと思つたが、その居所が判然しないので、中野に問い合せてやる。堀川肇子から「舞台」に戯曲掲載の礼状が来たので、返書。

けふも旧作の漢詩を訂正。風はいよ／＼吹き暴れて、気候も俄に暑くなつた。頗る不愉快の日である。

水脈社から俳句の選をたのんで来たので、選了、返送。晚餐後、散歩。八時頃入浴。読書。

十時半就寝。やがて雨の音、十二時頃から大雷雨となり、午前一時半に至つて漸く止む。

二十九日（金曜）晴（七十三度）

午前七時半起床。

おえいは深川の山本君方を訪問するとて、早朝から出てゆく。

十時半頃に木村富子が来て、自作戯曲「銀扇集」について何か批評文のやうな物をかいて呉れといふ。右は出版書店の依頼で、新聞広告用にするのでさうである。富子さんは一時間ほど話してゆく。

取りあへず「銀扇集」の批評めいたもの二枚ほどを書く。おえいは十二時半ごろ帰宅。晴れて暑くなる。

三時頃に伊坂君が田中巖君同道で来訪。新橋の芸妓学校へ講演に来てくれといふ。芸妓を相手に講演は少し困

と思つたが、しきりに頼むといふので兎も角も承諾。
ついで吉野作造氏来訪、物集芳子が計画してゐた出版事業は種々の事情で一時停止になつたといふ挨拶である。吉野氏は物集家の相談役になつてゐる關係上、色々の面倒をみて遣るのであるといふ。

又そのあとへ講談社出版部の矢部君が来て、飲料水ドリコノをくれた。私那不眠症とリウマチスに罹つてゐるのを聞いて、見舞に來たのである。

けふはなか／＼來客の多い日であつた。晚餐後、散歩。遠雷の音が聞えたので、今夜も驟雨かと早々に歸つて來たが、それぎり雨ともならなかつた。

夕刊をみると、昨夜は所々に落雷したといふ。

七時半ごろ入浴。読書。中野から返書が來た。

十時半就寝。空は晴れて月が出た。

三十日(土) 晴(七十四度)

午前八時起床。

中野から小菅君の住所を教えられたので、取りあへず礼状を發送。

午後は読書。晚餐後、散歩。高橋から「舞台」の礼状が來た。

七時半から入浴。読書。十時半就寝。

三十一日(日曜) 陰、晴(七十二度)

午前九時起床。

中村孝子から郵書が來たので、返書。木村富子と難波から礼状が來た。

咽喉がなんだか痛むので、含嗽をする。

読書。旧作の漢詩など訂正。

晚餐後、散歩。七時半から入浴。読書。

十時半就寝。今夜も暁まで殆ど一睡も出来なかつた。本月の仕事は青蛙神(一幕、三十一枚)のほかに、旧作「極楽」「雁の翅」の訂正など。ほかにはこれといふ仕事もしなかつた。

(翻刻担当…原辰吉)

昭和六年六月

一日（月曜）晴（七十二度）

午前五時頃に一旦起床。顔を洗つて再び寝たが、やはり安眠できないので、八時頃から起床。不眠のために頭が重い。

十二時頃に工業倶楽部から迎ひの自動車が来たので、出てゆく。来会者は工業会社関係の実業家三十余名で、午餐の後に私は「戯曲上演に就て」といふ演題で約四十分の講話を試み、再び自動車に送られて二時三十分ごろ帰宅。

留守中に物集芳子が来て、「過ぎにし物語」の原稿を返して行つたといふ。

額田に郵書を発して、来る五日頃から湯河原へゆくことを通知。

読書。前橋の藤嶋君から郵書が来たので、返書。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜は十二時過る頃から安眠。

二日（火曜）晴（七十四度）

午前八時半起床。

十時頃に額田が来て、嫩会員は来る七日午前九時五分発の列車で熱海へゆくと云ひ、私も湯河原から参加する

ことゝし、それらの打合せをして十一時頃まで話してゆく。

そのあひだに渡辺の妻子が来て、午餐を喫して一時頃に帰る。

読書。横浜の高橋から雑誌「葵」を送つて来たので、返書。岡君から先日のお札が来たので、返書。

四時過る頃に黒川君が来て、京都に於ける「室町御所」の上演料をくれ、一時間ほど話してゆく。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜も十二時頃から眠る。

三日（水曜）晴（七十三度）

午前八時半起床。

上松のおすが早朝に来て、おえいと共に橋場へ墓参に出てゆく。

読書。三重県波切町の十川といふ人から色紙の揮毫をたのんで来たので、二枚をかく。おえいは午前二時ごろ帰宅。

六時頃に正岡君が来て、七時頃まで話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝、今夜も眠られず、なんだか空腹になつたので、午前三時頃に起きて飯を食つた。それから暁方まで起きてゐた。

四日（木曜）雨、晴（七十三度）

午前六時ごろに起きて顔を洗ひ、七時頃から再び寝る。二時間ほど安眠、九時頃起床。あかつきに細雨、やがて晴れる。

けふは新橋へ講演にゆく筈であるので、午前十二時半頃から出てゆく。芸妓学校はまだ建築中ださうで、現在は銀座西仲通りの三葉事務所の二階を仮教場に宛てゝゐるのである。聴講者は大小芸妓五六十名。わたしは「演劇の種類とその見方」といふ題で四十分ほど講演。それから茶菓の馳走になつて、二時三十分ごろ帰宅。

やがて山下が来て、四時頃まで語る。明日から湯河原へゆく積りであるので、その仕度をする。

鈴木余志子から速達便で自作の原稿を送つて来た。山崎から郵書を送つて来たので、返書。

戸塚の山崎君から伯母が忌明けとして茶を送つて来たので、返書。

七時頃入浴。八時頃に佐久間来て、「雁の翅」の浄書二百枚をとゞけ、九時頃まで話してゆく。

十時半就寝。今夜は十二時頃から眠つた。

五日（金曜）晴

午前八時起床。

森部に送られて、十時半頃から家を出で、東京駅から

十時五十五分発の熱海行列車に乗込む。朝から快晴、俄に暑くなる。

午後一時六分湯河原着。迎ひの春さんに案内されて、湯河原会館に入り、二階十八番の座敷におち付く。女中はおふぢさん。

入浴。午餐は茶碗もり、まぐろの刺身、蝦のフライ。おえいと森部、鈴木、原田、中島、俵木の人々に発信。

それを投函ながら四時半頃から散歩。五時半頃帰宿。宿から葛餅をくれた。

読書。旧作の漢詩の訂正などする。晚餐は鯛のさしみ、鳥サラダ、野菜煮。

九時入浴。九時半就寝。午前二時頃から眠る。こゝで暫くブラ／＼してゐて、この不眠症を癒して仕舞はなければならぬ。

六日（土曜）晴

午前七時起床。入浴。

朝食は豆腐の味噌汁、玉子焼、菜のひたし物。

山形の本間君と講談社の矢部君に郵書を送る。入院中の石井にも見舞状を発送。山下と鈴木戯曲を一読。

昼餐は碗もり、鮎の塩焼、野菜煮。例の十五番の座敷が明いたので、更にそこへ引移る。

読書。午後四時半頃から散歩。五時半ごろ帰宿。晚餐

は椀もり、イタリアフキツシユ、野菜煮。

八時過る頃に中野が来たので、水菓子などを喰ひながら語る。今夜は土曜日で宿も混雑、団体なども乗込んで芸妓をあげて騒ぐ。

九時半ごろ入浴。十時半ごろ就寝。中野も同宿。

七日（日曜）晴

午前五時半ごろから眼をさまして、六時起床。

朝食はズイキの味噌汁、コロツケー、菜のひたし物。けふは嫩會員が熱海へ出て来る筈であるので、中野同道で十時四十分ごろ出発、湯河原停車場に待受けてゐると、十一時十一分着の列車で額田、山下、小林、岸井、佐久間、鈴木が来た。私たちもその列車に乗込んで、十一時十八分熱海停車場着。

樋口旅館の男に迎へられて、同館新築の三階に陣取る。十畳と六畳の二間である。海と山とを見晴らして頗る展望がよい。

入浴。午餐は椀もり、さしみ、うま煮、蝦フライ、そら豆の塩ゆで。食後にイチゴ。

午後、一同打連れて散歩。海岸を一巡して錦ヶ浦付近へ出で、そこにゐる写真師をたのんで、海中の大岩の前で撮影。更に町へ引返してみやげ物などを買ひ、温泉等にも回つて、四時ごろ帰宿。菓子などを食つて雑談。

晚餐は茶わん盛、あはびの酢の物、あゆの塩焼、鳥そぼろ、鯛のひやしめん。

八時十分熱海発の列車で、一同は帰亭の途に就く。わたしは途中で一同に別れて湯河原下車、宿の春さんに迎へられて、八時三十分ごろ帰宿。

入浴。九時半ごろ就寝。終日あるいて疲れたせゐか、今夜は安眠。

八日（月曜）雨

午前七時起床。昨夜半から雨。一日の違ひで昨日の好晴は自他の幸であつた。入浴。

別に仕事はないので、終日読書。朝食はワカメの味噌汁、鰯の干もの、そら豆の煮付。昼餐は椀もり、エビの天ぷら、野菜の煮付。

大村とおえいに郵書を発送。午後は雨も小降りになつたので、二時頃から散歩。途中で秋代さんに逢つた。

三時頃に東京の放送局から電話がかゝつて、来る十六日の夜、岡、松居、伊原の人々が集まつて劇談の放送をするので、私にも出席してくれとの交渉があつたが、断る。宿からは汁粉をくれた。

雨降りやまず、少しく無聊を感じた。五時半ごろ入浴。晚餐は椀もり、鯛のさしみ、ポイルフキツシユ。

九時ごろ入浴。九時半就寝。今夜も安眠。

九日（火曜）晴

午前七時起床。入浴。

朝食は豆腐の味噌汁、蒲鉾、菜の胡麻よごし。

読書。旧作の漢詩を訂正。

昼餐は味噌、蝦の鬼がら焼、鳥サラダ。

額田、大村、石井、鈴木、俵木、中島から郵書が来た。

額田、大村、中島に返書。大村からは東劇の劇評を送つ

て来たので、一読の上、中野に発送。それらを投函ながら二時頃から散歩。三時ごろ帰宿。

宿からは稲荷鮓をくれた。五時ごろ入浴。

読書。晚餐は蝦のシチウ、鯛茶、野菜煮。

九時入浴。九時半就寝。今夜も安眠。

十日（水曜）晴

午前六時半起床。入浴。快晴。

朝食は菜の味噌汁、ヲムレツ、菜のひたし物。

読書。講談社出版部の吉田といふ人から見舞の郵書が

来たので、返書。

十一時ごろ散歩。十二時帰宿。

昼餐は味噌、蝦の鬼がら焼、里芋の煮付。

額田、大村、山下、中野、森部から郵書が来たので、

いづれも返書。額田は舞台叢書発行の件である。宿からは牡丹餅をくれた。

三時過る頃から散歩。四時半ごろ帰宿。入浴。

読書に倦んで俳句など作る。宿の春さんが来て、短尺の揮毫をたのんでゆく。晚餐は味噌、鶏肉の酢味噌、野菜煮。

九時入浴。九時半就寝。

十一日（木曜）陰

午前六時起床。入浴。

朝食は大根の味噌汁、蒲鉾、そら豆の煮付。

宿の春さんに頼まれた色紙と短尺五枚、藤田屋の番頭に頼まれた色紙と短尺七枚をかく。

読書。昼餐は味噌、シヤコの玉子むし、鮎のフライ。

午後一時半頃から雨、間もなく止む。二時過る頃から散歩。三十分ほどで帰宿。

おえいと塚原から郵書が来た。三時廿五分ごろ強震。

宿からはコーヒーをくれた。新聞をみると猿之助は春秋座を解散して、松竹へ復帰するといふ。

晚餐は味噌、メンチエグス、里芋の煮付。

読書。九時入浴。九時半就寝。

十二日（金曜）雨

午前七時半起床。入浴。

朝から雨降りしきる。けふは入梅であるといふ。

朝食はワカメの味噌汁、玉子焼、菜のひたし物。

読書。昼餐は椀もり、アナゴの蒲焼、野菜煮。

午後二時頃から雨は次第に小降りになる。新聞をみると、昨日午後東京にも可なりの強震があつたといふ。

山形の本間君から郵書が来たので、返書。宿からはバナナを呉れた。

三時半頃から散歩。例の日の出屋で喫茶。みやげ用のきび餅、わさび餅などを頼んで帰る。雨やむ。

読書に倦んで俳句など作る。晚餐は蝦の金ぶら、あゆの塩焼、野菜煮。

九時入浴。九時半就寝。

十三日（土曜）晴

午前六時起床。入浴。快晴。

朝食はワカメの味噌汁、ラムレツ、菜の胡麻よごし。

読書。日の出屋からきび餅とわさび餅をとめて来た。

昼餐は椀もり、蝦の金ぶら、野菜サラダ。

午後読書。晴れて暑くなる。大村と岸井から郵書が来たので、返書。

宿からは鮎をくれた。四時頃から散歩。風が強い。

晚餐は蝦おろし煮、松茸むし、里芋のうま煮。

九時入浴。九時半就寝。

十四日（日曜）晴（七十八度）

午前六時起床。入浴。

朝食はズイキの味噌汁、蒲鉾、そら豆の煮付。

午前九時三十二分発の列車で帰京の予定で湯河原駅へゆくと、下り列車が廿五分も遅延したので、それに連れて上り列車も廿分ほどおくれた。

十一時卅八分東京駅着の列車が五十六分頃着。森部に迎へられて、十二時五分ごろ帰宅。晴れて暑くなる。

留守宅無事。但し佐久間が先日帰京の途中、列車内で俄に発病、大騒ぎをしたといふことである。

けふは山王祭の宵宮で、町内新調の神輿をかついで来た。

留守中到着の郵便物を整理、それ／＼に返書を書く。いつもながら帰京後はこれが忙がしいので困る。

六時ごろに額田が来て、アイスクリームと菓子をくれ、八時頃まで話してゆく。姉とおとく、おさきは日枝神社へ参詣にゆく。

入浴。十時半就寝。

十五日（月曜）陰、晴（七十八度）

午前八時起床。

川原から郵書が来たので、返書。その他にも返信六通をかく。

午後、町内の永田理髪店へ髪刈りに行き、二時ごろ帰宅すると、やがて岸井が来た。つゞいて林二九太君が来た。岸井は三時頃に去り、林君は四時過る頃まで話してゆく。

「舞台」連載の「明治演劇年表」を訂正。

晚餐後、散歩。山王祭も軒提灯ぐらゐで、各町ともに差したる催しも無いやうであつた。

七時半ごろ入浴。読書。

十時就寝。

十六日（火曜）陰（七十度）

午前八時起床。

陰つて折々に細雨、おのづと梅雨季らしい天候になつて来た。

高橋の「頼朝の最後」大村の「二代將軍の大奥」を一読、それ／＼に批評を添へて返送。更に林君の「男が一人足りない喜劇」俵木の「日帰りの避暑」をよむ。それらのために、一日を費やしてしまつた。どれも佳作ではない。

七時半ごろ入浴。読書。

十時就寝。

十七日（水曜）陰、雨（七十度）

午前七時半起床。

九時半頃からおえいと森部同道で銀座へ買物にゆく。松屋と三越で中元用の品々その他を買ひ調べ、三越の食堂で昼餐、十二時四十分ごろ帰宅。をり／＼に細雨。留守中に岡君が来たといふ。

二時半頃に山下が来た。つゞいて中野が来て、四時過る頃まで話してゆく。恰も雨が強くなつたので、傘を貸してやる。

浴衣地と手拭地を静岡の山本君に発送。あはせて郵書を送る。岡君にも郵書を送る。

読書。六時四十分ごろ入浴。夕より雨やむ。

九時十分ごろ強震、かなりに激しく動揺したので、家内一同は庭へ出た。近來は兎かくに地震の多いことである。

十時就寝。その後も余震がつゞくので、幾たびか眼がさめた。

十八日（木曜）陰（六十八度）

午前七時半起床。

黒川君から郵書が来たので、返書。植田君から転居の通知が来たので、返書。横浜の高橋に地震見舞の郵書を送る。

昨夜の地震は相模川流域が震源地で、関東一帯「は」

（の）強震であつたといふ。殊に横浜は騒動したさうである。

十時過る頃に額田が来て、十二時頃まで話してゆく。函館の藤森登志子から鈴蘭を送つて来たので、返書。

一時頃に佐久間が来て、一時間ほど語る。それが帰ると、鈴木千枝雄が来たので、その戯曲二種を渡してやる。それが帰ると、又入れ違ひに小林が自作の喜劇を持参。けふは殆ど終日、ふたば会員の応接に暮らしてしまつた。読書。七時ごろ入浴。大村から原稿うけ取りの返書が来た。

十時就寝。十一時半ごろから眼がさめて、午前三時頃まで眠られなかつた。

十九日（金曜）陰（七十二度）

午前九時起床。

報知の近代君から日曜報知の原稿をたのんで来たので、断りの返書。岡君から返書が来た。池田君から病氣見舞の郵書が来た。

太田君の喜劇「寝台と飛行機」を編集。小林の喜劇「支那から来た魔桃」を編集、いづれも「舞台」の原稿である。

高橋の妹から原稿うけ取りの返書が来て、姉は本月初旬から臥床、容態が宜しくないといふので、取りあへず

見舞状を発送。大阪の中島から地震見舞の郵書が来たので、返書。

名古屋の難波から郵書が来て、父が去十二日死去したといふので、悔み状に香典を添へて発送。

晚餐後、散歩。留守中に猿之助の秘書吉野総一君が来たといふ。七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。今夜は安眠。

二十日（土曜）晴、陰（六十九度）

午前八時起床。

朝から戯曲「青蛙神」第二幕を起稿。坪内士行君から病氣見舞の郵書が来たので、返書。

姉とおえいは日比谷公園から銀座へゆき、午後十二時半ごろ帰宅。

夕刻までに原稿十八枚をかく。静岡の山本君から浴衣の礼状が来た。

晚餐後、四谷を散歩。七時過るころ入浴。読書。

十時半就寝。夜半に雨の音。

二十一日（日曜）晴、驟雨（七十度）

午前八時起床。

晝屋が来て、下座敷の畳がへをする。十一時頃に驟雨、間もなく晴れる。

午後二時頃までに原稿八枚をかく。あはせて廿六枚。これで「青蛙神」第二幕を終る。

難波から香典の礼状が来た。浜村君から病氣見舞の郵便書が来たので、返書。

晚餐後、四谷を散歩。七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。夜半に起きて蚊帳を吊る。

二十二日（月曜）晴（七十度）

午前八時起床。けふも畳屋が三人来た。

九時半頃に小林蹴月君が来て短尺の揮毫をたのみ、一時間ほど話してゆく。

細野多知子の戯曲二編をよみ、その批評を添へて森部に持たせてやる。俵木の喜劇「日帰りの避暑」を訂正。

午後一時半頃に池田君来訪、二時間ほど語る。池田君は今度再婚したさうである。伊坂君の使が信州のまむし酒（養命酒）を送つて来た。

四時頃までに俵木の喜劇を訂正し終る。鈴木余志子から転居の通知が来たので、返書。

晚餐後、四谷を散歩。蹴月君の細君不快であるといふので、おえいは夕刻から見舞にゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜も蚊帳を吊る。

二十三日（火曜）晴（七十六度）

午前七時半起床。

塚原富江君から転居の通知が来たので、返書。小島邦之助から高橋の病状を通知して来たので、これにも返書。

高橋の病氣見舞として、菊の舎の菓子をお包み便にして発送。あはせて郵便を送る。

小林君依頼の短尺十五枚に揮毫。大阪の小川君から地震見舞の郵便書が来たので、返書。大阪の中島から自作の戯曲を送つて来たので、返書。

十二時頃に岸井が来て、廿五日のふたば会には欠席するといひ、四十分ほど話してゆく。

林君の喜劇「男がひとり足りない喜劇」を編集。

晚餐後、散歩。六時半ごろ帰宅すると、佐成のおしげさんが来てゐた。おしげさんは菓子をくれ、八時頃まで話してゆく。

八時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

二十四日（水曜）晴、雨（七十五度）

午前八時半起床。

「青蛙神」第三幕を起稿。十時頃から雨。

終日来客無し。三時頃までに原稿十枚をかく。

文芸家協会から通知が来て、廿二日の総会で私を評議員に選定したから、就任を承認しろといふ。併し私は老

人といひ、近來多病で引籠り勝であるので、評議員辞退の返書を送送。

雨がやまないので散歩に出ず。七時半入浴。読書。十時就寝。午前四時ごろ強震に眼をさました。

二十五日(木曜)雨、陰(七十五度)

午前七時半起床。

「青蛙神」第三幕をかきつゞける。細野多知子が来て、明後日池上へ移転するといひ、門口で挨拶して帰る。

大村から速達便が来て、親戚に病人があるので、今夜のふたば会には欠席するといふ。

午後四時頃までに原稿十枚をかく。

五時半頃に山崎が来た。つゞいて佐久間、岡田、富塚、中野、塚原、額田、小林、山下が来た。大村、岸井、鈴木は欠席。例によつて劇談、雑談。そのあひだに製本屋から「舞台」七月号の製本をとゞけて来た。

十時半散会。それから入浴。十一時半就寝。

二十六日(金曜)陰(七十八度)

午前八時半起床。

「舞台」七月号を高橋、難波、林、原田、清水、東儀の諸家へ発送。高橋から菓子のお礼状が来た。

十時頃に「堀川」岸井が来て、廿分ほど話してゆく。

つゞいて堀川聖子が来て、菓子をくれ、一時間ほど話してゆく。

山形の本間君から借りてゐた新聞の切貼り五種の謄写を終つたので、通運便に托して返送。あはせて郵書を送る。大村にも返書。

「青蛙神」第二幕を訂正。更に第三幕三枚をかく。

東隣に新築中の関口家から佃煮一籠をくれたので、その返礼として菓子折を持たせてやる。

午後、森部に命じて、額田方へ中元の品をとゞけさせる。その返礼に草花の鉢植を貰つて来た。

晚餐後、散歩。七時過るころ入浴。読書。

十時半就寝。今夜は午前三時頃まで眠れなかつた。

二十七日(土曜)晴(七十八度)

午前七時半起床。

昨夜不眠のために頭が重い。殊に暑気が俄に加はつたので、何をする気力もなく、終日読書。

午後三時頃に佐久間が来て、これから俳優学校の卒業試演を見物にゆくと云ひ、四十分ほど話してゆく。

岸井と鈴木から郵書が来た。岸井は発熱して臥床中であるといふ。石井から退院の通知が来たので、返書。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜は午前二時頃から眠る。

二十八日（日曜）晴（八十度）

午前八時半起床。

おいとおとくは銀座へ買物にゆく。大野君方から魚をくれた。

十時過るころに石井がその友人初見義一君同道で来た。石井は早稲田の従弟の下宿に同居して、病院に通つてゐるといひ、十二時頃まで語る。

「青蛙神」三枚をかく。あはせて三十枚、これで第三幕脱稿、更に訂正。

おい等は午後一時ごろ帰宅。けふも朝から晴れて暑い。

晩餐後、散歩。七時半ごろ入浴。やがて管野君の細君がその弟同道で来訪、一時間ほど話してゆく。

読書。十時半就寝。今夜も午前二時頃から眠る。

二十九日（月曜）晴（八十二度）

午前八時起床。朝から暑い。八十度。

「青蛙神」第三幕を訂正し終つて、更に第四幕をかく。

けふは終日暑い。夕方までに原稿八枚。

晩餐後、散歩。山形の本間君から新聞うけ取りの返書が来た。

七時ごろ入浴。読書。九時頃から驟雨、一時間ほどで晴れる。

十一時就寝。午前一時ごろ強震、近来は実に地震の多いことである。

三時頃から眠る。

三十日（火曜）晴（八十度）

午前八時起床。

岡田禎子にたのまれた短尺六枚に揮毫。難波から「舞台」の礼状が来て、来月初旬には一旦帰京するといふ。三橋君から奥多摩行の絵ハガキを送つて来た。大久保の川上君が来て、自園の枇杷をくれた。

「青蛙神」第四幕八枚をかく。睡眠不足と暑気のために筆が進まないで、中止。午後は寝転んで読書。

晩餐後、散歩。七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜は午前一時頃から眠る。

本月は不眠症に祟られて、殆ど何の仕事もしなかつた。わづかに「青蛙神」第二幕、第三幕、第四幕あはせて七十二枚。

（翻刻担当…松田祥平）

昭和六年七月

一日（水曜）晴（八十度）

午前七時半起床。植木屋三人、庭の植込みの刈込をする。

「青蛙神」をかきつづける。どうも筆が進まないのので、けふも中止。

午後は辻村澄江といふ人の戯曲「峯君達の話」を編集、舞台九月号の原稿である。

六時頃に中野が来て、舞台八月号の戯曲をうけ取つてゆく。但し額田の分は未着、いづれ後から送る筈にして置く。中野は七時半頃まで語つて去る。

それから入浴。読書。やがて驟雨。

十時半就寝。午前一時頃から眠る。

二日（木曜）晴（八十二度）

午前八時起床。けふも植木屋が一人来た。

十時頃に額田が来て、自作の喜劇「物くさ太郎」といけ、一時間あまり話してゆく。

午前一時頃に市川猿之助が来て、松竹復帰の挨拶を述べ、一時間ほど語る。ついで東京朝日新聞の林睦夫君が来て、文芸欄に何か寄稿してくれといふ。それは先度断つたのであるが、押して頼まれると今度は断るわけ

にも行かず。兎もかくも承諾。

ついで石井が来て、今夜俄に帰郷することになったと云ひ、二時間ほど話してゆく。

額田の喜劇を第二幕まで訂正。晚餐後、散歩。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。午前二時頃から眠る。

三日（金曜）晴（八十二度）

午前八時起床。

額田の喜劇を訂正し終り、速達便にて大黒活版所へ発送。その旨を中野にも通知。

大野君方へ「歳暮」中元の品を持たせてやる。

昨日来俄に暑気を催して、なんだか頭が重い。午後は下座敷へ降りて読書。

四時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。主人と職人に中元の心付を遣る。

晚餐後、散歩。岸井から病氣全快のハガキが来たので、返書。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。午前二時頃から眠る。

四日（土曜）晴、驟雨（八十三度）

午前八時起床。

庭のタキの池が破損したので、森部が塗りかへる。

横浜の高橋へ見舞状を発送。婦人倶楽部から「修禪寺物語」の絵物語を掲載したいと云つて来たので、承諾の返書。

「喜劇時代」をかく。舞台の原稿である。おえいは午後から紀尾井町の小林君方へ中元の礼にゆく。

一時頃に大村が来て、めい／＼に中元の礼物をくれ、三十分ほど語る。つゞいて植村君が来て枇杷をくれ、一時間ほど話してゆく。

二時半頃から雷鳴、驟雨。三十分ほどで晴れたかと思ふと、又もや雷雨。

四時半頃に至つて止む。

「喜劇時代」七枚をかき終つて、中野に郵送。七時半ごろ入浴。

九時頃から森部同道で平河天神の縁日にゆく。なか／＼賑はつてゐた。

歸つて読書。十一時就寝。今夜も午前二時頃から眠る。

五日（日曜）晴、陰（八十度）

午前八時半起床。

十時頃に牧野伴三郎君が久しぶりで来訪、以前はやまと新聞社に在つた人で、今は埼玉県庁に奉職してゐるといふ。一時間ほど話してゆく。

つゞいて佐久間が来て、四十分ほど語る。

額田から中元の品々を送つて来たので、返書。大村の筋書に批評を添へて返送。群馬の山口といふ人から病氣見舞の郵書が来たので、返書。

畑氏の未亡人が来て、眼病もおひ／＼快方に向つたといひ、床揚げのしるしとして鰹節をくれた。市川寿美蔵の使が来て、中元の品をとゞける。

三時頃に額田夫婦が子供をつれて来て、一時間ほど話してゆく。

読書。晚餐後、散歩。七時半入浴。読書。十一時就寝。午前一時頃から眠る。

六日（月曜）雨（七十二度）

午前八時半起床。細雨。

朝日新聞にたのまれた随筆をかく。

十時過るころに富塚が母同道で来て、中元の品をくれ、一時間ほど語る。

終日細雨、温度も俄にでる。

夕方までに原稿十枚をかく。森部は帝劇を見物すると三時頃から出てゆく。

七時ごろ入浴。読書。森部は十一時ごろ帰宅。

今夜は午前二時半頃から眠る。あかつきに大雨。

七日（火曜）雨、晴（七十五度）

午前八時半起床。細雨。

細野多知子から転居の通知が来たので、返書。横浜の高橋から郵書が来て、病氣もおひ／＼快方に向つたといふ。大村から筋書受取りの返書が来た。

朝日新聞の随筆をかきつけける。

雨は午頃より晴れる。おえいは午後から青山へ墓参にゆく。

森部、おとく、おさきに中元の金をやる。大谷君と市川「寿美蔵」へ左団次から中元の品をとどけて来た。岸井からも中元の品を送つて来た。

四時頃までに随筆九枚をかく。昨日の原稿をあはせて、五回分脱稿。

直ぐに朝日新聞社へ発送。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。浦口善為君死去の通知が来た。

読書。森部は二七不動の縁日へ行つて、緋鯉を買つて来た。

十一時就寝。十二時半頃に醒めて、二時頃から再び眠る。

八日（水曜）陰（七十三度）

午前五時五十分ごろ地震。九時起床。

三重県波切港の林君から句集を送つて来たので、選了。あはせて短尺四枚をかく。大関君から転居の通知が来たので、返書。

浦口君告別式には森部を代理に出してやる。

午後二時頃に丸尾君が来て、中元の品をくれ、四時頃まで話してゆく。そのあひだに浦岡の細君が新築祝の返礼に来て、おえいと話してゆく。

波切の林君から鯉節を送つて来たので、返書。山形の渡辺君から桜桃を送つて来たので、同じく返書。その桜桃を隣家の近藤君に分配。

読書。頭痛がするので、寝ころぶ。

七時ごろ入浴。読書。九時頃から雨。

十一時就寝。午前一時頃から眠る。

九日（木曜）雨（七十四度）

午前八時半起床。細雨。

姉とおえいは王子の管野君方へ中元の礼にゆき、午後一時ごろ帰宅。そのあひだに大野の細君と娘が中元の礼に来て、門口で帰る。

旧作の漢詩を訂正。午後三時頃に大阪の佐藤宏郎君が来て、一時間ほど話してゆく。

麹町一丁目の畑君方へ中元の品をとどけさせる。銀座の富多葉から鳥料理をとどけて来た。

五時頃から大雨。その雨を冒して、佐久間が自作の戯曲を持参。一時間あまり語る。佐久間の帰るころに雨やむ。

七時ごろ入浴。読書。九時頃から又もや大雨。

十時就寝。午前一時頃から眠る。

十日（金曜）雨（七十二度）

午前八時起床。細雨。

十時過る頃に黒川君が来て、吉右衛門、勘弥の九月興業に何か適当なものはないかと云ふ。何分新しく起稿するのは困るが、旧作の「將軍と僧と」はどうであらうと其略筋を話し、「舞台」二部を貸してやる。

一丁目の小川君方へ中元の品を持たせてやる。大野君方へも果物をとゞけさせる。大谷君方からサイダーを届けて来た。

「明治演劇年表」を追加するために、「歌舞伎」の古雑誌五十部ほどを調べる。なか／＼面倒である。

佐久間の戯曲を一読。三橋君から「舞台」の原稿を送つて来たので、これも一読。

終日雨やまず、温度もまた降る。恰も梅雨があと戻りしたやうである。

七時ごろ入浴。渥美君から郵便が来て、同君は神経衰弱に罹つてゐるといふ。

読書。十時就寝。やがて地震。午前一時頃から眠る。

十一日（土曜）雨（六十八度）

午前八時半起床。

森部に命じて、赤坂の黒川君方へ中元の品を持たせてやる。

建具屋が来て、戸障子の狂ひを直してゆく。

岸井が来て、一時間ほど話してゆく。そのあひだに鈴木泉三郎君の未亡人が中元の札に来て、門口で話して帰る。

「明治演劇年表」を訂正し終る。渥美君に返書。福島

の石井から郵便が来たので、これにも返書。

三時頃に三橋君が来て、中元の品をくれ、四時半頃まで語る。

町内の小川君方へ中元の品をとゞけさせる。一丁目の小川君方から中元の品をとゞけて来た。放送局の小林君

が来て、放送局の中元をくれた。

けふも終日細雨、気候も涼しい。まことに不順の気候である。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。午前一時頃にさめて、二時頃から再び眠る。

十二日（日曜）雨、陰（六十九度）

午前九時起床。

向ふの家の内「■」（藤）長一君が来た。銀座の松屋の店員である。松屋では浅草雷門付近に支店を開くことになつたので、その演芸場のプランに就いて相談に来たのである。一時間あまり話してゆく。午頃から雨やむ。岡田から中元の品をとりつけて来たので、返書。額田から郵書が来たので、返書。

午後一時頃から紀尾井町の小林君方へゆく。ことしは老母の新盆に付、仏前へ供へ物の菓子を持参したのである。小林君不在、細君と三十分ほど話して帰る。それから四谷を散歩。杉浦喫茶店で喫茶。三時ごろ帰宅。

三時半頃に俵木が中元の礼に来て、一時間ほど語る。小林君から中元の品をとりつけて来た。

五時半頃に佐久間が来て、さきに印刷をたのんで置いた暑中見舞のハガキをとどける。佐久間は兎かく不勉強であるので、この際こゝろを入れかへて勉強するやうに懇々云ひ聞かせる。佐久間は七時過る頃まで話してゆく。入浴。読書。姉は女中を連れて草市へ買物にゆく。九時半頃から又もや雨の音。十時半就寝。夜半大雨。

十三日（月曜）雨（六十八度）

午前八時起床。

けふも雨やまず、盂蘭盆前に諸商人の難渋が思ひやられる。

「青蛙神」を訂正。已に脱稿したる第四幕を全部削除し、第三幕にて完結することにした。

午後一時半頃に林二九太君が田中直樹君同道で来訪。田中君は内裏に「犯罪科学」の編集に従事してゐた人で、今度は三省堂の編集部に入つて、来る十月から「犯罪公論」を発行するといひ、三時過る頃まで語る。

林君等が帰らうとする所へ山下が来て中元の品をくれ、これも一時間ほど話してゆく。中川君方からも中元の品をとりつけて来た。

読書。七時半ごろ入浴。黒川君から先日 of 礼状が来た。十時半就寝。

十四日（火曜）雨（六十五度）

午前八時半起床。けふも雨。

此頃は「■」（ヘセ）ル地の単衣に単羽織をかさねてゐる。こんなことは盆前にめづらしいことである。

十一時頃に中野が夫婦づれで中元の礼に来て、一時間ほど話してゆく。

二時頃に東儀が来て中元の品をくれる。つゞいて佐久間が中元の品を持参。つゞいて海野の細君が中元の礼に来た。そのあひだに、おさだも来た。何分にも盆前にさ

しかゝつて雨はやまず、路は悪い。諸人が出入の不便、実に思ひ遣られるのである。

四時過る頃までに「青蛙神」第三幕を訂正し終る。

四時半頃に小林が来て、一時間あまり話してゆく。

読書。七時半入浴。十時半就寝。

十五日（火曜）雨（七十二度）

午前八時起床。けふも雨。

九時半頃に山崎が中元の礼に来て、四十分ほど話して帰る。

横浜の飯田君から郵書が来たので、返書。大槻君から久しぶりで郵書が来たので、返書。

をり／＼に陰又雨。二時半頃に額田が来て仏前に果物を供へ、四時過る頃まで話してゆく。

近藤といふ人の戯曲「辰巳夜話」を訂正、舞台の原稿である。木村富子から中元の品をとりつけて来たので、礼状を発送。

七時半ごろ入浴。読書。十時就寝。夜半に又もや雨の音。

この二三日はどうやら普通の通りに眠られるやうになつた。

十六日（木曜）陰（七十二度）

午前七時半起床。

早朝に上松武雄が盆礼に来たので、おえいからも中元を遣る。武雄は十時頃まで話してゆく。

森部に命じて、四谷の丸尾君方へ中元の品をとりけさせる。おえいは銀座へ買物に出てゆく。

横浜の高橋から郵書が来て、病気もおひ／＼快方に向つたといふので、返書。

浅草の石角春之助君から戯曲を送つて来たので、返書。午後一時ごろおえい帰宅。銀座の松屋に放送局の小林君と品川の津沢君への届け物を頼んで来たといふので、

右両家にあてゝ送り状を発送して置く。

仕事も一先づ片付いたので、旧作の俳句を訂正、浄書。七時過るころ入浴。読書。十時就寝。

十七日（金曜）陰（七十六度）

午前八時半起床。

中村孝子が果物を持参、一時間ほど話してゆく。横浜の飯田君から返書が来た。

俳句を浄書。夕刻までに夏の部二百六十五句を終る。晚餐後、四谷を散歩。晴れんとして晴れず、蒸暑い。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（土曜）晴（八十二度）

午前八時半起床。おとくは早朝から宿下りに出てゆく。俳句春の部を訂正、浄書。静岡の山本君から郵書が来たので、返書。

朝から晴れたが、をり／＼に陰つて蒸暑い。

終日「■」来客無し。晚餐後、散歩。今夜の川開きはなか／＼の人出があつたらしい。

七時過るころ入浴。読書。おとくは十時ごろ帰宅。

十時半就寝。

十九日（日曜）晴（八十五度）

午前八時半起床。

俳句春の部を訂正、浄書。午頃までに昨日の分をあはせて二百四十五句を浄書し終る。

午後一時頃に岸井が来て、二時頃まで話してゆく。

朝から晴れて、暑中らしい気候となる。

夕刻までに俳句冬の部百三十二句を訂正、浄書。津沢の寿子から届け物の礼状が来た。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。

横浜の飯田君が綱島の水蜜柑二箱を持参、その一箱を小林君方へとじて呉れといふので、森部に命じて届けさせる。飯田君は九時過る頃まで話して去る。

十一時就寝。

二十日（月曜）陰、雨（七十五度）

午前八時半起床。十時過る頃から雨。

犯罪公論の田中君に頼まれた原稿をかく。

十二時頃に岸井が来て、今晚五時ごろ築地の待合とんぼから出火、池田君の妹の家は類焼、池田君宅は幸に免かれたといふ。取りあへず池田君に見舞状を発送。岸井は一時頃まで話してゆく。

三時頃までに原稿九枚をかく。題は「芝居の嘘」

おえいは三時半頃から歌舞伎座見物に出てゆく。

原稿を三省堂の田中君に発送。更に暑中見舞のハガキの表書八十枚をかく。

終日雨やまず。温度もまた降る。七時ごろ入浴。単羽織を着る。

読書。十時半ごろにおえい帰宅。十一時半就寝。

二十一日（火曜）陰、雨（八十度）

午前八時半起床。おさきは宿下りに出てゆく。

けふは土用の入といふに、晴れんとして晴れず、十時頃から又もや雨。

坂東寿三郎の使が来て、上京のみやげ物をとげた。森部に命じて、築地の池田君方へ見舞の品を持たせてやる。

俳句秋の部を訂正、浄書。午後一時頃に小林が来て菓

子をくれ、その翻訳「地獄の巴里」が春秋社から出版されたとして、一部を置いてゆく。

七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。おさきは十一時ごろ帰宅。

二十二日（水曜）雨、陰（七十五度）

午前八時起床。

俳句秋の部を訂正、浄書。

午後二時四十分頃に佐久間が来て、舞台叢書の用紙をみせ、三時半頃まで語る。つづいて高輪の原君が来て菓子をくれ、五時半頃まで話してゆく。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

二十三日（木曜）陰（七十六度）

午前八時起床。

細野多知子が暑中見舞に来て、門口で帰る。

午後一時頃までに俳句秋の部二百八十一句を浄書し終る。

森部に命じて、麻布の海野方へ暑中見舞の品を持たせてやる。

読書。晚餐後、散歩。七時過るころ入浴。

宮森君その他より暑中見舞の郵書十六通到着。

十時半就寝。

二十四日（金曜）晴、陰（七十八度）

午前八時起床。

おえいは深川の山本君方へ暑中見舞にゆき、十時ごろ帰宅。その帰途、銀座の松屋へまはつて、青山の佐成と駒沢の鈴木君方へ贈り物を頼んで来たといふのでそれ／＼に送り状を発送して置く。

十時半ごろに佐久間が来た。佐久間は兎かく不勉強。毎日遊び廻つてばかりゐるので、厳しく叱責、この秋からどこへか通学して勉強しろと云ひ聞かせる。

渡辺の博と愛子が来た。つづいて津沢の寿子が来た。姉弟三人が恰も落合つたのである。三人は午餐を喫して、一時頃に去る。

髪を刈りにゆく。帰つて読書。

五時半ごろに佐久間の祖父が来た。佐久間が今朝わたしに叱られたので、その申訳に来たのである。結局、佐久間は来年から再び早稲田に通学すると云ふことに取決めて帰る。

七時ごろ入浴。暑中見舞の郵書十一通到着。
読書。十時半就寝。

二十五日（土曜）晴（八十度）

午前八時半起床。

森曉紅君から郵書が来た。わたしが東京朝日に掲載中の「温泉雑談」を読んで、そらに昔恋しくなつたと云ふのである。返書。下島君からも類焼見舞の礼状が来た。読書。午後二時頃から一時間ほど眠る。晴れてやゝ暑くなる。

暑中見舞の郵書十八通到着。そのうち返書五通をかく。けふは嫩会例会で、例のごとく山崎は五時頃から来た。ついで鈴木余志子が来た。ほかに塚原、小林、額田、大村、富塚、佐久間、山下、中野が来た。岸井と岡田は欠席。六時半頃に小雨、間もなく止む。

劇談。舞台十月号は秋季特大号とすること、十一月號から定價を五十錢に引上げてページを増加すること等を議決。

九時五十分ごろ散会。それから入浴。

十二時ごろ就寝。四時頃まで眠られず、それから一時間ほど眠ると又醒めた。暁から南風が強く吹き出して、雨戸をゆする音さわがしく、再び安眠することが出来なかつた。

二十六日（日曜）陰（八十二度）

午前六時起床。風はいよ／＼強く吹き暴れる。

新聞をみると、宮森君は古今俳句一千吟英訳を著した功勞を認められ、高松宮から有栖川宮奨學資金二千元を下賜されたとあるので、取りあへず郵書を発送。

黒川君から郵書が来て、猿之助は名古屋を振出しに地方巡業、「小栗栖の長兵衛」を上演したいといふので、承諾の返書。ほかに暑中見舞の郵書十一通、その返書五通をかく。岸井が来て、門口で帰る。

昨夜不眠のために頭は重く、気候は蒸暑く、風は強く、頗る不愉快の日である。下座敷に降りて読書。二時頃から一時間ほど午睡。

七時ごろ入浴。宵から風も次第に衰へた。読書。十時半就寝。今夜は安眠。

二十七日（月曜）晴（八十四度）

午前八時半起床。

星野麦人君が来て、木太刀の短尺帖を作るに付、わたしの写真を貸してくれといひ、一時間ほど話してゆく。読書。午後一時頃から神楽坂上の第一銀行支店に赴き、富士印刷会社の配当金を受取つて来た。晴れて暑くなる。暑中見舞の郵書十通到着。その返書四通をかく。

読書に倦んで、俳句など作る。晚餐後、四谷を散歩。七時半ごろ入浴。森部は二七不動の縁日で緋鯉と金魚を買つて来て、庭の池に放つ。

十時半就寝。今夜は午前三時頃まで眠れなかつた。

二十八日（火曜）晴（八十二度）

午前八時起床。

ペンキ屋の職人が三人来て、トタンの庇や樋を塗りかへる。

不眠のために頭が重い。十一時過る頃に地震、この頃は毎日地震がある。

宮森君から返書が来た。木村富子から舞踊「歌舞伎踊」の原稿を送つて来たので、返書。

下座敷に降りて読書。午後二時頃から一時間ほど眠る。四時頃に佐久間が来て、額田に頼まれたとて嫩会の七月分会費を受取り、五時過る頃まで話してゆく。

晚餐後、四谷を散歩。七時過るころ入浴。

暑中見舞の郵書八通到着、その返書三通をかく。

読書。十一時就寝。午前二時頃から眠る。

二十九日（水曜）晴（八十四度）

午前七時半起床。

けふもペンキ屋の職人が来て、裏手の塀を塗る。

読書。坪内君その他の暑中見舞十五通到着。その返書

三通をかく。

額田から郵書が来たので、返書。

午後は寝ころんで俳句など作る。

晚餐後、散歩。七時過る頃入浴。

読書。氣候が夏らしくなつたせゐか、俄に蚊が殖えた。十時半就寝。

三十日（木曜）晴（八十四度）

午前七時半起床。

浪曲研究会の崔永祚君が来て、欠食児童救済演芸会を催すに付、読売新聞社に紹介してくれといふので、玉虫君宛の紹介状をかいて遣る。

朝日新聞社から原稿料を送つて来たので返書。日活から「修禪寺物語」のレコードを送つて来たので、同じく返書。

十二時頃に岸井が来て、三十分ほど話してゆく。宝文館及び文学社から国語教科書を送つて来た。いづれも「修禪寺物語」が掲載されてゐるのである。

読書。暑中見舞の郵書十一通到着、その返信二通をかく。

三時半頃に東京日日新聞の細沼君が来て、何か怪談を話してくれといひ、海坊主を見た話を筆記してゆく。

晚餐後、四谷を散歩。七時過るころ入浴。

読書。明るい月が出て、夜は涼しい。

十一時就寝。今夜は二時頃から眠る。

三十一日（金曜）晴（八十六度）

午前七時起床。

十時頃に正岡君が来て、再び滝野川の旧宅へ戻ったといひ、十一半時頃まで話してゆく。菅野君から転居の通知が来たので、返書。

午後一時頃から一時間ほど午睡。それから岸井の戯曲と山本岩太君の翻訳をよむ。いづれも舞台の原稿である。暑中見舞の郵書八通到着、その返信四通をかく。

晚餐後、四谷を散歩。四谷見附で恰も市川小太夫に逢つた。小太夫の新興劇一座は来月八日から宝塚へ乗込むといひ、わたしの「曾我物語」を上演したいといふので、承諾。改造社から「修禪寺物語」増版の捺印を求めに来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

今月は別に纏まつた仕事もしない。東京朝日の随筆「温泉雑談」五回を書いたに過ぎなかつた。

（翻刻担当…脇坂健介）

昭和六年八月

一日（土曜）晴（八十五度）

午前八時起床。

三橋君の喜劇「アパアト春日■」佐藤四郎君の戯曲「麗日」を編集、いづれも舞台の原稿である。

読書。暑中見舞の郵書十四通到着、その返信三通をかく。

晚餐後、散歩。けふは神田まで行つて古本二種を買ふ。まだ宵のせるか、神田もあまり繁昌してゐなかつた。

七時半ごろ帰宅。空陰つて、遠雷の声も聞えたが、雨ともならなかつた。岡田から郵書が来て、アルプス登山を終つて帰京したといふ。

入浴。読書。森部も友人と「■」浅草へ行つて、九時頃帰宅。

十時半就寝。空は晴れて星が出た。

二日（日曜）晴（八十五度）

午前八時起床。

けふは母の祥月命日に相当するので、姉とおえいは早朝から青山へ墓参にゆく。私も仏前に供へ物をして、焼香。

晴れて暑くなる。それでも例年の土用に比べると、遙

に凌ぎよい。

読書。終日無事。暑中見舞の郵書十通到着、その返信二通をかく。

晚餐後、四谷を散歩。七時過るころ入浴。
読書。十時半就寝。午前一時頃から眠る。

三日（月曜）晴（八十五度）

午前八時起床。

九時半頃に小林君が来て、一時間ほど話してゆく。小林の細君はリウマチスが全快せず、やはり寝たり起きたりしてゐるといふ。

十二時頃に中野が来て、舞台叢書の表紙及び組方について相談があり、三十分あまり話してゆく。朝鮮人鄭君に頼まれた短尺八枚をかく。

一時半頃に額田が来て氷菓子をくれ、三時頃まで語る。読書。四時頃に横浜の高橋から速達便が来て、邦之助の容体がどうも宜しくないといふ。過日暑中見舞の郵書を出したが、それに対して返事がないので、少しく不審に思つてゐた所、この通知を受取つて驚かされた。就てはおえいが明日見舞ひに行くこととし、取りあへず高橋に返書を出して置く。

七時ごろ入浴。それから散歩。夜の風は涼しい。
歸つて読書。十一時就寝。

四日（火曜）晴（八十四度）

午前八時起床。

わたしの起きないうちに、おえいは横浜へ見舞に出てゆく。姉は小林の細君を見舞にゆく。どこにも病人の多いことである。

暑中見舞の郵書十九通到着、その返信六通をかく。読書。

午前三時頃におえい帰宅。やはり高橋の通知の通り、邦之助は重態、喉頭結核で回復の望みはあるまいといふ。まことに困つたことである。

四時頃に鈴木千枝雄が来て、果物をくれ、四十分ほど話してゆく。その果物を大野君方へ持たせてやる。

横浜の高橋に郵書を発して、おえいが本日見舞に行つたことを知らせてやる。

七時ごろ入浴。森部と平河天神の縁日にゆく。暑中のせみか、中々賑はつてゐた。帰途、磯部屋で古本六冊を買つて来た。

十一時就寝。暮れて涼しい風が吹き出したが、戸を締めると矢はり蒸暑い。

五日（水曜）晴（八十六度）

午前八時起床。

暑中見舞の郵書廿三通到着。その返信十四通をかく。

晴れて暑くなる。今年の夏は比較的に楽であつたが、これから本格の暑気になるらしい。

午後二時頃に文芸春秋社の武内君が来て、オール読物号に十枚ぐらゐのコントを書いてくれと云ひ、一時間ほど話してゆく。

つゞいて大阪毎日新聞の渡辺君から郵書が来て、これも五枚ぐらゐのコントを書いてくれといふ。

読書。おえいは三時頃から紀尾井町の小林君方へ見舞にゆく。小林の細君もけふは元気が好かつたさうである。

晚餐後、四谷を散歩。七時半ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

六日（木曜）晴（八十八度）

午前八時起床。

暑中見舞の郵書十八通到着。その返信六通をかく。

大阪毎日新聞のコント五枚をかく。題は「温泉の怪談」午後二時頃から一時間ほど午睡。醒めて読書。けふは当夏に入つて、第一の暑気であつた。

晚餐後、四谷を散歩。七時半ごろ入浴。やがて海野が来て、十時頃まで話してゆく。

十一時就寝。

七日（金曜）晴（八十八度）

午前八時起床。

暑中見舞の郵書十通到着、その返信三通をかく。

けふは土用の明けといふのであるが、暑気は日増しに加はる。今年は残暑が強さうである。

午後一時頃に山崎が来て、自作の戯曲をみせ、一時間ほど話してゆく。

読書。三時頃から一時間ほど午睡。

晚餐後、庭に出てゐると、日ぐらしの声がきこえる。暑いと云つても、立秋が近いことを思はせた。

おえいは夕から豊川稲荷へ参詣にゆく。

七時半ごろ入浴。中野が自作の喜劇を持参。あはせて舞台叢書第一編「歌舞伎談義」の校正刷をとゞけ、九時頃まで語る。

読書。十一時就寝。

八日（土曜）晴（八十九度）

午前八時起床。けふは立秋。

中野の喜劇を編集、更に歌舞伎談義「■」十八ページを校了、あはせて大黒活版所へ郵送。

池田君の妹が火事見舞の札に来て、門口で帰る。岡山の難波から父が忌明けの品を送つて来たので、返書。ほかに暑中見舞の郵書八通到着、その返信三通をかく。岸井から郵書が来て、榛名山へゆくといふ。

午後は下座敷に降りて読書。

三時半頃に寺田君が来た。ついでに改造社の塩谷晴如君が来た。塩谷君は文学大全集の編集を担当してゐるのである。両君は誘ひ合せて来たので、七時頃まで一緒に話してゆく。

入浴。読書。夜に入つて陰る。

十時半就寝。夜なかに汗をかいて幾たびか眼をさました。

九日（日曜）晴（九十度）

午前八時起床。

温度は日ましに騰つてゆく。読書。

午後は下座敷に降りて読書。二階よりも下座敷の方がよほど涼しいやうである。

暑中見舞の郵書十六通到着、その返信十通をかく。

終日來客無し。晚餐後、五番町の堀端を散歩。

七時半ごろ入浴。森部は宵から額田方へ行つて、十時ごろ帰宅。

読書。十一時就寝。

十日（月曜）晴（九十度）

午前八時起床。

崔永祚君が又来た。やはり先日と同じ用件である。都

新聞の伊原君と報知新聞の中代君に紹介の名刺をやる。

午後に蒲田の渡辺君が来て、一時間ほど話してゆく。

大阪の山上から京都の菓子を送つて来たので、返書。

大村から帰郷の通知が来たので、返書。ほかに暑中見舞の郵書廿三通到着、その返信十二通をかく。

町内の永田理髪店へ髪刈にゆく。帰つて読書。

気賀君子の使が来て、札幌の林檎をくれ、自作戯曲をといてゆく。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。

読書。十一時半就寝。やがて地震。

十一日（火曜）晴（九十度）

午前八時半起床。

暑中見舞の郵書十一通到着、その返信七通をかく。

オール読物のコント六枚をかく。午後には柏木龍吉君のラヂオ・ドラマを編集、舞台の原稿である。

おえいはおとく、おさきを連れて、午後三時半頃から隅田川公園へゆく。市の電気局の催しで花火などがあるといふ。

大黒活版所から「歌舞伎談義」の校正刷を届けて来たので、午後四時から八時までに初校三十二ページ、再校十八ページ校了、返送。

台湾の放送局から「番町皿屋敷」放送の電報が来たの

で、承諾の返電を発送。

暮れて蒸暑くなる。八時過るころ入浴。やがておえい等帰宅。

読書。十一時就寝。

十二日（水曜）晴、驟雨（九十一度）

午前八時半起床。

オール読物のコント三枚をかく。昨日の分をあはせて九枚、すぐに文芸春秋社へ発送。暑中見舞の郵書十二通到着。その返信七通。

舞台叢書の初校三十八ページ校了、返送。

森部は午後から学校へ行つて、中等教員検定証を取つて来た。

横浜の高橋から床あげの配り物を送つて来たので、返書。額田から郵書が来たので、返書。

六時頃から驟雨。額田が来て、松竹から電話がかゝつたので行つてみると、我童の出し物で何か一幕書いてくれといふ相談があつたといふ。雨は次第に強くなつて、雷鳴。七時半頃に額田は去る。

入浴。舞台叢書の初校四十五ページ校了。これで全部百三十五ページの初校を終る。

雷は止んでも、雨は降りつゞけてゐる。十時半就寝。

十三日（木曜）晴（九十度）

午前八時半起床。

新聞をみると、昨夜の六時半ごろ銀座一丁目に落雷したといふ。場所柄だけに大騒ぎであつたらうと察せられた。

大黒活版所から再校をとどけて来たので、すぐに校正に取りかかる。

植田の細君が誘ひに来て、姉同道で堀の内の祖師堂へ参詣にゆく。それと入れちがひに、上松の細君が来た。午後一時頃に鈴木千枝雄が来て自作の戯曲をとゞけ、これから大黒へ（雑誌の）校正にゆくといふので、三校十八ページを渡してやる。

上松の細君は午後一時半頃に帰る。二時頃に姉帰宅。夕刻までに再校三十四ページ校了。六時頃に大黒の使が又もや再校をとゞけて来た。

七時ごろ入浴。岡田禎子が会費をとゞけに来て、門口で帰る。

八時半頃までに再校三十八ページ校了。暑中見舞の郵書八通到着、その返信五通をかく。

九時頃から平河天神の縁日にゆく。暑いせみか、なか／＼賑はつてゐた。

十一時就寝。夜暑く、午後三時頃からやうやく眠る。

十四日（金曜）晴（八十八度）

午前九時起床。

わたしの起きないうちに、おえいは森部同道で阿佐ヶ谷の額田方へ出てゆく。朝から暑い。

大黒から校正刷をとってきて来たので、直ぐに校正に取りかゝる。十一時頃におえい等帰宅。

午後一時半頃に豊田豊君が自作の戯曲を持参、一時間ほど話してゆく。四時頃までに校正の三校三十八ページ、再校四十七ページ校了。

三橋君から帰京の通知が来たので、返書。暑中見舞の郵書六通到着、その返信四通をかく。

七時ごろ入浴。散歩。帰って読書。

十一時就寝。蒸暑くて眠られず、殆ど徹夜してしまつた。

十五日（土曜）晴（九十度）

午前六時起床。麹町小学校でラヂオ体操を行つてゐるので、行つて見る。老弱男女種々の人があつまつてゐた。

巖谷三一君の喜劇「ママさん」を編集。横浜の飯田君から「雑草」の句選を頼んで来たので、すぐを選了。

昨夜不眠のために頭が重い。午後は下座敷に降りて、二時間ほど午睡。醒めて読書。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。やがて佐久間が来て、

舞台叢書の製本について相談あり、四十分ほど話してゆく。

岡田禎子が文芸家協会に入会するに付、その推薦者に額田と私を頼んで来たので、署名捺印して返送。山形の本間君から郵書が来たので、返書。

横浜の小島家から郵書が来て、邦之助の容体いよ／＼宜しくないといふので、おえいは明朝かさねて見舞にゆくことにする。

読書。十一時就寝。

十六日（日曜）晴

午前七時起床。おえいは私の起きないうちに横浜へ出てゆく。

飯田君にたのまれた短尺四枚に揮毫、句稿と共に返送。水脈社に頼まれた短尺三枚にも揮毫、返送。

暑中見舞の郵書六通到着、その返信四通をかく。蒲田の渡辺から郵書が来て、小島の容態不良であるといふ。

植田の細君が来て、バインアップルの缶詰をくれた。けふも暑い。

気賀君子の戯曲「淀君懐胎」と番匠谷英一君の戯曲「下剋上」を編集、いづれも「舞台」の原稿である。

五時頃におえい帰宅。渡辺からの通知の通り、邦之助は所詮回復の見込みはあるまいといふ。けふの午後、横

浜には二度の驟雨があつたさうであるが、東京には一滴も降らなかつた。

晩餐後、散歩。七時過るころ入浴。

読書。十二時就寝。蒸暑いので、暁方まで殆ど眠られなかつた。

十七日（月曜）晴（九十度）

午前五時半頃に起きて庭を散歩。それから再び蚊帳に入つて一睡。九時ごろ起床。けふも朝から暑い。

誌友仲井照男君の戯曲「夜の挿話」を編集、舞台の原稿である。

午後は下座敷に降りて読書。二時間ほど午睡。

暑中見舞の郵書五通到着。その返信四通をかく。

晩餐後、散歩。七時半ごろ入浴。

おえいは姉及び女中等と二七の不動にゆき、西瓜ときり／＼を買つて来た。

十一時就寝。今夜も幾たびか眼がさめた。

十八日（火曜）晴（九十度）

午前七時起床。

額田、坪井から郵書は来たので、いづれも返書。ほか暑中見舞の郵書五通、その返信三通をかく。

姉が今朝紀尾井町の小林君方へ見舞に行つたところ、

小林の細君は病気がいつまでも捗々しくないので、明朝出発、信州の温泉に当分滞在するといふ。

就ては私も午後から餞別品をたづさへて、小林君方を訪問。小林君在宅、一時間あまり話して帰る。日中はなか／＼暑い。

二時頃に山下が来て、三時頃まで話してゆく。

読書。晩餐後、散歩。おえいもおとくを連れて四谷へ買物にゆく。

六時過る頃に佐久間が来て、舞台叢書の奥付をみせ、四十分ほど話して去る。それから入浴。

読書。籠のきり／＼すが頻りに鳴く。

十時半就寝。

十九日（水「木」曜）晴（八十九度）

午前八時起床。おえいは私の起きないうちに横浜へ出てゆく。

読書。午後は俳句など作る。連日の残暑に少しく疲れた気味である。暑中見舞の郵書五通到着、その返信三通をかく。

五時頃におえい帰宅。邦之助の容態は依然としてゐるといふ。

婦人倶楽部からドリコノ半ダースをとりけて来た。

晩餐後、散歩。七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

二十日（木「金」曜）晴（八十八度）

午前八時起床。

畑耕一君からその著「女たらしの昇天」を送つて来たので、返書。大阪毎日新聞からコントの原稿料を送つて来たので、これにも返書。

森部に手伝はせて、掛物の虫ぼしをする。所蔵の数十幅は先年の震災に焼いてしまつて、その後にあつめた物は十五六幅に過ぎない。

午後は更に書棚の整理をする。いつとは無しに不用の書籍が三四十冊も堆積してゐるのである。

それが済んでから西瓜を食ひ、一と休息して読書。けふもなか／＼暑い。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

二十一日（金曜）晴（八十八度）

午前八時起床。

森部は新宿の三城へチャブ台を買ひにゆく。ふたば会用である。

十時頃に横浜から電報が来て、邦之助は昨夜遂に死去したといふ。

中野が来て、舞台叢書の表紙をみせ、三十分ほど話してゆく。暑中見舞の郵書七通到着、その返信五通をかく。おえいは午後から横浜へ出てゆく。私は明日ゆく筈である。

下座敷へ降りて読書。四時頃に津沢君から速達便が来て、邦之助の遺骸は明朝火葬に付し、午後三時から告別式を営むといふ。つゞいて六時頃に津沢の寿子が来て、横浜から今帰つて来たといひ、邦之助葬儀について種々の話があつた。

七時過るころ入浴。八時頃に佐久間が来て、舞台叢書第一巻の製本もいよ／＼出来するといひ、一千部の奥付捺印を求めてゆく。

読書。十一時就寝。邦之助の事などそれからそれへと考へて、午前二時頃まで眠られなかつた。

二十二日（土曜）晴（八十八度）

午前七時起床。

松竹の黒川君から郵書が来て、九月の歌舞伎座で「狐の戯れ」を上演したいといふので、承諾の返書。

けふは邦之助の告別式であるので、正午から出てゆく。午後一時頃に横浜駅着、それから自動車で磯子着。けふもなか／＼暑い日である。

こゝで色々な人に逢つて挨拶、何分にも家が広くない

ので吊客混雑、告別式は三時から始めて四時に終る。医師会及び町会の人々が来て万事を手伝ひ、予想以上の盛儀であつた。

五時頃にこゝを出で、おえいと寿子、渡部の伝と四人で伊勢佐木町に出で、こゝで晚餐。桜木町駅から有線電車に申込み、途中で伝と寿子に別れて、私たちは有楽町駅着。七時ごろ帰宅。

入浴。けふは別に働いたわけでもないが、やはり何となく疲れた。一昨年の八月には義兄を亡ひ、本年の八月には義弟を失ふ。これも避け難き人事とは云ひながら、一種の感慨を覚えるのであつた。

十時半就寝。

二十三日（日曜）晴（八十七度）

午前八時起床。

横浜の高橋に昨日の礼状を発送。暑中見舞の返信五通をかく。

読書。終日無事。

七時ごろ入浴。やがて山下が来て、邦之助死去の悔みを述べ、一時間あまり話してゆく。今夜初めて庭に虫の声を聞く。

森部は夕刻から青山会館の浪花節大会を聴きに行き、十時ごろ帰宅。

十時半就寝。

二十四日（月曜）晴、雨（八十八度）

午前八時起床。

けふは石丸兄の三週忌命日に相当するので、仏前に供物をさしげて焼香。姉とおえいは早朝から青山墓地へ参詣にゆく。

森部は額田方を訪問するとて、これも朝から出てゆく。十一時頃に小村雪岱君来訪、歌舞伎座上演の「狐の戯れ」の舞台装置や扮装について打合せあり、四十分ほど話してゆく。

十二時過る頃に森部帰宅。森部はおとく、おさきに志の品をやる。

船橋聖一君の戯曲「首の無いおいは」を編集、舞台の原稿である。それから読書。けふも暑い、をり／＼に陰る。

七時ごろ入浴。読書。十時頃から雨。

十時半就寝。

二十五日（火曜）雨、陰（七十五度）

午前八時起床。細雨。気候も俄に涼しくなる。

横浜の小島良子から邦之助連夜の案内状が来たが、速達便で不参の返書。ほかに残暑見舞の返書三通をかく。

午後、散歩ながら紀尾井町の小林君方をたづねると、小林君は去廿二日突然発病、医師の厄介になったといふ。但しけふは已に平癒、別に変つた様子もなかつた。暫く話してゐるところへ、堀紫山君来訪、三時頃まで話して帰る。雨やんで陰る。

大村から今夜欠席の旨をいひ、会費と広告料をとげて来た。小林からも欠席の旨を速達便で届けて来た。

大黒活版所から舞台九月号と歌舞伎談義の製本をとげて来た。

四時頃に額田が来て、これから静浦に避暑中の子供等を迎ひにゆくと云ひ、邦之助の墓前に香典を供へてゆく。ふたば会例会で、山崎が先づ来た。つづいて鈴木余志子、岡田、高塚、中野、山下、岸井、鈴木千枝雄が来た。佐久間は無断欠席。

八時過る頃に浜村君が自作の戯曲「愛慾海」を持参。これも嫩会の席に入つて雑談。十時ごろ散会。

入浴。十一時半就寝。今夜は幾たびか眼がさめて、暁までおち／＼眠られなかつた。

二十六日（水曜）晴（八十六度）

午前六時起床。

歌舞伎談義を小包み便にして、畑、渥美、原田、木村、（河野、）和氣、清水、高橋の諸家へ発送。舞台九月号

を原田、清水、高橋、東儀の諸家へ発送。

大村から会費と広告料を送つて来たので、返書。横浜の高橋から返書が来た。ほかに残暑見舞の郵書三通到着。昨夜不眠のために頭が重い。午後、下座敷へ降りて一時間あまり午睡。醒めて読書。

三時頃に小林君が来て、邦之助の霊前に供へ物をくれ、一時間あまり話してゆく。

五時頃に鈴木千枝雄が来て、六時半頃まで語る。塚原氏の遺族頗る窮乏してゐるのは意外であつた。

七時半ごろ入浴。夕刊をみると、浜口前首相は本日午後二時三十五分遂に死去したといふ。

八時ごろ細雨、間もなく止む。読書。
十二時就寝。

二十七日（木曜）晴（八十八度）

午前八時起床。

十時半頃に額田の細君が来て、昨日静浦から帰京したといひ、三十分あまり話してゆく。

浜村君の戯曲「愛慾海」を編集。舞台の原稿である。午後、下座敷へ降りて読書。けふも暑い。

七時ごろ入浴。それから森部と二七不動の縁日にゆき、草花三株を買つて来た。

旧暦七月十四日の月が明るい。風のない夜である。

十「一」時頃に佐久間の宅から速達便が来て、佐久間は廿四日以来臥床、どうも丹毒であるらしいといふ。就ては舞台九月号の発送がまだ終らないから宜しく頼むといふのである。取りあへず見舞状を発送。額田方へは明朝森部をつかはして通知させることにする。なにしろ困つたことである。

十二時就寝。午前二時頃まで眠られなかつた。

二十八日（金曜）晴（九十度）

午前八時起床。森部は額田方へ出てゆく。

浜村君の戯曲を編集し終る。けふは殊に暑い。

午前一時頃から下座敷に降りて読書。

三時過る頃に森部帰宅。森部は額田と共に渋谷の佐久間方へ見舞に行き、それから大黒活版所へ赴き、大黒の人々も手伝ひて舞台九月号の発送を終つたといふ。佐久間は丹毒と決定、但し重症ではないらしいとのことであつた。

森部は長谷川伸君の戯曲を持参したので、一読。

七時ごろ入浴。八時過る頃に林二九太君が来て、一時間ほど語る。つゞいて大野君が来て、赤倉温泉のみやげをくれ、これも一時間ほど話してゆく。

畑君と木村富子から歌舞伎談義の礼状が来た。

十一時就寝。陰つてをり／＼に細雨。

二十九日（土曜）晴（八十二度）

午前八時起床。今朝はやゝ涼しい。

佐久間病氣に付、舞台九月号と舞台談義を小包みにして、大村と小林に発送。

十時過る頃に清見陸郎君来訪。清見君は今度文筆の傍らに、新興新内節として打つて出る計画があるといひ、十二時頃まで話してゆく。

そのあひだに渡辺の妻子が来て、午飯を食つて一時頃に去る。

長谷川君の戯曲を編集し終り、他の原稿と共に小包み便にして中野方へ発送。これで十月号の戯曲は纏まつたのである。

下座敷へ降りて、読書。渥美君から歌舞伎談義の礼状が来た。晚餐後、散歩。森部は小林君方へ行つて、小篠の鉢植を貰つて来た。

七時ごろ入浴。読書。暮れていよ／＼涼しくなる。

夕刊をみると、浜口前首相の葬儀は本日日比谷公園にて執行。会葬者非常に多く、受付けたる名「■」刺十五万枚を越え、賽銭を投げるもの続出して百五十円に達したといふ。歴代の首相の葬儀でこれほど盛大であつたものは無い。

十時半就寝。虫の声が夜ごとに殖えてゆく。

三十日（日曜）陰（七十五度）

午前八時起床。今朝は陰つて涼しい。

河野君から歌舞伎談義の札状が来たので、返書。原田君からも同じく札状が来た。

十一時頃から森部同道で銀座を散歩。三越と松屋で雑貨をかひ、三越の食堂で昼餐、一時半ごろ帰宅。日曜とはいひながら、銀座辺は頗るさびしかった。留守に鈴木千枝雄が来たといふ。

誌友矢島君の童話劇「雀の恩返し」を編集。それから読書。

森部を小林君方へつかはして支那の墨二個をとゞけさせる。森部はけふも小篠を貰つて来て、庭に栽える。

「八」六時過る頃に額田が来て静岡の茶をくれ、佐久間病氣も差したることは無いらしいといふ。額田は九時頃まで話してゆく。

入浴。十一時就寝。

〔三十一日（月曜）雨〕

午前七時半起床。雨はかなり強く、氣候もいよ／＼涼しくなつた。今朝は単羽織をかさねる。」

三十一日（月曜）雨（七十五度）

午前七時半起床。雨はかなり強く、氣候もいよ／＼

涼しい。今朝から単羽織をかさねる。

佐久間病氣のために、森部が代つて「舞台」の広告料を集めに行くこととなり、九時頃から雨を冒して出てゆく。

富塚に郵書を送る。これも「舞台」広告料の件である。大村から雑誌うけ取りの返書が来た。京都座の小太夫一座から大入袋を送つて来た。「川原から郵書が来たので、返書。」

十一時頃に鈴木千枝雄が来て嫩会の会費をとゞけ、一時間ほど話してゆく。午前一時半頃に森部帰宅。三ヶ所の広告料は全部滞りなく受取つて来たさうである。

津村君の戯曲「秘願成就」北村喜八君の喜劇「女・オン・パレード」を編集し終る。黒川君に郵書を発送、「狐の戯れ」の文句訂正の件である。

七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

本月は殆ど纏まつた仕事をしなかつた。箱根の怪談（五枚、大阪毎日）赤膏葉（九枚、オール読物）その他は歌舞伎談義の校正、舞台原稿の編集など。

（翻刻担当…阿部菜々香）

昭和六年九月

一日（火曜）晴（七十五度）

午前九時起床。

けふは邦之助の二七日連夜に相当するので、おえいは供物をたづさへて、早朝から横浜へ出てゆく。

震災八週年当日、警察では非常警戒の練習を行ひ、警官が辻々を警戒する。

十時頃に藤間勘四郎君が来て、「狐の戯れ」の振付について打合せあり、一時間ほど話してゆく。

川原小枝子から郵書が来たので、〈返書〉。中村孝子からも郵書が来たので、同じく返書。富塚秀子からも郵書が来た。

午後一時頃から町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆき、二時過るころ帰宅すると、おえいはもう帰宅してゐた。

三時頃に三宅孤軒、坂本猿冠者、田中煙亭の三君同道で来訪、今月廿八、九、三十日三日間、新橋演舞場で例の通話会演劇を開催するに付、中幕として「修禪寺物語」を上演したひとひ、三十分ほど話してゆく。

晩餐後、散歩。その留守中に放送局の小林君が来たといふ。夕刊をみると、被服廠あとの震災追悼会には参拝者三十万人を越えたさうである。

七時ごろに小林君再び来訪。放送局では今年もラヂ

オ・ドラマの懸賞募集を催すに付、わたしにも選者の一人となつてくれといふ。他の選者は菊地、久米、山本、岸田、久保田の諸君である。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二日（水曜）陰（七十二度）

午前八時半起床。けふは二百十日であるといふ。朝から陰つて涼しい。

山梨の河野君から自作の戯曲を送つて来たので、返書。十時頃に中野が来て、四十分ほど話してゆく。取りあへず河野君の戯曲を一読、題は「源氏の最後」といふのである。

森部に果物の籠を持たせて、佐久間方へ見舞にやる。佐久間も幸におひ／＼快方に向かふといふ。

二時四十分頃に黒川君が来て、五時過る頃まで話してゆく。

けふは歌舞伎座の舞台稽古で、「狐の戯れ」は午後八時頃になるであらうといふので、七時頃から出てゆくと、今や石川五右衛門の大詰を終るところであつた。「狐の戯れ」は八時十分頃に始まつて、九時五分頃に稽古を終る。

九時半ごろ帰宅。山下から入場券うけ取りの礼状が来てゐた。

入浴。十一時半就寝。

三日（木曜）陰（七十五度）

午前七時半起床。庭の芙蓉が一輪開く。朝顔は今や盛りである。

横浜の高橋から鳥取のデコ人形、陸前竹駒の狐絵馬、支那の仮面などを箱詰めにして送つて来た。相当嚴重に包装してあつたにも拘らず、仮面は微塵に碎けてゐたのは残念であつた。右の次第をしたためて、礼状を発送。浜村（君）から郵便が来たので、返書。午前より午後にかけて河野君の戯曲を編集し終る。

午後三時頃に浦岡の細君が来て、房州みやげをくれた。富塚秀子が来た。日活の広告料をとゞけてゆく。

歌舞伎座の初日で三時半頃から出てゆく。山下と岸井も来た。四時開場、第一「平家女護島」中幕「樽屋おせん」二番目「金淵双級巴」大切「狐の戯れ」を終つたのは、十時半頃であつた。

十時五十分頃帰宅。入浴。留守中にキングの社員が来たといふ。

十二時就寝。

四日（金曜）晴（八十度）

午前九時起床。

上松君来訪。午餐を喫して午後まで話してゐると、十二時頃に渡辺のおしげが来た。

上松君が帰ると、やがて菅野君が来た。つゞいて大阪の中島が来た。中島が先づ去り、それからおしげが去り、菅野君が去る。三時頃まで来客雑踏、少し疲れた。

静岡の山本君から梨の実を沢山に送つてくれたので、細君と小川君方へ分配。菅野君が味噌漬をくれたので、紀尾井町の小林君方へ分配。山本君に礼状を発送。

晚餐後、散歩。夕より陰つて蒸暑くなる。森部は昨夜から国民英学会の夜学に通ふこととなり、今夜も出てゆく。

七時ごろ入浴。読書。虫の声がいよ／＼繁くなる。十一時就寝。

五日（土曜）晴（九十度）

午前八時起床。

森部は「舞台」の広告料を取るとて、朝から出てゆく。

十時半ごろに額田が来て、一時間ほど語る。そのあひだに森部が帰宅したので、先日取集めの分をあはせて広告料金八拾一元六十銭を額田に渡してやる。

けふは又俄に温度が昇つて、秋暑が身にしみるやうである。

十二時半頃に山下が来て、一時間ほど話してゆく。富

塚から返書が来た。

二時頃に湯浅輝夫君が放送局の佐々健治同道で来訪、一時間あまり語る。湯浅君等の帰る頃から俄に脳貧血の気味、兎も角我慢して両君を見送り、それから下座敷に横臥して葡萄酒を飲む。顔色蒼白、流汗淋漓、家内の者もおどろき騒ぐ。

やがて気分も回復したので、床を敷かせて一時間ほど安眠。やはり睡眠不足と突然の暑気と来客混雑との為であつたらしい。

七時半ころ入浴。夜に入るも蒸暑く、十二時頃から蚊帳に入つたが、午前三時頃まで眠られなかつた。隣家の犬がしきりに吠える。

六日（日曜）晴、陰、雨（八十度）

午前八時起床。

八日頃から熱海に遊ぶつもりであるので、その旨を樋口旅館に通知。改造社から「修禪寺物語」増版の印税を送つて来たので、返書。

水脈社から歌舞伎俳句の選をたのんで来たので、選了、返送。

河野君の戯曲「源氏の最後」を編集し終り、更に岸井の戯曲「延びかけたガルソンヌ刈り」を編集。

紀尾井町の小林君が夕方から俳句会に出席するので、

森部はその留守番をたのまれ、三時頃から出てゆく。

入口の木柵をくぐつて、近所の犬が闖入するので、おとくに手伝はせて木竹を横へ、その出入口を塞ぐことにする。植木や草花を荒ら「■」されて困ものである。

六時半ごろ入浴。そのあひだにおさきの父が来たといふ。七時頃から驟雨。

読書。十時半就寝。森部は小林君方に一泊。

七日（月曜）陰（七十三度）

午前九時起床。五時四十分頃に地震、それに眼をさまして再び寝たので、今朝は寝過してしまつた。森部は早朝帰宅。

明日は熱海へゆく筈であるので、その荷ごしらへをする。例に依て、文房具や書籍類を持参。バスケットは相当に重くなる。

吉田武三君の戯曲「年の瀬」を編集、これで舞台十一月号の戯曲は大抵纏まつた。

木村富子から文芸倶楽部の切抜き二種を送つて来た。いづれも私の小説で、明治三十四年中の作、恰も三十年前である。一読、自分の作か他人の作か判らないくらいで、実に隔世の感がある。取りあへず礼状を発送して置く。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

八日（火曜）陰

午前六時起床。

八時半ごろから森部に送られて東京駅に向ふと、発車の際に森ほのほ君と中島に出逢つた。いづれも京都及び大阪へ帰るのである。

陰つて涼しく、十一時十八分熱海駅着、迎ひの自動車に乘せられて樋口旅館に入る。三階の三十四番、八畳と四畳の二間。山と海とに面して眺望はよい。

入浴。昼餐は茶碗もり、まぐろの海苔かけ、あなごの蒲焼。

額田、大村、佐久間、富塚にハガキを書く。それを投函ながら午後一時頃から散歩。いづこも同じことであるが、こゝらの湯治場も秋涼の季節に入つて余り賑はしくないやうである。

絵ハガキを買つて、二時頃帰宿。田郷君、黒川君、岸井、山下、三橋、高「野」橋、岡田等に発信。

少しく頭痛をおぼえたので、寝転んで読書。晚餐は枕盛り、鳥そぼろ、セイゴの塩焼。

六時過る頃から再び散歩。七時頃帰宿、入浴。

読書。八時半「入浴」就寝。浪の音が枕にひびく。

寂しいとは云つても、湯河原とは違つて、こゝらは町の中央であるので、自動車の音、唄の声、夜の更けるまで絶えない。

九日（水曜）陰

午前六時半起床。今朝も涼しい。

朝食はワカメの味噌汁、蒲鉾、玉子豆腐。

池田、豊田、河野の諸君、鈴木余志子、木村富子等にハガキをかき、それを投函ながら十時頃から散歩。秋のせみか、海の音が高い。やがて雨がはら／＼と降り出したので、帰宿。雨はまた晴れる。

おい等は今朝たづねて来る筈であつたが、午前中には来なかつた。

午餐は蝦の具足煮、うま煮。空は晴れて又陰る。

けふも何だか頭が重いので、寝ころんで読書。

晚餐はまぐろの刺身、鶏の枕もり。食後、再び散歩。晩「地」物の時計掛けなどを買つて来る。湯河原会館に郵便を發して、来る十一日午後に行くと通知して置く。

七時ごろ帰宿。入浴。八時就寝。夜半に強い風が吹き出して、幾たびか眼を醒まされた。

十日（木曜）驟雨、晴

午前六時起床。入浴。

朝食は蜆汁、鰯の干魚、ゆばの煮付。七時頃から八時半頃まで「■」の間に驟雨二回。やがて晴れて暑くなる。

九時半頃におえいとおとくが来た。昨日は東京大雨、

それがために出発を見合せたのであるといふ。

おえい等は入浴。十時頃から三人打ち連れて散歩。例のごとく金色夜叉の碑のあたりを一巡。所々の店へ入込んで土産物を買ひ、十二時ごろから帰宿。頗る暑いのに閉口した。

昼餐は茶碗もり、まぐろの刺身、鳥そぼろ。

二時頃からおえい等を案内して、再び海岸へ散歩に出る。けふは波が高いので、船は一艘も見えなかつた。幾代旅館の喫茶部で冷し紅茶と果物を喫し、四時ごろ帰宿。この時にも又もや土産物を買つた。

一同再び入浴。みやげ物が多いので、その荷作りがなか／＼面倒である。晚餐は碗もり、口取り、蝦の玉子揚げ。

おえい等は六時三十分発の列車で帰京。額田と佐久間から返書が来た。

読書。七時半ごろ入浴。夜に入るも蒸暑く、とても寝られさうもないので、硝子「■」〈戸〉をあけ放して縁側に出で、十二時頃まで起きてゐた。更けても、そよとの風も無い。寢床へ這入つてもおち／＼眠られなかつた。

十一日（金曜）晴

午前五時起床。入浴。暑いせみか、どの座敷の客もみな早く起きてゐた。今朝も蒸暑い。

朝餐は豆腐の味噌汁、鰯の干もの、大根の煮付。食後、散歩。帰宿の後は寝ころんで読書。なにしろ暑いには閉口である。

午餐は鮑の酢の物、鶏肉シチウ。午後から湯河原へ転ずる筈であるので、その支度をする。大村から郵書が来た。

午後二時廿分の上り列車に乗込んで、熱海出発、二時廿七分湯河原着。宿の春さんに迎へられて、湯河原会館に入る。座敷は十八番、受持の女中はおてるさん。どの人もみな馴染であるので、こゝへ来ると自分の家へ歸つたやうな気がする。氣候も熱海にくらべると余ほど涼しい。

入浴。宿からは茶受けの鮓をくれた。宿の話によると、岸井の父と母は先日来こゝに滞在、今朝帰京したといふ。半日の違ひで残念であつた。

額田、大村、岸井、佐久間、高橋、おえい、森部に湯河原着の通知を発送。それを投函ながら「二」五時頃から散歩。

晚餐は碗もり、蝦の甲良焼、コロツケー。

読書。夜の風も涼しい。やはり熱海とは海と山との相違がある。殊に私には海よりも山の方がよい。

九時ごろ入浴。九時半就寝。今夜は安眠。

十二日（土曜）晴、陰

午前六時起床。入浴。

朝食は菜の味噌汁、カマスの干魚、唐茄子の煮付。

講談社から私の経歴著書等を問合せて来たので、返書。

加納野梅君と花田ひで子から郵書が来たので、返書。額

田と三橋にも郵書。

読書。とき／＼に陰つて、風が吹き出す。けふは二百

廿日の厄日であると、宿の者は云ふ。

昼餐は椀もり、あなごの蒲焼、ボイルド・ロブスター。

山下から郵書が来たので、返書。東京の自宅から前橋

の「三橋」藤嶋君の郵書と三橋の原稿とを回送して来た

ので、いづれも返書。それを投函ながら、午後二時頃か

ら散歩。三時ごろ帰宿。やがて雨が降り出した。

宿からは茶受けに冷し素麵をくれた。三橋の原稿「フ

ランスの演劇」を訂正。雨また止む。

読書。雨は止んだが、をり／＼に陰つて強い風が吹く。

なんとなく暴れ模様である。

晚餐は椀もり、鮎の田楽、野菜煮。

暮れて風はいよ／＼強い。読書に倦んで俳句など作る。

九時ごろ入浴。十時就寝。

十三日（日曜）晴

午前六時起床。入浴。

朝食はズイキの味噌汁、蒲鉾、菜の玉子とち。

新聞をみると、昨日の二百廿日は九州四国中国に台風襲来し、東京もその余波を受けて強風が吹き暴れたといふ。

読書。日曜だけに宿にもなか／＼客が多い。

昼餐は椀もり、鳥サラダ、イタリア・フキツシュ。午

後から暑くなる。

額田、高橋、三橋、森部から返書が来た。二時頃から

散歩。三時ごろ帰宿。少しく汗になったので、入浴。宿

からは茶受けに薩摩芋の飴煮をくれた。

読書。晚餐は椀もり、蝦の具足煮、鳥サラダ。

九時ごろ入浴。宿の女中の話によると、これまで帳場

を担任してゐた藤沢君は今月かぎりで辞職するといふ。

当人からはまだ何の話も聞かないが、久しい馴染が去る

といふのは何だか寂しく感じられる。

十時就寝。

十四日（月曜）晴、陰

午前七時起床。入浴。

朝食は大根の味噌汁、鰯の干魚、菜のひたし物。

いつもの十五番の座敷が明いたので、朝から引移る。

向うの山では頻りに日暮らしが鳴く。

読書に倦んで俳句など作る。昼餐は椀もり、蝦の玉子

とぢ、カツレツ。

額田、岸井、佐久間とおえいから返書が来た。

一時頃から散歩。二時頃帰宿。春さんからも藤沢君辞職の話を聞く。宿からは茶受けに温泉饅頭をくれた。

読書。晚餐は椀もり、鯛とまぐろの刺身、鯛のあげもの。

六時頃から散歩。暮れて涼しくなる。七時頃から雨。

読書。十八番と違つて、こゝの座敷へは頻りに虫が飛び込む。

八時頃入浴。九時頃から下の応接室へ新聞を読みにくくと、新しい帳場に番頭が居合せて話しかける。他の浴客も二人来あはせて雑談。

十時頃から座敷へ戻つて就寝。

十五日（火曜）雨、陰

午前六時起床。入浴。細雨。

昨夜からよほど涼しくなつたので、今朝は浴衣の上に袷羽織をかさねる。朝食は豆腐の味噌汁、オムレツ、唐茄子の煮付。けふは十五日であるといふので、赤の飯を食はせる。

帳場の藤沢君が白紙二葉を持参して、揮毫をたのんで行く。その一葉は駐在所の巡査に頼まれたのであるといふ。昼餐は椀もり、月見そばろ、蝦のトマト煮。

松竹の黒川君から郵書が来て、猿之助が来月大阪へ乗込むに付、「水滸伝」を上演したいと云ひ、併せて歌舞伎座の十一月狂言を何か考へてくれぬかと云ふ。猿之助の件は承諾。歌舞伎座の件は昨今の健康状態では何分受合ひかねると云ふ返書を送る。

二時半ごろ散歩。三時過る頃帰宅。雨やんで陰る。

読書。五時頃に東京から三橋が来た。三橋は白木屋の菓子折を持参。

晚餐は椀盛、蝦フライ、野菜煮。燈下で三橋と語る。へ番頭の春さんがメロンを呉れた。ゝ

九時ごろ入浴。十時就寝。三橋は泊る。

十六日（水曜）陰

午前六時起床。入浴。

朝食は葱の味噌汁、鰯の干魚、菜のひたし物。

十時半頃から三橋と散歩。昼餐は椀もり、アナゴの蒲焼、蝦の具足煮。をりゝに細雨。

午後三時半頃から再び散歩。大倉公園の山に登る。

森部から郵書が来たので、返書。晚餐は椀もり、ポイロブスター、野菜煮。九時ごろ入浴。

九時四十五分ごろ地震、どの客もおどろいて廊下に出た。

十時就寝。三橋は今夜も泊る。

十七日（木曜）雨、陰

午前六時起床。雨。入浴。

朝食はワカメの味噌汁、蒲鉾、菜の玉子とち。

三橋は九時三十二分発の列車で帰京、みやげにきび餅を持たせて遣る。

読書。昼餐は松茸の土瓶むし、ハモの蒲焼、野菜煮。

雨は晴れて又陰る。午後一時半ごろ散歩。帰つて再び読書。宿からは団子をくれた。

四時半ごろ再び散歩。永田商店にて挽地物数点をかひ、日の出屋で喫茶。きび餅わさび餅を明日中にとじて呉れるやうに頼む。六時ごろ帰宿。

晚餐は鳥スープ、チキンライス。

九時入浴。九時半就寝。

十八日（金曜）晴、陰

午前六時起床。入浴。

朝食は豆腐の味噌汁、オムレツ、里芋の煮付。

読書。十時半頃から散歩。十一時過る頃帰宿。昼餐は梔もり、蝦の金ぶら、野菜サラダ。

額田と山下から郵書が来たので、十九日帰京の返書。

午後二時頃から再び散歩。三時半ごろ帰宿。宿から雑煮餅をくれた。私が帰宿する少し前に又もや地震があったといふ。

晚餐は梔もり、親子焼、ロールキャベツ。日の出屋から土産の菓子類をとどけて来た。

読書。九時ごろ入浴。十時就寝。夜半に雨の音。

十九日（土曜）晴、陰

午前六時起床。入浴。

朝食は豆腐の味噌汁、半べんの付焼、菜のひたし物。

九時三十二分発の列車で帰京。春さんは勿論、前支配人の「西」〈藤〉沢君も停車場まで送つて来た。藤沢君とは久しい馴染だけに、何となく名残惜しいやうな気がする。

停車場に貼り出されてある新聞号外を見ると、奉天で日本軍隊と支那軍隊が衝突したといふ。おそらく大事には至るまいと思はれるが、兎もかくも困つたことである。十一時三十八分東京駅着。森部に迎へられて帰宅。

留守中に小川君から鉢植の菊をくれたので、その返礼として湯河原のみやげ物を持たせて遣る。留守中に郵書が三十通ほど到来してゐるので、取りあへず、その返信五六通をかく。

四時頃に岸井が来て、舞台十月号の再校は今夜で全部終了するといひ、一時間ほど話してゆく。

六時半ごろ入浴。姉とおえいは湯河原のみやげを携へて小林君方を訪問、小林の細君が信州から帰京した為で

ある。細君はやゝ快方に向つたといふ。

七時頃に額田が来て、八時頃まで語る。そのあひだに細雨、又やむ。

夕刊をみると、十八日の夜十時半頃、支那兵の一部が奉天北方の鉄道線路を破壊し、わが守備兵がこれを制止せんとするや、支那兵続々来襲、遂に彼我砲火を交へる事となつたが、午前三時わが軍は奉天城を占領、それに先づつて北大營をも占領、敵はことごとく退却したといふ。この衝突は満洲主脳部の意思ではなく、一部将校等の突発的暴動と見らるゝのであるから、彼等を掃蕩した以上、最早大事にも至るまいかと察せられる。

読書。十一時就寝。

二十日（日曜）晴（八十度）

午前八時起床。おえいは湯河原みやげを携へて丸尾君方を訪問。

留守中に到来の郵便の返信十一通をかく。旅行から帰ると、いつでもこれが煩さい。少しく下痢の気味であるので、服薬。

石井の戯曲「百萬石の墨付」を編集、これで十一月号の戯曲編集を終る。十一月号からは「舞台」の定価をひき上げて、毎号五十銭とするに付、戯曲欄も従来よりは拡張したのである。

三時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。六時半ごろ入浴。満洲方面にも格別の変化を見ないやうである。

読書。十一時就寝。

二十一日（月曜）晴（七十八度）

午前八時起床。

けふも留守中の郵便の返信六通をかく。湯河原会館の藤沢君に「頼まれた白紙二枚に揮毫、返送。」十一時廿分頃、庭に出て花壇をながめてみると、俄に激震、おどろいて門外へ出ると、近所の人々もみな表へ出て来た。近來の激震である。

「水滸伝雑談」三枚をかいて、大阪の雑誌「道頓堀」へ郵送。

二時過ぎる頃に山下が来て話してゐると、あとから額田も来て彼岸の団子をくれた。二人は四時頃まで話してゆく。

中野から郵便が来て、身体検査の結果、召集免除となり、廿六七日ごろ帰京するといふ。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。

夕刊をみると、けふの地震は荒川上流の仙元山が震源地で、埼玉、群馬、茨城の各地方に被害が多かつたといふ。なにしろ地震が続発するのは困つたものである。

英国では向ふ六ヶ月間、金貨制廃止を發布したといふ。
世界各国みな多事である。

読書。十時半就寝。

二十二日（火曜）晴（七十八度）

午前八時起床。

昨日の地震に就て、埼玉県の清水、細浦、松崎、高沢の人々に見舞状を発送。

十時半頃に渡辺君が来て、自分の特許を得た渡辺式印刷器をいよ／＼売出すに付、その広告文を添削してくれといひ、四十分ほど話してゆく。

邦之助の三十五日相当するので、おえいは午後から横浜へ出てゆく。日中はやはり暑い。

山崎から郵書が来たので、返書。前橋の藤嶋君に地震見舞の郵書を送る。中島の喜劇「港の町の出来事」を編集。

六時頃におえい帰宅。七時ごろ入浴。それから散歩。読書。月は明るく、庭には虫の声。夜はすっかり秋らしくなつた。

十時半就寝。

二十三日（水曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

随筆「汽車が忌になつた」六枚をかいて、文芸春秋社に郵送。

読書。晚餐後、散歩。

七時過るころ入浴。読書。今夜も月が明るい。

十時就寝。

二十四日（木曜）晴（七十八度）

午前八時起床。けふは秋季皇霊祭。

姉とおえいは青山へ墓参にゆく。浦和の清水君から返書が来て、同地方の震災は新聞記事に誇張あり、いづ方も差したる被害はないといふ。前橋の藤嶋君も同様の返書が来た。

中島の喜劇を編集し終る。恰も中島から嫩会の会費を送つて来たので、返書。難波幸子から地震見舞の郵書が来たので、返書。

午後二時頃に菅野君が彼岸の鮎を持参。三時過る頃まで話してゆく。菅野君は古本屋を始めたといふので、私の著書十部を寄贈。

おえいからも熱海みやげの挽地物を贈る。

おえいは四時半頃から歌舞伎座見物に出てゆく。五時過る頃に黒川君が来て「狐の戯れ」と「小栗栖の長兵衛」の上演料をくれ、七時頃まで話してゆく。

横浜の高橋から郵書が来た。一昨日おえいが小島家訪問の帰途、高橋方へ挨拶へ廻はつたので、その礼状をよこしたのである。これにも返書。

八時ごろ入浴。読書。おえいは十時半ごろ帰宅。十一時就寝。

二十五日（金曜）晴（七十五度）

午前八時起床。

細浦から地震見舞の礼状が来た。小林からも郵書が来て、脚気のために今後の嫩会は欠席するといふ。森部の兄から地震見舞の郵書が来たので、返書。

けふは快晴。十一時頃から神田を散歩。古本と原稿紙をかひ、九段坂上のカフェーで喫茶。一時半ごろ帰宅。留守中に前橋の藤嶋君が来たといふ。

読書。鈴木千枝雄から郵書が来て、今夜の嫩会は欠席するといふ。

午後六時頃に大村が先づ来た。つゞいて富塚、岸井、岡田、山下、佐久間、額田が来た。他はみな欠席。例に依て劇談、雑談。十時散会。

それから入浴。十一時半就寝。

二十六日（土曜）雨（七十六度）

午前八時起床。

「舞台」十月号を高橋、東儀、清水、難波、林、原田の諸家へ発送。

十時半頃からおえいと森部同道で銀座の松屋へゆき、小林君と額田へ贈るべき小島三十五日の配り物を買ふ。大村も一兩日中に巢鴨宮下町四番地へ移転するといふので、その祝い物も買ひ、他に雑品数点を買つて、食堂で昼餐。一時ごろ帰宅。

額田が昨夜長田君の戯曲「伽羅奢姫」を持参したので、一読。

今夜は十五夜であるといふので、床の間に薄を生けさせたが、終日雨やまず、暮れていよ／＼強くなる。明月どころか、暴れ模様である。

六時半入浴。読書。十時就寝。

夜半豪雨、午前三時ごろ大雷。

二十七日（日曜）雨、晴（八十度）

午前八時起床。細雨、やがて晴れる。

読書。午後、森部を額田方へつかはして、小島の配り物を届けさせる。

三橋が父の久美君同道で来訪。久美君は大審院検事である。改めて三橋を私の門下に加へてくれとの依頼あり。午後一時過る頃まで話してゆく。久美君はみやげの品々をくれた。

隣家の近藤君が病氣中であるといふので、おえいは菓子折をたづさへて見舞にゆく。おえいは更に小島の配り物を紀尾井町の小林君方へ持参。小林君も感冒で寝てゐたさうである。

二時半頃におさだが子供をつれて来て、野菜類をくれた。

四時頃に森部帰宅。額田方からコスモスを貰つて来たので、庭に栽えさせる。大雨後、俄に暑くなる。

夕刊をみると、昨夜は十七年ぶりの大雨で、東京府下だけでも六万三千余戸の浸水をみたといふ。

晚餐後、森部と二七不動の縁日にゆき、草花二種を買つて来た。

七時半ごろ入浴。今夜は晴れて明るい月が出た。

読書。十時半就寝。

二十八日（月曜）晴（八十度）

午前八時起床。

読書。十二時頃に佐久間が来て、先頃の病氣見舞の返礼として白葡萄酒をくれ、三十分ほど話してゆく。

それから遅い午飯をくつてゐると、中野が来て一昨夜帰京したといひ、大阪のみやげを呉れた。つゞいて富塚の父「が」健太郎君が来て菓子をくれた。中野は二時半頃に去り、富塚君は三時頃まで話してゆく。

けふも暑い。中野が松竹の黒川君に逢つたところ、大村の「萩の朝霧」を中村扇雀等が京都座で上演したいと云ふ話があつたといふので、取りあへず其旨を大村に通知。

辻山春子の戯曲「残る香」をよむ。けふも午前と午後に可なりの地震があつた。

七時ごろ入浴。夕刊をみると、今朝十時頃、南京政府の外交部長王正廷氏が学生の暴力団に襲撃せられて、重傷を負つたといふ。

読書。十時就寝。

二十九日（火曜）陰、雨（八十度）

午前八時起床。

大村は一昨日小石川宮下町へ移転した筈であるので、森部に命じて祝ひ物を持たせて遣る。

おえいは感冒の気味であるといふので、一旦起きて又寝る。東南の風吹き暴れて蒸暑く、頗る不愉快の日である。

辻山の戯曲を編集し終り、更に石川岩雄君の戯曲「変態者公園」を編集。いづれも「舞台」十二月号の原稿である。

午後二時頃から驟雨、一時は暴風雨になるかと危ぶまれたが、四時頃から止む。

文芸春秋社の武内君から郵書が来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。夕から風やんで陰る。

十時半就寝。

昭和六年十月

一日（木曜）晴、陰（七十三度）

午前八時起床。

高橋と難波から「舞台」の礼状が来た。

森部とおとくは応接間を掃除。すべて冬の設備に改める。

午後には原稿四枚をかく。

晚餐後、散歩。七時ごろに入浴。

読書。十時就寝。

二日（金曜）陰（七十二度）

午前八時起床。

大村から代筆のハガキが来て、廿九日から神田仲猿楽町の百瀬医院に入院中。病気は鮑の中毒であるといふ。

取りあへず見舞状を発送。

額田にも右の次第を通知。

早稲田の真川文雄君が来て、戯曲の添削を求め、一時間ほど語る。

午後、森部に指図して、庭の柳、枇杷、槿、青梧などを栽えかへる。樹木がおひ／＼に繁茂したるために、その位置を変更したる必要を生じたのである。それがために、二時間ほどを費した。有山麓園君が来た。

三十日（水曜）陰、晴（七十二度）

午前八時起床。

長田君に郵書、その作「伽羅奢」を寄稿してくれた礼状である。おとくの兄から時候見舞の郵書が来たので、返書。

おえいは今日も寝たり起きたりしてゐる。気候もよほど涼しくなる。

午後から小説を起稿、オール読物号の原稿である。三時頃までに四枚。

三時半ごろに大関柊郎君が来て、一時間ほど話してゆく。晚餐後、散歩。

七時ごろ入浴。大阪の中島から戯曲の原稿を送つて来たので、一読。

七時半頃に鈴木千枝雄が来て、ふたば会の会費をとげ、九時頃まで語る。

読書。十時半就寝。

本月は旅行等で何にも仕事をしなかつた。「舞台」の原稿の編集だけである。

（翻刻担当…阿部菜々香）

風呂敷と手拭地を小包み便にして、静岡の山本君へ発送。あはせて郵書。

読書。七時から入浴。十時就寝。

三日（土曜）陰（七十三度）

午前二時半ごろ強震。午前八時起床。

「シネマ王国」の山村君が来て、劇界不振について私の談話を聴いてゆく。

原稿をかきつけて、夕方までに十枚。晚餐後、散歩。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

四日（日曜）雨（七十二度）

午前八時起床。

山梨の河野君から郵書が来たので、返書。長田君からも返書が来た。

原稿を書きつけて、夕方までに十四枚。

終日雨やまず、折角の日曜もさん／＼であつた。

七時ごろ入浴。読書。額田から郵書が来て、さつそく

大村の見舞にゆくといふ。

十時半就寝。

五日（月曜）雨、晴、陰（七十二度）

午前八時起床

今朝も細雨。十時頃から晴れて又陰る。

文芸春秋社の武内君が来て、オール読物号の稿料をくれ、一時間ほど話してゆく。

原稿をかきつけて、夕方までに八枚。おえいは今日も寝たり起きたりしてゐる。

帝劇から七日の入場券二枚をとめて来たので、その一枚を山下に郵送。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

六日（火曜）陰、雨、陰（七十度）

午前八時起床。十時頃から雨。

山上から松茸を送つて来たので、返書。木村毅君から帰朝の通知があつたので、返書。大村から其後何のたよりも無いので、重ねて見舞状を送る。

鈴木余志子の名を以て大阪毎日の代理部から松茸一籠を送つて来た。隣家の近藤君からも松茸をくれた。

諸方から同時に松茸を貰つたので、大野、浦岡、中川、小川の諸家へ分配。

管野、植松の両家へも小包み便にして発送。

午後は原稿四枚をかく。午後二時頃から晴れて又陰る。

四時頃に黒川君が来て「水滸伝」と「皿屋敷」の上演料をくれ、一時間ほど話してゐるところへ、額田がきた。額田の話によると、大村は業外の重態で入院以来絶食、まだ当分は退院おぼつかないであらうといふ。どうも困つたものである。

額田は六時頃に去る。黒川君もつゞいて帰る。

七時半入浴。大阪の中島から戯曲を送つて来た「。」ので、一読。

読書。十時半就寝。

七日（水曜）雨（七十六度）

午前八時半起床。

おえいは依然として気分がよくないので、今朝は吉岡医師の診察を受けにゆく。例の持病で、血圧二百四十に上つてゐるさうである。帰つて直ぐに臥床。

原稿四枚をかく。あはせて四十二枚。題は「鰻に呪はれた男」

中野、佐久間、岸井、岡田、富塚、鈴木に郵書を發して、大村の病状を通知。

四時頃から帝劇見物にゆく。山下はもう来てゐた。第一「頼山陽」第二「番町皿屋敷」まで見物して、八時頃帰宅。幸に雨はやんでゐた。

帝劇は不入。聞くとところによれば、こゝはまだ成績の

よい方で、他の劇場は更に甚しい不入であるといふ。書入れ月の十月がこの有様では困つたものである。又景氣がいよ／＼深刻になつたとみえる。

入浴。十時半就寝。

夜半大雨。午前三時半ごろ大雷。氣候は異常に蒸暑く、暁まで殆ど安眠できなかつた。

八日（木曜）晴（八十一度）

午前九時半起床。

朝は細雨、やがて晴れて暑くなる。不眠と暑氣のために頭がガン／＼痛む。額田から郵書が来たので、返書。午後一時過る頃に、山下が来ておえい見舞の菓子をくれ、二時過る頃まで話してゆく。

夕方から頭の痛みも少しく止む。五時（半）頃に中野が来て、七時頃まで話してゆく。中野は諸方の仕事を引受けて、頗る多忙であるといふ。

七時半入浴。読書。十時半就寝。

九日（金曜）雨、陰（七十六度）

午前八時半起床。朝は晴、忽ちに雨。

おえいは今朝も吉岡医師へゆく。血圧は更に二百五十に上つてゐるといふ。

東京日日新聞文芸欄の原稿七枚をかいて郵送。題は

「劇界不振のこと」午後より雨やんで陰る。

午後一時過る頃に額田の細君がおえいの見舞に來た。細君は大村へも見舞つて來たが、大村はおひ／＼快方に向つて、昨日から重湯を啜るやうになつたといふ。先づは結構である。

神戸の森田の宅から松茸一箱を送つてきたので、一町目の畑君方と永田理髮店へ分配。菅野君と上松から松茸の礼状が來た。

蒲田の渡辺君から郵書が來て、邦之介の遺骨埋葬は來る土日午後二時谷中墓地に於て執行するといふ。おえいは何分病中であるので、不参の返書を出して置く。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寢。又もや雨。

十日（土曜）風雨（六十八度）

午前九時起床。曉方から風雨。

神戸の森田方へ礼状を發送。三橋と中島から原稿を郵送して來たので、いづれも返書。

佐久間から郵書が來て、祖母は遂に八日午後死去したといふので、取りあへず悔み状を發送して置く。

十時頃から風雨がやうやく衰へたが、氣候は俄に涼しくなる。

星野君から私の俳句春夏秋冬各十句をかいてくれと云つて來たので、都合四十句をかいて送る。いづれも名

吟ではない。

三橋の原稿を訂正して、中野に發送。五時半頃に富塚が來た。

大村の見舞に行つて來たが、おひ／＼順調、一週間の後には退院出来るであらうと云ひ、三十分余り話してゆく。

額田から郵書が來た。七時ごろ入浴。読書。十時半就寢。

十一日（日曜）晴、陰（七十度）

午後八時半起床。けふから袷を着る。

おとくの実家から栗を送つて來たので、返書。

けふは邦之介納骨の日であるので、おえいの代理として森部に供へ物を持たせに遣る。森部は午後一時頃から出てゆく。

文芸春秋社出版部の田辺君が來て、來年の文芸自由日記に私の写真と筆跡を掲載したいといふので、色紙二枚に揮毫。

町内の永田理髮店へ髪を刈りにゆく。

岡田の戯曲「その大節季」を編集。晚餐後に、散歩。六時半頃に森部帰宅。つゞいて林二九太君が來て、三十分ほど話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寢。

十二日（月曜）晴、陰（六十八度）

午前八時起床。今朝は快晴。

佐久間の祖母告別式に付、森部を代理に出してやる。

甲府巡業中の市川小太夫から甲州葡萄一箱を送つて来た。

午後、森部同道で大村の見舞にゆく。神田仲猿楽町の百瀬医院である。病室へ通されて十五分ほど面談、大村も案外に容態よろしく、この分では遠からず退院出来さうに思はれた。

帰途、森部と三省堂の食堂で喫茶。本屋などをひやかして二時半ごろ帰宅すると、渡部のおしげと上松のおすがおいの見舞に来てゐた。

姉の話によると、紀尾井町の小林君も臥床中であるといふので、見舞にゆくと、胃腸を害して碌々に食事も摂れぬとの事であつた。細君もリウマチスで寝たり起きたりしてゐる上に、若い女中はぼんやりしてゐて役に立たず、定めて不自由の事と察せられた。三十分ほど話して帰る。

大阪の小川君から松茸一籠を送つて来た。直ぐに礼状を発送。

六時頃に額田が来て、一時間あまり話してゆく。それから入浴。

夕より陰る。今夜は会式で団扇太鼓の音が遠くきこえ

る。

読書。十時半就寝。午前二時頃から雨の音。

十三日（火曜）雨（六十四度）

午前九時起床。風まじりの雨。

岡田の戯曲を編集。氣候が俄に冬めいて来たので、けふは手炙りの火鉢を出した。

午後三時頃に俵木が自作の小説を持参。三十分あまり話してゆく。

夕刊をみると、九州地方は台風が襲来したといふ。

六時半ごろ入浴。読書。暮れて風雨いよ／＼強くなる。十時半就寝。

十四日（水曜）晴（七十五度）

午後八時起床。

小田切医師のもとへ松茸を持たせてやる。

額田から郵書が来て、阿佐ヶ谷に控家に適する貸家があるといふ。

おえいも私も近来多病、さりとて東京を離れて転地するのにも不便であるので、郊外に相当の貸家を借受け、控家として時々に出養生することにしては如何といふ相談あり。医師もそれを勧めるので、先日額田にも話したところ、額田も賛成、直ぐに貸家を見つけて通知してき

たのである。いづれ近日へ一見にゆくといふ返書を出して置く。

十二時半頃に津沢の寿子がおえいの病氣見舞に来了。

二時頃に寿子が帰ると、入れちがひに渡辺のおしげと小島の良子が来た。良子は四十九日の配り物をくれ、四時頃まで話してゆく。おえいが寝てゐるので、私が一々それらに接待。恰も京都日活の小川隆君から松茸を送つて来たので、おしげと良子に持たせて遣る。

〔五時頃に浜村君が来て、一時間ほど語る〕

晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

十五日（木曜）晴（七十二度）

午前八時起床。おえいは吉岡医師へゆく。

けふは私の誕辰であるので、例に依て赤の飯を焚き、森部、おとく、おさき等に祝儀の金をやる。

午後一時頃に山下が来たので、松茸をやる。山下は二時頃まで話してゆく。つゞいて山崎と佐久間が来た。一時間あまり語る。

つゞいて婦人公論の松本君が来て、来年中に一回でよいから五十枚ぐらゐの小説をかいとくれと云ひ、一時間ほど話してゆく。

晚餐後、散歩。横浜の高橋から風雨見舞の郵書が来た。

大村からも郵書が来て、昨日から床の上に起き直るやうになつたといふ。日活の小川君から「西南戦争」上演の謝礼を送つて来た。

七時入浴。読書。十時半就寝。

十六日（金曜）晴（七十度）

午前八時起床。

三宅周太郎君から郵書が来た。東京日日新聞に寄稿した私の小論文「演劇不振のこと」に就いてゐる。取りあえず返書。小川、高橋、大村にも返書。上松武雄から時候見舞の郵書が来たので、これにも返書。

午後、散歩ながら新宿の三越へゆき、雑品数点を買つて二時ごろ帰宅。その留守中に松竹の木村君が来たといふ。

三時頃に中野が来て、「舞台」原稿について相談、三十分ほどで去る。

読書。七時ごろ入浴。

十時半就寝。

十七日（土曜）晴、雨（七十五度）

午前九時起床。総長に川原が来て、菓子を呉れたさうである。

けふは神嘗祭。朝より快晴。

大村の使が来て、おえい見舞の果物をくれた。大村も四五日中に退院するといふ。

東京日日新聞から原稿料を送つて来たので、返書。大村にも礼状を発送。植木屋が菊を売りに来たので、二鉢を買つた。

午後から陰つて、三時頃から驟雨。折角の祭日で外出した人々は定めて難儀したことであらうと察せられた。岡田の戯曲「その大節季」を編集し終り、更に二宮君の戯曲「日曜日」を編集。

七時頃から入浴。一時的の驟雨と思ひの外、日暮れて雨いよ／＼烈しくなる。

読書。十時半就寝。今夜はめづらしく暁まで安眠した。

十八日（日曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

大村の戯曲「二代將軍の大奥」を編集。

午後、四谷を散歩。二時ごろ帰宅。

おえいは更に歯痛を發して、含嗽などする。

七時ごろ入浴。額田から郵便が来た。

読書。十時半就寝。

十九日（月曜）雨、陰（七十一度）

午前八時起床。

おえいは頻りに歯痛を訴へるので、小田切医師の来診を求めに遣る。天氣が悪いので、吉岡医師にも来診をたのむ。

十時頃に小田切医師来診。おえいの左の歯齦が腫れてゐるとて注射。

更に氷で冷罨法を施すことにする。

大村の戯曲を編集し終る。額田に返書。

午後二時頃に吉岡医師来診、おえいの血圧は又もや二百四十五に上つたといふ。

読書。七時ごろ入浴。

十時半就寝。

二十日（火曜）晴（六十八度）

午前八時起床。天氣快晴。氣候は俄に寒くなる。

九時半頃に小田切医師来診。

大村から郵便が来て、昨日退院したといふので、返書。

おえいの容態が依然としてゐるので、廿五日の嗽会例会は休会することゝし、その旨を各会員に通知。

十二時頃に真川文雄君が来て、二時頃まで話してゆく。

それから四谷を散歩。三時過るころ帰宅。その留守中に春陽堂の木呂子君と沢野君が来たといふ。

四時半頃に菅野君が来た。鉢植の万年青と田舎味噌をくれ、六時頃まで話してゆく。やがて又、額田が来て、

これも一時間あまり話してゆく。

八時頃入浴。頭が少しく痛む。

松竹から松茸をとどけて来たので、坂元医師と小林君方へ分配。

読書。十時半就寝。

二十一日（水曜）陰、雨（六十三度）

午前八時起床。

九時半頃に小田切医師来診。高橋からおえい病氣見舞の郵書が来たので、返書。

午後一時頃に中野夫婦と岸井が連れ立つて、おえいの見舞に来て、一時間ほど話してゆく。ついでに額田の細君が見舞に来て、これも一時間ほど語る。

三時半頃から雨。

読書。七時半ごろ入浴。

十時半就寝。

二十二日（木曜）晴（六十八度）

午前八時起床。靖国神社大祭で、早朝から花火の音。

九時頃に菅原寛君が来て、一時間ほど話してゆく。そのあひだに小田切医師来診。

午後、四谷を散歩。三時頃に吉岡医師来診。おえいの血圧は二百二十に降下したといふ。

四時頃に小林がおえいの見舞に来て、一時間ほど語る。小林の談によれば、拓務省もいよ／＼本年十二月かぎりで廃止に決したらしいと云ふ。就ては小林も返子を引き払つて上京、原稿生活に入る決心であるとして、種々の相談があつた。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十三日（金曜）晴（六十五度）

午前八時起床。けふも花火の音がきこえる。

九時半頃に額田が来て、一時間あまり語る。そのあひだに小田切医師来診、おえいの齒齦を切開したといふ。経師屋が障子を貼るかへに来た。おえい病中ではあるが、あまり寒くないうちに貼り換へることにしたのである。それがために家内は何かごた／＼する。

午後、四谷を散歩。一時ごろ帰宅。

二時過る頃に、佐久間がおえいの病氣見舞に来た。佐久間が帰ると、やがて山下が来た。

四時頃に春陽堂の木呂子君が来て、今後大衆文庫といふ叢書を発行するに付、わたしの「半七捕物帳」を編入したいと云ひ、一時間ほど話してゆく。不景氣の影響を受けて、どの出版業者も著るしく不況であるといふ。経師屋等は貼り換へを終つて、夕方に帰る。ついでに屏風の貼り換へをたのむ。

おとくとおさきは六時過る頃から靖国神社参詣にゆく。おえいは切開手術の後、齒痛は大いに薄らいだといふ。

七時ごろ入浴。読書。九時半頃におとく等帰宅。

今夜は陰暦の十三夜で、空には月光が冴えてゐる。庭には虫の声がきこえる。

十時半就寝。

二十四日（土曜）晴（六十四度）

午後八時起床。

読書。午後、四谷を散歩。二時ごろ帰宅。

二時半頃に鈴木千枝雄がおえいの見舞に来て、一時間

〈半〉ほど話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

二十五日（日曜）晴（六十五度）

午前八時起床。

十時半頃に吉岡医師来診。おえいの血圧二百十に降下。

大村から嫩会十月分の会費をとめて来たので、返書。

午後、森部と日比谷公園の傍にある百貨店美松へゆく。

去廿日から新に開店したので見物の客が多く、頗る混雑してゐた。一見したところでは、他の百貨店同様で、別

に特色もないやうである。

それから銀座へ出て、三城の食堂で喫茶。更に松屋、伊東屋などをひやかして、三時ごろ帰宅。留守中に富塚がおえいの見舞に來たといふ。

富塚は大磯の半ぺんを呉れたので、隣家の近藤君方へ分配。

読書。姉は平河天神の縁日へ行つて、菊二株を買つて來た。

七時ごろ入浴。おえいは医師の許しを得て、今夜久しぶりで入浴したが、浴後動悸がいつまでも鎮まらぬといふので、森部を吉岡氏方へつかはして頓服薬を貰ひ、胸部に冷罨法を施すと、九時頃から漸く静まつて安眠した。やはり入浴が悪かつたとみえる。

十時半ごろ就寝。をり／＼に細雨。

二十六日（月曜）陰、雨（六十五度）

午前八時起床。

陰晴定まらず、をり／＼に雨。時雨めいた日である。

湯河原会館の塩沢君から干鰯を送つて來たので、返書。

終日読書。昨夜安眠しなかつたせみか、頭が重い。

三時頃に大黒活版所から舞台十一月号の製本をとめて來たので、清水、原田、林、高橋、東儀、難波の諸家へ発送。

七時ごろ入浴。読書。今夜は嫩会員が白十字に集まる筈であるが、あひにくの雨。

十時半就寝。

二十七日（火曜）陰（六十八度）

午前七時半起床。

森部に命じて、小田切医師のもとへ鶏卵を持たせて遣る。

大阪朝日新聞社の同情週間係から頼まれた色紙五枚と短尺五枚に俳句を揮毫。朝鮮人に頼まれた短尺五枚にも揮毫。

午後一時ごろ四谷を散歩。二時半ごろ帰宅。

福島 of 石井の戯曲「関東五郎」を一読、その批評を添へて返送。

読書。をり／＼に細雨。

七時ごろ入浴。読書。額田から昨夜の白十字会の報告が来た。大平野虹君からおでん屋を開いたといふ通知が来た。

十時半就寝。

二十八日（水曜）晴（六十八度）

午前八時起床。快晴。

読書。午後、四谷を散歩。ほてい屋百貨店を一覧。

二時ごろ帰宅すると、（渡辺の）愛子が津沢の子供をつれて、おえいの見舞に来てゐた。

二時半頃に武田万兵衛君が崔永祚君同道で来訪、京山華千代は目下明治座に出演中であるといひ、一時間あまり話してゆく。

つづいて佐久間が来て、舞台十二月号の戯曲原稿をうけ取り、三十分ほど語る。

又そのあとへ木村君が来て、大森痴雪君からの依頼であるが、加藤京子といふ婦人を私の門下に加へてくれと云ひ、四十分ほど話してゆく。木村君も各劇場の不況を嘆じてゐた。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（木曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。今朝は少しく寒い。

十時頃に小林蹴月君が来て、昨日信州から帰京したといひ、土産物の品々をくれ、一時間ほど話してゆく。その際、短尺六枚の揮毫をたのまれたので、直ぐに揮毫。午後、四谷を散歩。帰つて読書。髪刈りにゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三十日（金曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。

十時頃から森部同道で、阿佐ヶ谷の額田方を訪問。その途中、四谷の有明屋で土産の佃煮を買つてゆく。

額田在宅。佐久間も来てゐた。暫時雑談の後、近所の貸家を見にゆく、そこには木原といふ予備中将が住んでゐるのであるが、木原氏は新築の自邸落成して、十一月末には移転するので、私がそのあとを借受けようかと思ふのである。木原氏は一々案内して家内を残らず見せてくれた。間取り等は悪くないが、建物が少し古い。

十二時頃に同家を辞して、額田方に帰る。けふは天氣が好いので、これから井の頭公園を散歩することゝし、佐久間と森部は同行、額田は仕事の都合で不参。

阿佐ヶ谷駅から電車に乗つて、吉祥寺駅下車。徒歩して公園に入り、茶店に休息して栗めしを食つたが、あまり旨くなかつた。

私は久しぶりで井の頭へ来たのであるが、園内も頗る整頓して、何は無くとも自然の風趣に富んでゐた。池畔をめぐつて、再び茶店に休憩。みやげの玩具や絵ハガキを買つて、吉祥寺駅から上り電車に乗込む。佐久間は再び額田方へ立寄るといふので、阿佐ヶ谷で別れ、森部と私は四谷駅へで下車、四時過るころ帰宅。

留守中に大阪の中島と文芸春秋社の武内君が来たといふ。

吉祥寺へ行く途中、佐久間は私に向つて、若し控家を

借りる積りならばいつそ新築してはどうか、自分の家では渋谷に恰好の土地を所有してゐるといふ。それは西郷家の分譲地をかひ受けたもので、百四十坪余、周囲も閑静である。玉川電車からも遠くないといふ。種々の条件が好都合であるらしいので、兎もかくも近日一見しようとして約束して別れた。

帰宅後、おえいに相談すると、若しその場所が恰好ならば、佐久間の云ふ通りにそれを借受けて、いつそ新築したほうがよいかも知れないと云ふ。

七時ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

三十一日（土曜）晴（六十五度）

午前八時起床。

十時頃に中島が来て、いよ／＼大阪を引揚げて上京したといふ。それへ日活の小川隆君が来た。小川君は四十分ほど話して去り、中島は一時間ほど話してゆく。

午頃から四谷を散歩。一時半ごろ帰宅。

二時頃に三橋が来て話してゐる処へ、山梨の河野君が来て土産の栗をくれ、四十分余り話してゆく。三橋はあとに残つて三時半頃に去る。

読書。大阪の堀から自作の戯曲を送つて来た。

七時頃入浴。十時半就寝。

本月の仕事は鰻に呪はれた男（オール読物号、四十二枚）ほかに舞台原稿の編集など。

（翻刻担当…今藤晃裕）

昭和六年十一月

一日（日曜）晴（六十五度）

午前七時起床。

読書。十一時半頃に大村が来て、病氣全快の祝物をくれ、併せておえい病氣見舞の菓子をくれ、三十分ほど話してゆく。大村も外出が出来るやうになつて、先づは結構である。

一時頃から四谷を散歩。額田から自作の戯曲「あの道この道」を送つて来たので、一読。佐久間に郵書を渡して、明日午前十時頃に控家の敷地を見にゆくと云ひ送る。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二日（月曜）晴（六十八度）

午前八時起床。

午前九時四十分頃から森部同道で渋谷の佐久間方へ出てゆく。祖父も居合せて控家敷地の話があり。すべて佐久間のいふ通りで、地代等も思召次第でよいと云ふことであつた。それでは兎も角も一見しようとして、佐久間と森部と三人づれで出る。

場所は大坂上停留場から左折して七八町、西郷家の分譲地である。これはもう渋谷でなく、荏原郡に属してゐて、上目黒字日向といふところである。佐久間家から職人

を入れて、石垣の上に土坂を築き、地あげの工事中であった。東向の地所で百四五十坪。目黒川の方面へ降る坂路の上り口にあるので、展望は悪くない。

それから近所を散歩して、再び大坂上の電車線路に出で、道玄坂を降つて渋谷駅付近に戻り、そこで三人昼餐。佐久間に別れて、一時半ごろ帰宅。留守中に小林が逗子の魚類を持つて来たといふ。姉はおさき同道で四谷の西の市へゆき、唐の芋や柿などを買つて来た。

二時過る頃に中野が来て、仕事も片付いたから三四日旅行するといひ、三十分ほど話してゆく。吉岡医師も来診。

七時半ごろ入浴。額田に郵書を発して、佐久間の所有地を見て来たことを通知して置く。

読書。十時半就寝。十二時頃から眼がさめて、午前三時過る頃まで眠られなかつた。

三日（火曜）晴（六十五度）

午前八時起床。けふは明治節。朝は寒い。

姉は滝野川の管野氏をたづねるとて、森部同道で早朝から出てゆく。

昨日佐久間の地所を見て来たので、試みに控家の設計図を作つてみる。小さい家ではあるが、それでもなか／＼面倒である。

午後一時半頃に上松のおすゝが果物をたづさへて、おいしいの病気見舞に来た。姉と森部は三時過るころ帰宅。管野君の細君と共に滝野川の紅葉を見物して来たといふ。おすゝは四時頃まで話して帰る。

放送局の小林君が懸賞募集のラヂオ・ドラマ十六編を持参、三十分ほど話してゆく。おさきの父がたづねて来て魚類をくれた。

六時頃に文芸春秋社の武内君が来て、七時過る頃まで語る。武内君はオール読物号の二月号を書いてくれと云ふことであつたが、断る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

四日（水曜）晴（六十七度）

午前八時起床。

花屋が来たので、菊三鉢を買ひ、その一鉢を隣家の近藤君方へ贈る。

額田の戯曲「あの道この道」を編集し終つて、大黒活版所へ郵送。

福島石井から原稿受取りの返書が来た。

大西君から琴平小唄の新作を送つて来たので、一読。その批評を添へて返送。大阪の堀にも返書。

読書。七時頃入浴。夕刊をみると、岩手地方に地震があつたといふ。兎角に地震の多いことである。

十時半就寝。

五日（木曜）雨（六十六度）

午前九時起床。

ラヂオ・ドラマの懸賞応募原稿をよむ。額田から返書が来た。

終日雨やまず。来客もない。海上火災保険会社社員が来て、来年へ度の保険金を受け取つてゆく。～

六時半ごろ入浴。九時頃までにラヂオ・ドラマ十六編をよみ終る。あまり佳作もないやうである。

十時半就寝。午後一時頃まで眠られなかつた。

六日（金曜）雨（六十八度）

午前七時半起床。

ラヂオ・ドラマの審査報告をかく。それから又、控家の設計図を引いてみる。

午後二時頃に吉岡医師来診、おえいの血圧は百七五に下つた。

二時頃に山下が来た。つゞいて丸尾君が来て、札幌の林檎をくれ、更に自作の俳画に星野君讚の色紙と短尺をくれ、四時半頃まで話してゆく。その間に、文芸春秋社の武内君が来て、私の写真を借りてゆく。

五時頃に山下も去る。雨があひにく強くなつたので、

傘を貸してやる。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

午前二時頃から強い風が吹き出した。

七日（土曜）晴（六十九度）

午前八時起床。

丸尾君依頼の短尺五枚をかく。高田町の清水君に頼まれた短尺四枚をかく。石川県の花の芽吟社の俳句を選了。これにも短尺四枚をかく。

午後、四谷を散歩。朝より快晴。日中は汗ばむ程である。

歸つて読書。麴町一丁目の中川君から菊一鉢をくれたので、その返礼に林檎を持たせてやる。

四時半頃に放送局の小林君が来て、ラヂオ・ドラマの原稿を受取り、三十分ほど話してゆく。大西君からおえいの見舞状が来た。

七時頃入浴。読書。

十時半就寝。

八日（日曜）晴（七十度）

午前七時半起床。

天氣が好いので、散歩ながら森部同道で上目黒へ出てゆく。けふは自動車で渋谷駅まで行き、それから東横電

車に乗って代官山停留場下車、徒歩で三四町、この方が渋谷から行くよりも余ほど近い。

佐久間の地所には土や芝などを持ち込んであつたが、職人は誰も来てゐなかつた。森部とその付近を散歩。それから渋谷の大通りへ出て、道玄坂下で昼餐。更に青山辺まで徒歩して自動車に乗る。

二時ごろ帰宅。

読書。七時ごろ入浴。静岡の山本君から郵書が来たので、返書。

小川君の息子が来て、又もや切り花をくれた。菊は大輪で頗る見事なものである。

十時半就寝。

九日（月）晴、陰（六十八度）

午前八時起床。

けふは麹町小学校の運動会であるので、早朝から楽隊の音などが賑かにきこえる。

十時頃に渡辺の愛子がおえいの見舞に来た。つゞいて額田が来て、舞台誌友会の件について相談あり、十一時半頃まで話してゆく。

午後から陰る。一時半頃に大村が見舞に来て、野菜類一籠をくれたので、吉岡医師方へ持たせてやる。

伊藤松雄君の喜劇「失業時代相」を編集。

七時ごろ入浴。学生舞台研究会の伊藤祐治君が来て、同劇団の試演に「相馬の金さん」を上演したいと云ひ、三十分ほど話してゆく。

読書。十時半就寝。

十日（火曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。快晴。

伊藤君の喜劇を編集し終る。

午後、四谷を散歩。一時頃に帰宅すると、横浜の高橋がおえいの病氣見舞に来てゐて、三時半まで話してゆく。高橋は横浜の知人から貰つたとて、青蛙神の香炉をくれた。

柳紀美子の戯曲「春」を編集。四時半頃に放送局の小林君が来て、十五日の夜に「名立崩れ」を放送したいと云ひ、門口で話して帰る。

七時半頃に丸尾君が来て、わたしが揮毫の短尺をうけ取り、これも門口で話してゆく。

七時半頃入浴。読書。

十時半就寝。十二時過る頃から強風が吹き出した。

十一日（水曜）晴（六十六度）

午前八時起床。けふも晴れて風吹く。

三橋からフランス劇の続稿を送つてきたので、返書。

その原稿を訂正して、中野方へ発送。

佐久間祖母三十五日の配り物を三越から配達して来たので、取りあへず佐久間方へ礼状を出して置く。

東京日日の森川君が来て、「名立崩れ」放送について其作談などを聴いてゆく。午後二時頃に吉岡医師来診。おえいの血圧は百七十に降下。

吉川虎牡君の戯曲を編集。それについて今後の注意と
なるべきこと数点を指示して云ひ送る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十二日（木曜）晴、陰（六十四度）

午前八時起床。

山下の喜劇「三十前」を読む。

午後、四谷を散歩。伝馬町の通りに高島屋が十銭百貨店を開いた。アメ（ヘリ）カの白銅貨店を学んだものと見える。日本でもこんな店がおひ／＼に殖えるであらう。

午後から陰つて寒くなる。三時頃に渡辺の愛子が来て、今度三井物産会社の女事務員に雇はれることになったので、私に保証人になつてくれといふ。それには納税証明書と印鑑証明書が入用であるので、森部を区役所へつかはしてその手続きをする。三時十分頃に地震。四時頃に愛子は去る。

読書。六時ごろ「■■」に中野が富塚同道で来た。新

歌舞伎座の松竹レビューで富塚作の「女学生気質」を上演、けふはその初日を観て来たといふのである。十五日の誌友会の話などあつて、七時頃に去る。

それから入浴。十時半就寝。

十三日（金曜）晴（六十二度）

午前八時起床。庭の野菊は今や盛りである。

山崎の戯曲「憂愁の寺」を一読。

午後、四谷を散歩。一時半ごろ帰宅。「憂愁の寺」を編集。

四時半頃に鈴木氏亨君が来て、藤沢清造が病気に苦しんでゐるので、その見舞金を贈りたいといふので、承諾。鈴木君は一時間あまり話してゆく。つゞいて佐久間が来て、三十分あまり語る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十四日（土曜）晴、陰、雨（六十八度）

午前八時半起床。晴、やがて陰。

十一時頃に前橋の藤嶋君が来た。藤嶋君は十五日に舞台誌友会出席のために昨夜上京、額田方に投宿してゐるといふ。一時間ほど雑談、これから浅草へゆくと去る。

午後一時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。二時頃から雨が降り出したので、森部が傘と下駄を持つて

来た。

二時半ごろ帰宅すると、おさだが子供をつれて来てゐた。キネマ豊国社の鈴木小春浦君が同社の高田尚亮君同道で来訪、同社のキネマ雑誌「松竹」に「半七捕物帳」を掲載したいといひ、一時間あまり話してゆく。雨はいよ／＼強くなる。

六時頃に吉岡医師来診、おえいの血圧は百六十に降下。七時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

十五日（日曜）晴、陰（六十八度）

午前八時起床。

昨夜幾たびか眼をさましたせいか、今日はなんだか頭が重い。

午後一時頃に正岡君が来て、二時過る頃まで話してゆく。つゞいて上松君がおえいの見舞に来て、四時頃まで語る。

けふは第三回舞台誌友会が例の白十字堂で開かれるので、四時半頃から出てゆく。時刻が少しく早いので、新宿の三越支店を一覧。日曜といひ、十五日に相当するので、新宿界限はおびたゞしい混雑であつた。

五時半頃に白十字へゆくと、已に二三十人の来会者が集まつてゐた。

六時頃から開会して、額田が例に依て開会の挨拶を述

べ、それから私と森ほのほ氏、一二三漱夫氏、水谷竹紫氏等の講演を終つて、八時頃から食卓に着き、それから喫茶。

来会者は前回よりやゝ少く、七十五名。而も開会毎に婦人の出席者の多いのが眼「が」へに／＼ついた。十時頃から会衆もおひ／＼退散したので、私は額田君等にあとを頼んで十時半頃にこゝを出る。午後から陰つたが、幸に雨ともならなかつた。

三橋も誌友会に出席したが、その出がけに私の家へ立寄つて、自宅の庭に生つたといふ枝柿をくれた。

十時四十五分頃帰宅。入浴。十二時就寝。

十六日（月曜）陰（六十五度）

午前十時起床。

鈴木小春浦君から郵書が来て、キネマ雑誌「松竹」に半七捕物帳を掲載するに付、わたしの署名を直筆のまゝで印刷したいといふので、書いて送る。

わたしの住宅地は在来北七番地のところ、区画整理の結果三十二番地に変更したといふのである。別にどこから通知があつたといふわけでもないが、区役所について聞き合せると、兎も角も番地変更届を出せといふ、理窟を云ふのも面倒であるから、その云ふがまゝに変更届を出して置く。これで私の住宅地も元園町一丁目三十二番

となつたわけである。

午後、四谷を散歩。

三時頃に森本のほ君が来て、一時間あまり話してゆく。
七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

十七日（火曜）晴（六十六度）

午前八時起床。おえいは今朝から床払ひをする。

サンデー毎日に原稿五枚をかく。川尻君の姉死去の通知があつたので、森部を代理として告別式に参列させる。
午後一時頃、放送局の柳八重子が来て、調査時報の原稿にするとして、ラヂオ・ドラマに関する私の談話を聴いてゆく。

二時頃に松竹の木村君と黒川君が来て、左団次一座は京都の顔見世興行に乗込んで「佐々木高綱」を上演、猿之助は東京劇場に出勤して「小栗栖の長兵衛」と「後日の長兵衛」を上演すると云ひ、三十分ほど話してゆく。
今日の芝居もやはり不況ださうである。

そのあひだに山下が来て、先日の傘をかへしてゆく。
木村君等が帰ると、佐久間と中島が来て、四時半頃まで語る。

七時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

十八日（水曜）晴、陰（六十四度）

午前八時起床。

岡山の難波からアナゴを送つて来たので、返書。そのアナゴは焼いてあるので、紀尾井町の小林君方へも分配。
弘津千代子から誌友会の礼状が来たので、返書。

午頃に報知新聞社の中代君が来て、来春の日曜報知に十回以上の連載小説を寄稿してくれといふ。少しく難儀ではあるが、兎も角も承諾。つゞいて額田が来て、一時半頃まで話してゆく。

それから四谷を散歩して、三時ごろ帰宅。その頃から細雨。

読書。六時頃に放送局の小林君が来て、「名立崩れ」の放送料をくれ、門口で話してゆく。雨強くふる。

七時から入浴。読書。十時半就寝。

十九日（木曜）晴、陰（六十四度）

午後八時起床。

わたしの起きない間に額田が来て、神戸の脚本検閲が面倒になつたので、これから出発すると云ひ置いて行つたさうである。この問題は先日一旦無事に解決した筈であるのに、又もや何か面倒が出来たとみえる。実にうるさい事である。

サンデー毎日の原稿六枚をかく。併せて十一枚。甲字楼夜話と題して東京日日新聞社へ発送。

午後一時頃に富塚が自作の戯曲を持参、三十分ほど話してゆく。

それから四谷を散歩。けふも午後から陰る。留守中に真川文雄君が自作の戯曲を持参。

富塚の戯曲を一読、先づは無事に出来てゐるやうである。武田鶯塘君から還暦記念の俳句集を送つて来た。わたしも来年は還暦、今更のやうに青年の昔が思ひ出される。

六時頃に吉岡医師来診、おえいももう全快したといふ。七時頃に入浴。読書。十時半就寝。

二十日（金曜）晴（六十二度）

午前八時起床。晴れて暖い。

十時廿分頃からおえいと森部同道で銀座の松屋へゆく。おえいが床あげの配り物を買ふためである。

渡辺、上松、津沢、高橋、額田、山下、中野、佐久間、富塚の九軒へは松屋から直接に配達して貰ふやうに頼み、大村、丸尾、小林、吉岡の四家へ贈る分は持帰ることにする。食堂で昼餐。他に雑品数点を買つて、一時半ごろ帰宅。

放送局の柳八重子から先日 of 談話筆記の原稿を送つて来たので、一読して返送。武田君にも俳句集の礼状を発送。

渡辺その他八軒へ配り物の送り状を発送。前橋の藤嶋（君）から郵書が来たので、返書。逗子の小林方へは配り物を小包み便にして郵送、あはせて郵書を送る。

額田から電報が来て、「■」検閲問題は兎もかくも解決したといふ。

こんなことで神戸までたび／＼呼び出されては頗る迷惑である。

七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

二十一日（土曜）陰、雨（六十二度）

午前八時起床。

森部をつかはして、大村方へ床あげの祝物をとゞけさせる。

富塚の喜劇を編集し終り、更に佐久間の喜劇を訂正。午後、四谷を散歩。むさし屋で座蒲団をかひ、自宅へ届けてくれるやうに頼んで帰る。陰つて又寒くなる。

午前引きつゞいて佐久間の原稿を訂正、頗る面倒である。大村と富塚から祝物の礼状が来た。

夕より雨。七時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

二十二日（日曜）晴、陰（六十二度）

午前八時起床。

佐久間の原稿を訂正し終る。十時半頃に渡辺の愛子に来て、いよ／＼三井物産会社の保険部に出勤することになったと云ひ、一時間ほど話してゆく。

午後、四谷を散歩。先日あつらへて貰つたゴム印を受取つて来た。番地変更のためにゴム印を改造したのである。

読書。中野と佐久間から祝物の礼状が来た。

おとくとおさきは宵から国技館の菊人形を見物にゆく。

七時ごろ入浴。読書。おとく等は九時半ごろ帰宅。

十時半就寝。

二十三日（月曜）陰、雨（六十度）

午前八時半起床。けふは新嘗祭。

森部に命じて、四谷の丸尾君方へ床あげの祝物をとげさせる。

十時頃に額田の細君が来て、祝物の礼をいひ、一時間あまり話してゆく。

額田は明日帰京するさうである。

創健社から原稿依頼の郵書が来たので、断りの返書。上松と小林から祝物の礼状が来た。

午頃から雨。折角の祭日もさん／＼である。

朝日新聞（東京）同情週間係から頼まれた大色紙三枚、尾道市の大崎君から頼まれた短尺一枚、朝鮮人から頼まれた短尺六枚に揮毫。頼まれるから抛らないやうなものゝ、こんな拙い字をむやみに書くのは実に閉口である。

二時頃に佐久間が来て、三時過る頃まで話してゆく。読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十四日（火曜）陰、晴（六十四度）

午前八時半起床。

午「■」頃に額田が来て、昨夜帰京したといひ、「一」〈二〉時過る頃まで語る。

それから四谷を散歩。午後から晴れて暖くなる。

三時過る頃に帰宅すると、菅野君が来てゐた。ほかに俵木も来て、浦岡君の北海道みやげを呉れたといふ。菅野君は四時過る頃まで話してゆく。

つゞいて山下が来て、祝物の礼をいひ、五時半頃まで語る。丸尾君と津沢の寿子からも祝物の礼状が来た。

木村富子から速達便で自作の原稿「女山賊」と私の旧作所載の文芸倶楽部を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（水曜）陰（六十二度）

午前八時半起床。

横浜の高橋から祝物の礼状が来て、母が去十八日以来入院中であるといふので、取りあへず見舞状を発送。丸尾君にも返書。

午後一時半頃に三橋が来て、いよく嫩会に加入させてくれといふので、承諾。三橋は三十分ほど話してゆく。読書。終日陰つて寒い。

嫩会例会で五時廿分頃に大村が来た。つゞいて額田、中島、小林、富塚、山崎、佐久間、中野、岡田、山下が来た。岸井、鈴木は欠席。例に依て劇談。「舞台」の売行が七月以来毎月一割五分ぐらゐ減少したといふ。やはり不景氣の影響で已むを得まい。

九時半ごろ散会。それから入浴。

十一時半頃に戸を叩いて、小石川の製本屋から「舞台」十二月号を届けて来た。十二時就寝。

二十六日（木曜）晴（六十五度）

午前八時半起床。快晴。

けふは天氣が好いので、おえいは目黒の控家の地所を一見したいといふ。

午前十時頃からおえいと森部同道で渋谷の佐久間方へたづねて行くと、中島と塚原も恰も居合せたので、佐

久間をあはせて六人連れで行くことになった。

地所には今日も三四人の職人が来て、土盛りの工事中であつた。おえいを案内して、その近辺を一見。それから渋谷の電車通りへ引返し、道玄坂上で自動車を歸し、六人徒歩。こゝらは道路取揚げの工事中で頗る混雑してゐた。柳家といふ家で昼餐。こゝで佐久間等三人に別れて帰宅。昼餐に暇取つたので、自宅に歸り着いたのは午後二時頃であつた。〈往復ともに自動車で、〳〵差して歩いたのでもないが、おえいはやはり疲れたといふ。健康がまだ本当に回復しなへい〉と見える。

佐久間の戯曲「計略」を編集し終る。雑司ヶ谷の清水といふ人から短尺の礼状が来たので、返書。

七時ごろ入浴。中島の戯曲「陽氣な闖入者」を一読。十時半就寝。

二十七日（金曜）陰（六十度）

午前八時半起床。

「舞台」十二月号を原田、林、清水、高橋、東儀、難波の諸家へ郵送。福島 of 石井から戯曲の原稿を送つてきたので、返書。

十一時頃に黒川君が来て、松竹で左団次のために懸賞脚本を募集したいから、真山君と私の選者をたのむといふ。一等一編二千元、二等二編各五百円である。従来 of

例によると、あまり佳作を得られさうにも思はれないが、兎もかくも承諾。黒川君は一時間程話してゆく。

「舞台」新年号の巻頭の辞をかき、更に「甲字楼劇談」七枚をかく。

終日陰つて寒い。おえいの疲労癒えず、終日臥床。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（土曜）陰、雨（五十八度）

午前八時半起床。朝は五十度。いよ／＼本当の冬らしくなつた。

十時過る頃から雨。おえいは今日も臥床。

畑耕一君から俳句集「露座」を送つて来たので、返書。

大阪の吉川君から郵便が来たので、返書。

十二時頃に佐久間が来たので、年賀郵便七百枚と名刺百枚の印刷をたのむ。

そこへ又、中島が来て短尺の揮毫をたのむので、三枚揮毫。二人は二時頃まで話してゆく。

やがて又そのあとへ額田が来て、三越の広告料を某君に使ひ込んでしまはれたといふ。某君の不信は已に再三であるから、今夜その手から来た広告は「舞台」の誌上に一切掲載しないことに決める。額田は一時間ほど話してゆく。

中江草一君の戯曲「古井」を編集。「甲字楼劇談」の

原稿を中野方へ発送。

七時ごろ入浴。八時頃にちら／＼と雪をみたが、間もなく止んで又もや雨。

読書。十一時就寝。

二十九日（日曜）晴（五十二度）

午前九時起床。晴れてゐるが、風が寒い。

中江君の「古井」を編集し終る。これで「舞台」新年号の戯曲十種の編集を終る。

午後一時頃から神田を散歩。古書三部と文房具などを買ひ、三時ごろ帰宅。東京劇場から明日舞台稽古の電報が来た。

六時頃に放送局の小林君が来て、ラヂオ・ドラマ審査の謝礼をくれ、門口で話して帰る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三十日（月曜）晴（五十度）

午前九時起床。朝は四十三度。

戯曲の原稿を小包み便にして中野に発送。新橋演舞場から二日の入場券を送つてきたので、中野と岸井に郵送。午後十二時半頃から東京劇場の舞台稽古に出てゆく。やはり一時からは始まらず、二時半頃から中幕「猪八戒」の幕をあげ、四時頃から「小栗栖の長兵衛」の第一幕を

あけ、七時過る頃に第二幕を終る。

それから逆に第一の「満洲事変」にかゝる筈で、陸軍側の人々がその指導に来てゐた。それを見残して、八時ごろ帰宅。留守中に中野が来たといふ。

入浴。読書。十時半就寝。寒気やゝ弛む。

本月の仕事は甲字楼夜話（サンデー毎日、十一枚）放送局の懸賞ドラマ審査、舞台の戯曲編集など、ほかには取留めた仕事もなかった。

（翻刻担当…今藤晃裕）

昭和六年十二月

一日（火曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

けふはおえいが床あげの祝として赤飯をあつらへ、家内の者一同にも祝儀の金をやる。

森田信義から自作の戯曲を送つて来たので、返書。額田からも郵書が来たので、返書。

午後から風が吹き出して寒くなる。

東劇の初日で三時半頃から出てゆくと、山下、佐久間、中島「の」はもう来てゐた。四時開場。第一「満洲事変」第二「猪八戒」第三「小栗栖の長兵衛」を演じ終つたのは、十時半。表には寒い風が吹いてゐた。

帰宅。入浴。十二時半就寝。

二日（水曜）陰、晴（五十一度）

今朝は寝過して、九時半頃に眼をさますと、春陽堂の木呂子君が来て、大衆文庫の「半七捕物帳」も近日出版するといひ、枕元で三十分余り話してゆく。

昨日不在中に真川君が来たといふので、郵書を出して置く。黒川君にも「小栗栖の長兵衛」の上演料の受領証を発送。猿之助から歳暮品をとどけて来た。

午後一時頃に三省堂の田中君が来て、犯罪之論十月号

の原稿料をくれ、一時間ほど語る。午前は陰、午後から晴れる。

旧作の俳句を訂正。額田から郵書が来た。

七時半から入浴。読書。昨夜から夜警の柝の音がきこえる。

十一時就寝。

三日（木曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。

旧作の俳句を訂正、浄書。私も来年は還暦に相当するので、その記念として句集を作り、知人に配らうかと思ひ立つたのである。

午後、四谷を散歩。二時から帰宅。更に俳句を浄書。

夕刊をみると、花井卓蔵博士は瓦斯火鉢のために窒息死亡したといふ。

八時ごろ入浴。読書。中島から一昨夜の礼状が来た。十時半就寝。

四日（金曜）晴（五十五度）

午前九時起床。隣家の近藤君から床あげの祝物をくれた。

天気がよいので、午後十二時半頃から森部と銀座の松屋と三越へゆき、奥田君と津沢君方へ贈るべき歳暮品の

配達方をたのみ、三越の食堂で喫茶、ほかに雑品数点を買つて、二時半ごろ帰宅。その帰宅中に額田の細君が来て、家内一同に歳暮品をくれた。

三時頃に岸井が来たので、日比谷の陶々亭に交渉をたのむ。例年の如く嫩会の忘年会を開く為である。ついで佐久間も来た。岸井は四時頃に去り、佐久間は四時半頃まで話してゆく。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

五日（土曜）晴（五十三度）

午前九時半起床。

俳句を訂正しながら浄書。午後、神田の市川升六君方へ歳暮品を持たせて遣ると、一家不在の由で森部は空しく帰つて来た。

午後三時頃までに俳句夏の部を浄書し終る。それから町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。晴れてはゐるが、風が寒い。

おさだの家から漬菜をとじて来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

六日（日曜）晴（五十四度）

午前九時半起床。

岸井から郵書が来て、忘年会は十四日に決めて来たと

いふので、返書。奥田君から歳暮品の礼状が来た。中野から郵書が来て、去三日から湯河原の遠州屋旅館に投宿してゐるといふ。

森部は再び神田の升君方へ行つて、歳暮品をとりけて来た。

十二時頃に正岡君が来て、昨日大阪から帰京したといひ、一時間あまり話してゆく。それから四谷を散歩。三時頃帰宅。

嫩会員一同に忘年会の通知を発送。俳句を訂正、浄書。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

この頃は毎夜寝付かれず、今後も午前二時頃から漸く眠る。

七日（月曜）晴（五十五度）

午前九時半起床。

俳句を訂正、浄書。

午後一時半頃に依木が来て、一時間ほど話してゆく。森部の兄から時候見舞の郵書が来たので、返書。中野にも返書。

七時頃入浴。読書。十一時就寝。

八日（火曜）晴（六十三度）

午前八時起床。晴れて暖い。

十時半頃からおえいと森部同道で銀座の三越へゆき、諸家へ贈るべき鮭十五箱をかひ、そのうちにて小林、吉沢、山本、北川、上松、渡辺、植田、鈴木、額田、菅野の十軒へは直接に配達をたのみ、他の五箱は自宅へとりけて貰ふやうに頼む。食堂で昼餐。他に雑品数点を買つて、十二時半ごろ帰宅。

その留守中に中村孝子が歳暮の礼に来たので、礼状を発送。鈴木、菅野の両家へ鮭の送り状を発送。

森部は額田方へ歳暮品をとりけにゆく。麹町一丁目の小川君へも歳暮品をとりけさせる。

大野君の娘が子供をつれて、歳暮品を持つて来た。

三時頃に山下が来た。ついで渡辺の博が来た。山下は四時頃に去り、博は四時半頃に去る。博に歳暮の金をやる。

大村から戯曲の筋書を送つて来たので、一読。七時半から入浴。

読書、十一時就寝。雨の音、やがて又やむ。今夜も午前三時頃まで眠られなかつた。

九日（水曜）陰（六十三度）

午前九時半起床。

三越から鮭をとりけて来たので、静岡の山本君と森部、おとく、おさきの実家へ鉄道便で発送。

三橋から原稿を送つて来たので、返書。サンデー毎日の渡辺君から寄稿を頼んで来たので、断りの返書。鈴木余志子から郵書が来たので、返書。鈴木は前田早苗と改名したといふ。市川升六君から先日のお礼状が来た。

大谷君から歳暮品をとどけて来た。

午後二時頃に近衛連隊の兵士が在郷軍人同道で来訪、地方の兵士が上京するかも知れぬので、その節は五人ほど宿泊させてくれと頼んで行つた。兵士の宿舍の割当をするやうでは、いよ／＼軍議行動を起す準備と察せられる。国際連盟の無力、如何ともし難いらしい。

俳句の秋の部を訂正、浄書し終る。更に三橋の原稿を編集。

三時半頃に鈴木未亡人が歳暮の礼に来て、門口で話して帰る。つゞいて大村が来て、家内一同に歳暮の品をくれ、一時間ほど話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。夜半に雨の音。今夜も午前三時頃から眠る。

十日（木曜）陰（六十二度）

午前九時起床。

森部をつかはして、赤坂の黒川君方へ歳暮の品をとどけさせる。三重県波切町の林君から色紙の揮毫をたのみ、併せて伊勢蝦を送つて来た。

おえいは紀尾井町の小林君方へ歳暮の礼にゆく。

俳句の冬の部を浄書し終る。銀座のふたばから歳暮品をとどけて来た。

五時頃に佐久間と中島が来て、これから嫩会の十日の会へゆくと云ひ、門口で話して帰る。

上松、山本の両家とおさきの実家から鮭の礼状が来た。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

この年末は例に比して頗る暖いやうである。これで景気が好ければ、十分はないのであるが、どうもさうは行かぬらしい。

十一日（金曜）陰（六十三度）

午前十時起床。

鈴木、植田、額田から鮭の礼状が来た。大阪の堀から郵書が来たので、返書。

午後二時頃に木村君が黒川君同道で来訪、歌舞伎座一月興行に「なこそこの関」を上演したいと云ひ、四十分ほど話してゆく。市川寿美蔵から歳暮品をとどけて来た。

俳句の春の部を訂正、浄書し終る。富塚から郵書が来て、十四日の忘年会には出席するといふ。菅野君から鮭の礼状が来た。

七時ごろ入浴。夕刊をみると、内閣総辞職。読書。十一時就寝。

十二日（土曜）陰（六十二度）

午前九時起床。

静岡の山本君とおとくの実家から鮭の礼状が来た。

波切町の林君から頼まれた色紙と短尺に揮毫。

午後、四谷を散歩。鉢裁の支那水仙を買つて、一時半帰宅すると、深川の山本未亡人が歳暮の礼に来てゐた。未亡人は一時間ほど話して帰る。

二時四十分頃に伊藤晴雨君門下の佐藤君が他の門弟同道で来訪、風俗野史第五巻が出来したとて届けてくれる。つゞいて清見君が来る。又つゞいて新潮社の寺井君が来た。来客混雑。佐藤君等先づ去り、次に寺井君去り、清見君はあとに残つて四時半頃まで語る。

七時ごろ入浴。読書。八時頃に佐久間が来て、年賀ハガキ七百枚の印刷をとゞけ、九時頃まで届けてゆく。

十時半就寝。今夜は午前四時頃まで眠られなかつた。

十三日（日曜）雪、陰（五十二度）

午前九時起床。朝から霰まじりの雪。気候も俄に寒くなる。

後継内閣は政友会、首相は犬養毅と決まつた。

雪は間もなく止んだが、やはり陰つて寒い。昨夜不眠のために、何だか頭が重い。

午後三時頃に上松のおすゝが歳暮の礼に来て、一時間

ほど話してゆく。

夕方までに年賀ハガキの宛名百枚をかく。

六時半頃に鈴木千枝雄が来た。つゞいて中野が来た。中野は十六日頃から二三日帰阪するかも知れぬといふ。二人は八時頃まで話してゆく。

それから入浴。読書。十時半就寝。

十四日（月曜）晴（四十八度）

午前八時半起床。今朝は四十二度。頗る寒い。

日曜報知の原稿を書き始めなければならぬので、その材料を調査。更に年賀ハガキの宛名五十枚をかく。

森部の兄から鮭の礼状が来た。おとくの実家からも同様の礼状が来た。三越から額田が歳暮の梅一鉢をとゞけて来た。

今夜は忘年会で、嫩会員を陶々亭に招待してあるので、五時半頃から出てゆく。額田、山下、山崎、佐久間、中島はもう来てゐた。つゞいて富塚、大村、中野、岸井、岡田、小林、鈴木が来た。六時頃から食卓に着き、八時頃に終る。それから雑談。十時ごろ散会。

表へ出てみると、往来がぬれてゐる。七時半頃に霽まじりの雨が降つたのであるといふ。帰宅の頃には空が晴れて、星が一面に光つてゐた。

留守中に鈴木小春浦君が来て、キネマ雑誌「松竹」の

原稿料をとどけてくれたといふ。

入浴。十二時就寝。

十五日（火曜）晴（四十九度）

午前九時半起床。まだ起きないうちに、山崎が来たといふ。

十一時頃に山崎が再び来て、嫩会の会費をとどけ、一時間ほど話してゆく。

午後には日曜報知の原稿五枚をかく。晴れてはみるが、頗る寒い。各地方には降雪しきりなりといふ。

額田から昨夜の礼状が来た。渡辺のおしげから鮭の礼状が来た。鈴木小春浦君に原稿料の受領証を発送。

六時過る頃に川尻君が来て、「なこそこの関」上演について色々の打合せがあり、一時間あまり話してゆく。

八時ごろ入浴。読書。十一時就寝。夜半にをりく／＼雨の音。

十六日（水曜）雨（五十七度）

午前九時半起床。大村から一昨夜の礼状が来た。

日曜報知の原稿をかきつけて、夕方までに十枚。終日雨やまず、寒気やゝ弛む。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十七日（木曜）晴（五十六度）

午前九時半起床。

日曜報知の原稿を訂正、「白蝶怪」と題して報知社に発送。

午後一時頃に小林が細君と子供同道で歳暮の礼に來たので、おえいからは服紗をやる。ついで富塚が母同道で来て、これも歳暮の品をくれた。

森部の郷里から梨を送つて來たので、大野君方へ分配。小林は鯛をくれたので、隣家の近藤君方へ分配。

三時過る頃から四谷を散歩。四時半ごろ帰宅。七時過るころ入浴。森田の戯曲を編集。

十一時就寝。

十八日（金曜）晴（五十二度）

午前十時起床。

十時半頃に中島が歳暮の礼に來て、一時間ほど話してゆく。大野君方から鯛をくれた。

十二時頃に津沢の寿子が子供をつれて歳暮の礼に來て、二時過る頃まで話して帰る。

三時頃に佐久間が來た。ついで林二九太君が來た。佐久間は四時過る頃に去り、林君は四時四十分頃まで話してゆく。

大阪の坪内君から松竹の懸賞脚本について問合せが

来たので、返書。大阪の山上から奈良漬を送つて来たので、返書。森部の兄にも返書。

森田の戯曲を編集し終る。七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

十九日（土曜）晴（五十度）

午前九時半起床。

おえいはおとくを連れて、三越へ買物にゆく。

十二時頃に中野が歳暮の礼に来て、いよ／＼松竹の懸賞脚本に応募するといひ、一時間ほど話してゆく。岸井の使が来て、歳暮の品をとりつけてゆく。

二時頃に植村君が歳暮の礼に来て話してゐるうちに、おえい等帰宅。つゞいて奥田君が歳暮の礼に来た。奥田君は三時半頃に去り、植村君は四時頃まで話してゆく。そのあいだに、丸尾の細君も歳暮の礼に来た。

小寺君から「日本近世舞踊史」を送つて来たので、返書。前田から自作の戯曲を送つて来たので、返書。

年賀ハガキの宛名六十枚をかく。八時頃入浴。

読書。富塚からおえいにハブ茶一箱を送つて来た。須賀川の菅野君から葱を送つて来た。

十一時就寝。

二十日（日曜）陰、晴（五十二度）

午前九時起床。

野村好之助君の戯曲「朋友」伊佐野律子の戯曲「十字路の女」を編集、いづれも「舞台」の原稿である。

岡田禎子から歳暮品を送つて来たので、返書。富塚にもハブ茶受取の返書。

午後一時半頃に邦之助の未亡人良子が長男邦憲をつれて来訪、三時過る頃まで話してゆく。陰晴定まらず、午後より又陰る。

年賀ハガキの宛名四十枚をかく。七時ごろ入浴。

鳥居君から使が来て、言人「■」君版画会加入の依頼があつたので、承諾。その会費は五円であるといふ。

読書。十一時就寝。

二十一日（月曜）晴（五十二度）

午前十時起床。おえいは吉岡医師へゆく。

石角春之助君の戯曲「人肉斬捨裁判」を編集。

午後一時頃に小村雪岱君が来て、「なこそこの関」の舞台装置について打合せてゆく。そのあひだに大村が来て、自作の戯曲をとりつけ、門口で帰る。

つゞいて浦岡の細君が来て、歳暮の品をくれ、一時間ほど話してゆく。

それから四谷を散歩。三時半頃帰宅すると、額田が待つてゐて、松竹の懸賞当選脚本は「舞台」に掲載するこ

とに決めて来たといひ、五時まで語る。今日まで松竹に集まつて来た脚本には余り思はしいものは無いといふ。或はさうかも知れない。

真川君の喜劇二種をよむ。七時半ごろ入浴。

八時半頃に東京日日の森川君が来て、「出雲崎の遊女」初演の年月と劇場とを聞き合せてゆく。ラヂオで放送するのださうであるが、放送局からはまだ何の通知もない。読書。十一時就寝。今夜も午前四時半頃まで眠られなかつた。

二十二日（火曜）陰（四十七度）

午前十時半起床。

「人肉斬捨裁判」を編集し終る。

午後一時半頃に紀尾井町の小林君の細君が歳暮の礼に来て、三時頃まで話してゆく。終日陰つて寒い。

年賀ハガキの宛名五十枚をかく。五時頃に山下が歳暮の礼に来て、門口で帰る。静岡の山本君から蜜柑一箱を送つて来た。

七時半ごろ入浴。やがて雨の音。

大村の戯曲「泉三郎」を一読。十一時就寝。

二十三日（水曜）晴（五十二度）

午前十時半起床。

静岡の山本君に蜜柑の礼状を発送。大村の戯曲に批評を添へて返送。

三時頃に浜村君が来た。五時頃に東京朝日の林君が来た。浜村君は五時過る頃に去り、林君は六時頃まで話してゆく。林君の用向きは来春から東京朝日新聞の劇評を担任してくれまいかとの相談であつたが、断る。各劇場の劇評などを引受けた日には大仕事である。

放送局の使が来て、廿五日に「出雲崎の遊女」を放送したいといふので、承諾。

森部の友人が負傷したといふので、神保町の病院へ見舞に行つたが、帰つて来ての話によれば、酔つてカフェーの二階から道路へ墜落したのださうである。重傷ではあるが、生命に別条ないといふ。歳の暮に飛んでもないことであつた。

七時半ごろ入浴。けふは冬至で柚湯を焚く。森部とおとく、おさきに歳暮の金をやる。

読書。十一時就寝。

二十四日（木曜）晴、陰（五十二度）

午前十時起床。

大村から原稿うけ取りの返書が来た。赤堀君から歳暮品の礼状が来た。

午後一時半頃に真川君が来て、自作の戯曲をうけ取り、

一時間あまり話してゆく。

それから町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆき、主人と職人に歳暮を遣る。陰つて寒くなる。帰つて年賀ハガキの宛名四十枚をかく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。雨の音。

二十五日（金曜）陰、雨（四十八度）

午前九時半起床。

岡田の使が来て、本月の会費と自作の戯曲をとげ、今夜のふたば会の有無を問ひ合せてゆく。十時過る頃に渡辺のあい子が歳暮に来て、一時間ほど話して帰る。十二時頃から雨。

午後一時過る頃に中野が来て、松竹の懸賞脚本を脱稿するために、これから湯河原へゆくと云ひ、三十分ほど話してゆく。ついで佐久間が来て歳暮の品をくれ、門口で帰る。又そのあとへ、大黒から舞台新年号の製本をとじてゆく。

年賀ハガキの宛名をかき終る。あはせて五百六十五枚、まだ幾分の追加はあるらしい。

終日降り暮らして寒い。

嫩会例会で、山崎、額田、小林、大村、中島、富塚、山下、佐久間、塚原が来た。三橋が歳暮品を持つて来た三橋も嫩会に加入したので、今夜から列席。例によつて

劇談、雑談。十時散会の頃には雨やむ。

入浴。十一時半就寝。

二十六日（土曜）晴（五十四度）

午前九時半起床。晴れて暖い。

けふは下座敷の煤払ひをするといふので、家内混雑。十一時過る頃に大村が来て、舞台二月号のために国分商店の広告を取つて来たといひ、三十分ほど話してゆく。午後一時頃から四谷を散歩。この年末は景気が好いといふのであるが、四谷の大通りなどは殆ど平日と変らないやうであつた。留守中に東儀が歳暮の礼に来て、このたび鎌倉を引払い、中六番町に移転して来たと話して行つたさうである。

舞台新年号を高橋、清水、難波、東儀、林、原田の諸家へ発送。

三時頃に俵木が歳暮の礼に来て、四十分ほど話してゆく。そのあひだに湯河原会館の帳場の細君が番頭の西沢君同道で歳暮の礼に来て、門口で話して帰る。

机の抽斗や手箱を整理。知人宿所帳を訂正。横浜の金井なか子といふ婦人から私の門下に加へてくれといふ郵便が来たので、断りの返書。

大阪毎日新聞社代理部から牛肉一樽を発送して来たが、差出し人が判然しないには困つた。

六時半頃に額田が来て、ふたば会の会費をうけ取り、八時頃まで話してゆく。それから入浴。

読書。十時半就寝。本年の暮は比較的に温暖である。

二十七日（日曜）晴（五十二度）

午前八時起床。けふも快晴。けふは餅搗。

石井の戯曲「産児制限座談会」を一読、その批評を添へて返送。

天氣が好いので、銀座辺の歳末の景況を一見すべく、十一時半頃から森部同道で出てゆく。露店商人などは店を列ねて賑はつてゐたが、その割合に人出は多くないやうであつた。

松坂屋の食堂で昼餐。それから文房具その他の雑品をかひ、大通りの両側を一巡して、二時過る頃帰宅すると、恰も海野が歳暮の札に来てゐたので、呼びあげて一時間あまり語る。

湯河原の中野から郵書が来た。大阪毎日の代理部から送り状が来て、牛肉の発送者は前田早苗であることが判つた。

年賀ハガキの追加十一枚をかく。六時半頃に岸井が来て、一時間ほど話してゆく。それから入浴。

日曜報知から原稿料を送つて来たので、返書。森部は二七不動の縁日へ行つて、福寿草などを買つて来た。

読書。十一時就寝。

二十八日（月曜）雨（五十一度）

午前八時起床。大雨。十一時頃に雷鳴、やがて雨晴れる。

八百屋が輪かざり、裏白、ゆづり葉などを持つて来たので、例のごとく玄関と上下の各座敷にかける。森部は門松を立てる。更に応接間の額などを懸けかへる。これで先づ迎春の用意は整つたのである。

読書。年賀ハガキの追加八枚をかく。正岡君が来て、円朝全集一部をくれ、門口で帰る。

六時頃に放送局の小林君が来て、「出雲崎の遊女」の放送料をくれた。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

二十九日（火曜）晴（五十六度）

午前九時半起床。晴れて暖い。

日曜報知の小説第二回を起稿。放送協会から調査時報の原稿料を送つて来たので、返書。

やまと新聞社の婦人記者が来て、出征将士慰問寄付演芸会の入場料を買つてくれといふので、一枚（二円）を買つた。歌舞伎座の使が来て、明日の舞台稽古は衣装も小道具も間に合はず、大道具だけを急がしてゐるといふ。

春陽堂から歳暮品を送つて来た。

おえいはおとくを連れて、午後一時頃から新宿四谷へ買物にゆく。

四時頃までに原稿五枚をかき、それから四谷を散歩。五時ごろ帰宅。その留守中に放送局の小林君が来て、放送局の歳暮をとどけてくれたので、返書。

七時から入浴。読書。十一時就寝。

三十日（水曜）晴（五十七度）

午前九時半起床。

けふは歌舞伎座の舞台稽古であるが、衣装や小道具が間に合はぬやうでは、立会ふ必要もないと思はれるので、速達便で川尻君宛に不参の通知を発送して置く。

日曜報知の原稿をかく。夕方までに八枚。

福島石井から郵書が来て、祖父が去十八日死去したといふので、取りあへず悔み状を発送。歌舞伎座入場券を山下、岸井、佐久間に発送。

七時ごろ入浴。読書。暮れて陰る。気候も寒くなる。十一時就寝。

三十一日（木曜）陰、晴（四十八度）

午前九時半起床。

日曜報知の原稿二枚をかく。あはせて十五枚。速達便

で報知社に発送。

姉とおえいは十一時半頃から四谷へ買物にゆき、二時頃帰宅。

真川君が来て、国産の蒲鉾をくれ、門口で帰る。その蒲鉾を蒲岡君方へ分配。

おえい等と入れ違ひに、私も森部同道で四谷を散歩。陰晴定らず、風が寒い。それでも降らぬが何よりの幸である。

四時ごろ帰宅。大阪のサンデー毎日から原稿料を電報為替で送つて来た。

読書。七時ごろ入浴。おとくとおさきは宵から銀座へゆき、九時ごろ帰宅。

十一時就寝。姉と私夫婦、森部とおとく、おさき、一家六人無事に昭和六年を送る。

本月の仕事は白蝶怪（日曜報知二回分、三十枚）ほかに俳句の訂正、舞台「稽」稿の編集など。

今年は春來不景気の声高く、歳末に内閣交代あり、満洲事変はいまだ解決せず、匆忙のうちに歳が暮れた。

（翻刻担当…加瀬桃子）

昭和七年（一九三二年）六十一歳

昭和七年一月

一日（金曜）晴、陰、雨（四十七度）

午前七時起床。

一家六人、屠蘇を祝ひ、雑煮を祝ふこと例のごとし。森部と、おとく、おさきに年玉をやる。

陰晴定まらず、寒気も頗る強い。

十時頃に山崎が来て、三十分ばかり話してゆく。森部を代理として、近隣十八軒に回礼させる。

十二時頃に渡辺の博が愛子同道で年賀に来た。二人は午餐を喫して、午後二時頃まで話してゆく。そのあひだに中野が年賀に来た。富塚も来た。つゞいて山下も来た。額田夫婦も子供を連れて来た。塚原も来た。

ほかに年賀客八人。年賀郵便六百余通到着、例に依てその中には未知の人も多い。森部に上書きをさせて、百余通の返信を発送。

六時頃に佐久間が来て、四十分ほど話してゆく。佐久間の話によると、元日の浅草公園は非常の人出であつたといふ。

七時半ごろ入浴。やがて雨の音。

少しく感冒の気味であるので、服薬。八時四十分頃から就寝。

夜半に雨の音がいよ／＼強くきこえた。

二日（土曜）雨、晴（五十三度）

午前八時起床。雨。やがて晴れて、寒気も弛む。

年賀郵便六十余通到着、それに対する返信十五通を発送。大野君方へ年玉の品を持たせて遣る。

午後一時頃に大野文吾君が年賀に来た。つゞいて東儀が年賀に来て、三十分ほど話してゆく。ほかに歌沢寅右衛門その他の賀客五人。

二時頃に岸井が年賀に来たので、同道して歌舞伎座へゆく。正月だけに初日満員。山下と佐久間もあとから来た。

三時開演。第一「なこそこの関」と第二「石切梶原」まで見物したが、感冒のせみか何分にも気分がよくないので、半途で退場、七時十分帰宅。

留守中に俵木、三橋等が年賀に来たといふ。年賀郵便が更に五十余通到着、それに対する返信廿六通。

今夜は入浴せず、九時ごろ服薬して就寝。夜半に下痢。

三日（日曜）晴（五十四度）

午前十時起床。

今朝も下痢。感冒のために胃腸を害したとみえる。

年賀郵便五十余通到着、それに対する返信十余通を発送。

何分にも感冒の気味で気分が悪いので、終日書斎に籠

居して知友宿所帳を訂正。この宿所帳は大正十五年に作ったものであるから、年々の訂正やら追加やらで頗る乱雑になつてしまつた。今年は全部を書き換へなければならぬと思はれる。

晴れて風なく、いかにも春めいた日である。表には遣羽子の音がきこえた。今年は万歳が一向に來ないやうである。

年賀客は樽松君、林君、ほか六人、いづれも門口で歸る。

今夜も入浴せず、服薬して九時頃から就寝。

四日（月曜）晴（五十八度）

午前九時半起床。今朝も晴れて暖く、気分もよい。

午後一時頃に中野が松竹懸賞応募脚本の原稿を持参、二階の書齋で本読みをする。先づ大抵は好きさうである。二時半頃に中野は去る。

そのあひだに上松君年賀に來てゐた。上松君は屠蘇を飲んで四時頃まで話してゆく。ほかに年賀客四人、みな門口で歸る。

おさきの父が年賀に來た。森部に命じて、四谷の丸尾君方へ年玉の品を持たせて遣る。丸尾君は兄の一週忌で歸郷したといふ。

大村から速達便で戯曲の原稿を送つて來たので、一読。

その批評を添へて返送。

年賀郵便五十余通到着、その返信廿余通を発送。読書。今夜も入浴せず、服薬して九時ごろ就寝。

五日（火曜）晴（五十八度）

午前九時起床。けふも快晴。

十二時頃に大村が年賀に來て、年玉をくれ、四十分ほど語る。つゞいて中村孝子が來て年玉をくれ、一時間ほど話してゆく。

つゞいて東京日日新聞の桑原君が來て、私の談話を聴き、写真班員が私を撮影してゆく。ほかに年賀客五人。

管野君から年賀状が來て、脱腸のために入院してゐたといふので、取りあへず見舞状を発送。新興座の谷屋君から大入袋を送つて來たので、返書。岸井から風邪見舞の郵書が來たので、返書。

年賀郵便三十余通到着、その返信十余通を発送。

感冒も大かた癒えたらしいので、七時半頃に入浴。森部は額田方へ年始にゆき、八時頃過るころ帰宅。読書。十時半就寝。

六日（水曜）晴（五十二度）

午前九時半起床。けふは寒の入であるが、ことしの正月は暖い。

森部に菓子折を持たせて、滝野川の管野君方へ見舞にやる。

日曜報知の続稿をかく。午後一時半頃までに六枚。

それから四谷を散歩。三時から帰宅。巢鴨の能村武男君が年賀に来て、門口で帰る。十余年ぶりの対面である。ほかに年賀客三人。年賀郵便十一通到着。その返信八通を発送。

五時頃に額田が来て、一時間ほど語る。そのあひだに松竹の使が来て、懸賞脚本六編をとじてゆく。まだあとから続々送つて来るといふ。

七時ごろ入浴。とりあへず懸賞脚本二編をよむ。いづれも百枚前後の物であるから、容易に読み切れない。

十一時就寝。

七日（木曜）晴（五十二度）

午前八時起床。

おとくは宿下りで早朝から出てゆく。おえいは青山へ墓参にゆく。

朝から書斎に引籠つて、懸賞脚本をよむ。どうも面白いのは少い。

博文館の水島君が来て、従軍記者の座談会を開きたいから出席してくれと云ふ。多忙であるので断る。

ほかに小林宗吉、原氏敏君、その他の年賀客四人、い

づれも門口で帰る。

川原から喪中欠礼の郵書が来て、祖母が旧臈死去したといふので、悔み状を発送。白木屋の足立君から郵書が来たので、返書。

五時頃までに脚本四編をよみ終る。昨夜の分をあはせて六編。

六時頃からをり／＼に雨。七時ごろ入浴。

大野君が年賀に来て、ことしは私の還暦に相当するといふので祝物をくれ、九時頃まで話してゆく。

九時頃におとく帰宅。やがて大雨。

感冒がまだ癒えないので、今夜も服薬。十一時就寝。

八日（金曜）晴、陰（五十八度）

午前九時半起床。

隣家の近藤君から神戸の菓子くれたので、大野君方へ分配。

知友宿所帳があまり乱雑になつたので、森部に命じて浄書させる。

林幹君が来て、廿二日から市村座で開演、私の作「朝飯前」を上演したいといひ、門口で帰る。晴れて南風強く、温度も俄に昇る。

日曜報知の原稿をかきつけて、午後一時半頃までに五枚。それから四谷を散歩。をり／＼に陰る。

留守中に竹柴梅松君が来て、歌右衛門が「勾当内侍」をレコードに吹き込むに付、私の承諾を得たいといふので、兎もかくも承諾の返書を出して置く。

菅野君が年賀に来て、脱腸の手術も思ひのほか早く快癒、最早外出を許されたと云ひ、一時間あまり話してゆく。

森部は今夜から夜学に出てゆく。松竹から又もや懸賞脚本三編をとじて来た。

夕刊をみると、本日午前十一時四十四分、陛下が陸軍始観兵式の御帰途、桜田門外、警視庁前を御通行の際、鹵簿に対して手投弾様の物を投じたる者あり。弾は爆発せず、犯人は現場に捕へられた。朝鮮人李奉昌といふ當年三十二歳の土工ある。

それがために、内閣員一同は辞表を呈することゝなつた。新春早々の不祥事である。

七時半ごろ入浴。懸賞脚本一編をよみ終る。
十一時就寝。

九日（土曜）晴（五十一度）

午前九時起床。

朝から脚本を読む。

おえいは十二時半頃から紀尾井町的小林君方へ年始にゆく。その留守中に深川の山本の未亡人が年賀に来た

ので、私が相手になつて話してゐるうちに、おえい帰宅。未亡人は三時頃まで話してゆく。

四時頃まで脚本二編をよみ終る。新聞号外によると、大命に因て内閣員は現職に留まることになつたといふ。おえいは更に大野君方を訪問、わたしの還暦祝を貰つた返礼である。

七時半から入浴。読書。
十時半就寝。

十日（日曜）晴（四十八度）

午前九時起床。

植田の細君が年賀に来た。晴れてはゐるが、寒い風が吹く。

佐久間が来て、小太夫一座の新興座が来月は新橋演舞場で開場するに付、わたしの半七捕物帳の中「筆屋の娘」を脚色上演したいといふので、承諾。

日曜報知の原稿三枚をかく。あはせて十五枚、これで第三回脱稿。直ぐに報知社へ発送。

午後三時頃から四谷を散歩。四時過るころ帰宅。

前田の戯曲「ある職業婦人素描」を編集、舞台三月号の原稿である。

七時ごろ入浴。読書。森部は宵から羽田の友人をたづねて、九時ごろ帰宅。

十時半就寝。

十一日（月曜）晴（五十一度）

午前八時半起床。

三橋からフランス劇の原稿を送つて来たので、返書。小寺君の「近世日本舞踊史」の紹介三枚をかき、三橋の原稿と共に中野に郵送。

午後二時頃から銀座を散歩。松屋と伊東屋で文房具などを買つて、三時十五分帰宅。やがて山下が来て、十分ほど話してゆく。

山下が帰ると間もなく、中野から郵書が来て、家庭の用向で帰阪するといふので、その旨を山下に通知。

松竹から懸賞脚本四編をとゞけて来たので、已に読み終つた分への九編を渡してやる。日曜報知の中代君から原稿うけ取りの返書が来た。

七時ごろ入浴。懸賞脚本一編をよみ終る。

十時半就寝。今夜は暁まで眠られなかつた。

十二日（火曜）晴（五十度）

午前八時起床。昨夜不眠のために頭が重い。

新聞をみると、麹町区役所の宮尾君が区長に昇進したとあるので、取りあへず祝状を発送。日曜報知から原稿料を送つて来たので、返書。松竹の木村君に郵書を送る、

懸賞脚本の件である。

おさきは宿下りで、大磯の実家へゆく。

午後二時頃までに懸賞脚本三編をよみ終る。朝は寒かつたが、午頃から南風強く吹き出して、次第に暖くなる。読書。七時過るころ入浴。おさきは九時ごろ帰宅。

十時就寝。南風吹きやまず、温度いよく昇る。今夜は安眠。

十三日（水曜）晴（五十七度）

午前八時起床。快晴。風やんで春めく。

大村から明治座の劇評を送つて来たので、返書。その劇評を山下に発送。

佐久間の上目黒分譲地が旧臈末に地ならしを終つたといふので、午前十一時半頃から森部同道で見分に行く。なるほど地均しは済んでゐるが、庭園となるべきあたりの置き土がよくない。これは家屋落成の上で、更に置き土をするの外はあるまい。道玄坂下で喫茶。二時ごろ帰宅。晴れて暖く、外套を着てゐると、汗ばむほどであつた。

留守中に松竹の浅野君が来て、脚本七編をとゞけて行つた。真山君閲覧済の分である。そのうちには中野、山下、林二九太等の作もあるので、取りあへずその旨を額田と林君に通知。但し最後の決定はまだ判らない。

菅野君が来て、過日たのんで置いた感冒薬をとゞけて呉れた。

三時半頃に浅野君は黒川君同道で再び来訪。黒川君は「なこそこの関」の上演料をくれ、浅野君は予選通過の脚本について種々の話があつた。応募脚本の総数は四百九編、その中で予選を通過したもの廿六編であるといふ。

つゞいて丸尾君が来て、昨夜帰京したとて琴平のみやげを呉れ、五時半頃まで話してゆく。

懸賞脚本をよむ。七時過るころ入浴。日が暮れて、温度いよ／＼昇る。

十時半頃までに脚本二編をよみ終る。十一時就寝。

十四日(木曜)陰、晴(五十二度)

午前八時起床。

朝から懸賞脚本をよむ。松竹の使が又もや一部の脚本を持参、早く読んでくれといふので、更にそれを一読、すぐに速達便で松竹へ返送。

午後一時頃に額田が来て、一時間あまり話してゆく。夕方まで脚本三編を読み終る。かなりに疲れた。

七時ごろ入浴。九時半頃までに又もや一編をよむ。最初より併せて廿六編、これで予選全部を読したのである。なにしろいづれも百枚前後の作であるから、それからそれへと読み続けるのは容易でなかつた。

前橋の藤嶋君から寒見舞の郵書が来たので、返書。宮尾君から祝辞の礼状が来た。

十時半就寝。

十五日(金曜)晴(五十四度)

午前九時起床。

春陽堂の使が来て、半七捕物帳(大衆文庫)一万部の捺印を求めたので、森部に手伝はせて捺印し終る。

十一時頃に木村君が来て、懸賞脚本選定について打合せあり、一時間ほど話してゆく。二三日中に真山君等と会合して、最後の決定をする筈である。

懸賞脚本審査の経過をかく。舞台の原稿である。

稲田黄洋君が来て、梅花と短尺をとゞける。短尺には私の俳句をかいてくれといふのである。山崎が来て、一月分の会費をとゞけてゆく。

五時半頃に岡君来訪、玄関で話してゆく。歌沢節の件である。つゞいて松竹の浅野君が来て、いよ／＼脚本の最後の決定を来る十七日に行ふことにしたから、当日午後一時までに松竹本社へ出張してくれと云ひ、これも門口で帰る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十六日（土曜）陰（五十度）

午前九時起床。朝から陰つて寒い。

婦人倶楽部の上野（君）から原稿依頼の郵便が来たので、断りの返書。

十一時頃に上松の武雄が来て、一時間ほど話してゆく。

稲田君に頼まれた短尺三枚に揮毫、星野君宛に返送。

午後一時過る頃に、山梨の河野君が来て、一時間あまり話してゆく。そのあひだに天野雉彦君の紹介で山村といふ学生が来た。自作の戯曲を見にくれといふのである。

懸賞脚本の読後感をかく。これも舞台の原稿である。

なか／＼煩さい。夕より雨。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜も午前三時頃まで眠らず。

十七日（日曜）晴（五十度）

午前八時半起床。晴れてはあるが、風が寒い。

けふは懸賞脚本の審査決定の当日であるので、十二時半頃から新富町の松竹本社へ出てゆく。

大谷君、木村君、真山君、左団次、私をあはせて五人、協議の結果、何分にも第一等に選出するほどの作品は見出し得ないので、賞金三千円を二等三編（各五百円）選外佳作六編（各二百五十円）に分配することとし、二等は麻田公輔（蓮華堂晃二）木曾義仲（中野実）平賀源内

額田と中野に通知。

七時過るころ入浴。読書。星野君から短尺受取りの返書が来た。

十時半就寝。

十九日（火曜）晴（五十度）

午前九時起床。

「応募脚本を読みて」を書き終る。あはせて十枚。

午後二時過るころに中野が来て、唯今松竹本社へ行つて大谷君に面会して来たといひ、一時間ほど話してゆく。中野に舞台の原稿二種を渡してやる。「舞台」二月号には付録として、中野の「木曾義仲」真山君の応募脚本選評、私の選評、入選諸君の作談等を掲載する筈である。おさだが子供をつれて年賀に来た。

足立君と真川君に郵書を送る。山梨の河野君から郵書が来たので、返書。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十日（水曜）陰、晴（四十七度）

午前九時半起床。陰つて寒い。

諸新聞に松竹懸賞脚本審査の結果が発表されてゐる。

額田から郵書が来たので、返書。「舞台」原稿の件に付、中野にも郵書を発送。

日曜報知の続稿をかく。夕方までに七枚。

四時半頃に佐久間が来て、一時間あまり話してゆく。大村から中野等当選祝の郵書が来たので、返書。池田君の使が来て菓子をくれた。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十一日（木曜）晴（五十一度）

午前九時半起床。

池田君に昨日の礼状を発送。日曜報知の続稿をかく。午後一時頃に岸井が来て、一時間ほど語る。つゞいて豊国社の高田君が来て、雑誌「松竹」の原稿料をくれた。

三時四十分頃に岡君が来て、中野の「木曾義仲」の舞台監督を引受けたといひ、種々打合せなどありて五時半頃に去る。中野にもその旨を通知、岡君方へ一度挨拶にゆくやうに云ひ遣る。

けふは来客が多かつたので、夕方までに原稿三枚。

読書。鷲尾君から選外佳作入選の礼状が来た。

七時半ごろ入浴。夕刊をみると、本日午後三時三十分衆議院解散。

十一時就寝。

二十二日（金曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。

清見陸郎君がいよ／＼岡本文声と名乗つて、新興新内

節に加入し、来る三十日その名披露会を開くといふので、取りあへず入場券五枚を引受けることとし、その料金を小為替で発送。

日曜報知の続稿をかく。午後一時三十分頃から四谷を散歩。晴れて暖い。

二時半帰宅すると、佐久間が待受けてゐて、松竹懸賞脚本応募者控の帳面を貸してくれといふ。応募者全部に「舞台」二月号を寄贈する為である。佐久間は三十分ほど話してゆく。

夕方までに原稿五枚をかく。あはせて十五枚、これにて第四回脱稿。すぐに報知社に郵送。

七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（土曜）陰、雨（四十八度）

午前九時起床。

中村多嘉子の戯曲「旅鳥」を編集、舞台の原稿である。

陰つて折々に細雨。午後一時頃に鷺尾君が懸賞脚本入選の挨拶に来て、一時間半ほど話してゆく。

小野金次郎君の戯曲「紫野見物」を編集。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十四日（日曜）晴（五十一度）

午前八時起床。

神奈川の近藤といふ人から郵書が来たので、返書。懸賞脚本の件である。

十一時頃に松居君が子息の桃多郎君同道で来訪、懸賞脚本入選の挨拶である。一時間あまり話してゆく。

午後一時頃から四谷を散歩。二時過る頃帰宅。

三時頃に正岡君が来て、一時間あまり語る。浦岡君の細君が年賀に来て、これもおえいを相手に一時間ほど話してゆく。

小野君の戯曲を編集し終る。池田君から返書が来た。読書。七時半ごろ入浴。十時半就寝。

二十五日（月曜）晴（五十四度）

午前九時起床。

午後十二時半頃から四谷を散歩。杉浦喫茶店で喫茶。けふも晴れて暖い。

帰つて読書。報知の中代君から原稿うけ取りの返書が来た。

ふたば会例会で、五時半頃に額田が来た。ついて大村、山下、岡田、山崎、塚原、岸井、富塚、中野、佐久間、三橋が来た。

額田は松竹へ行つて、観劇会の打合せをして来たといふ報告あり。今月から私が江戸講話を始めることになつ

たので、江戸の手習師匠について一時間あまり語る。十時散会。

入浴。十二時就寝。

二十六日（火曜）陰、晴（五十四度）

午前十時起床。

多田芳枝の戯曲「柿の木の蔭に」を編集。

原君が来て、自作の原稿を置いてゆく。豊田君が来て、楽焼の菓子器をくれた。大阪の堀から郵書が来たので、返書。

「柿の木の蔭に」を編集し終りて、更に園義雄君の「毎日斯うでもありません」を編集、いづれも「舞台」の原稿である。

十二時半頃に上松のおすゝが年賀に来て、三時頃まで話してゆく。

つゞいて額田が来て、観劇会はいよ／＼二月八日に決定すると云ひ、それらの打合せをして帰る。その節、額田は二等当選脚本「平賀源内」の原稿を借りて来たので、森部に命じて浄書させる。これも「舞台」の原稿である。

五時過る頃に渡辺の愛子が来て、三十分ほど話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（水曜）晴（五十一度）

午前九時起床。

歌沢寅右衛門の使が来て、大色紙二枚を持参、裏に私を作つて与へた新曲「夢のあと」と「多摩の秋」の二種を稽古に出すに付、私の証明書のやうな物をかいてくれと云ひ、三十分ほど話してゆく。

山梨の河野君から郵書が来たので、返書。茨城の黒岩といふ人から郵書が来たので、これにも返書。

午後一時過る頃に名古屋新聞東京支局の大島君が来て、劇に関する談話を聴いてゆく。

山田市の神路社から俳句の選をたのんで来たので、選了。ほかに短尺四枚を書く。寒い風が吹き出した。

読書。七時過るころ入浴。十時半就寝。

二十八日（木曜）晴（五十八度）

午前九時起床。

額田から郵書が来た。日曜報知の続稿をかき始めたが、筆が進まないので中止。

午後一時頃に花田ひで子が年賀に来て、門口で帰る。

それから散歩に出かけると、恰も額田、中野、佐久間が来たので、連れ立って歩きながら語る。歌舞伎座観劇会は二月八日に一旦決定したが、観客のうちに日曜日を希望する者が多いので、更に七日に繰上げるといふ相談

があつた。私にも異存はない。

九段坂上のカフェーで四人喫茶。額田と佐久間は松竹の本社へゆき、中野は帰宅。わたしはそれから神田を散歩。晴れて、風の無い日である。

四時過るころ帰宅。留守中に池田君が来たといふので、郵便を出して置く。銀座の富多葉から鳥料理をとどけて来た。

森部は「平賀源内」を浄書し終つたので、その編集にかゝる。

七時過るころ入浴。八時半頃に佐久間が来て、先刻松竹の本社に赴き、観劇会の日取りを七日に変更して来たといふ。上目黒の控屋敷地もいよ／＼地ならしを終つたので、控家設計図を佐久間に渡してやる。今度の工事は種々の便宜上、佐久間方へ出入りの大工に頼むことにしたのである。佐久間は一時間ほど話してゆく。

十時半就寝。

二十九日（金曜）晴（五十二度）

午前九時起床。

春陽堂の使が来て、半七捕物帳の増版二千部の捺印を求めゆく。

山梨の河野君から自作の戯曲「土と金」を送つて来たので、返書。

「平賀源内」を編集。森部は午後から滝野川の菅野君方へゆく。

一時頃に三橋が来た。つゞいて池田君が来た。又その間に浦岡の細君が俵木の母同道で来た。

三橋は三時頃に去り、池田君は四時半頃まで話してゆく。

「平賀源内」を編集し終る。大黒活版所から「舞台」二月号をとどけて来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三十日（土曜）晴（五十度）

午前八時半起床。

十一時頃に中野が来て、これから歌舞伎座の舞台稽古にゆくと云ひ、「舞台」三月号の戯曲原稿を受取つてゆく。

日曜報知の原稿をかく。午後三時頃に岸井が来て、自作の戯曲を見てくれといひ、一時間ほど話してゆく。

森部はけふも山下の戯曲「国事犯」を浄書し終る。一日に六十余枚は案外に早い。

「舞台」二月号を清水、原田、小寺、高橋、林、東儀、難波、石角の諸家へ発送。

夕方までに原稿七枚。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。二三日前から左右の耳が腫れぼつたいや

昭和七年二月

うに感じられたが、今夜は少しく痛む。例の中耳炎を發したらしい。夜半に風の音。

三十一日（日曜）晴（五十三度）

午前九時起床。

今朝も耳の工合がよくないので、坂元医師のもとへゆく。左右の鼓膜が半分ほど充血してゐるさうである。診察を受けて帰宅。森部に命じて坂元氏方へ葡萄酒を持たせてやる。

山下の戯曲「大阪の国事犯」を編集し終りて、中野に郵送。横浜の高橋から郵書が来たので、返書。山崎君の母が年賀に来て、門口で帰る。

四時頃に佐久間が大同道で来たので、控家設計について種々の打合せをする。佐久間等は一時間ほど話してゆく。

その節、佐久間が歌舞伎座観劇会の入場券八枚をとどけて呉れたので、深「■」川の山本君方と番町の東儀方へ各二枚を郵送。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は松竹懸賞脚本の審査。白蝶怪二回分（日曜報知、三十枚）ほかに舞台原稿の編集など。

一日（月曜）晴（五十度）

午前九時起床。

けふも坂元医師方へゆく。森部は庭の花壇に寒中の肥料を施す。この春は寒中が比較的温暖であつたので、各種の球根類がもう発芽した。

松沢君に頼まれてゐた短尺に揮毫して返送。歌沢寅右衛門にたのまれてゐた色紙二枚にも揮毫して返送。

おえいは大野君と浦岡君方へ歌舞伎座入場券をとどけにゆく。

日曜報知の原稿四枚をかく。どうも捗取らない。

四時頃に山下が来て、これから嫩会員の会合で新宿の白十字へゆくといひ、三十分ほど話してゆく。つゞいて六時頃に額田と中野が来て、歌舞伎座の初日を見物して来たといひ、これも白十字へゆくとして六時半頃に去る。

七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。午前四時過る頃まで眠られなかつた。

二日（火曜）晴、雨（五十二度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。おえいは青山へ墓参にゆく。

文芸春秋社からオール読物号の原稿料を送つて来たの

（翻刻担当…加瀬桃子）

で、返書。都新聞の豊島君から文芸欄に隨筆をかいて呉れと云つて来たが、病中に付断りの返書。京都の湯浅といふ人から郵書が来たので、返書。

日曜報知の原稿四枚をかく。あはせて十五枚、これで第五回脱稿。郵送。

小寺君から「近世日本舞踊史」紹介の礼状が来た。

七時半ごろ入浴。読書。八時頃から雨。

十一時就寝。夜半に雨の音が強くきこえた。

三日（水曜）晴（五十一度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

菅野君の甥の佐藤君が森部をたづねて来て、三十分ほど話してゆく。就職口の件である。

近藤君から若狭鯨をくれた。恰も横浜の高橋から支那人形と芽キヤベツを送つて来たので、返礼として芽キヤベツを近藤君方へ持たせてやる。

高橋に返書。深川の山本未亡人から歌舞伎座入場券の礼状が来た。大阪の山上から郵書が来て、六日午後五時半から「舞台」の関西支部誌友会を開くといふので、返書。

二時半頃から散歩に出て、麴町五丁目まで行きかゝると、森部が追つて来て、来客があるといふ。引返してみると、竹柴梅松君が待つてゐて、「勾当内侍」のレコー

ド吹込み延引の申訳があり、近日いよ／＼吹込むことにすると云ひ、三十分ほど話してゆく。

大村が耳の見舞に来て、歌舞伎座観劇会は成績よろしく、已に百名ほどの申込みがあつたといふ。勿論ふたば会員も運動したのであるが、この分ならば七日は相当の盛会であるらしく思はれる。

三時半頃から再び出て、四谷を散歩。四時半ごろ帰宅。読書。七時半ごろ入浴。十一時就寝。

四日（木曜）陰（五十度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

平瀬君から母死去の通知が来たので、悔み状を発送。清見君と額田から郵書が来たので、いづれも返書。

日曜報知の続稿をかく。夕方までに五枚。何分にも耳の工合がよくないので、博文館の野坂君に郵書を発して、先日約束の原稿は間に合ひ兼ねる旨を云ひ送る。

読書。七時半入浴。十一時就寝。夜半に左の耳が痛む。

五日（金曜）晴（四十八度）

午前九時半起床。

坂元医師へゆくと、往診中で廿分ほど待たされた。坂元氏帰宅して療治に取りかつたところへ、森部が来て大工が待つてゐるといふ。

療治を終つて帰宅すると、渋谷の大王（倉持政吉）が待つてゐて、新築家屋の絵図面をみせ、工事見積書をも見せる。建坪参拾五坪二合五勺で、四千二百八十五円四十五銭であるといふ。

そのほかに中野も見舞に來たが、私の帰るを待たずして去つたといふ。

大王の方は見積書の通りで頼むこととし、建具等について打合せをしてゐるところへ、佐久間が來た。佐久間と大王は午後二時頃まで話して去る。

大野君が來て、おえいに面会、七日の歌舞伎座観劇会には夫婦揃つてゆくと云ひ、三越の商品券と菓子をくれた。

歌沢寅右衛門から色紙の札狀が來た。額田から浅野武男君の戯曲を送つて來た。

三時頃から頭痛激しく、左の耳が痛む。少しく熱もあるらしいので、四時半頃から臥床。一時間ほどとうとうと眠ると、頭痛はよほど薄らいだ。

今夜は入浴を休んで、そのまゝ寝てゐる。但し午前三時頃まではおち／＼眠られなかつた。夜半に風の音。

六日（土曜）晴（五十一度）

午前八時半起床。今朝は幸に気分が好い。

「舞台」関西支部の誌友会は今夕開催の筈であるので、

大阪の山上宛に「シヨクンニヨロシク」といふ電報を發送。

坂元医師のもとへ行くこと例のごとし。麹町警察署長が今回退職に付、区内有志から記念品を贈るといふ計画あり、私にも賛成を求めて來たので、承諾。

午後一時半頃に東儀の母が大野の細君同道で來訪、歌舞伎座観劇会の案内を受けた札をいひ、三越の商品券と煙草をくれた。

つゞいて額田の細君が見舞に來て、三十分ほど話してゆく。山下も見舞に來て、門口で帰る。改造社の塩谷君も來て、門口で帰る。

四谷の坂本といふ人から見舞狀が來たので、返書。わたしは中耳炎に罹つてゐることを都新聞で知つたといふ。

河野君の戯曲「土と金」を編集。婦人公論の高田君が來て、雑誌十五週年記念のために揮毫してくれとて、色紙四枚を置いてゆく。

風呂の釜が破損したので、これを機会に瓦斯風呂にかへることにする。その工事のために、今夜は風呂を休み、

家内の者は近所の湯屋へゆく。私は病氣中で入浴しない。晚餐後、臥床。九時半ごろに佐久間が來て、明日歌舞伎座の食事時間に「木曾義仲」の座談会を開き、それを国民新聞に掲載することになったから、私にもあらかじ

め承知してゐてくれと云ひ、枕もとで廿分ほど話してゆく。

十一時頃から就寝。

七日（日曜）晴（四十九度）

午前八時起床。晴れてはゐるが、風が寒い。

報知社から原稿料を送つて来たので、返書。塩谷君から郵書が来たので、返書。坂元医師へゆく。

河野君の戯曲を編集し終る。

けふは舞台社観劇会の当日であるので、午後三時過る頃からおえいと森部同道で歌舞伎座へ出てゆく。嫩会員等もみな来てゐた。私から入場券を送つた大野夫婦、東儀母子、山本母子、浦岡、俵木の人人もみな来た。四時開場、けふは日曜のせみか、殆ど満員の盛況であつた。観劇会の来会者は嫩会員を除いて百六名。

第一「木曾義仲」を終つた後、四階の日本室で右劇評の座談会を開く。国民新聞記者、速記者、額田、大村、岡田、中野、岸井、山下、小林、佐久間と私をあはせて十一人。晚餐をすませて座談に移る。ほんの型ばかりで、差したることもなく、一時間ほど（で）終る。それから雑談。

四階から戻ると、中幕は已に終り、第二の「佐野次郎左衛門」の第一幕がもう明いてゐた。それを見物しない

で、直ぐに出る。

八時十五分ごろ帰宅。今夜も入浴せず。十時頃から寢床に入る。

おえいと森部は十時半ごろ帰宅。十一時半就寝。

八日（月曜）陰（五十度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

何分にも耳の工合が悪いので、仕事も手に付かない。頭も痛む。

午頃に額田から長文の郵書が来た。中野の細君離別の件である。つゞいて午後一時過る頃に額田夫婦が来て、右の一件に付き種々の相談があり、四時頃まで話してゆく。頭がいよ／＼痛くなる。

そのあひだに大村が来て、果物をくれ、上松のおすゞも私の見舞に来た。

大村に礼状を発送。額田にも郵書を発送。読書。今夜も入浴せず。十一時就寝。

九日（火曜）晴（五十二度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

黒川君から郵書が来て、歌舞伎座に於て十二日から六日間、マチネー興行として瓦斯会社の慰安会を催すに付、訥子と亀蔵で「権三と助十」を上演したいといふので、

承諾の返書。

午後一時頃に大工が建具屋同道で来て、控家の材木仕入れ金千参百円を受取り、一時間ほど話してゆく。

私の家の風呂はまだ工事が出来ないもので、けふは午後三時頃から麴町四丁目の萩巢の湯へゆく。久しぶりで銭湯に入浴したのであるが、以前に比べると、すべての構造が著るしく進歩した。

新潮社の寺沢君に郵書を発して、病氣のために原稿が間に合ひ兼ねる旨を通知。
読書。十時半就寝。

十日（水曜）雪、陰（四十七度）

午前九時起床。夜半より雪が降り出して、家根も庭も白くなつてゐた。

新聞をみると、昨夜八時二分、前蔵相井上準之助氏が選挙応援演説のために、本郷元町の小学校へ赴きし際、ピストルを以て狙撃せられ、即死。犯人も現場で捕はれたといふ。

雪は止んで陰る。坂元医師方へゆきて帰宅すると、頭痛が激しくなつたので、下座敷に床を敷かせて寝る。

植田の細君が来た。東儀の母が観劇会の礼に来た。

午後には中島が帰京したとて、細君同道で来た。林二九太君、中野、山下の三人が連れ立つて来て、今日松竹

から入選脚本の賞金を受取つたといふ。

浦岡の細君が俵木同道で来た。これも観劇会の礼である。竹柴梅松君が来て、「勾当内侍」レコード吹込みの謝礼をとじてゆく。新潮社の寺沢君が見舞に来た。ほかに正岡君も来た。利倉幸一君が脚本入選の挨拶に来た。朝来の来客あはせて十「四」〈三〉人、私はすべて面会せず、おえいが応対したのであるが、大かたは玄関先で話して帰つた。

夕方から頭の痛みもやや軽くなる。床の上に起き直つて読書。

額田と三橋から郵書が来た。

十時半頃から再び寝る。

十一日（木曜）陰（四十五度）

午前九時起床。けふは紀元節、朝から陰つて寒い。

森部に命じて、麻布の海野方へ菓子折を持たせてやる。坂元医師へゆく。有門茂君が脚本入選の挨拶に来て、門口で帰つたといふ。

額田の細君が来た。やはり中野の件である。午後には木村君が来て、懸賞脚本審査の礼物をとじてゆく。

利倉君と有門君に礼状を発送。額田にも郵書。竹柴梅松君にも吹込み料受取の返書。

風呂屋の職人が来て、風呂の釜を瓦斯釜と換へる。午

後三時頃から森部同道で萩巢の湯にゆく。

三時半頃に佐久間が来て、一時間あまり語る。けふは幸に頭痛もしないが、何分にも寒気が強いので、入浴後は寢床の上に座つてゐる。

十時半就寝。

十二日（金曜）晴（五十四度）

午前八時半起床。坂元医師へゆく。

婦人公論社に頼まれてゐる大色紙四枚に揮毫。

午後一時頃から四谷を散歩。二時ごろ帰宅すると、葉山の吉田隆子が来て、一時間あまり語る。つゞいて額田が来て、これも四時過る頃まで話してゆく。浦岡君と小川君方へ果物を持たせてやる。

六時頃に岸井が来て、八時頃まで語る。

けふは午後から瓦斯会社の職工が来て、風呂へ瓦斯管を引いて行つたので、八時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

十三日（土曜）晴（五十五度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。晴れて暖い。

松竹の木村君から病氣見舞として、長命寺の桜餅をどけて来た。向島付近はまったく昔と変つたといふが、長命寺のさくら餅は今も繁昌してゐると見える。それを

食ひながら、一種今昔の感に堪へなかつた。

木村君に礼状を送。田郷君から郵書が来たので、返書。前橋の藤嶋君から病氣見舞の郵書が来たので、返書。

十二時頃に津沢の寿子が子供をつれて来た。午後一時頃に富塚が病氣見舞に来た。寿子は先づ帰り、富塚は二時過るころに去る。

日曜報知の中代君が来て、門口で帰る。東京日日の金子君が来て、同新聞が近日三万号を発行するに付、私にも在社中の思ひ出四五枚をかいと云ひ、これも門口で帰る。

取りあへず東京日日の原稿三枚をかく。朝来下痢、なんだか気分が悪いので、今夜は入浴を休む。

中野の件に付、額田、小林、山下等が今夜わたしの宅に会合する筈であつたが、誰も来なかつた。いづれも優柔不断の連中であるから、相談が決着しなかつたと察せられる。

読書。上松の武雄から病氣見舞の郵書が来たので、返書。

十時半就寝。十一時ごろから安眠。近来こんなに安眠したのは珍しい。

十四日（日曜）雨（五十二度）

午前九時起床。早朝に額田の細君が来て、小林と山下

は昨夜額田方に会合したが、深更まで議論纏らず、小林は額田方に一泊。今朝更に会議を開いて、午後三人連れ立って私の宅へ来るといふ。この事件については、細君もしば／＼奔走、まことに気の毒である。

坂元医師へゆく。東京日日新聞の原稿二枚をかく。あはせて五枚。「前後七年」と題して郵送。有門君から返書が来た。

終日細雨。午後三時頃に額田、小林、山下が来たので、下座敷の八畳で協議。五時半から晚餐を俱にし、結局額田が中野をよび寄せて忠告を試み、それを肯かざる場合には嫩会より除名することに決して、七時ごろ退散。

七時半ごろ入浴。読書。森部は新橋演舞場の新興劇見物にゆきて、十時ごろ帰宅。

十時半就寝。昨夜にひきかへて今夜は眠られず、午前六時を過ぎてやうやく眠る。

十五日（月曜）陰、雨（五十六度）

午前九時半起床。

坂元医師へゆく。右の耳は大分よくなつたが、左の耳がまだ悪いといふ。

上野つぎ子の舞踊劇を編集、昨夜不眠のために頭が重い。

午後、大村と中村が見舞に来て、門口で帰る。

「大」〈中〉村は菓子をくれたので、坂元医師方へとゞけさせる。大村は椎茸をくれたので、近藤君方へ分配。読書。七時ごろ入浴。八時頃から雨。十時就寝。

十六日（火曜）晴（五十八度）

午前九時半起床。坂元医師へゆく。

午頃に渋谷の土田電機商會が来て、目黒の控家の電燈取付けに就て問合せてゆく。晴れて暖い。

それから町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。永田の老主人は胃癌であるといふ。私とも久しい馴染であつたが、気の毒なことである。

浅野君の戯曲「国の市の夢」を編集。森部は佐久間と目黒の普請を見に行つたが、切組みの工事も進捗、来る廿五日か廿八日頃には棟上げをすることになるであらうといふ。案外に早い。

読書。七時ごろ入浴。十一時就寝。

十七日（水曜）晴（四十八度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。風が寒い。

額田から郵書が来て、鎌倉にある甥の容態が悪いといふ通知に接して、これから鎌倉へ急行するといふ。額田もなか／＼多事である。

塩谷君、川上君、中島から郵書が来たので、返書。

午後には日曜報知の続稿五枚をかく。あはせて十二枚、これで第六回脱稿、すぐに郵送。東京日日の金子君から原稿うけ取りの返書が来た。

読書。七時ごろ入浴。十一時就寝。

十八日(木曜)晴(五十度)

午前九時起床。坂元医師へゆく。

額田から重ねて郵書が来たので、返書。

藤沢清造君の葬儀が午後二時から芝公園の源興院で営まれるといふので、森部を代理として香典を持たせてやる。

午後一時頃に岸井が来て、三時頃まで語る。ついで山下が来て、四時頃まで語る。山下の細君は近日出産するといふ。いづ方も多事である。

岸井の戯曲「足の商売」を編集。夕刊をみると、松竹会社では新派のために又もや懸賞脚本募集の企てがあるといふ。その締切は五月十日である。

読書。日曜報知の中代君から原稿うけ取りの返書。

総選挙の期日切迫して、各候補者の推薦状が続々来る。而も例に比すれば全体に活気がないやうである。

七時半入浴。十時半就寝。

十九日(金曜)晴(五十度)

午前九時起床。坂元医師へゆく。

第一書房の堀川君から灰野庄平氏の遺著「大日本演劇史」を送つて来たので、返書。松竹の木村君に郵書を発して、今回の懸賞脚本も「舞台」誌上に発表するやうに頼んで置く。

午後一時頃に額田が来て、自分も懸賞脚本の件についてこれから松竹へゆくと云ひ、二時頃まで話してゆく。ついでに気賀君子が見舞に来て、門口でおえいと話して帰る。

岡田の戯曲「女給時代」を編集し終る。気賀君子にも礼状を発送。

四時頃に佐久間が来て、目黒の控家は廿八日上棟式を行ふ筈であると云ひ、一時間ほど語る。そのあひだに中央公論社の松本君が原稿の催促に来たが、病中であるから直ぐには起稿できぬと断る。その節、松本君はこれから自分の社へも「舞台」を寄贈して貰ひたいと云ひ置いて行つたので、取りあへず二月号を郵送して置く。

読書。七時半入浴。十時半就寝。

二十日(土曜)晴(五十二度)

午前九時起床。坂元医師へゆく。

小林から郵書が来たので、返書。横浜の高橋から郵書

が来たので、これにも返書。

けふは総選挙当日であるので、十二時頃から出てゆく。選挙場は麴町小学校で、その裏門はわたしの家の前であるから、便利がよい。

原田君から郵書が来たので、返書。葉山の吉田隆子から郵書、これにも返書。鈴木郷夢君にたのまれてゐた短尺五枚に揮毫。

四時頃に寺田君が来て、一時間ほど話してゆく。その依頼によつて、都新聞社の伊原君宛の紹介状をかく。

大村が来て、三島の芹一籠をくれ、門口で帰る。額田から郵書が来て、細君の従弟が死去したので、これから夫婦連れで千葉へ出向くといふ。額田一家もなか／＼多事である。

七時半入浴。読書。十時半就寝。

二十一日（日曜）晴（五十度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。風が寒い。

新聞をみると、守田勘弥は奇病にかゝり、或は舞台に立てぬかも知れぬといふ。どんな病気か知らぬが、困つたことである。

木村君から返事が来て、懸賞脚本掲載の件は承知、左団次一座は来月九州地方を巡業するに付、「番町皿屋敷」と「浪花の春雨」を上演したいといふので、承諾の返書。

帝国劇場から昭和七年度の優待券を送つて来たので、返書。大村にも昨日の礼状を送送。

田郷君から「改造」三月号を送つて来たので、返書。それには田郷君作の戯曲「■」 「支那」が掲載されてゐるのである。

午頃に渡辺の愛子が来た。一時過頃に森本君が来て、中野の件について二時間あまり話してゆく。この一件、どうにか無事に解決しさうである。取りあへず其次第を額田にも通知して置く。

六時頃に岸井が来て、八時頃まで語る。それから入浴。読書。十時半就寝。

二十二日（月曜）晴（五十一度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

中島から郵書が来て、いよ／＼碑文谷に一戸を構へたといふので、返書。

豊国社の高田君が来て、三月号の雑誌と原稿料をとゞけてゆく。

午後一時頃から四谷を散歩。二時半頃帰宅。

森部の兄から郵書が来たので、返書。高梨花人君から新婚の通知があつたので、返書。鈴木千枝雄にも郵書を發送。

読書。七時半ごろ入浴。十一時就寝。

二十三日（火曜）晴（五十度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。風が寒い。

午後、おえいは森部同道で渋谷の佐久間方へ挨拶にゆく。控家の上棟式も近いたので、佐久間の祖父に逢つて置くのである。

額田から郵書が来たので、返書。森本君にも郵書。黒川君から郵書が来て、三月の新歌舞伎座で「長柄の人柱」を上演したいといふので、返書。

午後一時頃に春陽堂の使が来て「半七捕物帳」の増版二千部の捺印を求めてゆく。

渡辺の博が来て、来月いよ／＼農科大学を卒業するに付、学校の紹介で旭川の酒釀会社に雇はれることになったといふ。北海道は少し遠いが、この時節柄であるから進んで行くの外はあるまい。

二時過る頃におえい等帰宅。

改造社の塩谷君が来て、私の全集第一巻を来月発行するに付、写真を貸してくれといひ、それから雑談を試みてあるうちに、黒川君が来た。わたしの返書と行き違ひになつたのである。

新潮社の寺沢君が来て、来月四五日頃までに是非寄稿してくれと云ひ置いてゆく。黒川君は先づ去り、塩谷君は四時半頃まで話してゆく。

婦人公論記者が来て、揮毫の色紙を受取つてゆく。五

時頃に佐久間が先刻の礼に来て、おえいと四十分ほど話して帰る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十四日（水曜）晴

午前八時起床。坂元医師へゆく。今朝も風が寒い。

綺堂大全集の序文三枚をかく。それから写真版にするための短尺をかく。別に塩谷君宛の郵書をかく。

寺田君から郵書が来て、廿二日に伊原君を訪問したといふ。返書。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（木曜）雪（五十度）

午前九時起床。けふから床の間に雛を飾る。

坂元医師へゆく。十一時帰宅する頃には雪紛々と降り出して来た。

新潮社の原稿をかく。四時頃までに五枚。改造社の塩谷君から原稿うけ取りの返書が来た。大黒活版所から「舞台」三月号をとどけて来た。

暮れても雪降りやまず。今夜はふたば会例会で、小林が先づ来た。つゞいて三橋、大村、山下、中島、岸井、佐久間、山崎が雪を冒して来た。例に依て劇談、雑談。八時半頃に大村が先づ去り、九時過る頃に一同散会。そ

の頃には雪も小降りになった。

それから入浴。十一時半就寝。

二十六日（金曜）晴（五十三度）

午前九時半起床。快晴。

昨夜の雪は五寸以上に達した。路が悪いので、今朝は医師へ行かない。

改造社の使が来て、「修禪寺物語」の増版捺印を求めゆく。日曜報知から原稿料を送つて来たので、返書。

新潮社の原稿をかく。夕方までに七枚。午後二時過るころに額田の細君が来て、一時間あまり話してゆく。

鈴木余志子から郵書が来て、夫の前田君は上海事件のために召集されたといふ。東京横浜からも続々召集されるやうである。

「舞台」三月号を林、清水、高橋、東儀、原田、難波の諸家へ発送。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（土曜）晴（五十度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

新聞をみると、昨日の東京市の雪かき料一万二千円を越えたといふ。

鈴木千枝雄と高橋から郵書が来た。

新潮社の原稿をかきつゞける。午後一時半頃に森本君が来た。やはり中野の問題について一時間あまり話してゆく。

夕方までに原稿十六枚、あはせて廿八枚で完結、題は「西瓜」といふ。すぐに新潮社へ発送。川尻君から速達便が来て、新歌舞伎の「長柄の人柱」の幕切れを少しく変更したいといふので、承諾の返書。

七時頃に大工が来て、目黒の棟上げは降雪のために延引、来月二日に举行するといふ。そのあとから佐久間も来た。大工は棟上げの祝儀、酒代、蕎麦代を受取つて先づ去り、佐久間はあとに残つて四十分ほど話してゆく。それから入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（日曜）晴（四十八度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。風が寒い。

近作の俳句を訂正、浄書。

午後二時頃に鈴木余志子がその夫の前田賢君同伴で来た。前田君はいよ／＼召集されさうであるので、一先づ世帯を畳んで横浜の実家に同居するといひ、一時間あまり話してゆく。前田君は自画の半折をくれた。

小林の戯曲「淡路から来た母」を編集。鼻加答児を起したとみえて、無暗に涙が出て困つた。

松沢雪松君が来て、例のウドを呉れ、短尺の揮毫をた

のんで行つたので、直ぐに八枚に揮毫。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（月曜）晴（五十度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

額田から郵書が来た。原田君から「舞台」の礼状が来た。新潮社の寺沢君から原稿うけ取りの返書が来た。

午頃に水谷君が来て、八重子と共に紀尾井三番地に移転して来たといひ、一時間あまり話してゆく。小川君から草花の鉢植をくれた。

小林の戯曲を編集し終つて、すぐに岸井方へ郵送。

三時頃に額田が来て話してゐる処へ、山下が母をつれて来た。山下の細君が近日出産するに付、母を郷里から呼び寄せたのであるといふ。山下等は先づ去り、額田はあとに残つて話してゐると、更に又岸井が来た。

額田は五時過る頃に去り、岸井は六時頃まで話してゆく。

七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は白蝶怪二回（日曜報知、廿八枚）西瓜（文学時代、廿八枚）ほかに「舞台」の編集など。

（翻刻担当…鈴木彩）

昭和七年三月

一日（火曜）晴

午前八時起床。坂元医師へゆく。

太田君の戯曲「賑かな孤独」を編集し終る。更に「甲字樓劇談」二枚を書く。

午後二時過る頃におえいとおとく帰宅。白木屋へ買物に行つたのである。

つゞいて岡田禎子が来て、二月分の会費をとゞけ、三時過る頃まで話してゆく。帝劇の荻野君が山本君の使として来訪、細野多賀子の戯曲を見てくれと頼んでゆく。中村孝子が来て大阪のみやげをくれ、門口で話して帰る。つゞいて佐久間が来て、明日いよ／＼建前を執行するといひ、五時頃まで話してゆく。森部は佐久間と帝劇のキネマを見物に出てゆく。

七時半入浴。読書。十時半就寝。

二日（水曜）陰、晴（五十三度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。昨日貰つた大阪みやげを持参。

大阪の山上から病氣見舞の品を中村に托して来たので、右受取りの返書。

けふは目黒の控家棟上げの日であるので、十二時頃か

ら森部同道で出てゆく。空も幸に晴れた。

普請場には大工と仕事師等十七八人で今や建前の最中であつた。佐久間も来てゐた。二時半頃には工事も略ぼ終つたので、佐久間、森部と三人連れで道玄坂に出て、棟上げ祝の蕎麦を喰ひ、こゝで佐久間に別れて三時半ごろ帰宅。あまり暖い日でもなかつたが、風の無いので凌ぎ好かつた。

前橋の藤嶋君から郵書が来たので、返書。中島の戯曲三種をよむ。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三日（木曜）晴、陰（五十六度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

「甲字楼劇談」をかく。一昨日の分をあはせて八枚。午後、四谷を散歩。けふは寒気も弛んで、花曇りともいふべき空である。一時半ごろ帰宅。

大阪の森田から郵書が来て、或は近日召集されるかも知れぬといふ。取りあへず返書。菅野君から一向にたよりの無いので、病後の経過問ひ合せの郵書を発送。

「白蝶怪」第七回四枚をかく。四時頃におさだが子供を連れて来て、一時間ほど話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。九時頃に大工が来て、電気工事の見積り書をとゞけ、三十分ほど話してゆく。

十時半就寝。

四日（金曜）晴（五十四度）

午前八時起床。

早朝に東京瓦斯会社指定の風呂屋といふのが来て、目黒の宅の据風呂の註文を聞いてゆく。頗る気の早いことである。

坂元医師へゆく。額田から有門君の懸賞当選脚本「麻田公輔」を郵送して来たので、返書。

「舞台」四月号編集用のために、取りあへず「麻田公輔」をよむ。百三十枚以上の長編であるので、二回に分けて掲載することとし、私の「甲字楼劇談」と共に岸井へ郵送。

中島の喜劇「仏蘭西人形」高谷君の舞踊劇「口弁慶」を編集。これは「舞台」五月号の原稿である。来客がないので、仕事は捗取る。

七時過る頃入浴。読書。十時半就寝。

五日（土曜）晴（五十八度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

「白蝶怪」をかきつゞける。晴れて暖く、南風が吹く。

午後二時頃に菅野君が来て、一時間ほど語る。菅野君は脱腸手術の後、まだ完全に快癒せぬといふ。

春陽堂の使が来て、「半七捕物帳」増版の捺印を求めてゆく。大京堂の使が来て、同じく「半七捕物帳」の増版捺印を求めてゆく。

佐久間が来て、外国語学校専修科の入学届を提出して来たと云ひ、一時間ほど話してゆく。

六時頃に大工が来て、更に工事の内金壹千円を受取り、これも一時間ほど話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

六日（日曜）晴（五十九度）

午前八時半起床。坂元医師へゆく。

佐藤今朝太郎君来訪。菅野君の甥で、森部の就職口を紹介したいと云ひ、一時間あまり話してゆく。

前田曙山君の次男葬儀が午後一時から青山斎場に於て執行されるので、森部を代理に出してやる。晴れて暖い日となった。

「白蝶怪」をかきつづける。そのあひだに四谷を散歩。夕方までに原稿七枚、あはせて十五枚、これで第七回脱稿、直ぐに報知社へ発送。

大村の戯曲「母の袴」を編集。六時頃に岸井が来て、七時頃まで語る。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

七日（月曜）晴、陰、雨（五十二度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

午後一時過る頃に中島が来た。ついで小林が来た。小林はいよゝ拓務省を辞職することにしたといふ。二人は三時過る頃まで話して帰る。

北尾君の戯曲「つかまへる」俵木の戯曲「お祖母さん子」をよむ。

七時頃から雨。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

八日（火曜）陰、晴（四十九度）

午前八時起床。陰つて寒い。

坂元医師へゆくと、外診に出て不在、三十分ほど待つてゐたが帰らないので、そのまゝ帰宅。

おえいは森部を連れて、目黒の普請場へゆく。午後一時頃に黒川君が来て、「番町皿屋敷」と「長柄の人柱」「権三と助十」の上演料をくれ、三十分ほど話してゆく。二時頃におえい等帰宅。それから四谷を散歩。

四時半頃に額田が寺田君同道で来た。あとから岸井も来て、六時頃まで話して去る。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

九日（水曜）晴（四十八度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。寒い風が吹く。

立教大学の本庄といふ人が来て、同大学の教授根岸といふ人が米国人と共同で日本作家の戯曲七種を英訳、米国で出版することになったが、その中に私の「自来也」を加へたいといふ。承諾。

「白蝶怪」第八回をかく。三時過る頃に俵木が北海道の林檎を持参、一時間ほど話してゆく。

夕方までに原稿七枚をかく。新歌舞伎座の使が来て、十一日の入場券四枚をとゞけてゆく。

畑君からその著「光の序曲」を送つて来たので、返書。

七時半入浴。読書。十一時就寝。今夜は午前四時頃まで眠られなかつた。

十日（木曜）晴（五十度）

午前九時半起床。

坂元医師へゆく。治療も済んで雑談中、森部が迎ひに来たので帰宅。その途中、三町目の花屋で緋桃の鉢植を買つて来た。

帰宅すると、土田電機商会の店員が待つ（てゐ）て、いよ／＼目黒控家の電燈装置に着手するといひ、その見積り書をみせてゆく。

新歌舞伎座の入場券を山下、岸井、佐久間、中島へ郵送。

十二時過る頃に津沢の寿子が子供を連れて来て、一時

間あまり話してゆく。

有門君の「麻田公輔」続稿を編集、更に北尾君の戯曲「つかまへる」を編集。昨夜不眠のために頭が重い。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半に雨の音。

十一日（金曜）晴（五十八度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。晴れて春めく。

博文館から改築落成の記念品を送つて来たので、返書。真川君から郵書の通知が来たので、返書。

山下から郵書が来て、畑君は去九日女兒を死産したといふので、これにも返書。老母が定めて落胆したであらうと察せられる。

「白蝶怪」をかきつゞける。午頃に清見君が来て、今後は毎月新内の会を開くといひ、一時間ほど話してゆく。夕方までに原稿七枚をかく。七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。

十二日（土曜）陰、雨（五十五度）

午前八時半起床。坂元医師へゆく。

「白蝶怪」一枚をかく。あはせて十五枚、これにて第八回脱稿、郵送。

十一時から雨。

細野多知子の戯曲「子供たち」を編集。旧作の俳句を

訂正。

七時過るころ入浴。読書。十時半就寝。今夜も午前四時頃まで眠られなかった。

十三日（日曜）晴（六十度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

昨夜不眠のために頭が重い。十一時半頃に中野が来て、いよ／＼細君を離別して自分は本郷湯島の大和ハウスに移つたといひ、午後一時頃まで話してゆく。

それから森部同道で目黒の普請場へゆき、物置の位置などを指図し、帰途は道玄坂辺を散歩。四時ごろ帰宅。町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。終日暖い。

七時過るころ入浴。読書。細野多知子と仲井照男君から病氣見舞の郵書が来た。

十時半就寝。

十四日（月曜）陰（五十八度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

仲井君と細野多知子に返書。

午後二時頃に山下が来て、三十分ほど話してゆく。三時頃に池田君が来て、五時過る頃まで語る。

六時過る頃に額田が来て、八時頃まで話してゆく。それから入浴。読書。十時半就寝。

十五日（火曜）晴、陰（五十六度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

新潮社の丸山君が来て、「日本文学大辞典」掲載のために、わたしの写真を借りてゆく。

午後、四谷を散歩。空陰つて細雨、やがて又止む。

「白蝶怪」第九回六枚をかく。五時半頃に宮森君が来て、病氣見舞として鉢植の蘭と京都の菓子をくれ、三十分あまり話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜も午前三時頃まで眠られなかった。

十六日（水曜）晴（五十六度）

午前九時半起床。けふは坂元医師へゆかない。

十一時半頃から森部同道で日本橋の白木屋百貨店へゆく。雑貨数点を買つて食堂で昼餐。

それから散歩ながら高島屋百貨店を一覧、更に銀座へまはつて松屋へゆき、こゝでも雑貨類と西洋間用の椅子テーブルを買ふ。椅子テーブルは目黒の控家用である。

三時過る頃帰宅。留守中に原田君が来たといふ。帰宅後、間もなく佐久間が来て、控家の工事は大いに進行したといひ、一時間ほど話してゆく。

七時半ごろ入浴。額田から郵書が来て、大阪の山上は明日上京するといふ。

讀書。十時半就寢。今夜も午前四時頃まで眠られなかつた。

十七日(木曜)晴(五十二度)

午前十時起床。坂元医師へゆく。風が寒い。

宮森君から重ねて見舞状が来たので、返書。浜松の土屋君からも見舞状が来たので、返書。

午後一時頃に三橋が来て、これから大黒活版所へゆくといひ、三十分ほど語る。新潮社の寺沢君が来て、文学時代の原稿料をくれ、更に短尺二枚の揮毫をたのむ。

二時過る頃に山上が坂東弥三郎君同道で来た。大阪劇界の近況などを語つてゐると、三時半頃に額田が来た。五時頃から山上、坂東、額田等と銀座の富多葉へ行つて晚餐。久しぶりで主人の平山君に逢つたが、腎臓が悪いとかいふので頗る弱つてゐるやうに見えた。

こゝで山上と阪東君に別れ、額田と共に七時過るころ帰宅すると、山下と小林が待つてゐた。四人会談。中野と富塚との処分法に就て協議の結果、二人ともに一先づ嫩会を脱退させることに決定。そのあひだに佐久間が来て山上の宿所をたづね、門口で帰る。額田等も九時ごろに去る。

それから入浴。十一時半就寢。夜半に幾たびか眼がさめた。

十八日(金曜)晴(五十八度)

午前十時起床。けふより春の彼岸に入るといふ。

姉とおえいは私の起きないうちに、青山へ墓参に出てゆく。

けふは坂元医師へゆかない。山村総君から母死去の通知があつたので、悔み状を発送。

おえい等は墓参の帰途、日比谷の美松百貨店へ買物にまはつたと云ひ、午後一時過るころ帰宅。

富塚の父と中野に郵書を発して、嫩会脱退を通告。

三時頃に岸井と佐久間が来て、舞台叢書第二巻の体裁について相談あり。一時間ほど話してゆく。

三重県波切町の人から頼まれた短尺五枚に揮毫。七時半ごろ入浴。讀書。十時半就寢。

十九日(土曜)晴(五十六度)

午前九時起床。

坂元医師へゆく。その帰途、麴町三丁目の花屋で海棠の鉢植を見たので、一鉢を買つて坂元氏方へ届けさせる。小林蹴月君が母一週忌の配りものを持参。つゞいて原田君来訪。二人は四十分ほど話して去る。

此頃は兎角に睡眠不足勝で、頭がボンヤリしてゐる。

山形の本間君から郵書が来たので、返書。大阪の北村学といふ人から誌友の件に付き郵書を送つて来たので、

返書。

午後三時頃から四谷を散歩。四時半ごろ帰宅。「白蝶怪」の原稿二枚ほどを書いてやめる。

山村君から郵書が来て、村上浪六氏の小説を撮影した
いから紹介してくれといふ。但し私は村上氏を識らない。
七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半に雨の音。

二十日（日曜）晴（五十五度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

山村君に返書。黒川君から郵書が来て、猿之助は来月
大阪へ乗込み、中座で「小栗栖の長兵衛」を上演したい
といふ。承諾の返書。加納野梅君から転居の通知が来た
ので、返書。

片岡千代麿が来月の歌舞伎座で名取に昇進するさう
で、その挨拶に来た。朝から晴れてはゐるが、寒い風が
吹く。

午後一時半頃に大工が来て、門の設計について相談、
二時間ほど話してゆく。気の長い男である。

夕方までに「白蝶怪」五枚をかく。

今夜は山上の歓迎茶話会があるので、六時頃から新宿
の白十字へ出てゆくと、小林が先づ来てゐた。来会者は
山上と額田、山下、佐久間、岸井、三橋、山崎、ほかに
中村多嘉子も来た。種々の劇談、雑談。九時十分ごろ散

会。

九時廿分ごろ帰宅。入浴。十一時就寝。今夜も眠られ
ず、午前六時頃まで起きてゐた。

二十一日（月曜）晴（五十八度）

午前九時起床。けふは春季皇霊祭。坂元医師へ行かな
い。

十時頃に植田の細君が来た。つゞいて中島が母を連れ
て来た。母は大阪から昨日上京したといひ、大阪みやげ
を呉れて廿分ほど話して去る。

十二時頃に渡辺の愛子が津沢の子供を連れて来た。小
林の細君も子供を連れて来て、逗子のあま鯛と蝦と草花
をくれた。つゞいて深川の山本の未亡人も来た。それか
らそれへと女客がこみ合つて頗る混雑。

一時半ごろ四谷を散歩。三時頃帰宅。

「白蝶怪」二枚をかく。あはせて十二枚、これで第九
回脱稿。直ぐに郵送。

小林から貰つた魚類を麹町一丁目の小川君方へ分配。
豊国社の高田君が来て、「松竹」四月号の原稿料をとど
けてゆく。

宿所帳を訂正。七時半ごろ入浴。十時半ごろ就寝。今
夜は安眠。

二十二日（火曜）晴（五十七度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

午後一時半頃に山上が来て、明廿三日の夜汽車で帰阪するといひ、四時頃まで話してゆく。そのあひだに東京火災保険会社の外交員が来たといふ。

読書。六時頃に大工が来て、工事の内金八百円を受取つてゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

二十三日（水曜）晴、陰、雨（五十六度）

午前八時起床。けふは坂元医師へ行かない。

十時頃からおえいと森部同道で銀座の三越へゆき、小林母一週忌の供へ物をかひ、更に新宅用の諸道具数点を買ふ。私の病中に見舞品を貰つてゐるので、その返礼の品をかひ、大村、宮森、中村の諸家に発送方をたのむ。食堂で昼餐。十二時四十分ごろ帰宅。

留守中に大村「が」（へから）速達便が来てゐた。舞台の広告の件である。取りあへず返書。宮森君と中村にも送り状を発送。

朝は晴れたが、午後は陰る。東京火災の外交員黒田貞雄君が今日も来て、目黒の新宅の保険契約を結んでゆく。一千元に対して保険料二円廿銭の割合で、五千元。

つゞいて額田の細君が来て、彼岸の鮓をくれ、三十分

ほど話してゆく。

読書。六時頃から雨。七時半ごろ入浴。

九時頃から雨は雪と変つたが、間もなく止む。十一時就寝。

二十四日（木曜）陰、雨（五十二度）

午前八時起床。坂元医師へゆく。

小林君の母一週忌の速夜に相当するので、おえいは供へ物と白百合の鉢植を持参。十二時頃に渡辺の博が来た。博は農科大学を卒④（④業して、北海道旭川のビール会社へ雇はれることになつたので、饞別の金をやる。）

報知新聞社から「白蝶怪」第五、第七の原稿料を送つて来たので、返書。「小栗栖の長兵衛」の作談二枚を大阪の「道頓堀」へ郵送。

昨夜も不眠のために頭が重い。陰つて底寒い日である。読書に倦んで俳句など作る。夕方から細雨。

七時過る頃入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（金曜）陰、晴（五十四度）

午前九時起床。けふは坂元医師へ行かない。

小林君母一週忌の当日に付、十時頃から紀尾井町の小林君を訪問、仏前に焼香。それから雑談、十二時帰宅。

大村から祝物の礼状が来た。山上から郵書が来て、廿

三日夜は熱海に宿泊、廿五日の朝帰阪するといふ。

大分の中村嶽堂といふ人に頼まれた色紙二枚に揮毫、尾道市の大崎といふ人に頼まれた短尺三枚に揮毫。

読書。大阪の堀から戯曲の原稿を送つて来た。中村孝子から祝物の礼状が来た。

今夜はふたば会例会で、小林が〈先づ〉来た。つゞいて中島、大村、三橋、山下、額田、佐久間、岡田が来た。

岸井は京都行で欠席、山崎は無断欠席。七時半頃に寺田君が額田をたづねて来たので、私も面談、寺田君は三十分ほど話してゆく。今夜も「江戸時代の手習師匠」について一時間ほどの講話をこゝろみ、それから雑談。「舞台」四月号製本がまだ出来ないので、佐久間は小石川の製本屋まで催促に行つて持参。十時五十分ごろ散会。

入浴。十二時就寝。

二十六日(土曜)晴(五十七度)

午前九時起床。森部は電気局の佐藤「といふ」君をたづねるとて、早朝から出てゆく。私は坂元医師へゆく。文芸家協会で昭和六年度の戯曲集を発行するに付、私にも寄稿するやうに云つて来たが、去年はこれぞといふ作品もないので、舞台四月号所載の「名古屋の清正」を郵送して置く。

舞台四月号を清水、原田、高橋、東儀、林、難波の諸

家へ郵送。宮森君から祝物の礼状が来た。

改造社から岡本綺堂全集第一巻の奥付捺印を求めに来た。初版三千六百部である。齒齦が腫れたので、含嗽剤を用ゐる。

晴れてやゝ暖くなる。午後三時過る頃に原田君が来て、五時頃まで語る。

六時半頃に森部帰宅。七時過る頃に佐藤駒雄君が来て、八時四十分頃まで話してゆく。

九時ごろ入浴。富塚秀子と大阪の堀から郵書が来た。十一時就寝。

二十「■」七日(日曜)晴、陰、晴(六十度)

午前九時起床。坂元医師へゆく。東南の風が吹き出した。

「白蝶怪」第十回をかく。午後一時半頃に富塚秀子の母が来て、一時間あまり話してゆく。中野の一件である。つゞいて佐久間が来て、祖父の病症よろしからず、昨日から下谷病院に入院させたと云ひ、これも一時間ほど話してゆく。佐久間方も無人であるから、祖父が入院しては何かと不便であらうと察せられる。

夕方までに原稿五枚。七時ごろ入浴。

読書。森部は六時頃から新歌舞伎座へ見物にゆき、十時ごろ帰宅。

十一時就寝。夜に入るも南風やまず、氣候は俄に春めいた。

二十八日(月曜)雨(六十四度)

午前九時起床。

森部は「舞台」四月号の発送を手伝ふために、早朝から佐久間方へ出てゆく。朝は陰りて暖く、十時頃から風まじりの雨。

額田から郵書が来たので、返書。山上から廿六日帰阪の通知が来たので、返書。

十二時過る頃に黒川君が来て、大阪に於ける「小栗栖の長兵衛」の上演料をくれ、一時間あまり話してゆく。改造社から岡本綺堂全集第一巻の製本をとめて来た。

二時半頃に森部は佐久間同道で帰宅。ついで岸井が来たので、綺堂全集一部をやる。佐久間はこれから病院へゆくと云ひ、岸井と共に一時間ほど話して去る。雨は一旦晴れたが、又強く降りしきる。この雨で各所の花は俄に開くであらう。

山梨の河野君から志道軒伝について問合せが来たので、返書。川原小枝子から郵書が来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日(火曜)晴、陰(六十度)

午前九時起床。坂元医師へゆく。

「白蝶怪」をかきつづける。渋谷の医師土岐龍太郎といふ人が来て、画帖に俳句の毫を頼んでゆく。

綺堂全集を小包便に托して、宮森、清水、大村、東儀の四家に発送。

午後一時ごろ降雨、降雹、忽ち晴れて又陰る。佐久間が来た。

四時過る頃に堀河肇子^{マサコ}が来た。ついで真川君が来た。堀河は五時廿分頃に去り、真川君は六時頃に去る。

夕方までに原稿九枚、あはせて十四枚、これで第十回脱稿、郵送。

六時半頃に額田が来て、松竹から明治座の五月狂言を頼まれたと云ひ、その相談などあつて八時半頃まで話してゆく。

それから入浴。読書。十一時就寝。暮れて寒くなる。

三十日(水曜)晴(五十五度)

午前八時起床。坂元医師へゆく。風が薄寒い。森部をつかはして、湯島の山崎君方へ菓子をとげさせる。

十一時半頃から散歩ながら日比谷の美松百貨店へゆく。どこの百貨店も大同小異である。雑品数点をかひ、食堂で昼餐、一時三十分ごろ帰宅。

昭和七年四月

二時過る頃に改造社の塩谷君が来て、同社では今度俳句講座を発行するに付、わたしにも「劇と俳句」を寄稿してくれと云ひ、四時頃まで話してゆく。

脇屋実伸君の喜劇「煙突」を編集、舞台の原稿である。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三十一日（木曜）晴（五十六度）

午前九時起床。けふは坂元医師へ行かない。

池田君から郵書が来て、舞台監督のために下阪してゐるといふので、返書。

森部の兄から時候見舞の郵書が来たので、返書。

「白蝶怪」第十一回を書き始めたが、なんだか薄ら眠いので、三枚ばかりで中止。二時過る頃から四谷を散歩。四時ごろ帰宅。

読書。七時ごろ入浴。十一時就寝。

本月の仕事は白蝶怪（日曜報知、四回五十六枚）舞台の編集など。

（翻刻担当…鈴木彩）

一日（金曜）晴（五十八度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

宮森君と大村から綺堂全集の礼状が来た。中島から絵ハガキを送つて来て、姪と共に日光に滞在中であるといふ。

春陽堂の使が来て、「半七捕物帳」増版二千部の奥付捺印を求めてゆく。報知社から「白蝶怪」の原稿料を送つて来たので、返書。

午後一時頃から散歩。英国大使館前の桜はまだ咲かない。今年は余寒のために後れたと見える。陽気は春めいて来たが、風はまだ寒い。

二時頃帰宅。「白蝶怪」四枚をかく。

六時頃に額田が来て、川村君の戯曲をとどけ、一時間ほど話してゆく。

難波から「舞台」の礼状が来た。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二日（土曜）晴（六十六度）

午前八時起床。快晴。気候はいよ／＼春めく。

川村君の戯曲を編集、北尾「男」君脇屋君の原稿と共に岸井方へ郵送。これで舞台五月号の戯曲は締切りであ

る。川村君にも礼状を発送。

正午頃からおえいと森部同道で目黒の工事を見にゆく。自動車で道玄坂上まで行き、それから徒歩。工事はおひ／＼進捗して、家の外廻りなどは殆ど完備した。

佐久間が出入りの植木屋高橋春五郎同道で来て、生垣や植込みについて相談。生垣はカナメにする筈であつたが、思はしい木が揃はないといふので、柃木を植えることにする。ほかに柳、桜、寿桐、山茶花など植え込む筈である。

二時半頃にこゝを出て、途中で佐久間に別れ、再び道玄坂から自動車に乗つて、二時五十分ごろ帰宅。

誌友富岡茂平君のスピード・ドラマを編集。更に伊藤松雄君の戯曲「花の雨」を編集。斎藤梅雪君にたのまれた短尺五枚に揮毫。

七時ごろ入浴。読書。十時頃に近火といふので、森部と廻町通りへ出てみたが、人々が立騒ぐばかりで火元は判らず、空しく立帰る。あとで聞けば、三番町のボヤを三町目と誤つて、消防自動車が駆け付けたのであるといふ。

十一時就寝。今夜は午前四時頃まで安眠できなかった。

三日（日曜）晴（六十六度）

午前九時起床。けふは神武天皇祭と日曜日と一つにな

つて、朝より快晴。各所の人出が思ひやられた。

昨夜不眠のために頭が重い。午後二時頃から森部同道で新宿の布袋屋百貨店へゆき、色紙掛け、花生け、硯箱等をかひ、地下室の食堂で喫茶。古るいなから混雑していた。三時半ごろ帰宅。留守中に豊田君が来たといふ。伊藤君の戯曲を編集し終る。大分の中村君、尾道の大崎君から短尺の礼状が来た。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

四日（月曜）陰、晴（六十四度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。

東儀から綺堂全集の礼状が来た。山崎から郵書が来た。陰晴定まらず、花ぐもりと云ふやうな天気で頭が重い。午後一時頃に津沢の寿子が来て、渡辺の博も十二日出発、旭川へ赴任することになつたといふ。就てはおえい等が渡辺方に集まつて送別会を開くこととし、その日取りなどを決めて去る。

つゞいて額田の細君が来て、女中が急に暇を取ることになつたので、私方へ出入りの雇人請宿から女中を周旋して貰ひたいと云ひ、一時間ほど話してゆく。

六時ごろ散歩。あとから森部も来たので、連れ立つて英国大使館前を散歩。桜はよほど紅らんだが、まだ開かない。

七時ごろ入浴。読書。十一時就寝。三時過る頃に強震。

五日（火曜）陰、雨（五十五度）

午前九時起床。坂元医師へゆく。私の耳も大かた治癒したので、今回かぎりで一先づ治癒を休むことにする。

十二時頃から雨。額田から郵書が来たので、返書。高橋から「舞台」の礼状が来た。川村君からも返書が来た。

「白蝶怪」を書きつづけて、四時頃までに八枚、あはせて十五枚。これにて第十一回脱稿、すぐに郵送。雨やんで陰る。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

六日（水曜）陰、晴、陰（五十六度）

午前八時起床。

十時過る頃に星野麦人君来訪、その句集「草笛」と「きら星」をくれた。後者は木太刀関係者の俳句をあつめたもので、私の写真、筆跡、俳句なども掲げられてゐる。私の方からも綺堂全集一部を寄贈。星野君は三十分あまり話してゆく。森部は午後から額田方へある。

取りあへず星野君の句集をよむ。なか／＼面白い句がある。

三時過る頃から永田理髪店へ髪刈りにゆき、四時過る頃帰宅。やがて佐久間が来て、植木屋の見積り書をみせ

る。生垣、四つ目垣、地ならし、樹木の植込み等をあはせて、百五十九円である。佐久間は五時半頃まで話してゆく。

渥美君から郵書が来て、演芸画報五月号の寄稿をたのむとの事であつたが、何かゴタ／＼してゐるので、断りの返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

七日（木曜）晴、雨（五十四度）

午前九時起床。

けふは父の祥月命日に相当するので、大野君から仏前に供へ物があつた。姉とおえいは青山へ墓参にゆき、十一時半ごろ帰宅。

午後、森部同道で四谷を散歩。目黒の控家落成が近いので、そこへ備へ付けの手まはり道具数点をかひ、一時四十分ごろ帰宅。京都の天野君から転居の通知が来た。三時頃に岸井が来て、一時間あまり話してゆく。

七時から入浴。雨の音。読書。十時半就寝。

八日（金曜）雨（五十一度）

午前九時起床。細雨。

蒲田の渡辺方で博の送別会を開くといふので、おえいは十一時頃から出てゆく。土田電機商会員が来て、便所

の電灯や門柱のベル取付けに就て相談してゆく。

十一時四十分頃に鈴木千枝雄が来て、午後一時過る頃まで語る。経師屋から過日依頼の画軸二幅の表装出来したとて届けてゆく。

清水君から綺堂全集の礼状が来た。清水君は埼玉県庁を去つて、内務省の社会局に転任することになったと云ふので、返書。富国映画の山下君から「半七捕物帳」を撮影したいと云つて来たので、断りの返書。

大阪の放送局から十四日の夜に「なこそ関」を放送したいといふ電報が来たので、承諾の返書。

「白蝶怪」第十二回四枚をかく。四時頃におえい帰宅。渡辺の愛子を送つて来たので、三十分ほど話してゆく。暮れて薄寒くなる。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

九日（土曜）晴（六十度）

午前八時起床。

丹後富津の山本竹蔵といふ人から皿屋敷伝説について問合せがあつたので、返書。

十一時半頃から、森部同道で青山へ墓参。その帰途、目黒の普請場へ廻ると、佐久間も来てゐた。大工の話では工事也大抵出来、廿五日頃までには全部完成するであらうといふ。植木屋も来て、植木の生垣を結つてゐた。

普請場を出て、佐久間と三人づれで道玄坂を散歩。塩瀬で喫茶。こゝで佐久間に別れて宮益坂へ出で、興農園で草花の種子三十袋をかひ、自動車に乗つて三時廿分ごろ帰宅。

留守中に九星舎の山田君が来たといふ。舞台叢書第二巻の印刷を同舎に依頼したので、その挨拶に来たのである。取りあへず返書。

額田から郵書が来たので、返書。黒幕座の佐々木君から十日の夜に前田早苗の「牛を喰ふ女」を放送したいと云つて来たが、前田の現住所が判然しないので、兎も角も私から承知の旨を答へて置く。

六時頃に額田が来て、先日頼んで置いた女中は、自分の方に心当りが出来たといひ、八時過る頃まで話してゆく。それから入浴。

おえいは感冒の気味で早く寝る。読書。十時四十分就寝。風の音。

十日（日曜）晴、陰（六十四度）

午前九時起床。快晴、但し昨夜来の風が吹きやまない。

（午後）に渡辺の博が来て、いよ／＼十二日の夜汽車で旭川へ出発するといひ、門口で暇乞ひをしてゆく。～

午後、森部と庭に出て、花壇に草花の種子を播く。別に変つたものも無いが、併せて十七種、これだけが生長

すると花壇は定めて混雑するであらう。

二時頃に佐久間が来たので、目黒の水道工事費六十四円を渡してやる。ついで後から豊田君が来た。佐久間は四時頃に去り、豊田君は更に廿分ほど話してゆく。

堀のラヂオドラマ「大空の労働者」を一読。

七時ごろ入浴。夕刊をみると、けふの日曜の花見客は八十万人に上つたといふ。

今年の花もけふが終りであらう。いつもながら春は慌しい。

おえいは今夜も早く寝る。読書。

十一時就寝。夜半に風の音。午前四時頃まで安眠できなかった。

十一日（月曜）晴、陰（五十六度）

午前十時起床。私の起きないうちに、姉はおとくとおさを連れて花見に出て行った。

「白蝶怪」をかきつゞける。午後二時ごろ四谷を散歩。

三時過るころ帰宅。陰つて風が寒くなる。不順の氣候である。

姉たちは三時半ごろ帰宅。鶴見の花月園へ行つたのであるが、団体なども繰込んで非常に賑はつてゐたといふ。そのみやげ物を大野君方へ持たせて遣る。

夕方までに原稿九枚をかく。あはせて十五枚、これに

て第十二回脱稿。

七時半頃に放送局の小林君が来て、十四日大阪で「なこそこの関」を放送するといひ、門口で話して帰る。

読書。十一時就寝。夜半に雨の音。今夜も午前四時頃から眠る。

十二日（火曜）雨（五十六度）

午前九時半起床。

報知社から「白蝶怪」第十回の原稿料を送つて来たので、返書。読売新聞社の村上君から郵書が来たので、返書。

目黒の控家も近日落成するに付、雇人請宿に新しい女中を頼んで置いたところ、今朝ひとりの女を連れて来た。兎も角も明日から目見得奉公をさせることにする。

岸井の戯曲「才菊さん」を一読、更に堀の「大空の労働者」を編集。

終日雨やまず、今年の花もこれで散るのであらう。

七時入浴。読書。暮れて風の音も強くなつた。
十時半就寝。今夜は午前二時頃から眠る。

十三日（水曜）晴（六十度）

午前九時起床。

新しい女中が今朝から来た。山岸ひさ、廿一歳、宿は

番町であるといふ。

春陽堂から「半七捕物帳」第三、第四、第五の奥付捺印をたのんで来た。あはせて二万一千部である。購買のために売行がよいとみえる。

「白蝶怪」第十三回をかく。四時頃までに八枚。

目黒の控家移転が廿四五日頃になるかも知れないので、嫩会例会を廿日に繰上げることとし、大村、額田、小林、岡田、三橋に通知。山上から郵書が来たので、返書。常磐津節太夫が改名の挨拶に来た。

五時頃に岸井が来て、先日頼んで置いた目黒の表札をとり、一時間ほど話してゆく。

七時ごろ入浴。雨の音、忽ち止む。読書。十時半就寝。

十四日（木曜）晴（六十度）

午前八時起床。晴れてはゐるが、風が寒い。

「白蝶怪」をかきつゞける。

午後一時頃に三橋が来て、一時間ほど語る。三橋にも綺堂全集一部をやる。それから森部同道で四谷を散歩。花生けその他の雑品数点をかつて、三時半ごろ帰宅。

夕方までに原稿五枚をかく。大阪放送局から「なこそ」の関の放送料を送つて来たので、返書。大村から返書が来た。

六時半頃に春陽堂の木呂子君が来て「半七捕物帳」印

税の内金をくれ、一時間あまり話してゆく。それから入浴。

読書。少しく頭痛をおぼえた。十一時就寝。

十五日（金曜）陰、雨（六十度）

午前八時起床。やがて雨。

十時頃に杉原が来て、四十分ほど話してゆく、表の柵が傷んで来たので、杉原にその改築をたのみ、併せて応接室の壁の修繕をたのみ。

ついで山崎が来て、二月三月分の会費をとゞけ三十分あまり語る。山崎にも綺堂全集一部を遣る。

「白蝶怪」三枚をかく。あはせて十五枚、これにて第十三回脱稿、郵送。正岡（君）にも郵書を送る。額田から郵書が来た。

四時頃に佐久間が来て、五月の誌友会は日比谷の三信ビルの地下室に開くことにしたいと云ひ、一時間ほど話してゆく。

読書。七時ごろ入浴。雨は一日降り暮らして、宵から晴れた。

十一時就寝。

十六日（土曜）晴（六十二度）

午前八時起床。

目黒の工事もおひ／＼進行したといふので、十時頃から見にゆく。けふは姉とおえいとおとくと四人連れである。風は少し寒いが、晴れてゐる。

控家の建物は殆ど全部出来して、壁の上塗りにかゝつてゐた。植木屋ら生垣を結び終り、樹木を植え込み、応接間の周囲の土坡を築いてゐた。

十二時ごろ目黒を出て、道玄坂まで徒歩。こゝで昼餐、一時四十分ごろ帰宅。

留守中に松竹の木村君、中島、小林、山下等が来たといふ。

星野君から木太刀の十句選をたのんで来たので、選了更に短尺十二枚を揮毫。清見君から「修禪寺物語」を新内に作曲したとして、その原稿を送つて来たので、返書。四時半頃に木村君が再び来て、明治座の五月興行に「箕輪の心中」を上演したいといひ、五十分ほど話してゆく。

六時半頃に小林が再び来たので、綺堂全集一部をやる。ついで佐久間が来た。二人は九時頃まで話して去る。入浴。読書。十一時就寝。

十七日（日曜）晴（六十五度）

午前八時起床。

「白蝶怪」第十四回をかく。少しく風はあるが、朝か

ら快晴。

市ヶ谷の能川といふ家具屋が大工の紹介で尋ねて来た。

馬場清唱君死去の通知が来たので、悔み状を発送。馬場君は廿年前やまと新聞社で机をならべてゐたのであるが、光陰流水、私は老い、馬場君は逝く。今昔の感に堪へない。

京都の前田早苗夫婦から郵便が来たので、返書。

四時頃までに原稿六枚。それから英国大使館前を散歩。ひとへの桜はいつの間にか散つてゐた。

七時ごろ入浴。読書。夕刊をみると、けふは名残の花見で、いづこも凄まじい人出であつたといふ。今年の花もこれで終りであらう。

十一時就寝。今夜は安眠。

十八日（月曜）陰（六十二度）

午前八時半起床。

「白蝶怪」をかきつゞける。

午後一時半頃に正岡君が来て鉢植の白百合をくれ、一時間あまり話してゆく。三時過ぎの頃に山下が来て、三十分あまり語る。山下に綺堂全集一部をやる。

原稿八枚をかく。あはせて十三枚、これにて第十四回脱稿。更に第十五回三枚をかく。

七時ごろ入浴。読書。十時頃から雨の音。十時半就寝。

十九日（火曜）陰（六十度）

午前七時半起床。あかつきに大雨、やがて止む。

おえいは十時頃から世田ヶ谷の上松方を訪問。市ヶ谷の家具商が来て、目黒の応接間の壁に貼るサルブラの見本を見せてゆく。

「白蝶怪」をかきつゞけて、夕方までに十三枚。おえいは三時ごろ帰宅。七時ごろに佐久間が来て、八時頃まで話してゆく。その帰る頃から細雨。

読書。十時半就寝。

二十日（水曜）晴（六十度）

午前八時起床。晴れて風吹く。

「白蝶怪」をかきつゞける。十一時頃に中央公論社の松本君が来た。例の原稿の催促である。たび／＼のことであるから、今度こそは五月中に必ず寄稿することに約束する。松本君は一時間ほど話してゆく。

十二時半頃から四谷を散歩。一時半頃帰宅。をり／＼に陰る。

原稿三枚をかく。あはせて十九枚、これにて第十五回脱稿。この小説も完結である。

三時頃に豊国社の高田君が来て原稿料をとゞけ、三十

分ほど話してゆく。大阪の山上から嫩会の会費を送つて来たので、返書。

五時ごろ驟雨、間もなく止む。

嫩会例会を今夜に繰上げたので、五時四十分頃に大村が先づ来た。つゞいて小林、岸井、山崎、中島、山下、三橋、額田、佐久間が来た。岡田は無断欠席。例に依て私は江戸時代の武士教育について講話をこゝろみ、それから劇談、雑談。十一時に近いころ散会。

それから入浴。十二時半就寝。晴れて月が出た。

二十一日（木曜）晴（六十一度）

午前八時半起床。晴れてはゐるが、風が寒い。不順の気候である。

おえいは過日来咽喉を痛めてゐるので、今朝は坂元医師へゆく。

目黒の控家落成も近いたので、午後からおえいと森部同道で銀座の松屋へゆき、夜具、筆筒、その他の雑品をかひ、食堂で昼餐、二時四十分ごろ帰宅。控家とはいひながら一軒の家を構るのはなか／＼うるさい。

旭川の渡辺博から郵書が来て、十五日着、いよ／＼同市の合同酒精会社に出勤することになったが、同地は余寒いまだ去らず、市中にも所々に残雪が堆積してゐたといふ。取りあへず返書。日曜報知の中代君から原稿うけ

取りの返書が来た。

読書。六時半ごろ入浴。九時半就寝。

二十二日（金曜）晴（六十四度）

午前八時半起床。おえいは今朝も坂元医師へゆく。

十時半頃から森部同道で目黒へ出てゆく。佐久間もあとから来た。

植木屋が庭の地ならしをしてゐたので、花壇五ヶ所を作るやうに指図する。室内は壁の上塗りがまだ出来ぬところもあり、門内のコンクリートの地固めもまだ完成せず、全部が片付くのは月末であらうかと思はれた。

帰りは森部佐久間と徒歩。塩瀬で昼餐。それから宮益坂の興農園に立寄つて、園芸用具と球根類をかひ、こゝで佐久間に別れて午後一時半ごろ帰宅。婦人公論から二百号記念の風呂敷を送つて来た。

留守中に文芸家協会の林田君が来た。観音劇場で「鳥辺山心中」を剽窃したものを上演してゐるといふ件である。取りあへず返書。

三時過るころに寺田君が来て、六時過る頃まで話してゆく。

七時過るころ入浴。八時半頃に小村雪岱君が来て、明治座五月興行の「箕輪の心中」の舞台装置について打合せがあつた。

読書。十時四十分ごろ就寝。

二十三日（土曜）陰、雨（六十五度）

午前九時起床。おえいは坂元医師へゆく。

大村の筋書「堂島物語」を一読、その批評を添へて返送。読売新聞の村上君から原稿依頼の郵書が来たので、断りの返書。改造社の塩谷君から郵書が来たので、返書。婦人公論社へ記念品の礼状を発送。

午後二時頃に中島が来て、一時間ほど話してゆく。氣候不順、陰つて鬱陶しい日である。

読書。六時頃に佐久間が来て、七時過る頃まで語る。植木屋の内金五拾円を佐久間に渡してやる。

七時半入浴。読書。雨の音。十時半就寝。

二十四日（日曜）雨（六十三度）

午前九時起床。おえいは坂元医師へゆく。

浜松の本屋君から病氣見舞の郵書が来たので、返書。額田から郵書が来たので、返書。寺田君に頼まれた短尺六枚に揮毫。

花は無くとも今日の日曜はピクニックの好時季であるに、夜半の雨やまず、折角の日曜をさんくにして仕舞つた。

小川同天君の戯曲「桃源」を編集し終る。舞台の原稿で

ある。

六時半頃に小村君が来て、「箕輪の心中」の舞台装置について再び打合せがあった。それから入浴。

読書。雨やんで温度俄に騰る。十時半就寝。

二十五日（月曜）晴（六十八度）

午前九時起床。おえいは坂元医師へゆく。

南風が強く吹いて、温度いよ／＼騰る。大工が来て、水道の給水届に調印を求め、廿九日頃には移転が出来るといふので、廿八日に下掃除をして、廿九日移転のことに決める。

いよ／＼移転の日が決定したので、書棚を整理。目黒へ運ぶべき書籍や道具類の荷作りをする。なか／＼面倒である。そのあひだに大村が来て新宅の祝物をくれ、三十分ほど話してゆく。中島も来て原稿をさし置き、門口で帰る。

五時半頃に山下の細君が母同道で来訪、母は一先づ郷里へ帰るといふので、おえいから饒別の品をやる。

七時ごろ入浴。七時半頃に佐久間が来て、一時間ほど語る。

読書。十時半就寝。

二十六日（火曜）晴、陰（六十四度）

午前九時起床。森部は「舞台」五月号の発送を手伝ふために、早朝から佐久間方へ出てゆく。おさだが来て、竹の子をくれた。

麹町三丁目の花屋で萼の鉢植をかひ、更に山百合、ダリヤなどの球根を買つて来た。小林から郵書が来たので、返書。

午後、四谷を散歩。目黒で使用の茶器など買つて、一時四十分頃帰宅。

大野君方から長岡温泉みやげをくれた。

三時頃に講談社の岡田君が来て、十月頃までに戯曲を寄稿してくれと云ひ、一時間あまり話してゆく。つゞいて岸井が来て、六時頃まで語る。

そのあひだに森部帰宅。目黒の工事も大抵完成したといふ。

七時頃に大橋が来て、三十分ほど話してゆく。それから入浴。

読書。十時半就寝。

二十七日（水曜）晴（六十八度）

午前九時起床。靖国神社大祭で早朝から花火の音がきこえる。

おえいは姉とおとくを連れて、四谷へ買物にゆく。目黒の移転準備である。いはゆる移転ではないが、やはり

移転同様のゴタ／＼騒ぎである。

午後二時頃から町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。帰宅後は荷作りの指図や手伝いなどをする。

長崎の深見といふ人から「波多家改易始末」といふ古記録を送つて来たので、返書。夕刊をみると、けふの靖国神社参詣人は百万を超えたであらうといふ。

七時から入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（木曜）陰（六十度）

午前九時起床。

明日いよ／＼目黒へ荷物を送り込む筈であるので、おえいはおとくとおひさを連れて、十時半頃から下掃除に出てゆく。

私も森部と共にあとから出る。その途中、宮益坂の興農園で草花類の苗や球根をかひ、おえい等よりも一足おくれて目黒へ行き着くと、植木屋が来て地ならしをしてゐた。大工も来て、棚などを吊つてゐた。

けふは陰つて風が冷たく、今にも降り出しさうであつたが、森部に指図して花壇に球根類を栽え付けてゐると、佐久間と中島も来て手伝ふ。

佐久間等は一時半頃に去り、私と森部は三時頃に出る。それから新宿へまはつて、布袋屋と三越で洋室用の机と椅子、花台、書斎用の机、チャブ台などを買い、布袋

屋の食堂で喫茶。四時半ごろ帰宅すると、おえい等はどう帰つてゐた。雨はら／＼と降り出したが、間もなく止む。留守中に山下が来たといふ。

六時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜は眠られず、午前四時頃から漸く眠つた。夜半に雨の音。

二十九日（金曜）晴、陰（六十四度）

午前五時半起床。けふは天長節。

けふは目黒へ荷物を送る当日であるので、早朝から忙がしい。

森部に指図して、庭木を掘らせてゐると、八時頃に佐久間が来た。

八時半頃にトラックが来たので、家具や植木などを二台に積み込ませ、森部はその一台に同乗して先発、佐久間と私は自動車に同乗、姉とおえいとおとくは自動車に同乗して、九時頃に麴町を出で、赤坂見附まで差しかけると、代々木練兵場行幸のために往来止めとなつてゐるので、更に転じて麻布方面から目黒に出て、九時廿五分ごろ到着。

大工や植木屋も来てゐて、荷物を運び込む手伝ひをする。岸井と中島も来た。額田夫婦も来た。山下も来た。家内の掃除は女たちに任せて、私たちは庭に出て、花壇その他に草花類の種子を播き、植木屋に指図して樹木

を栽えさせる。十二時頃に大抵片付いて、一同昼餐。

三時頃に蕎麦を祝つて、額田の細君は帰宅。額田、岸井、山下、中島等は道玄坂へ行つて床の間の生け花などを買つて来る。別に紅白のつゝじを買つて来て庭に栽える。これは嫩会の寄贈であるといふ。別に岸井は自宅から薔薇四株を持つて来た。

五時半頃に岸井は去り、額田、山下、中島、佐久間はあとに残つて、七時ごろ晚餐。八時半ごろ入浴。山下と佐久間も入浴。

「九時」おえいと森部は七時半頃に帰り、嫩会員は九時ごろに帰る。私は残つて一泊することにした。

十時半就寝。こゝらの夜は静で、近所の森で梟の鳴く声がかこえる。どこやらで蛙も鳴く。

昨夜碌々に眠らなかつたのと、終日何かとゴタ／＼したのとで、今夜は安眠。

三十日(土曜)陰、雨(六十二度)

午前八時起床。

姉とおとくがこの控家をあづかる事になつてゐるので、今朝は跡掃除に忙がしい。大工も一人来て棚などを吊る。植木屋二人が来て、椎二本、アオキ二株、丁字一株を栽え込む。

私のまだ起きない間に、隣家の上村家の子息が挨拶に

来たといふ。十時頃に森部が来た。朝「が」(へから)陰つてをり／＼に細雨。

午後一時頃に石屋が勘定を取りに来たので、支払つてやる。

つゞいて中島が銀杏三株と白「■」サツキ一株を持つて来たので、植木屋に指図して栽えさせる。中島は直ぐに帰る。

四時頃に私も一先づ帰宅することゝし、森部同道で道玄坂まで徒歩。百軒店で色紙かけ、手拭かけ、ステッキ立、スリツパ等をかひ、それを持たせて森部を目黒へ帰し、私は真直に帰宅。幸に雨は止んでゐた。

留守中に松竹の木村君と杉原が来て、杉原は来月十日頃から(木)柵の改築に取りかゝると云ひ置いて行つたさうである。目黒が先づ片付くと、今度は本宅の工事、それからそれへと中々うるさい。

土田電機商会から電灯取付工事費百三十五円余を受取りに来たので、支払つてやる。

六時半ごろ入浴。高橋から舞台の令状が来た。前田早苗と小林宗吉からも郵書が来た。

読書。十時半就寝。夜半大雨。

本月の仕事は白蝶怪(日曜報知五回分、七十七枚)舞台原稿の編集など。目黒の移転で何や彼やゴタ／＼と暮らしてしまつた。

(翻刻担当…中坪有羽)

昭和七年五月

一日（日曜）晴（七十度）

午前八時起床。晴れて俄に夏めく。九時頃に森部帰宅。十時頃に大工の倉持が来た。けふは日曜で、銀行が休みであるので、小物の代金二百四十四円廿七銭だけを支払つて置く。

日記を二三日休んだので、一度に記入。

明治座初日で午後二時半頃から出てゆくと、入口で木村君に面会。木村君が昨日訪問の用件は七月狂言執筆の相談である。兎も角も承諾。拾も中央公論社の松本君も見物に来てゐたので、その話をする、それでは六月号に掲載したいから十三日までに書き上げてくれといふ。それでは余りに時日がないので、七月号に延期してくれと云つたが、松本君は肯かない。結局わたしの方が降伏して十三日までに脱稿することに決められて仕舞つた。当分は忙がしいことになつたが、仕方がない。

岸井、佐久間、中島も来た。初日満員。第一「新版伊太八稿」第二「父帰る」第三「箕輪の心中」まで見物。第四の「連獅子」を見残して、午後九時ごろ退場。同十五分ごろ帰宅。

入浴。十一時就寝。

二日（月曜）陰、晴（六十七度）

午前八時起床。おえいは坂元医師へゆく。小林に返書。額田にも郵書を送る。

いよ／＼松竹の脚本を書くことになつたので、その材料を調査、国定忠次を三幕に脚色する積りであるが、私は今まで博徒のやうな人物を書いたことが無いので、巧く行くかどうか判らない。

午後一時ごろ四谷を散歩。二時ごろ帰宅。更に材料を調査。

信州長野の蕎麦の花吟社から俳句の選を頼んで来たので、選了、返送。大野君が来て、三十分あまり話してゆく。

六時半から入浴。読書。

八時過る頃に佐久間が来たので、四月分の地代と植木屋の代金を渡す。

つゞいて大工が来たので、これにも工事の残金一千参百四十円余を渡してやる。

佐久間と大工は九時半頃まで話してゆく。十一時就寝。

三日（火曜）晴

午前八時起床。

松竹の脚本を目黒で起稿する積りで、朝から支度をし
てみると、演芸画報社の利倉君が来て、私の劇談を筆記、
一時間ほど話してゆく。

十一時頃からおえいと森部と三人連れで目黒へ出て
ゆく。その途中、渋谷駅付近の塩瀬で昼餐。けふは東横
電車に乗つて代官山停車場で下車、それから徒歩。

午後零時半頃に行き着くと、恰も大村が新宅見舞に來
てゐた。大村は置時計をくれ、暫らく話してゐると、そ
こへ又、岸井が来た。大村は大阪の懸賞脚本を持参。岸
井は東京の懸賞脚本を持参。大村は一時廿分頃に去り、
岸井は二時頃に去る。目黒警察署員が新築検査に來た。
つづいて菅野君が来て菓子をくれ、二時間ほど話して
ゆく。森部に指図して、花壇を整理してゐると、植木屋
が昨夜の受取証をとゞけに來た。

森部は四時半ごろ帰宅。おえいは今夜一泊する筈であ
るので、連れ立つて近所を散歩。到るところに若葉の緑
深く、流石に郊外の初夏らしい風趣を見せてゐた。

六時ごろ晚餐。七時ごろ入浴。口中が荒れたので、薬
を塗る。

大村の脚本を一読。多少の訂正を加へて、その批評を
かく。

おえい等は十時ごろ就寝。わたしは十一時半ごろ就寝。

四日（水曜）晴

午前八時半起床。大村の原稿を返送。

九時半頃に佐久間が来て、蛸殻町の電話売買員業浜商
店に交渉して、電話を買ひ取ることに決めて來たといふ。
番号は青山一五三三、買値六百七十円、工事費三十円、
引込み費十八円、名義変更料十五円、電話基金七円、あ
はせて七百四十円であるといふ。やがてあとから浜商店
員も來たので、おえいが面会、その料金は明日麴町の宅
で支払ふことにする。佐久間は十一時半頃まで話して去
る。

脚本の材料を調査。おえいは昼餐を済ませて麴町へ帰
る。

午後三時頃までに材料の調査も一通り終つたので、兎
もかくも第一幕から起稿。

夕刻おとくに手伝つて、わたしも花壇に水をやる。百
日草、コスモス、矢車草などは芽を吹いて來た。

十時頃までに原稿八枚をかく。それから読書。

十一時半就寝。

五日（木曜）晴

午前七時起床。

八時頃に佐久間が来て、九時半頃まで話してゆく。

戯曲をかきつづけたが、思ふやうに書けない。口中が荒れ、舌が爛れて頗る不愉快である。ボラスリンを塗つてもなか／＼効目がない。

岸井から郵書が来て、いよ／＼大黒活版所と手を切り、舞台印刷は六月号から渋谷の九星社に依頼することにしたといふ。難波から舞台の礼状が来た。

午後一時頃に中島が来て、自作の松竹懸賞応募脚本を受取り、三十分あまり話してゆく。湯浅君から舞台の原稿を送つて来たので、これも中島に渡してやる。大工が庭に入れた黒土の代金廿六円を受取りに来た。

麴町の宅から寺田君と堀之旗の郵書を同送して来たので、いづれも返書。大村から原稿うけ取りの返書が来た。

四時過る頃から近所を散歩。出入りの商人は八幡通りといふ所から来るといふので、その方面へ行つてみる。代官山停車場へゆく途中で、広い道路である。ここに一通りの商店はあるらしい。帰途、花屋が車を挽いて来るのに出逢つたので、撫子二鉢を買つて来て花壇に栽え込む。

六時ごろ入浴。けふは端午の節句といふので、菖蒲湯を焚く。

岸井の懸賞応募脚本をよみ終る。夕から陰つて風が吹き出した。

十一時就寝。夜半に風の音、をり／＼に雨の音。

六日（金曜）晴（八十度）

午前八時起床。晴れて温度俄に昇る。今朝から拾をきる。

新聞をみると、東京の大都市計画もいよ／＼十月一日より実行、隣接の五郡を廿区に分割して市部に編「輸」入するといふ。目黒は上目黒、中目黒、下目黒に碑衾町を併合して、目黒区となるさうである。

口中の爛れがまだ癒らず、物を喰ふにも談話をするにも不便であるので、明日は医師の治療を受けることとし、午後二時ごろ帰宅の仕度をしてゐると、家具商能川商店員がカーテンを取付けに来たので、西洋室と座敷の縁側、書生部屋等にカーテンをかけるやうに指図する。

三時ごろに目黒を出て道玄坂上まで徒歩。温度いよ／＼昇つて、汗が流れ出た。それから自動車で帰宅。留守中に「日曜報知」から「白蝶怪」の原稿料を送つて来たので、森部から受領証を発送して置いたといふ。

五時頃に岸井が来た。目黒へ行つて私の帰宅を聞き、更に跡を追つて来たのである。六時頃まで話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。宵から強い風が吹き出した。十時半就寝。

七日（土曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

九時半頃に吉岡医師の診察を受けにゆく。やはり胃を害してゐる為であるとして散薬をくれ、口中の爛れてゐる部分を焼いてくれた。その留守中に能島君が来たといふ。改造社から綺堂全集第一巻の印税を送つて来たので、返書。綺堂全集を小包み便にして、長谷川伸君に郵送。口中が爛れて頗る不愉快、引きつゞき執筆の元気がないので、中央公論社の松本君に速達便を發して、約束の原稿は十三日までに間に合ひ兼ねる旨を通知。

能川商店員が来て、カアテンの代金を受取つてゆく。午後、森部と麴町三丁目の草花屋をひやかしに行つたが、思はしい苗もないので、カンナ二株ほどを買つて帰る。

灰野庄平君の遺著「大日本演劇史」の批評をかく。舞台の原稿である。

七時ごろ入浴。読書。森部は学校の帰途、二七不動の縁日へ廻つて、サツキ十株を買つて来た。

十時半就寝。

八日（日曜）陰、雨（六十二度）

午前七時起床。

八時半頃から森部同道で目黒へゆく。昨夜のサツキと

自宅の庭の草花類を自動車に積み込み、九時頃に控家着。森部に指図して、サツキ類を庭に栽える。をり／＼に細雨。それでも何うにか栽込みを終つた。

二時半頃に目黒を出る。佐久間の祖父が容態宜しからずといふので、帰途、雨を冒して見舞に立寄ると、佐久間は不在。こゝで植木屋に逢つたので、目黒の庭に池を掘ることを頼み、三時頃帰宅。

中央公論社の松本君から返書が来た。電話局から電話の名義変更承認の通知が来た。

読書。晴れんとして晴れず、又ふりしきる。氣候も又俄に冷かになった。口の爛れは猶癒らず、飲食も不自由、談話も不自由、頗る不愉快である。春來、中耳炎に悩み、それかやう／＼癒ると今度は口中の病、どうもうるさくてならない。

六時頃入浴。田中直樹君の弟死去した通知が来たので、悔み状を發送。

読書。十時就寝。

九日（月曜）晴、陰

午前九時起床。森部は電気局の佐藤君をたづねにゆく。

十時半ごろ吉岡医師へゆくと、患者が大勢詰めかけてゐるので、暫く待たされた。治療を終つて帰宅したのは、十二時に近い頃であつた。

おえいは午後から青山へ墓参にゆく。春陽堂の使が来て、半七捕物帳第六編、綺堂読物集第壹編の奥付捺印を求めてゆく。

三時頃に佐久間が来て、四時半頃まで話してゆく。六時頃に額田が来て、富山房から発行する歌舞伎物語「を」〈の〉原稿をみせ、八時半頃まで語る。額田は新宿中村屋のシウマイとサンドウィッチをくれた。

九時から入浴。読書。十一時就寝。

十日（火曜）陰、晴（六十三度）

午前九時起床。

舞台誌友会の通知発送を手伝ふために、森部は早朝から佐久間方へ出てゆく。山梨の河野君から竹の子を送つて来たので、返書。

先日起稿した。「国定忠治」第一幕十八枚を訂正。

五時頃に森部帰宅。六時頃に渡辺の愛子が来て、薔薇の花をくれ、夕飯を食つて帰る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十一日（水曜）晴

午前八時半起床。吉岡医師へゆく。

「国定忠治」続稿五枚をかく。なんだか気分がよくなるので、午後三時頃から四谷を散歩。四時ごろ帰宅。

七時半ごろ入浴。浴後、呼吸困難をおぼえて来たので、臥床。

十一時頃から就寝。

十二日（木曜）雨

午前九時ごろ起床。顔を洗つて再び臥床。

小林君が矢吹淡月君同道で来て、短尺の揮毫をたのみ、病臥中と聞いて門口で帰る。その節、矢吹君が鮑一籠をくれたので、坂元医師方へ持たせてやる。

静岡の山本君から新茶を送つて来たので、返書。婦人公論社の福島君が来て、廿三日頃までに随筆をかいてくれと云ひ、門口で帰る。

春陽堂の使が来て、綺堂読物集第二巻の奥付捺印をたのんでゆく。

何分にも呼吸困難、少しく動くと息切れがするで、「坂」吉岡医師を迎ひにやると、四時頃に吉岡氏来診、やはり胃腸が拡大した為に心臓を圧迫するのであらうと云ひ、当分は安静を守るやうに注意された。

口中の炎症はまだ去らず、呼吸は困難、頗る不愉快である。

十一時頃から眠る。

十三日（金曜）晴

午前九時ごろ起床。顔を洗って再び臥床。

呼吸は依然として困難、少しく談話をつづけると咳が出る。

目黒の電話線引込み料十八円を払ひ込めといふ通知が来たので、森部はそれを持参して目黒へ出てゆく。市川小太夫の使が来て、地方巡業の謝礼をくれた。

午後二時頃に山下が来て、一時間ほど話してゆく。つづいて吉岡医師が来た。

昨日から頓服の下剤二回、いづれも効果がないので、更に浣腸をこゝろみろと医師は云ひ置いてゆく。

富塚の父が来て、日活で「半七捕物帳」の津の国屋を撮影したいと云ひ、三十分ほど話してゆく。

六時ごろグリスリン浣腸を試みた結果、十一時頃まで便通二回。

十一時頃から安眠。

十四日（土曜）晴、陰

けふも臥床。

寺田君から見舞状が来たので、床の上で返書をかく。豊田君にも郵書を発して、「日本芸術」の原稿は間に合ひ兼ねる旨を断つてやる。

十時頃に吉岡医師来診。つづいて大村が来て、大阪新

歌舞伎の懸賞脚本をみてくれと云ひ、三十分ほど話してゆく。

午後二時頃に岸井と中島が見舞に来た。真川君も来たが、病中と聞いて門口で帰る。杉原が来て、表の木柵改築は廿日過ぎまで延期してくれといふ。

春陽堂の使が来て、「半七捕物帳」第十一巻の奥付捺印を頼んでゆく。

浜村君が来て、早稲田演劇博物館編集の「国劇要覧」の批評をたのみ、門口で帰る。

今夜は七時ごろ入浴。呼吸困難はやゝ薄らいだやうである。

十五日（日曜）晴

けふも臥床。

安部豊君と上松武雄から郵書が来たので、返書。晴れて温度昇る。

午後一時頃に吉岡医師来診。三時頃に杉原が来て、応接間の壁に貼るサルブラの見本をみせてゆく。

おえいは森部同道で、三時半頃から明治座見物にゆく。「四」「五」時半頃に額田が来た。つづいて佐久間が来た。二人は七時頃まで話してゆく。

八時頃に新聞号外が出て、今夕五時頃に政友会本部に手榴弾を投げ、更に警視庁応及び牧野内大臣邸にピスト

ルを発射した者があるといふ。

おえい等は十一時ごろ帰宅。明治座は満員であつたといふ。

十二時頃から安眠。

十六日（月曜）晴

けふも臥床。

午前十時頃吉岡医師来診。

今朝の新聞をみると、昨夕諸方を襲撃したのは陸海軍人で、その一部は首相官邸を襲つて、犬養首相を射殺したといふ。近来の一大事変である。

豊田君から病氣見舞の郵書が来た。長谷川伸君から綺堂全集の礼状が来た。

午後一時半頃に目黒のおとくが来た。わたしの病気の模様を聞きに来たのである。一時間ほど話して帰る。

床の上で読書。十時頃から就寝。

十七日（火曜）晴

けふも臥床。

午後一時半頃に吉岡医師来診。わたしの容態が不明なので、兎も角も一度、佐々康平博士の診断を受けてみたら好からうといふ。

四時頃に佐久間が来て、一時間ほど話してゆく。佐久

間の祖父もやゝ快方に向つたので、廿日頃には一先づ退院するとの事である。

黒川君から郵書が来て、左団次一座は六月名古屋神戸等を巡業、「浪花の春雨」を上演したいといふ。承諾の返書。

七時から入浴。十時半頃から就寝。

十八日（水曜）晴

けふも臥床。

大工の青木が表の木柵の寸法を取りに来た。同時に渋谷の植木屋が目黒の控家へ運ぶ庭石や植木を取りに来た。植木屋はトラツクに木石を積み込み、森部も同伴して十一時頃から出てゆく。

又そのあひだに、文芸春秋社の武内君が来て、モダン日本の原稿に困るから、何か旧稿でも好いから送つてくれと云ひ置いて去つたので、曾てポケット（博文館発行）に掲載した旧作の小説をさがし出して発送。

十一時半頃に津沢のひさ子が子供をつれて来て、午後一時半頃まで話してゆく。

二時半頃に吉岡医師が来た。やがてあとから佐々博士が来た。佐々氏の診察によれば、口内炎は兎もあれ、他の内臓にはこれぞといふ異状も渡見せず、呼吸困難は疲労衰弱の結果であらうと思はれるから、当分は安静にし

て休養しろとの事であつた。

床の上で読書。十時半頃から就寝。

十九日（木曜）晴

「■」けふも臥床。

加納野梅君から郵書が来たので、返書。文芸春秋社の武内君から郵書が来たので、これにも返書。

午「前」〈後〉一時半頃に三橋が来て、三十分ほど話してゆく。二時頃に吉岡医師来診。

目黒のおとくから電話がかゝつて、本日から電話が架設済になつたといふ。青山の千五百「二」〈三〉十三番である。

四時頃に佐久間が来て、一時間ほど話してゆく。ついで岡君来訪。病中と聞いて門口で帰る。大村の懸賞戯曲に批評を添へて返送。

七時ごろ入浴。読書。十時半ごろ就寝。

二十日（金曜）晴

けふも臥床。

午前十一時頃は大村が来て、鉢栽の草花をくれ、門口で帰る。

午前二時頃に山下が来て、見舞の菓子をくれ、一時間ほど話してゆく。四時頃に額田が来て、廿二日の誌友会

について色々の話あり、これも一時間あまり話してゆく。津沢のひさ子から郵書が来て、昨夕三橋の案内で目黒の控家を見に行つたといふ。

床の上で読書。九時ごろ強震。十一時頃から寝る。

二十一日（土曜）晴、雨

けふも臥床。呼吸困難はやゝ薄らいだが、口内炎はまだ癒えず、舌のさきに潰瘍を生じて頗る不愉快である。

大村から原稿うけ取りの返書が来て、山梨の河野君から病氣見舞の郵書が来たので、返書。富塚秀子からも同じく病氣見舞の郵書が来たので、返書。豊国社の高田君が来て雑誌「松竹」の原稿料をくれ、門口で帰る。

午後三時頃に吉岡医師来診。

六時頃に佐久間が来て、一時間あまり話してゆく。八時頃から雨。

入浴。読書。十時半頃から就寝。

二十二日（日曜）陰、晴

けふも臥床。

静岡の山本君から又もや茶二缶を送つて来たので、返書。岡君から郵書が来たので、返書。

けふは「舞台」誌友会当日であるが、午前は陰、午後より晴、頗る好都合である。午後一時頃に小林が見舞に

来て、これから誌友会に出席するといひ、三十分ほど話してゆく。

渡辺君が見舞に来て、これも三十分ほど話してゆく。それと入れちがひに、津沢の寿子が見舞に来て、剪花と菓子にくれた。それが帰ると、又そのあとへ三橋が来て、これから誌友会へゆくといふ。わたしは病中で出席することが出来ないので、森部を代理に出してやる。

床の上で読書。九時半頃に森部帰宅。誌友会の来会者は八十余人、「舞台」関係者をあはせて約百人、田郷、寺田、松居、川村渚君の講話、清見陸郎君の新内「修禪寺物語」等があつて、なか／＼の盛会であつたといふ。十時半ごろから就寝。

二十三日（月曜）陰、雨

けふも臥床。

けふは春季大掃除で、家内混雑。

清見君から病氣見舞の郵書と原稿を送つて来たので、返書。

大掃除は午後一時頃に片付く。やがて佐久間が来て昨夜の報告をしてゐるうちに、雨が俄に降り出して来た。婦人会論の福島君に速達便を發して、病氣のために原稿は間に合ひかぬ旨を通知。おえいは森部と麴町三丁目の花屋へゆき、風知草の鉢栽を買つて来た。ほかにゴ

ムの木の鉢栽を買つて、坂元医師方へとゞけて来たさうである。

四時頃に吉岡医師来診。そのあひだに林二九太君が見舞に来て、門口で帰る。真川君も来て、門口で帰る。

三木春雄君から郵書が来て、実践女子専門学校の劇研究会に出席して何か講話をこゝろみてくれと云ふことであつたが、病中なれば断りの返書。

大村と額田から郵書が来た。中野と塩谷君から病氣見舞の郵書が来た。

七時ごろ入浴。床の上で読書。雨やまず。

十時半頃から就寝。

二十四日（火曜）晴

けふも臥床。

目黒から電話がかゝつて、植木屋が池を掘りに来たといふので、森部は朝から出てゆく。こちらへも経師屋二人が来て、応接室の壁にサルブラを貼る。なにや彼や混雑。

十時半頃に菅野君が来て、一時間あまり話してゆく。杉原も工事見まはりに来た。

大村と塩谷君に返書。十二時過る頃に森部帰宅。

午後二時頃に岸井と中島が草花の鉢をたづさへて見舞に来た。つゞいて小林が魚をたづさへて見舞に来た。

小林の「淡路から来た母」は来月の東京劇場上演に決定したといふ。

四時頃に大工二人が材木を運び込んで来た。表の木柵を作りかへる材料である。実践女子専門学校の生徒が来たが、病中と聞いて門口で帰る。

経師屋は夕刻までに壁を貼り終つて去る。病中色々混雑するので閉口である。

七時ごろ入浴。読書。十時半頃から就寝。

二十五日（水曜）陰、晴

けふも臥床。

森部はけふも目黒へゆく。佐久間の祖父が退院したといふので、見舞の菓子を持たせてやる。

大工二人が来て、木柵の工事に取にかゝる。

大谷君が病氣見舞として果物の籠を持参。おえいと応接室で話して帰る。寺田君から病氣見舞の郵便が来たので、返書。三木君からも病氣見舞の郵便が来た。

三時過ぎ頃に吉岡医師来診。呼吸困難はもう大抵快癒したが、口内炎が何分にも捗々しく快方に向はないので、更に吸入を行ふことにする。

床の上で読書。十時頃までに吸入二回。

十時半就寝。風の音が強くきこえる。

二十六日（木曜）晴

けふも臥床。晴れてはゐるが、風吹く。

森部に命じて、本郷の佐々博士方へ来診の謝礼をとゞけさせる。

午前中に吸入一回。十一時頃に額田の細君が見舞に来て草花をくれ、三十分ほど話してゆく。けふは大工一人来た。

午後吸入二回。小林蹴月君の紹介で、曹洞宗の林栄道師が来診、病中と聞いて、門口で帰る。三時頃に森部帰宅。本郷から目黒へまはつて来たといふ。

五時半頃に放送局の小林君が来て、来月二日の夜に「亜米利加の使」を放送するといひ、門口でおえいと話して帰る。つゞいて渡辺のあい子が見舞に来て、三十分ほど話してゆく。春陽堂の使が来て、綺堂読物集第三編と半七捕物帳第九巻の奥付捺印を求めてゆく。

七時頃に三橋が来て、ふたば会員は今夜新宿の白十字にあつまる筈であるので、定刻に行つてみたが、誰も来てゐなかつたといふ。同時に九星舎の山田君が来て、「舞台」六月号廿部をとどけてゆく。

七時半ごろ入浴。夜も吸入二回。十時半頃から就寝。

二十七日（金曜）晴

けふも臥床。

森部は目黒へゆく。こちらへも職人二人が来た。

木村が来て芍薬その他の剪り花をくれ、門口で帰る。

文芸倶楽部の村田君が原稿をたのみに来たが、おえいが玄関へ出て断る。

午後一時過る頃に吉岡医師来診。三時頃に額田が来た。四時頃に佐久間が来た。四時半頃に森部帰宅、目黒の池も全部出来したといふ。池のまはりにはこちらから運んだ樹木を栽えつけ、佐久間が寄付のさつき五株も栽え込んだといふ。額田と佐久間は五時頃まで話してゆく。

長野の田中美穂君からその句集を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。けふは吸入四回。十時半頃から就寝。

二十八日(土曜)陰、雨

けふも臥床。朝から陰つて風が寒い。

森部は舞台六月の発送を手伝ふために、朝から佐久間方へ出てゆく。けふも職人が二人来た。

午後から折々に細雨。午後一時頃に目黒からおとくが来た。つゞいて岸井が来て、一時間あまり話してゆく。

五時過るころに森部帰宅。六時頃に額田が来てわたしの胸や腹をおさへ、八時半頃まで話してゆく。

けふは吸入三回。今夜は入浴せず。十時半頃から就寝。午前二時半頃に眼をさますと大に発汗、起きて寝衣を着

がへる。

二十九日(日曜)晴

けふも臥床。晴れてはゐるが、風が寒い。不順の気候である。

舞台六月号を小包み便にして、清水、林、原田、東儀、高橋、難波の諸家へ発送。第一書房の堀川君にも発送。職人二人が来て、柵の工事をつづける。間口が広いとは云ひながら案外に暇取るものである。

午後一時過る頃に小林の細君が見舞に来て、鶏卵と缶詰をくれ、二時過る頃まで話してゆく。

床の上で読書。七時ごろ入浴。けふは吸入三回。

九時頃から雨の音。十時頃から就寝。

三十日(月曜)晴

午前九時起床。わたしの起きないうちに、おえいは目黒へゆき、月末の支払ひを済ませて来たさうである。

けふも職人二人が来た。

呼吸困難はもう快癒したので、けふは床の上に起き直つて机にむかひ、小林君に頼まれた色紙三枚と短尺二枚に揮毫、加納野梅君にたのまれた短尺五枚に揮毫。

中島から郵書が来て、細君病氣のために碑文谷を引払つて、茅ヶ崎か平塚海岸へ転地することになるかもと知

れないといふ。取りあへず返書。

山崎と中野からも病氣見舞の郵書が来た。

五時頃に佐久間が来て、七時頃まで話してゆく。けふは吸入三回。

今夜は入浴せず。十時半頃から就寝。

三十一日（火曜）陰

午前八時半起床。けふから床払ひをして、下座敷に座る。

職人二人、けふは杉原も来て指図をする。表の木柵と門の修繕だけは出来した。

女中のおひさは暇を取つて去る。

文芸春秋社の武内君とおとくの兄から病氣見舞の郵書が来たので、返書。山崎と中野にも返書。

午後一時頃に三橋が来た。つゞいて額田が来た。三橋は一時四十分頃に去り、額田は残つて話してゐると、二時半頃に吉岡医師が来診。口内炎が案外に頑固であるのに、医師もおどろいてゐた。

市川三升が額田をたづねて来て、応接間で一時間ほど話してゆく。額田は四時半頃に去る。

けふは吸入三回。七時半ごろ入浴。医師はけふから口中の塗薬をかへてくれたが、水薬と散薬、いづれもひどく沁みるのに閉口した。

読書。十時半就寝。夜半に口中が乾くので、起きて含嗽、これもまた沁みるので眼が醒めてしまった。

本月は口内炎やら呼吸困難やらで、毎日寝たり起きたりしてゐた為に、なんの仕事もしなかつた。老来多病、まことに意気地がない。そんなわけで、目黒の控家へも殆ど足踏みをしないくらゐであつた。

（翻刻担当…中坪有羽）

昭和七年六月

一日（水曜）雨（七十度）

午前九時起床。夜来の雨やまず。けふは職人も来ない。下座敷で読書。雇人請宿から新しい女中をつれて来た。岸井の父から病氣見舞の郵書が来た。夫婦づれで湯河原に滞在中であるといふ。旭川の渡辺博からも見舞状が来た。

午後五時頃に佐久間が植木屋の請求書を持参。目黒の池をほり、山を築き、樹木を栽え込んだ手間賃セメント代など併せて五十二円廿七銭であるといふので、すぐに渡してやる。佐久間は六時半頃まで話してゆく。

七時ごろ入浴。けふも吸入一回。

読書。十時半就寝。

二日（木曜）晴（七十四度）

午前九時起床。

けふは職人二人来た。杉原も来て工事の請求書を提出、木柵材料、ペンキ代、大工の手間賃等で百四十二円、応接室のサルブラと手間賃四十二円四十銭、あはせて百八十四円四十銭である。

松竹の黒川君に郵書を発して、病氣のために七月狂言の脚本は起稿し兼ねる旨を断つてやる。前橋の藤嶋君か

ら見舞状が来たので、返書。渡辺の博にも返書。

午後一時頃に岡田が来て、三十分ほど話してゆく。春陽堂の使が来て、今古探偵十種と半七捕物帳第九編十編の奥付捺印を求めてゆく。

二時頃から近所を散歩。三週間ぶりで外出したのであるが、千鳥ヶ淵公園も青葉につつまれてゐた。

三時頃帰宅すると、額田が来て、これから歌舞伎座の舞台稽古にゆくと云ひ、四時頃まで話してゆく。

大工は木柵を終つて、更に裏木戸、風呂場、裏手の塀などを繕ひ、七時半頃に去る。これで工事も先づ終りである。職人が来てゐると、何かとさわがしい。

八時半ごろ入浴。けふは吸入一回。十時四十分就寝。

三日（金曜）陰、雨（七十二度）

午前九時起床。

十時頃に杉原が来て、工事の代金をうけ取つてゆく。

十時半頃から町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆき、十一時半頃帰宅すると、岸井が待受けてゐて、十二時半頃まで話してゆく。

目黒から姉が来て、一時半頃まで語る。恰も雨が降り出して来たので、自動車に乗せて帰してやる。つゞいて小林君が来て、四十分ほど語る。先日揮毫の色紙と短尺を小林君に渡してやる。

ついで又、植田の細君が来て、一時間ほど話してゆく。横浜の高橋留守宅から舞台の礼状が来た。難波からも同じく礼状が来た。

寺田君からその翻訳「暗殺受負業」を送つて来たので、返書。三井高大君から「演劇史研究」を送つて来たので、返書。生方君から長男死去の通知が来たので、悔み状を返送。

四時半頃に吉岡医師来診。六時頃に放送局の小林君が来て「垂米利加の使」の放送料をくれ、門口で帰る。今度から放送料が値上げになったさうである。

七時半ごろ入浴。雨やまず。けふは吸入二回。
読書。十時半就寝。

四日（土曜）雨（七十二度）

午前九時起床。

湯河原会館の番頭西沢君から病氣見舞の郵便書が来たので、返書。新しい女中は居付くことになる。名はおせん、廿歳。

終日読書。晴れんとして晴れず、恰も梅雨季に入つたやうな天候である。

口内炎は依然として癒えない。これまで口内炎には五六回悩まされた経験もあるが、今度のやうに頑固であるのは珍しい。服薬、含嗽、吸入、塗り薬、随分手を尽し

てゐるのであるが、それでも一向に効が無い。飲食も不自由、談話も不自由、実に閉口である。

七時半ごろ入浴。けふは吸入三回。
読書。十時半就寝。

五日（日曜）雨（七十二度）

午前八時起床。

おえいはおさを連れて、九時半頃から銀座へ買物に出てゆく。

額田から郵便書が来たので、返書。

旧作の俳句を訂正、浄書。ことしの十月十五日は私の還暦誕辰に相当するので、記念の俳句集を作つて知人に寄贈する積りである。

午後一時頃におえい等帰宅。過日来わたしの見舞品をたび／＼貰つた返礼として、銀座の三越から大村と津沢方へ品物を送らせたさうである。

晴れんとして晴れず、をり／＼に細雨、早くも梅雨期に入つたやうである。四時頃に銀座の松屋から蚊帳三枚をとゞけて来た。目黒へ送る分である。森部と庭へ出て、山吹、つゝじ、八つ手などの挿し木をする。

読書。七時半ごろ入浴。けふは吸入二回。
十時半就寝。

六日（月曜）雨（七十度）

午前八時半起床。

俳句を訂正、浄書。けふも梅雨めいた雨降りしきる。

午後四時頃に佐久間が来た。その話によると、目黒の池のセメントが破損したので、天気になり次第に再び塗りかへるといふ。佐久間は一時間ほど話してゆく。

府会議員選挙が近いので、推薦状などが来る。而も今度の選挙は一向に熱がないやうである。

七時半ごろ入浴。けふは吸入二回。

読書。十時半就寝。

七日（火曜）雨（六十八度）

午前八時半起床。けふも雨。

俳句を訂正、浄書。

午後二時頃に山下が来て、その作「三十前」が新国劇の二の替りに上演されるかも知れないと云ひ、三十分ほど話してゆく。

六時半頃に小林が来た。つゞいて佐久間が来て、二人は七時半頃まで話してゆく。東京劇場上演の小林作「ある殺人事件」は好評であるといふ。

八時ごろ入浴。けふは吸入二回。

読書。十時半就寝。

八日（水曜）晴、陰（七十度）

午前八時起床。

けふはめづらしく晴れたので、おえいと森部同道で目黒へゆく。佐久間も来た。今朝、左官屋が来て、池の損所を修繕して行つたといふ。

森部に指図して、花壇の草花を整理。佐久間も手伝ふ。播種が遅かつたせゐか、どの苗も養育が思はしくないやうである。

午後から折々に陰る。四時半頃までに大抵の整理を終つたので、おえい森部と帰途に就く。先月の三十日より渋谷駅と赤十字社前のあひだを往復のバスが開通し、府立第一商業学校前にも停留場が設けられたので、試みに乗つてみる。全区間五錢均一である。渋谷から自動車に乗へつて、〜五時十五分ごろ帰宅。

午後三時頃に中島が目黒へたづねて来た。細君の容態がよくないので直ぐに転地させることも出来なくなつたといふ。困つたことである。

留守中に額田が来て鮎をくれ、岸井の使が来て湯河原の干鰯鮓をくれ、放送局の使が来て見舞の果物をくれたといふ。ほかに岩崎菊絵といふ婦人が姉をたづねて来たさうである。

春陽堂の使が来て。綺堂読物集第五巻の奥付捺印を求めてゆく。

額田と岸井に礼状を発送して「ゆ」〈置〉く。

七時半頃に清水虎雄君来訪、おえいが出て応接、門口で話して帰る。

八時ごろ入浴。けふは吸入一回。

読書。十一時就寝。

九日（木曜）晴、陰（六十八度）

午前八時半起床。

今朝も岩崎といふ婦人が来た。須賀川の岩崎直次郎君の妹で、姉をたづねて来たのである。森部はそれを案内しながら目黒へ出てゆく。

放送局と岸井の父に礼状を発送。山下から郵書が来て、新国劇の方は時間の都合で延期になったといふ。これにも返書。

放送局でも果物をくれ、清水君も果物をくれたので、吉岡医師と近藤君と大野君方へ分配。大村と寿子から配り物の礼状が来た。

森部と入れちがひに、目黒からおとくが来て、姉や自分の着物の洗濯や張物をする。

十一時頃に黒川君が来て、吉野葛をくれ、一時間ほど語る。十二時半頃に佐久間が来て、これも一時間あまり話してゆく。

俳句を訂正、浄書。三時半頃におとくは帰る。

四時過るころに吉岡医師来診。四時半ごろに森部帰宅。

七時半ごろ入浴。けふは吸入二回。

読書。十時半就寝。

十日（金曜）陰、晴（七十度）

午前八時起床。けふは入梅。陰つて風が冷かである。

俳句を訂正、浄書。静岡の山本君から夏物うけ取りの礼状が来た。

十二時半頃に渡辺のおしげが見舞に来て、一時間あまり話してゆく。おえいはそれから紀尾井町の小林君方へゆく。〈細君が〉先日見舞に来てくれた返礼である。

三時半頃に額田が来て、松竹の新派懸賞脚本もいよ／＼決定したといひ、五時過る頃まで語る。懸賞脚本は第一部一等、二等、第二部一等、二等、あはせて四人、舞台社関係者は一人も入選しなかつたのは遺憾であった。

晚餐後、近所を散歩。七時半ごろ入浴。

読書。十時半入浴。

十一日（土曜）晴、陰（七十度）

午前八時起床。

九時過る頃から森部同道で目黒へゆく。その途中、宮益坂の興農園で草花の苗をかひ、花壇その他に栽え付け

る。

十二時半頃に岸井がたづねて来て、松竹懸賞脚本の件に付、選者の長田君を訪問してその談話を聴いて来たといひ、二時頃まで話してゆく。

四時半ごろ帰宅。留守中に能島君と婦人公論の藤田君が来たといふ。〈五時半頃に大村が来て、山形の菓子と桜ん坊をくれた。〉

七時半ごろ入浴。けふは吸入一回。
読書。十時半就寝。

十二日（日曜）陰、晴（七十二度）

午前八時半起床。

十時頃に能島君が堀川君同道で来訪、友人の酒井君が松沢病院に入院したので、援助の寄付金をたのむといふので、承諾。能島君等は一時間ほど話してゆく。

俳句を訂正、浄書。横浜の矢島君から郵書が来て、「句当内侍」の脚本朗読を試みたいといふ。山梨の河野君から郵書が来て、舞台所載の同君作「土と金」が京都上演に決定したといふ。いづれも返書。

小林の招待で、おえいと森部は午後三時半頃から東京劇場見物に出てゆく。

七時半ごろ入浴。けふは吸入一回。大阪の森田から郵書がきたので、返書。

読書。十一時頃におえい等帰宅。十二時就寝。

夜半に暑くなつたので、起きて掛蒲団をかへる。午前五時頃まで安眠できなかつた。

十三日（月曜）晴（七十一度）

午前七時半起床。けふから下座敷を引払つて、二階の書斎に戻る。

俳句を訂正。浄書。額田から郵書が来たので、返書。小林にも昨夜の礼状を出して置く。

午後三時頃までに俳句を訂正し終る。あはせて千三十二句、少しく多過ぎるので、削除しなければなるまいと思ふ。更に漢詩を訂正、これは七十首である。

晚餐後、近所を散歩。七時半頃に佐久間が来て、九時頃まで語る。それから入浴。

十時半就寝。

十四日（火曜）雨、晴（七十一度）

午前九時起床。けふは山王祭、「俱」今年は「蔭」（本）祭である。

浦岡の細君が来て粕漬の鰯をくれ、おえいと三十分ほど話してゆく。

森部はその鰯を目黒の姉へといけに行くといふので、私も同行。十一時半頃から自宅を出てその途中、宮益坂

の興農園に立寄つて、夾竹桃二株と紅蜀葵、ハブ草、芝刈鋏などを買い、十二時過るころに目黒に着く。陰晴定らず、をり／＼に雨。

森部に指図して、夾竹桃などを庭に栽え込み、四ツ目垣のそばの土止めなどをする。当分は庭の手入れに忙しい。池ももう漏らなくなつたやうである。

三時頃から雨が又強くなつたが、三時半頃から帰途に就く。商業学校前から自動車に乗ると、雨又やむ。麹町山元町まで帰つて来ると、恰も神輿の渡御に逢つた。

四時過るころ帰宅。浅草の出陣座から「修禪寺物語」の朗読をしたいと云つて来たので、承諾の返書。

七時半ごろ入浴。けふは吸入一回。口内炎もおひ／＼快癒したので、今夜かぎりで吸入をやめる。これまで吸入はおさきの受持であつたので、その慰勞として単衣地一反をやる。

読書。十時半就寝。夕から晴れて星が出た。

十五日（水曜）晴（七十三度）

午前八時起床。

「蔭祭ではあるが、」朝から「祭礼の」太鼓の音「など」が聞える。

改造社の俳句講座の起稿にかゝる。私の担任は「演劇と俳句」で、短いものではあるが、参考の俳書を読まな

ければならないので、なか／＼面倒である。

十一時頃に山崎が来て、四月と五月の「俳句」〈会費〉をとゞけ、三十分余り話してゆく。

午後四時頃までに原稿四枚をかく。創作と違つて抄取らない。

夕方に町内の若い者が神輿をかついで来たので、おえいが出て賽銭を供へる。若い衆は手拭をくれた。

町内を散歩してゐると、恰も中川君に出遭ひ、その空地に栽えてあるコスモスの苗を貰つたので、自宅に持ち帰つて花壇に栽える。それから更に出直して散歩。麹町三丁目の花屋でダリア一鉢を買つて来た。

麹町中学校で今夜は映画の夕といふのを催すので、おさきとおせんは観にゆく。七時半ごろ入浴。

読書。十一時ごろ就寝。夜半に雨の音。午前三時頃まで眠られなかつた。

十六日（木曜）雨（七十一度）

午前八時半起床。細雨。

おえいは下の前歯を欠いたので、小田切医師方へ修繕をたのみに行く。

森部は午後から額田方へゆく。一時頃に三橋が来て、これから九星舎へ「舞台」の校正にゆくといいひ、三十分あまり話してゆく。

俳句講座をかきつづける。三時頃に森部帰宅。

四時半頃に佐久間が来て、松竹懸賞一の部の当選脚本二種をとめる。今度は謄写版刷になってゐないので、取りあへず森部に命じて一等当選脚本「海の渡り鳥」を写させることにする。佐久間は六時頃まで話してゆく。その間に、※以下空欄

夕刻までに原稿七枚。中川君からバナナをくれた。

七時頃に岸井が来た。懸賞脚本は印刷を急ぐので、「海の渡り鳥」の半分を岸井が筆写することとし、二等当選脚本は紙数が多いので掲載を見合せることにする。岸井は一時間ほど話してゆく。

それから入浴。読書。十一時就寝。

十七日（金曜）陰（七十度）

午前八時半起床。

おえいはけふも小田切医師へゆく。日本橋の西川商店から夏蒲団五枚を送つて来た。上松君の寄贈である。

午後二時頃までに俳句講座三枚をかく。あはせて十四枚。もう少し書く積りであつたが、こゝらで止めてしまつた。直ぐに改造社に郵送。森部が懸賞脚本の浄書を終つたので、一読。あまり面白いものではない。今度の募集にも「余り」佳作は見出されなかつたらしい。

大阪の堀から郵書が来たので、返書。額田にも郵書。

尾張の人から新潮社の文芸講座について問合せが来たので、返書。政界往来社から原稿の依頼があつたので、断りの返書。

ほかに都新聞の豊島君が原稿をたのみに来たが、森部が応対して断る。終日陰つて折々に細雨。

新聞をみると、昨十六日午前十時三十五分、守田勘弥は大阪の帝大病院で死去したといふ。四十八歳。時代劇、現代劇、行くとして可ならざるなき有望の俳優であつたのに、惜むべきことである。

晚餐後、散歩。到るところの青葉の色がいよ／＼濃くなつた。

八時ごろ入浴。読書。口内炎も先づ大かたは治癒したらしい。五月初旬から約一ヶ月半、随分長いあひだ悩まされた。

十一時就寝。

十八日（土曜）陰、晴（七十二度）

午前八時半起床。

おえいは小田切医師へゆく。小林蹴月君画の半紙三枚に俳句を揮毫、森部の依頼である。

十一時頃から晴れて日かげを洩したので、午後から森部同道で新宿の二幸へ行き、雑品数点を買ふ。それから東洋園芸へ廻つて、夏菊、金魚草、孔雀草、菖蒲などを

買ひ、自宅へ配達方へ頼んで帰る。

二時頃帰宅すると、恰も岸井が来た。その以前に三橋が来て、懸賞脚本の原稿を受取つて行つたさうである。岸井は三時頃まで話してゆく。

山形の渡辺君から桜桃を送つて来たので、返書。その桜桃を中川君方へ持たせて遣ると、又もやコスモスの苗を貰つて来た。

四時半頃に額田が来て、鮎の鮨と小鯛をくれ、六時頃まで語る。

七時半ごろ入浴。読書。

新宿の園芸会社からは夜に入つても草花類をとどけて来ないので、森部は夜学から帰つて催促にゆき、その草花を自動車に積み込んで、十時十五分ごろ帰宅。

十一時ごろ就寝。

十九日(日曜)晴(七十三度)

午前八時起床。おえいは小田切医師へゆく。

昨夜の草花類とコスモスの苗をたづさへて、おえいと森部と三人づれで十時頃から目黒へゆく。門前で自動車を降りると、恰も上松のおすゝが来た。

森部と私は直ぐに庭へ出て、草花類を栽え込む。午後一時頃に佐久間も来た。目黒へ来ると、庭いぢりで忙がしい。

おすゝは四時頃に帰る。おえいも一緒に帰る。

私たちは夕飯を食つて、六時頃に出る。佐久間も途中で同道、道玄坂で夏帽、夏シヤツ、ステツキなどをかひ、それから自動車に乗つて七時ごろ帰宅。留守中に渡辺の愛子が来たといふ。

八時ごろ入浴。読書。十一時就寝。

二十日(月曜)晴(七十三度)

午前八時起床。

おえいは青山へ墓参にゆき、それから小田切医師へゆく。

都新聞の随筆をかく。十一時半頃に清見君が来て、一時間ほど話してゆく。

午後二時ごろに富塚の母が来て、おえいに面会、富塚はいよ／＼中野と結婚式を挙げたといふことを報告して行つたさうである。

崔永祚君が来て、浪花節慈善興行について劇場を借受けたといふので、松竹の木村君「を」へへ紹介してやる。豊国社の高田君が来て、雑誌「松竹」七月号の謝礼をとどけてゆく。

四時頃までに随筆をかき終る。一回一枚の割で七枚余。晩餐後、散歩。七時半ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

二十一日（火曜）陰、雨（七十二度）

午前七時半起床。おえいは小田切医師へゆく。

けふは文芸春秋の随筆を起稿。十時半頃から雨。

午後一時頃に佐久間が来て、篠田胡蝶君の娘との縁談進行、いよ／＼四五日中に見合の運びになつたと云ひ、一時間ほど話してゆく。

神奈川の伊東極浦君からその句集「残紅」を送つて来たので、返書。中島の細君の容態について問合せの郵書を発送。

二時半頃までに原稿十枚、題は「苦力の話」直ぐに文芸春秋社に郵送。

四時半頃に畑喜代司君が来て「鳥辺山心中」を浪花節でレコードに吹き込みたいといふ話があつたが、松延十種の関係があるので断る。

七時半ごろ入浴。読書。都新聞の豊島君から原稿うけ取りの返書が来た。

十一時就寝。

二十二日（水曜）陰、雨（七十三度）

午前七時半起床。おえいは小田切医師へゆく。

私の病氣も先づ快癒したので、床あげの内祝として強飯をあつらへ、一同午餐。

午後、その強飯をたづさへて、森部と共に目黒へゆく。

相変わらず花壇の手入れである。（それから）森部と中目黒のあたりを散歩。久しぶりでこゝらを一巡したが、昔のおもかげは全然無いほどに変わってしまった。殊にいつの間にか環状線の広い道路が出来たので、こゝらの面目は一新した。三時ごろ別宅に帰つて喫茶。

それから帰り仕度をして、四時ごろ帰宅。麹町通りへ来た頃に雨。留守へ中に山下が来たといふ。ゝ

五時頃に佐久間が来て、懸賞脚本二冊を松竹へ返して来たといひ、六時過る頃まで話してゆく。

深川の山本辰治から時候見舞の郵書が来た。文芸春秋社から原稿うけ取りの返書が来た。黒川君から郵書が来て、歌舞伎座七月興行に「虚無僧」を上演したいといふ。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（木曜）陰（七十三度）

午前八時起床。おえいは小田切医師へゆく。

黒川君に返書。山本にも返書。野間会から賛助員になつてくれと云つて来たので、承諾。

十時頃に佐久間が来て、けふの午後に植木屋が目黒の方へ来るから、私たちに来てくれといふ。おえいと森部と私の三人、佐久間同道で十一時半頃から出てゆく。佐久間の見合は明廿四日午後五時半から日比谷の三信ビル地下食堂と決定、佐久間側の媒介者として額田夫婦

が同席する筈であるといふ。

十二時頃に目黒着、やがて植木屋が来（たの）で、庭の西隅に糸瓜の棚を吊り、垣のそばに花ウツギ、池のほとりに百日紅、生垣の柾木の裾に何か灌木を栽え込むことに決める。それから森部に指図して、例のごとく花壇の手入れにかゝる。何分にも置土が新しいので、草花類の生育が思はしくない。

三時頃に岸井が来たので、池のほとりへテールを持ち出して茶を喫む。四時五十分頃に目黒を出て、途中で岸井と佐久間に別れ、五時十五分頃帰宅。留守中に大岡龍男君が来たといふ。

七時半ごろ入浴。山崎から廿五日のふたば会歓席の通知が来た。

十時半就寝。

二十四日（金曜）陰、晴、雨（七十五度）

午前八時起床。おえいは小田切医師へゆく。

都新聞社から原稿料を送つて来たので、返書。

俳句を再び訂正、そのはしがき二枚をかく。守田勘弥の告別式があるので、森部を代理として谷中斎場へ出してやる。

晚餐後、散歩。をり／＼に小雨。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

夜半に大雨、雷鳴。幾たびか眼がさめた。

二十五日（土曜）晴（七十四度）

午前八時起床。おえいは小田切医師へゆく。

俳句のはしがきを訂正。十時半頃に額田の細君が来て、昨日佐久間の見合を済ませたといひ、この縁談も大抵纏まるであらうとのことであつた。

読書。午後二時ごろ雷鳴驟雨。

今夜は嫩会例会で、岡田が先づ来た。つゞいて岸井、大村、山下、佐久間、額田、三橋、中島が来た。小林は子どもが病氣のために欠席。例に依て劇談、雑談。九時頃に九星社から「舞台」七月号の製本をとじて来たので、一同に分配。十時ごろ散会。

今夜は平河天神の縁日で、森部は芒、鶏頭などを買つて来た。わたしもあとから行つてみたが、他には思はしい草花もなかつた。

入浴。十二時就寝。

二十六日（日曜）晴、陰（七十六度）

午前七時半起床。おえいは小田切医師へゆく。

けふは目黒に植木屋が来る筈であるので、十時頃から森部と出てゆく。おえいは途中まで同乗、赤坂の豊川稲荷前で下車。わたし達は真直に目黒へゆき着くと、植木

屋が三人来て、今や池のほとりに百日紅を栽え付けてゐる所であつた。

私も森部と共に、持参の芒のたぐいを庭に栽え込む。陰晴定まらず、氣候も暑くなる。

植木屋は百日紅、花ウツギを栽え込み、更にヘチマの棚を作り、生垣の裾に灌木を栽え付け、午後六時頃に仕事を終りて去る。

六時半頃に森部同道で道玄坂を散歩。露店などひやかして、七時四十分ごろ帰宅。それから入浴。

森部も私も今夜は目黒に泊る。十一時就寝。

こゝらは定めて蚊が多からうと思つてゐたが、まだ蚊帳を吊るほどでもなかつた。

二十七日（月曜）陰、晴（七十四度）

午前七時半起床。

森部は「舞台」七月号の放送を手伝ふために、九時頃から佐久間方へゆく。

読書。庭内を散歩。なにしろ新築ではあり、播種もおくれたので、花壇の草花類の発育がどうも思はしくない。四時過るころに森部帰宅。佐久間も一緒に来て、六時半頃まで話してゆく。

七時半ごろ入浴。へ八時頃から雨。読書。十一時就寝。

二十八日（火曜）晴（七十六度）

午前七時半起床。

森部は糸瓜の棚に糸を吊る。糸にからませた方が早く棚の上に這ひのぼると、植木屋が教えて行つたからである。

八時頃に佐久間が来た。九時半頃から森部同道で目黒を出て、十時ごろ麴町に帰着。晴れて暑くなる。セルをぬいで単衣をきる。

午後、読書。中野と富塚の結婚披露会を来月五日午後五時半から一つ橋の如水会館「■」で開くとのことで、双方の父の名を以て私夫婦に案内状が来た。

晚餐後、散歩。歌舞伎座初日の入場券を送つて来たので、岸井、佐久間、三橋に郵送。小林の子供の病氣見舞状を発送。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（水曜）陰（七十五度）

午前七時半起床。おえいは小田切医師へ草花の鉢植を持参。

富塚の父に宛てゝ結婚披露会（不参）の返書を発送。額田から郵書が来たので、返書。

明日は晦日であるので、その勘定等のためにおえいは森部同道で午後から目黒へ出てゆく。三橋から歌舞伎座

入場券の礼状が来た。

午後一時頃に岸井が来た。ついでに額田の細君が来た。ついでに文芸春秋社の武内君が来て、モダン日本の原稿料をくれた。岸井先づ去り、武内君ついで去り、額田の細君は四時頃に去る。そのあひだにおえい等帰宅。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。読書。

十時半就寝。

三十日（木曜）晴、陰（七十六度）

午前八時起床。

おえいは吉岡医師と小田切医師方へ薬価と謝礼をとどけにゆく。

植木屋三人が来て、庭の刈込みをする。小林から返書が来て、子どもは百日咳のやうな容態であつたが、幸に快方に向つたといふ。

十時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。

午後、森部同道で四谷を散歩。雑品数点を買つて、二時半頃帰宅。

読書。六時頃に佐久間が来たので、目黒の地代を渡す。佐久間は四十分ほど話してゆく。そのあひだに驟雨、間もなく晴れる。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

本月「は」へも病気のために殆ど何事もしない。旧作の俳句の訂正、満洲の夏（都新聞、七枚）苦力の話（文芸春秋、十枚）などである。

（翻刻担当…三浦達尋）

昭和七年七月

一日（金曜）雨（七十六度）

午前七時半起床。細雨。

横浜の小島良子から郵書が来て、邦之助の一週忌^{しゅうき}仏事は七月三日に繰上げ、谷中墓地に参詣するといふ。

正岡君から郵書が来たので、返書。大阪への堀^{ほり}から郵書が来たので、返書。

併せてその戯曲「青年自由同盟」を小包み便で返送。読書。午頃に植田の細君が来た。

歌舞伎座の初日で、二時頃から出てゆく。午後から雨が強くなる。

岸井、佐久間、三橋も来「てゐ」た。昼の部は二時廿分開演。第一「川中島」第二「武田信玄」第三「虚無僧」夜の部は七時開演、第一「弓矢太郎」第二「国定忠次」三幕。私は第二の序幕まで見物して退場。夕方から雨はいよ／＼激しく、風さへまじつて来た。

九時四十分ごろ帰宅。入浴。十一時四十分就寝。雨は一時衰へたが、夜半から又もや豪雨。

二日（土曜）雨（七十五度）

午前八時起床。

今朝も雨が強いので、下座敷に降りて読書。

十一時頃に津沢の寿子が雨を冒して中元の礼に来た。武内君の戯曲「売茶修業」を一読。

午後一時頃に中島が来て、細君は南湖院に入院、自分も碑文谷を引払つて、茅ヶ崎に一戸を借受けることにしたといふ。つゞいて山下が来て、自作の戯曲「三十前」をとゞける。そこへ又、佐久間が来て、松竹懸賞当選脚本「街底」をとゞける。つゞいて又、豊田君が来た。中島は先づ去り、山下君はあとに残つて雑談。

三時頃に山下と佐久間は去り、豊田君は四時頃まで話してゆく。

森部に命じて「街底」を筆写させる。私は菅原君の戯曲「妻の名声」を編集。

山梨の河野君から自作の「土と金」が京都で上演された記念として、甲州産の硯を送つて来たので、礼状を送。改造社から俳句講座の校正刷を送つて来たので、すぐに校了、発送。

雨は夕から晴れて、宵には星が出た。七時半入浴。読書。十時半就寝。

三日（日曜）晴、陰（七十八度）

午前八時起床。

十時頃に津沢の寿子が来て、けふの邦之助法事に列席できぬと云ひ、香典だけを頼んでゆく。おえいは十一時

頃から右法事に列席するために谷中墓地へ出てゆく。

森部は昨夜から今朝へかけて、懸賞脚本五十枚〈余〉を筆写し終つたので、その訂正にかゝる。晴れて暑くなる。

午後三時頃におえい帰宅。森部は脚本を筆写し終る。あはせて百一枚。わたしも午後四時過る頃までに訂正し終る。

晚餐後、午後六時頃から散歩に出ようとすると、恰も岸井と小林が来た。舞台「七」〈八〉月号の戯曲三編を岸井に渡す。二人は八時頃まで話してゆく。

それから入浴。読書。十一時就寝。午前零時半頃から眼がさめて、三時過る頃まで眠られなかつた。

四日（月曜）晴（八十度）

午前八時起床。おえいは吉岡医師へゆく。

十時頃からおえいと森部同道で銀座の三越と松屋へゆき、諸方へ贈るべき中元用の品々をかひ、松屋の食堂で昼餐、午後一時ごろ帰宅。森部は中元の品をたづさへて、直ぐに額田方へゆく。

二時頃に大阪の中野の父が中野の叔父川「村」原君同道で来訪、四時頃まで語る。父は中野の結婚披露会に列席するために上京したのであるといふ。目黒の植木屋が来て、代金を受取つてゆく。

四時過る頃に森部帰宅。額田からコスモスを沢山貰つて来たので、兎もかくも庭の空地に仮栽えにさせて置く。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜も幾たびか眼がさめた。

五日（火曜）陰、晴（七十八度）

午前八時起床。

大野君と浦岡君方へ中元の品を持たせてやる。山形にある大村の弟から桜桃を送つて来たので、畑君方へ分配。丸尾君の細君が子供をつれて中元の礼に来て、三十分あまり話してゆく。つゞいて大村が中元の礼に来て、これも三十分ほど話してゆく。

額田の戯曲「武田信玄」を編集、舞台八月号の原稿である。

目黒の姉が午前から来て、午餐を喫して午後一時頃に帰る。私も明日は目黒へゆく筈である。

森部は夕方から牛込北山伏町の山田君方へゆく。額田の紹介で、受験「の」〈と〉学生（雑誌）の編集部就職をたのみに行つたのである。

晚餐後、散歩。七時半ごろ入浴。九時頃に森部帰宅、どうやら好都合に運びさうであるといふ。

十時半就寝。

六日（水曜）陰、雨（八十度）

午前八時起床。岸井から中元の品をとどけて来た。

十時頃に黒川君が来て、「虚無僧」の上演料をくれ、

一時間ほど話してゆく。額田から郵書が来たので、返書。

十二時頃から森部同道で目黒へ出かけようとする処

へ、恰も岸井が来たので、三人連れ立ってゆく。岸井に

長谷川君と額田の戯曲及び鳥居言人君の雑文を渡す。

けふも庭の手入れをするので、森部と私は庭に出る。

岸井も手伝ふ。をり／＼に日光をみせて又陰る。庭の手

入れを終つて、更に池の水を浚ふこととなり、岸井と森

部は大働きへ、五時頃に終る。やがて雨。

六時頃に三人晚餐、入浴。雑談。

七時半頃から雨が止んだので、岸井と森部は道玄坂へ

鯉をかひに行かうといふ。池へ放つたのである。雨あがり

で路が悪からうと思つたが、七時四十分頃から連れ立っ

て出る。果して路が悪い。道玄坂に人通りは多いが、夜

店は一軒も出てゐない。

折角出て来たのであるから、路の悪いのを我慢して宮

益坂までゆく。こゝには定店の金魚屋があるので、緋鯉

と緋目高をかひ、その入れ物がないので、更にバケツを

買つて入れる。

帰途は渋谷駅からバスに乗つて、九時十五分ごろ帰宅。

岸井は十時過る頃まで話して去る。

森部も私も今夜は目黒に一泊。十一時半ごろ就寝。
蚊が出るので、蚊帳を吊る。虫の声ももう聞える。

七日（木曜）陰、雨（八十度）

午前八時半起床。

森部は早朝から佐久間方へ発送の手伝ひにゆく。

読書。陰つてをり／＼に雨。気候も蒸暑い。

午後二時頃に森部帰宅。その節、佐久間から金子洋文

君作「金井半兵衛追跡」第一幕を受取つて来たので、直

ぐに岸井に発送。

三時半頃に雨がやんだので、森部と目黒を出る。

四時過るころに帰宅すると、佐久間が来てゐて、金子

君の戯曲第二幕をとどける。佐久間は六時頃まで話して

ゆく。

ほかに岡田禎子が坂本さち子同道で来たといふ。坂本

は杏の酒をくれた。大野君から中元の品をくれた。近藤

君から蒲鉾をくれた。

上松君から祝物受取りの礼状が来た。堀から原稿うけ

取りの返書が来た。蒲田の渡辺君から転居の通知が来た。

八時ごろ入浴。読書。俵木が中元の礼に来て、三十分

ほど語る。

十一時就寝。自宅でも今夜から蚊帳を吊る。

八日（金曜）陰、雨（八十度）

午前七時起床。

森部は黒川君方へ中元の品をとゞけにゆく。おえいは紀尾井町の小林君方へ中元の礼にゆく。陰晴定まらず、をり／＼に雨。

森部、おさき、おせんに中元の金をやる。

渡辺君に返書。坂本さち子に礼状を発送。茅ヶ崎の島から郵書が来たので、返書。金子君の戯曲第二幕を岸井に郵送。

長谷川君と金子君に郵書を贈る。戯曲寄稿の礼状である。

旧作の俳句を訂正。へ佐久間に頼まれた短尺十三枚に揮毫。午後三時頃に坂本さち子の使が来て、舞台七月号五部をうけ取り、誌友半年分の会費をとゞけてゆく。三越から草花の盆栽をとゞけて来た。額田からの中元である。小林宇吉から贈物の礼状が来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

九日（土曜）陰、晴（八十一度）

午前八時半起床。陰つて風吹く。

町内の鳶頭が中元の礼に来たので、当方からも中元をやる。

武内初太郎君の戯曲「売茶修業」を一読、その批評を

添へて返送。

二時半頃に海野が中元の礼に来て、五時頃まで語る。そのあひだに三橋も中元の礼に来て、門口で帰る。

名古屋新聞支局の大島君が来て、毎週の文芸付録に劇評をたのみたいから額田に紹介してくれといひ、三十分ほど語る。そのあひだに、浦岡君から中元の品をとゞけて来た。

五時半頃に岸井が来て、七時半頃まで語る。おえいは〈夕方から〉おさきと、おせんを連れて、銀座へ買物にゆく。

八時ごろ入浴。読書。

おえい等は九時ごろ帰宅。それから森部と公園を散歩。十一時就寝。夜半むし暑く、幾たびか眼がさめた。

十日（日曜）晴、陰（八十度）

午前八時半起床。おえいは私の起きないうちに青山へ墓参にゆく。

岡田禎子から中元の品をとゞけて来たので、返書。宇治山田市の神山君から句集の選をたのみ、併せて私の句を焼きつけた花瓶を送つて来たので、選了、返送。

森部に命じて、麴町一丁目の小川君方へ中元の品を持たせてやると、同家の養女は赤痢で去る一日俄に死去したといふ。年は十六歳、可哀さうなことである。それを

聞いて、おえいは取りあへず悔みにゆく。

町内の中川君方へも中元の品を持たせてやる。浦岡君から干鰯を貰ったので、紀尾井町の小林君へも分配すると、その返礼に竹葉の蒲「焼」焼をくれた。

三時頃に淀橋のおさだが子供をつれて、中元の礼に來たので、おえいからも返礼をやる。

四時半頃に小林宇吉が中元の礼に來て、三十分あまり話してゆく。又そのあとへ中島が中元の礼に來て、これも三十分ほど話してゆく。

七時半ごろ入浴。浦岡の細君が來て、おえいと一時間ほど語る。

読書。十時半就寢。

十一日（月曜）陰

午前七時半起床。おえいは吉岡医師へゆく。

森部は目黒の町役場へ新築届を出すために、九時頃から目黒へ出てゆく。額田から郵書が來たので、返書。

向ふの内藤君から菓子をくれた。杉原から中元の品をとどけて來た。松竹の大谷君からも中元の品を贈つて來た。

読書。午後四時近い頃に佐久間が來て、篠田君の娘との縁談はいよいよ決定したといふ、つゞいて三橋が來て、四時四十分頃に二人は去る。

麹町一丁目の小川君から香典返し配りものを届けてきた。町内の中川君からも中元の品をとどけて來た。

五時頃に森部帰宅。役場へ建物の図面を差出すために、案外に暇取つたといふ。鈴木君の未亡人が中元の礼に來て、門口で話しへて帰る。ゝ

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寢。

十二日（火曜）晴（八十六度）

午前七時半起床。

おえい（い）は四谷の丸尾君方へ中元の礼にゆく。その留守中に深川の山本未亡人が中元の礼に來て、一時間ほど話してゆく。

額田と林二九太君に郵書。

午頃に目黒の姉が來て、町役場から町税と付加税五十七円五十銭を納めろといふ通知があつたといふ。目黒の植木屋が來て、中元として草花の鉢をくれた。婦人公論の藤田君が原稿をたのみに來た。

読書。晴れて俄に暑くなる。

「四」三越から缶詰、菓子、浴衣地などを送つて來た。

額田の中元である。森部と女中等にそれ／＼分配。

四時半頃に佐久間が來た。つゞいて渡辺の愛子が中元の礼に來た。佐久間は残つて話してゐると、六時頃に額田が來た。七時半頃に山下が中元の礼に來た。三人は九

時頃まで話してゆく。暮れても暑い。

それから入浴。門前で納涼。おえいはおせんを連れて、麴町通りの草市へ買物にゆく。

十一時十五分ごろ就寝。

十三日（水曜）陰（八十五度）

午前七時半起床。けふも暑い。

おえいは九時半頃から銀座へ買物にゆく。十時半頃に額田の細君が来て、草花をくれ、あはせて仏前に青物類を供へ、一時間あまり話してゆく。そのあひだにおえい帰宅。

森部は目黒の役場へ納税にゆき、十一時ごろ帰宅。

細野多智子が中元の礼に来て、門口で帰る。つゞいて植村君が中元の礼に来て、一時間あまり語る。又そのあとへ佐久間が中元の礼に来て、これも一時間半ほど話してゆく。

左団次の使が来て、中元の品をとゞけてゆく。武内君から原稿うけ取りの返書が来た。丸尾君から昨日の礼状が来た。

紀尾町の小林君と麴町一丁目の小川君からも中元の品をとゞけて来た。

放送局の小林君が来て、放送局の中元をとゞけてくれ、門口で帰る。

日暮れて雷鳴、但し雨は降らなかつた。

七時半ごろ入浴。八時半頃から森部と平河天神の縁日にゆく。暑いせゐか、なか／＼賑はつてゐた。

十時半就寝。十二時頃から醒めて四時頃まで眠られなかつた。

十四日（木曜）晴（八十四度）

午前八時半起床。

一丁目の小川君方の娘の二七日に相当するので、おえいは供へ物をたづさへてゆく。紀尾井町の小林君が中元の礼に来て、一時間ほど話してゆく。

松竹の里川君が来て中元の礼を述べ、門口で話して帰る。

「現代」から五六枚の随筆を頼んで来たので、午後から起稿、四時頃までに五枚、題は「孝子と貞女」

福島石井から郵書が来て、しばらく神経衰弱に悩んでゐたといふ。どこにも病人の多いことである。取りあへず見舞の郵書を発送。

富塚の母が中元の礼に来て、門口でおえいと話して帰る。市川寿美蔵からも中元の品をへとゞけて来た。～

五時頃に岸井が来て、七時頃まで話してゆく。八時ごろ入浴。

読書。をり／＼に細雨。十一時就寝。夜半から雨。

十五日（金曜）雨、陰、雨（八十度）

午前七時半起床。あかつきに大雨。

俳句を訂正。雨晴れて、又陰る。

午後一時半ごろに中央公論の松本君が来て、原稿の催促。三時頃まで話してゆく。

読書。四時頃から雨、をり／＼に雷鳴。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半に大雨、雷鳴。

十六日（土曜）雨（「八」〈七〉十〈五〉度）

午前八時半起床。けふも曉に大雨。

十時頃に上松の武雄が中元の礼に来て、一時間ほど話してゆく。それから町内の永田理髪店へ髪を刈りにゆく。店の主人と職人に中元の金をやる。

「現代」から原稿うけ取りの返書。花田ひで子から暑中見舞の郵書が来た。

晴れんとして晴れず、をり／＼に雨。きのふ今日の藪入は大外れで、気の毒であつた。

俳句を訂正、いつまで訂正しても際限がないので、好い加減に止めようと思ふ。

おえいは町内の浦岡君方をたづねると、細君不在、みやげ物を差置いて一旦帰宅。やがて細君が帰つたとて迎ひに來たので、六時半頃から再び出てゆく。雨が強くな

つたので、森部は傘を持つてゆく。おえいは八時ごろ帰宅。

七時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

十七日（日曜）陰

午前八時半起床。

十一時から「森部」へおえいへ同道で目黒へゆく。やがてあとから額田が来た。

午後一時頃に佐久間が篠田胡蝶君、その娘二人、三井信託の中山君夫婦を案内して来た。突然の来客に少しく驚かされたが、兎も角も座敷へ通して三十分ほど語る。篠田君の妹娘は佐久間方へ縁談整ひ、中山君はその媒酌人であるといふ。

額田は更にあとに残つて、一時間ほど話してゆく。おえいは姉と共に近所へ散歩に出てゆく。こゝらではもう日暮らしが鳴く。

四時半頃に佐久間は再び来て、五時半頃まで話してゆく。晚餐の後、姉とおえい、おとくは道玄坂の夜店をひやかしに出てゆく。

読書。満月に近い月はをり／＼に雲を出て、そこらの草むらには虫の音がきこえる。九時過る頃におえい等帰宅、道玄坂はおびたゞしい人出であつたといふ。おえいも今夜は目黒に一泊することになる。

十時ごろ入浴。十時廿分ごろ就寝。夜半に又もや雨の音。

十八日（月曜）雨、陰

午前六時半起床。細雨。五六日は目黒に滞在の筈である。

けふはおとくが宿下りに出る筈であるので、早朝に麹町からおさがり来た。おとくは八時頃から出てゆく。雨やんで、をり／＼に薄い日光が洩れる。

おさがりが森部の手紙を持参、それによると留守中に宮森君、正岡君、山崎が中元の札に来たといふ。

婦人公論の小説起稿に取りかゝらなければならぬので、江戸時代の地図など調べる。大工が来て、襖の狂ひを修繕してゆく。

十一時半頃に岸井が来たので、一緒に昼餐、岸井は午後二時頃まで話して去る。二時半頃に佐久間が来て、池のほとりでおえいやおさを撮影、四時頃まで話して去る。

宮内君から電話で、観音劇場の市川鶴之助が「権三と助十」を上演したいといふ。兎も角も承諾の返事をして置く。

晚餐後、散歩。風が絶えて蒸暑い。六時ごろ帰宅。入浴。

六時半頃におえいとおさは帰る。

読書。横浜の高橋から郵書が来たので、返書。

七時廿分頃におとく帰宅。みやげに無花果を買つて来てくれた。

十時就寝。

十九日（火曜）晴

午前六時半起床。

植木屋が庭の芝や植木の刈込みに来た。池の鯉もやうやく馴れて、私たちの投げる麩を喰ふやうになつた。花壇のダリア、桔梗、百日草のたぐひが皆咲き出した。朝から虫の声がきこえる。

八時頃から西洋間に閉ぢ籠つて、婦人公論の小説を起稿。晴れて暑くなる。

四時頃に森部から電話がかゝつて、額田の細君が富山房の歌舞伎物語の印税をとゞけに来たといふので、額田あてに返書を出して置く。黒川君からも電話で、いつまで目黒にゐるかといふ問合せが来た。

五時頃までに原稿十五枚をかく。晚餐後、近所を散歩。七時ごろ入浴。庭のうちを散歩。暗い池で鯉の跳る声がかきこえる。

読書。十時就寝。

二十日（水曜）陰、晴

午前六時半起床。

けふも植木屋が来て、生け垣を刈り込む。けふは土用の入であると言ふだけに、朝から暑い。

婦人公論の小説をかきつゞける。植木屋は刈込みを終つて、十一時頃に帰る。

十一時半頃に岸井が来て、これから松竹へ広告原稿をうけ取りにゆくと云ひ、一時間ほど話してゆく。つゞいて一時頃に黒川君が来て、三十分ほど話してゆく。日中はいよ／＼暑くなる。

四時ごろ近所を散歩。八幡通りの理髪店で顔を剃る。ほかに文房具二三点を買つて、五時ごろ帰宅。

六時ごろ入浴。浴後、床几を庭に出して涼む。虫の声やしきりに聞える。今からこれでは秋が思ひやられる。

読書。十時就寝。

十一時廿分頃に佐久間から電話がかゝつて来て、額田は鎌倉の甥が危篤のために今夜俄に出発したので、明日の結納取交しにゆくことが出来なくなつたといふ。あひにくの事である。就ては佐久間家と篠田家の使をすべて中山君に一任したら好からうと答へて置く。

更けても蒸暑く、俄に蚊が殖えた。

二十一日（木曜）晴（九十度）

午前六時起床。朝から暑い。額田の細君から電話が来て、鎌倉の甥危篤のために、自分もこれから出発するといふ。

八時頃に佐久間が来て、昨夜の挨拶があつた。つゞいて麹町から森部が来た。佐久間は一時間ほど話して去る。婦人公論の原稿をかきつゞけたが、大暑のために抄取らない。

おとくは午後一時頃から麹町へ出てゆく。二時半頃に金魚屋が鯉を売りに来たので、緋鯉大小十尾を買つて池に放つ。

三時半頃におとく帰宅。四時頃に中山君が来て、佐久間の結納取交しも滞りなく取済ませたといふ。この大暑に御苦労であつた。

中山君が去ると、間もなく佐久間が来た。そのあとから岸井と三橋が来て、舞台八月号の校正も本日全部終つたといひ、糸瓜棚の下に竹床几を出して喫茶、雑談。六時頃に三人立帰る。

森部も夕飯を食つて、七時頃に帰る。それから入浴。夕刊をみると、けふは当夏第一の暑氣、日中は九十度二分に上つたといふ。池のほとりに床几を運んで八時頃まで納涼。

読書。十時就寝。

二十二日（金曜）晴（九十度）

午前六時起床。けふも朝から晴れて暑い。

八時頃から原稿をかきつゞける。

十二時頃に佐久間が来て、先日撮影の写真を見せる。

けふは夕刻から木挽町の木村屋倶楽部で篠田君の娘の長唄名びろめ会があるので、中山君等と一緒にゆくといふ。

五時頃までに原稿廿三枚をかく。七時ごろ入浴。

読書。十時就寝。

二十三日（土曜）晴（九十度）

午前六時起床。

八時半頃に中山君の細君が来て、昨夜の名びろめ会の席上で佐久間が例の持病を発して卒倒、大騒ぎであつたといふ。佐久間に持病のあることは篠田家でも予て承知ではあるが、当夜は同家の親戚知人等が多数参加、その席上で右の椿事を演出したのであるから、たとひ結納の取りかはしが済んだとしても、或は破談になりはせぬかといふ懸念があると、細君も心配してゐたが、今さら何うにもならない。細君は一時間ほど話してゆく。

麹町から森部が来た。十時頃に中村多嘉子が来て菓子をくれ、三十分ほど話してゆく。けふも朝から暑い。

婦人公論の原稿三枚をかく。あはせて六十（二）一枚、

題は「驚」

午後は寝ころんで読書。三時頃から一時間あまり仮睡。眼をさますと、姉も森部を庭に出て水撒きをしてゐるので、私も出て手伝ふ。

原稿も書き終わつたので、一先づ帰宅することゝし、六時半頃から森部同道で帰宅。暮れても暑気おへ（と）ろへず、而も天氣がよいので今夜の両国の川開きは定めて賑はつたであらうと察せられた。

七時ごろ入浴。一週間ほど目黒へ行つてゐるあひだに、こちらの庭の草花も大分咲き出した。

十一時就寝。日中はいづ方とも同様であるが、日没後は目黒の方が涼しいやうである。

二十四日（日曜）晴（九十二度）

午前六時半起床。朝から暑い。ことしの土用はかなりに温度が高いやうである。

「驚」を訂正して午頃に終る。速達便で婦人公論社に発送。

午後は下座敷に降りて読書。二時頃から一時間ほど眠る。

四時半頃に中野が暑中見舞に来て、一時間ほど話してゆく。中野は西瓜二個をくれたので、その一個を隣家の近藤君方へ分配。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（月曜）晴（九十一度）

午前六時半起床。

おえいは深川の山本君方へ暑中見舞にゆく。

九時半頃に篠田君来訪。例の佐久間の件である。予想の通り、破談にしたいやうな口吻で、色々の話があつた。いまだ正式に破談の通告に來たわけではないが、暗に私の諒解を求めに來たものと察せられた。それから雑談、十時四十分頃に去る。

十一時頃におえい帰宅。深川の帰途、銀座の松屋へまはつて、富塚、鈴木、海野の諸家へ送るべき暑中見舞の品を頼んで來たといふ。

午後は俳句を訂正。けふも暑い。

今夜は嫩会例会で、五時四十分頃に小林が先づ來た。つゞいて岸井、山下、山崎、中島、佐久間が來た。中島は汽車の都合があるとして、八時頃に去る。

八時半に額田が黒川君同道で來た。黒川君は酔つてゐて、十時半頃まで話してゆく。その節「虚無僧」の上演料追加をとゞけて呉れた。

十一時十分ごろ一同散会。

それから入浴。午前一時就寝。

二十六日（火曜）晴（九十二度）

午前六時半起床。

八時半頃から神楽坂上の第一銀行支店へゆき、富士印刷の配当金をうけ取つて来る。けふも朝から暑い。

麹町四丁目の洪文堂から暑中見舞のハガキを印刷して「ゐ」來た。印刷料は百枚につき五十銭の割合である。

過日来、暑中見舞の郵書五十余通到着してゐるので、けふ出來して來たハガキで答札を発送。

旧作の俳句を訂正。婦人公論の藤田君から原稿うけ取りの返書が來た。舞台八月号を高橋、原田、林、東儀、難波に発送。

晚餐後、近所を散歩。六時半ごろ帰宅すると、佐久間が來てゐて、篠田君との縁談はいよ／＼破談に決したといふ。この縁談は破れた方が寧ろ双方の爲であるかも知れない。佐久間は一時間あまり話してゆく。それから入浴。

読書。十一時就寝。

二十七日（水曜）晴（九十一度）

午前七時半起床。

十時頃に中山君夫婦が來て、佐久間の結婚破談について釈明する所あり、いよ／＼本日をもて双方の結納を戻すことになつたと云ひ、一時間ほど話してゆく。

森部は舞台八月号の発送を手伝ふために、早朝から佐久間方へ出てゆく。額田も佐久間の媒酌人として篠田方へ出向く筈である。

暑中見舞の郵書十九枚到着、その返書を発送。

けふも暑い。俳句を訂正。

午後三時半頃に中山君が再び来て、自分は篠田の使として佐久間方へ向ひ、額田は佐久間の使として篠田方へ向ひ、万事とどこほりなく結了したといひ、三十分ほど話して去る。

五時頃に森部帰宅。結納取戻しについての報告があつた。

六時半ごろ入浴。やがて佐久間が挨拶に来た。ついで俵木が来た。俵木は八時頃に去り、佐久間は九時頃に去る。

十一時ごろ就寝。

二十八日(木曜)晴(九十一度)

午前七時半起床。

山上から暑中見舞の郵書が来て、大阪歌舞伎座の懸賞脚本は大村が当選しさうであるといふ。返書。岸井から郵書が来たので、同じく返書。ほかに暑中見舞のハガキ十枚到着、いづれも返書。

講談社の鈴木君が原稿をたのみに来たが、森部が応接

して断つて置く。

十二時過るころに額田の細君が来て、子供等をつれて明日から静浦の海水浴にゆくといひ、一時間ほど話してゆく。

俳句を訂正。午後にも暑中見舞のハガキ七通到着、いづれも返書。

横浜の高橋から絵馬と人形を送つて来たので、返書。

六時半ごろ入浴。それから散歩。暮れても暑い。近年めづらしい大暑である。

読書。十一時就寝。

二十九日(金曜)晴(九十二度)

午前七時半起床。

暑中見舞の郵書十一通到着。その返信八通をかく。富塚、鈴木、海野から贈物うけ取りの礼状が来た。

小林の戯曲「この殺人を見よ」を一読。午後一時頃にプレイガイド社の加藤真君が来て、十株の払込金二百円をうけ取つてゆく。同社は今度株式会社となつたので、私もその十株を受けさせられたのである。

けふも暑い。新聞には何年振りとか伝えてゐるが、兎に角これほどの大暑の毎日つゞくのは近年稀である。

三時(半)頃に九星「社」(舎)の山田君が来た。ついで岸井が来た。私の還暦記念の原稿もやうやく纏まつ

たので、その印刷を九星舎に依頼することにしたのである。

俳句千余句、漢詩六十余首、あはせて百七十八ページになる予定である。岸井も相談にあづかつて、組み方や装幀について打合せを済ませ、山田君は五時頃に去り、岸井はあとに残つて五時半頃まで話してゆく。歌沢寅右衛門が暑中見舞に來た。

六時半から入浴。おえいは夕方から目黒の控家へ月末の支払ひにゆき、七時半ごろ帰宅。

八時頃から麹町通りを散歩。帰つて森部と門前で納涼。暮れても風が無い。

十一時就寝。あまり暑いので、幾たびか眼がさめた。

三十日（土曜）晴（九十二度）

午前七時起床。けふは明治天皇祭。

暑中見舞の郵書十通到着、その返書六通をかく。

けふから中央公論の戯曲の起稿を思ひ立つて、その材料を調査。題材は小春治兵衛であるが、私はむかしの大阪の地理風俗をよく知らないので、その調査に殆ど一日を費した。けふも暑い。

藤田草之助君の戯曲「金を持つて困つた話」を編集して、岸井に郵送。舞台の原稿である。

六時頃に放送局の小林君が市川小太夫同道で來訪。来月七日に「水滸伝」を放送したいといひ、三十分ほど話

してゆく。

文芸春秋社から八月号の原稿料を送つて來たので、返書。

七時ごろ入浴。散歩。暮れても風が無い。
十一時半就寝。

三十一日（日曜）晴（九十一度）

午前七時半起床。

戯曲を起稿。なにぶん大暑のために筆が進まないの、半日にして中止。午後は読書。

雨を見ざること半月。温度は少しも下らない。新潮によると、発狂者が俄に増加したさうである。

暑中見舞の郵書十六通到着、その返信十一通をかく。五時頃に佐久間が來たので、目黒の地代を渡してやる。ついでに花田房子が來た。

六時半ごろ入浴。それから散歩。帰つて読書。十一時半就寝。

本月の仕事は鷺（婦人公論、六十一枚）還暦記念句集の編集、舞台の編集など。

（翻刻担当…三浦達尋）

昭和七年八月

一日（月曜）陰（九十一度）

午前八時半起床。朝は陰、やがて晴れる。

三重県波切町の岡紫石君から俳句の選をたのんで来たので、選了。暑中見舞の郵書八通到着。返信五通をかく。

午後は読書。大村から七月分の会費を送つて来たので、返書。

六時半ごろ入浴。散歩。帰つて読書。

十一時半就寝。

二日（火曜）陰、晴（九十三度）

午前八時起床。

けふは母の祥月命日に相当するので、写真を飾りて焼香。

おえいは早朝より青山へゆく。姉も目黒より青山へ来て待受け居り、おえいと共に墓参。それから同道して帰宅。

十時半頃に上「■」松のおすゝが来た。これも青山に参詣して来たさうである。姉は午餐を喫して、午後一時ごろに去り、おすゝは三時半頃まで話してゆく。

天気予報には驟雨とあるが、一向に降らない。

暑中見舞いの郵書十一通到着、その返信八通をかく。大坪草二郎君の戯曲「不死身の松」を一読。岸井方へ郵送。

読書。六時半ごろ入浴。散歩。森部は神田へゆく。十一時就寝。

三日（水曜）晴（八十九度）

午前七時起床。

暑中見舞の郵書八通到着。その返信六通をかく。

中央公論の戯曲は小春治兵衛をかく積りであつたが、何分思ふやうに筆が運ばないので、更に他の材料を探すこととし、終日読書。

午後三時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。

竹松、梅松君から郵書が来て、紅若、七三郎、吉之丞等が名古屋で「時雨ふる夜」を放送したいといふ。つゞいて名古屋の放送局からも郵書が来て、右放送の交渉があつたが、あまりに放送料が安いので「ホウソウコトワル」といふ〈返〉電を発送。

六時半ごろ入浴。けふは風が強いので稍や凌ぎよかつた。

読書。梅松君から又もや電報が来て、「ハナシツケル、オマカセアレ」といふのでよろしく頼むといふ返電を発送して置く。

十一時就寝。

四日（木曜）晴

午前七時半起床。けふも少しく風吹く。

戯曲原稿は目黒へ行つて書きあげて仕舞ふつもりで、午前九時半頃から仕度して出る。森部も同道。

目黒の庭の花壇には種々の草花がおひ／＼に咲き出した。へちまや唐もろこしも著るしく伸びた。こゝも暑い。

午後は読書。四時頃から森部と共に庭へ出て水を撒く。

早つぎのために草木はよほど弱つてゐるらしいので、大に勉強して水を遣る。池の水も取替へる。

六時頃に森部帰宅。私は残つて読書。六時半入浴。庭が広いのと、樹木が多いのとで、暮れると流石に涼しく、日ぐらしが頻りに鳴く。

十時半就寝。

五日（金曜）晴

午前六時半起床。朝から風が強い。

門柱に取付けてあるベルが破損したので、土田電機商会に電話をかけると、店員が来て新しいベルと付けかへてゆく。

けふから中央公論の戯曲を起稿。腹案がまだ纏まらな

いので、草稿を付けてみる。風がまた／＼強い。

十二時頃に松竹の木村君から電話がかゝつて、これから訪問するといふ。やがて木村君来訪。来る十月には東京の大都市計画が実行されるので、何かそれに因んだものを起稿してくれとないかといふ。差当りこれといふ思ひ付もないが、兎もかくも一応考へた上で返事をする答へて置く。木村君は一時頃過る頃まで話してゆく。

戯曲をかきつゞけたが、なんだか手探りのやうで思ふやうに筆が進まない。四時頃から庭へ出て、水まきの手伝ひをする。

六時半ごろ入浴。風はまだ止まない。

読書。十時就寝。雨の音がきこえたが、直ぐに止む。

六日（土曜）晴

午前七時起床。風はやんだが、朝から暑い。

八時半（頃）におえいが西瓜と奈良漬を持つて来た。奈良漬は大阪の山上から送つて来たのであるといふ。

おえいが自宅から暑中見舞の郵書十四通を持参したので、その返書十一通をかく。山上にも礼状を発送。

けふも戯曲をかきつゞけたが、やはり思ふやうに書けない。

四時頃から水まきの手伝ひをする。おえいは晚餐を食つて、六時頃に帰る。それから入浴。

讀書。暮れてやゝ涼しくなる。十時半ごろ就寢。

七日（日曜）晴

午前六時半起床。朝から日ぐらしが鳴く。

けふも戯曲をかく。午後一時頃から寝ころんで讀書。一時間ほど眠つてしまつた。けふは土用の明けとかいふのであるが、やはり暑い。

四時頃から庭に出て、水まきを手伝つてみると、半鐘の音がきこえる。出てみると、坂下の環状線道路に面したところに煙があがつてゐる。白昼であるから、弥次馬達が大勢かけてゆく。私もつゞいてゆくと、大通へ出る右角の家で、周囲は草原であるから他に類焼の危険もなく、一戸を半焼けにただけで消えた。

六時半ごろ入浴。讀書。暮れてやゝ涼しくなる。十時就寢。

八日（月曜）晴

午前八時起床。

九時半頃に植木屋が来て、庭の百日紅の根のまわりを堀り、十分に水をたゝへて行く。先月以来の旱魃のために、樹木がよほど弱つた為である。なにしろ雨を見ざるに甘余日、その上に例外の大暑であるから、草も木も堪らない。

戯曲をかきつゞける。どんなものが出来あがるか、自分にも判らない。

午後に森部が来た。麴町の宅へとゞいた郵書を持参したが、その大部分は暑中見舞である。それ／＼に返書。大村の郵書には上州水上温泉に滞在してゐるが、こゝも暑いといふ。

森部は池の水淺ひなどして、六時半頃に帰る。それから入浴。

九星舎の山田君が還暦祝いの俳句原稿を持参、門口で帰る。その話によると、岸井は過日来病氣であるといふ。俳句原稿に訂正を要する個所があるので、七時頃から訂正に取りかゝつて九時頃に終る。暮れると、少しく涼しい。

十時半就寢。

九日（火曜）晴

午前七時半起床。

戯曲をかきつゞける。十時頃に岸井が来て、俳句の原稿をうけ取り、四十分ほど話してゆく。岸井は筋肉性リウマチスで体中が痛むといふ。

目黒の町役場から水道管役工事費の剰余金十三円五十銭を還付するから十七日まで受取りに来いといふ通知が来た。

中島と森部から郵便が来たので、返書。ほかに暑中見舞の郵便十一通に対して、返信八通をかく。

四時頃から水まきの手つだひ、晚餐後散歩。六時半ごろ入浴。

夕刊をみると、台風が明朝東京を襲ふかも知れぬといふ。

読書。十時半就寝十二時頃に雨の音、間もよく止む。

十日（水曜）晴

午前七時起床。

戯曲をかきつゞける。暑中見舞の返信三通、ほかに文芸新聞の原稿三枚をかく。

四時頃から水まきの手伝ひをすること例のごとし。

五時半頃に宮内寿松君が来て、市川鶴之助が観音劇場で「権三と助十」を上演するに付、自分が舞台監督をたのまれたと云ひ、その打合せなどして四十分ほど話してゆく。

晚餐後、中目黒辺を散歩。七時ごろ入浴。

読書。十時半就寝。こゝらは思ひのほかには蚊は少ないが、色々の虫が飛び込んで来る。

十一日（木曜）晴、風

新聞をみると、台風はいよいよ九州四国方面に襲来し

たといふ。その余波を受けたとみえて、東京も朝から風が強い。

戯曲をかきつゞける。風が強いので、窓を閉ぢれば蒸暑く、明ければ砂塵が舞ひ込む。頗る閉口である。

午後一時頃に佐久間が来て、三時頃まで話してゆく。佐久間方では去一日の朝、盗難に逢ひ、現金四十五円と腕時計を奪はれたといふ。

四時頃から水まきの手伝ひ、けふは風が強いので、いつもよりも少しく骨が折れた。

けふは散歩に出ない。六時半頃入浴。

読書。七時半頃に三橋が来て、今まで岸井方で「舞台」の校正をしてゐたといひ、十時頃まで話してゆく。

をり／＼に驟雨、さしても降らない。十時四十分ごろ就寝。

十二日（金曜）晴、驟雨

午前六時起床。

戯曲をかきつゞける。けふも風が強い。

午後一時頃から一時間ほど眠る。額田から郵便が来たので、返書。

三時四十分頃から驟雨、五十分ほどで晴れる。それでも久しぶりの降雨で、庭の草木は頗る活気を添へた。

晚餐後、散歩。帰つて入浴。空は晴れて月が出た。

読書。十時半ごろ就寝。

十三日（土曜）晴

午前六時起床。

七時半頃に森部が縁側に敷く薄縁を持参。それから目黒の町役場へ行つて、水道工事概算の剰余金十三円五十銭を受取つて来た。

戯曲をかきつゞける。午後は読書。一時間あまり眠つた。

四時頃から水まきの手伝ひをする。今夜は麴町へ帰りであるので、晚餐後、書きかけの原稿など取纏めて、森部と共に目黒を出る。

六時四十分ごろ帰宅。入浴。

留守中に暑中見舞その他の郵書が来てゐるので、一々読むのに一時間余を費した。

十一時就寝。

十四日（日曜）晴（九十度）

午前七時半起床。相変わらず暑い。

朝から戯曲をかきつゞける。午後は留守中の郵書に對して、それ／＼に返書をかく。頗る疲れた。

六時半ごろ入浴。

八時四十分頃に佐久間方へ出入の大工倉持が来た。佐

久間の祖父に頼まれて来たので、その用件は佐久間の縁談である。篠田君の娘との縁談が破れた為に、祖父は更に小林宗吉の妹を貰ひたいといふので、兎も角も私の意向を聞き糾しに来たといふ。然るべき縁組とは思はれるが、何分にも私の一存で挨拶の出来ることでないから、小林等の意中を確めた上で、改めて返事をする旨を答へて置く。倉持は十時頃まで話してゆく。

十一時就寝。

十五日（月曜）晴（八十度）

午前八時起床。

四万温泉にある大村から座敷用の挽地物塵取りを送つて来た。

戯曲をかきつゞける。何分にも連日の大暑に疲れて一向に捗取らない。

午後二時頃に額田が来て、佃煮とアイスクリームをくれた。佐久間縁談の件については額田も賛成、就ては小林の意中を糾すために、明後日逗子へ行つて来るといふ。額田は四時過る頃まで話してゆく。

演劇社から速達便が来て、伊井蓉峰が今朝死去したに付、その思ひ出を簡短に書いてくれといふので、直ぐに返書。山崎が来て、三十分ほど（語る。）

六時半ごろ入浴。七時過る頃に林君が来て、九時頃ま

で話してゆく。

空は晴れて陰曆十四日の月が明るい。

十一時半就寝。夜半に雨の音。

十六日（火曜）雨

午前七時半起床、

新聞をみると、伊井蓉峰は昨午前二時廿分の死去。新派の元老として四十余年の舞台生活も終りを告げたのである。彼の若い時、私の若い時、彼れ是れ思い出して一種の今昔の感に堪へない。

陰晴定まらず、をり／＼に驟雨。蒸暑い。

例のごとく戯曲をかきつけてみると、頭が重く、目が眩む。「■」脳貧血を発したやうに思はれるので、直ぐに下座敷に降りて葡萄酒をのみ、蒲団を敷かせて平臥。約二時間ほどと／＼と眠った。

十二時半頃に眼をさますと、頭もよほど軽くなつたので、離床。再び二階の書斎に戻る。

鬼怒川温泉にある大村から郵書が来た。大阪毎日新聞懸賞募集の大阪歌舞伎座開場式上演脚本は大村の「堂島繁昌記」が二等に当選したといふ。先づは結構である。取りあへず返書。

伊勢の神山君にたのまれた短尺五枚に揮毫。暑中見舞の返信六通をかく。

五時半頃に佐久間が来て、一時間ほど話してゆく。

入浴。読書。けふの驟雨は台風の影響ださうで、雨後少しく暑威を感じたやうである。宵から晴れて、明るい月が出た。

十一時就寝。

十七日（水曜）陰（八十五度）

午前八時起床。

戯曲をかきつける。

けふは伊井蓉峰の葬儀が午前十時から十一時まで芝愛宕町の青松寺で執行されうので、森部を代理に出してやる。流石に新派の元老だけに会葬者おびたく、非常の盛儀であつたといふ。

中央公論社の松本君が原稿の模様を聞合せに来て、門口で帰る。

午後二時頃に三橋が来て、岸井の容態がよろしからず、昨日からドツと仆れてしまつたといふ。病症は神経衰弱と胃酸過多と筋肉リウマチスの併発である。病気が病気であるから、右から左には快癒しまいと思はれる。三橋は一時間ほど話してゆく。

暑中見舞の返信五通をかく。

六時半ごろ入浴。それから森部同道で二七不動の縁日にゆく。

八時十分ごろ帰宅。暮れてやゝ涼しくなる。「■」(八)時半頃に額田が来て、今日逗子の小林をたづね、佐久間縁談の件を相談した処、小林にも異存ない様子で、兎も角も本人と打合せた上で返事をするとの事であつたといふ。額田は三十分ほど話してゆく。

十一時就寝。

十八日(木曜)陰、雨(八十度)

午前八時起床。

朝から折々に驟雨。台風之余波であるらしい。

戯曲をかきつゞける。

十一時半頃に津沢のひさ子の母子と渡辺の愛子が来て、明日谷中の邦之助墓に参詣するといひ、午餐を喫して一時半頃に帰る。

森部にたのんで、神田へ原稿紙をかひに遣る。これも

一時半頃帰宅。

四時頃から雨激しく降りつゞける。けふは涼しいせゐか、執筆やゝ捗取る。額田から原巖君「■」の戯曲「ある浪人の話」を送つて来た。

六時半入浴。読書。十時半就寝。

十九日(金曜)陰(八十五度)

午前七時半起床。

九時頃に津沢の寿子と渡辺の愛子が来て、おえい同道で(谷)中墓地へ参詣に出てゆく。

戯曲をかきつゞける。この戯曲も幾度が書き直してゐるうちに、どうにか眼鼻も付いて来たやうである。

小林、山下、中島、大村、岡田、三橋に郵書を発して、本月の嫩会は目黒の別宅で開く旨を通知。

午後一時頃に九星舎の山田君が俳句集の見本刷を持参、一時間ほど話してゆく。二時半頃におえい帰宅。

岸井の病状が思はしくないといふので、森部に見舞物を持たせて遣ると、四時半頃帰宅。その報告によると、岸井はひどく心臓を害してゐるので、本日午前遂に慶応病院に入院したといふ。

晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。

七時半頃に山下が来て、一時間ほど語る。山下も岸井の入院を聞いて驚いてゐた。

読書。十時半就寝。宵から晴れて月が出た。

二十日(土曜)晴(八十八度)

午前八時起床。

戯曲をかきつゞける。中島から喜劇の原稿を送つて来たので、返書。あはせて岸井入院を通知。

岸井の友人から郵書が来て、岸井は慶応内科いの三十九号室に入院したといふ。病院は肝臓肥大と心臓衰弱で

あるとのことである。取りあへずその次第を嫩会員等に通知。

午後三時半頃に戯曲第二幕まで脱稿。頭が少し痛む。五時半頃に山田君が俳句集の校正刷八十ページを持参、その話によると岸井は入院後の経過面白からず、シヤクリが止まないといふ。

六時半ごろ入浴。それから俳句集の校正にかゝり、九時頃までへに初校を終る。夕から台風めいた風が強くなる。

十一時就寝。十二時頃から醒めて眠られず、三時頃に葡萄酒を飲んで三時半頃から再び眠る。四時半頃に又醒めて便所にゆくと、その帰途眩暈を感じて、縁側に倒れてしまった。例の脳貧血である。

おえいも起きて来て、水など飲ませてくれる。十五分ほど横臥してゐて、それから寢床に入る。そんな騒ぎのうちに、夜は明けた。

二十一日(日曜)晴(九十度)

午前八時半ごろ起床。けふも風が吹く。

十時頃に大村が来て、一昨日鬼怒川温泉から帰京したといひ、みやげ物などを畏れて三十分ほど話してゆく。

俳句集の初校、昨夜は電燈の下で一読したので、けふは再び読み直すことにする。森部は慶応病院へ岸井の見

舞に行くと、シヤクリも昨夜から止まつて、今朝は頗る快いとのであつた。

十一時半頃に三橋が来た。これも岸井を見舞に行つた帰りである。つゞいて岸井の友人斎藤君も来た。二人は一時半頃まで話してゆく。

三時半頃までに俳句の初校を読み直し終る。暑気はあと戻りして、日中は頗る暑い。

一二三君から舞台の原稿を送つてくれたので、返書。ほかに暑中見舞の返書三通をかく。

「■」六時ごろ入浴。七時頃から散歩。八時頃帰宅すると、佐久間が来てゐて、祖父も外出ができるやうになつたので、今日湯河原へ送りとゞけて来たといひ、九時頃までに話してゆく。

十一時就寝。夜半大雨。

二十二日(月曜)陰、雨(八十八度)

午前七時起床。

戯曲をかきつゞける。十時半頃に小林が来て、岸井を見舞つて来たと云ひ、三十分あまり話してゆく。

陰晴定まらず、をり／＼に驟雨。なんとなく暴れ模様である。

けふは執筆やゝ捗取る。六時半ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

二十三日（火曜）晴（九十度）

午前八時起床。けふも暑い。

森部に西瓜を持たせて、岸井の見舞にやる。その報告によれば、岸井は先づ現状維持、併し危険の虞れはないといふ。

戯曲をかきつけて、午後三時半頃までに第三幕を脱稿。あはせて九十六枚。途中で幾たびか書き直して、意外に時間を費したのである。

婦人公論から九月号の原稿料を送つて来たので、返書。六時半ごろ入浴。森部は感冒で早く寝る。

読書。日が暮れても蒸暑い。十一時半就寝。

二十四日（水曜）陰、驟雨（八十八度）

午前七時半起床。

けふは石丸兄の祥月命日に相当するので、おえいは早朝から青山へ墓参にゆく。

戯曲を訂正。陰晴定まらず、をり／＼に驟雨。

午後一時頃に九星舎の山田君が舞台九月号をとどけて来たので、記念句集の用紙等について相談する。

二時過るころ、おえい帰宅。青山で姉に出逢つて、一緒に目黒へ行つて来たといふ。

舞台九月号を高橋、難波、原田、林、東儀の諸家へ発送。それから町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。

戯曲を訂正し終る。三幕九十六枚。題は「とん平地蔵」六時半ごろ入浴。読書。十一時就寝。

二十五日（木曜）晴

午前七時半起床。

今夜は嫩会例会を目黒で開く筈であるので、八時半頃から森部と出る。その途中、慶応病院に岸井を見舞ふと、案外に弱つてゐる様子もみえなかつた。併し病気は心臓衰弱であるから、右から左に退院は出来まいと察せられた。

それから目黒に向つて、九時半ごろ到着。庭の草花は今が盛りで、棚のへちまも著しく伸びてゐた。

午後三時頃に山崎が先づ来たので、糸瓜の棚の下に床几を出して語る。つゞいて中島、小林、岡田、山下、額田、大村、三橋、佐久間が来た。入院中の岸井を除いて、全部出席である。

六時過る頃に一同晚餐。それから劇談、雑談。八時半ごろ散会、それから入浴。十一時就寝。

二十六日（金曜）雨（八十二度）

午前七時起床。森部は佐久間方へ雑誌の発送を手伝ひ

にゆく。

記念俳句集の再校にかゝる。大村から電話で昨夜の礼
「状」を云つて来た。松竹の木村君からも電話が来た。
十月興行の脚本の催促であるが、中央公論を漸く終つた
ばかりで、歌舞伎座の方へはまだ一向に手を着けてゐな
いので、そのわけを答へて置く。

をり／＼に驟雨、気候もやゝ涼しくなる。午後一時半
ごろに再校を終つて読書。

三時半頃に森部は佐久間同道で帰つて来た。佐久間は
一時間ほど話してゆく。

晚餐をすませて、五時半ごろに森部と共に目黒を出る。
幸に雨も小降りとなつてゐた。六時ごろ帰宅。

六時半ごろ入浴。読書。留守中に中央公論の松本君が
原稿うけ取りの挨拶に来たといふ。松竹の黒川君も来た
さうである。

暮れていよ／＼涼しくなる。十時就寝。

二十七日（土曜）陰、雨（七十六度）

午前七時起床。今朝も陰つて涼しい。

大村からサンデー毎日を送つて来た。「堂島繁昌記」
当選発表の雑誌である。梅島昇から自著「ヘトのゝもへ
じ」を送つて来た。いづれも返書。林君から郵書が来た
ので、返書。

原巖君の戯曲「ある浪人の話」前田喜郎君の戯曲「左
衛門と二人」を編集、舞台の原稿である。

午後三時頃に堀河肇子^{マサコ}が来て無沙汰見舞の挨拶あり、
門口で話して帰る。朝から陰つて、をり／＼に雨。

富山県に帰省中の真川君から西瓜を送つて来たので、
大野君と中川君に分配。

おえいは五時半頃から歌舞伎座見物にゆく。私も近所
を散歩。

六時半頃入浴。額田から郵書と戯曲原稿を送つて来た。
読書。微雨。おえいは「■」〈十〉時半ごろ帰宅。銀
座辺は大雨であつたといふ。

十二時就寝。午前一時半頃から眼がさめて、五時頃ま
で眠られなかつた。

二十八日（日曜）雨（七十七度）

午前八時起床。

前田君の戯曲を編集し終つて、更に額田の戯曲「心中
月佳話」を編集。

終日細雨。なんとなく暴れ模様である。

大久保の川上君から郵書が来たので、返書。
六時半ごろ入浴。読書。十時就寝。庭には虫がしきり
に鳴き出した。

二十九日（月曜）晴（八十二度）

午前七時半起床。

額田から森部宛の郵書が来て、新潮社の「日の出」で記者を募集してゐるから、加藤武雄君を訪問して頼んでみるというので、私からも紹介状をかいて遣る。

九時半頃に小林蹴月君が来て菓子をくれ、一時間ほど語る。

午後一時頃に九星舎の山田君が校正刷の三校を持参。十分ほど語る。山田君が帰つたあとで、直ぐに校了、返送。

晴れて又暑くなる。真川君から帰京の通知があつたので、西瓜の礼状を発送。小寺融吉から結婚の通知が来たので、返書。

三時半頃に森部帰宅。加藤（君）在宅で、採用如何はいづれ改めて挨拶するとの事であつたといふ。

晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。
読書。十時半就寝。

三十日（火曜）晴（八十八度）

午前七時半起床。

浦岡の細君が房州から帰京したとて蝦と鮑をくれたので、紀尾井町の小林君方へ分配。

読書。気候あと戻りして、又暑くなる。

午後一時頃に黒川君が来て、「とん平地蔵」の略筋を聴いてゆく。

三時頃に九星舎の使が来て、校正刷をとゞけ、あはせて内金として紙代五十円を受取つてゆく。直ぐに校了、返送。

晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。

七時過る頃に額田が来て、舞台十月号にわたしの著作年表を掲載するために、昭和四年以後の著作物を問ひ合せ、九時頃まで話してゆく。

十一時就寝。

三十一日（水曜）晴、驟雨（八十五度）

午前七時半起床。今日も暑い。

森部は慶応病院に岸井を見舞にゆく。岸井もおひ／＼快方に向ひ、頗る元気がよくなつたといふ。

読書。晴れてはゐるが、なんとなく暴れ模様で蒸暑い。四時過るころ驟雨。五時半頃に渡辺のあい子が来た。六時半ごろ入浴。をり／＼に驟雨。

読書。十時半就寝。

本月の仕事はとん平地蔵（中央公論、九十六枚）ほかに舞台の編集、記念句集の校正など。

（翻刻担当…赤井紀美）

昭和七年九月

一日（木曜）晴（九十二度）

午前七時起床。

けふは震災九週年当日。晴れて風吹く。

十時半頃に木村君が来て、歌舞伎座十月狂言の筋を聴いてゆく。

十月はいよいよ近隣町村を東京市内に編入して、大東京実現するに付き、何かそれに因んだものを脚色する筈であるが、まだ本当に決まっておらない。

〔終日〕〈午前〉読書。午後には週刊朝日の随筆「九月一日」五枚をかいて郵送。終日暑い。

鹿兒島に帰郷中の寺田君から西郷漬といふ菓子を送つて来た。夕刊をみると、けふの被服廠跡の参拝者三十万人を超えたといふ。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。

読書。十一時就寝。

二日（金曜）晴（九十度）

午前七時起床。けふも暑い。

歌舞伎座の脚本起稿について、参考書類を調査。

午後二時頃、九星舎の山田君が来て、用紙について再び相談、一時間ほど話してゆく。

晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。森部は夕刻から根津の友人をたづねて、九時ごろ帰宅。
読書。十一時半就寝。

三日（土曜）晴（九十度）

午前八時起床。けふも暑い。

九時半頃に上松君が来た。そのあひだに波多野英一君が来て、三十分ほど話してゆく。つゞいて津沢の寿子が来て乾魚をくれ、これも三十分あまり話してゆく。

上松君は午餐を喫して話つゞけてみると、午後一時頃に渡辺のおしげが来た。

上松君は一時半頃に去ると、二時頃に植村君が来て京都のみやげをくれ、四時頃まで話してゆく。そのあひだにおしげも帰る。朝から来客つゞきで少しく疲れた。

植村君にたのまれた短尺五枚に揮毫。それから読書。経師屋の職人が来たので、二階の襖六枚の貼替へをたのむ。畳屋が来たので、同じく二階の畳がへを頼む。

晚餐後、散歩。日が暮れても暑い。

六時半入浴。読書。十一時就寝。三時頃まで眠られず、起きて涼む。

四日（日曜）晴（八十九度）

午前八時起床。けふも暑い。

歌舞伎座の戯曲を起稿しなければならぬのであるが、何分にも残暑が強いので、明日から目黒へ行つて執筆することとし、けふは一日休息。

終日読書。きのふに引きかへて、けふは来客無し。額田に郵書を発して、当分目黒に滞在する旨を通知。

晚餐後、散歩。六時半ごろ入浴。

読書。虫の声は秋らしくなつたが、暮れても暑い。

十一時就寝。十二時頃に眼がさめて、二時過ぎ頃まで眠られなかつた。

五日（月曜）晴

午前八時起床。

九時頃から森部同道で麹町を出て、三十分ごろ目黒着。庭の草花は今を盛りと咲き乱れてゐる。百日紅も一面に花を着けた。

近所に新しい温泉が出来たといふので、森部は試みに入浴にゆく。私は家にゐて読書。

午後一時頃に森部帰宅。温泉ではなく、ラジウム鉱泉で金泉閣と云ひ、新築で綺麗である由。入浴料四十銭。

二時頃に額田が来て、十月号に松居桃多郎君の戯曲（約百枚）掲載をたのまれたと云ひ、三時半頃まで話してゆく。

六時過ぎ頃に森部は帰る。七時ごろ入浴。

読書。暮れて涼しくなる。うしろの堤では一面に虫の声。

放送局の小林君から電話がかゝつて、団十郎三十回忌で、来る十二日の夜、団十郎に関する放送をするので、私にも思ひ出話放送の仲間に這入つてくれとの事であつたが、断る。

十時半就寝。十二時頃から眼がさめて、午前三時頃まで眠られなかつた。

六日（火曜）陰

午前八時起床。

朝から戯曲の起稿にかゝる。陰つて折々に細雨。温度は降つて稍や凌ぎは好くなつた。

午後四時頃までに十三枚をかく。五時頃から雨降りしきる。

六時ごろ入浴。読書。

十時就寝。十一時頃から眼がさめて、午前二時頃まで眠られなかつた。

七日（水曜）雨、陰

午前七時半起床。細雨。

戯曲をかきつづける。額田から郵書が来た。

午後二時頃から雨やむ。三時頃に木村君から電話、わ

たしが起稿中の戯曲の重なる役割について問合せがあった。

四時頃までに原稿二十枚をかく。あはせて三十三枚、これにて第一幕脱稿。

六時ごろ入浴。読書。

十時半就寝。今夜も十二時半頃から眼がさめて、三時頃まで眠られなかった。庭には虫の声がしきりに聞える。

八日（木曜）雨、晴

午前七時起床。大雨。

戯曲をかきつづける。雨は九時頃から止んで、十時頃から晴れる。

十時半頃に「芸術殿」の大村君来訪。同誌十月号に明治文学者列伝を掲載するから、私の写真を貸してくれといひ、三十分ほど話してゆく。晴れて暑くなる。

麹町の宅から大村の歌舞伎座劇評を回送して来たので、一読の上、額谷郵送、大村にも返送。

十一時頃におえいが鮎を持参、これからおすゞ病氣見舞にゆくとて二時間ほど話して去る。

三時四十分頃に佐久間の祖父が女中に扶けられて来訪、小林の妹との縁談は佐久間が何分不承知であるから遺憾ながら破談にしたいと云ひ、一時間ほど語る。病衰

の老人をかくの如くに苦むるは甚だ気の毒である。老人が去つて後、近所を散歩。

けふは来客が多かつた為に執筆捗取らず、夕刻までに十二枚。蒸暑くて不愉快の日である。

六時ごろ入浴。読書。

十一時就寝。十二時半頃から眠る。

九日（金曜）雨

午前八時起床。わたしの起きないうちに九星舎の山田君が来て、俳句集の初校四十八ページを届けてゆく。

戯曲をかきつづける。陰晴定まらず、をり／＼に驟雨。二百廿日に近いて暴れ模様である。

午後一時ごろ少しく脳貧血の気味で、葡萄酒をのんで一時間ほど寝転んでゐる「る」へた。夕刻までに原稿十五枚。

五時頃から大雨、夜に入るも止まない。六時ごろ入浴。句集四十八ページ校了。額田から私の著作年表原稿を送つて来たので、一読。雨がつよいので、明朝返送することにする。

九時頃から電光、雷鳴。三十分ほどで雷は止んだが、雨はやまない。

読書。十時半就寝。

十日（土曜）晴、陰

午前七時半起床。昨夜の大雨で、庭のコスモスは皆倒れた。

戯曲をかきつゞける。

十時頃に森部が来て、庭のコスモスを扶け起してくれ
た。晴れて又暑くなる。森部は午後二時頃に去る。

四時頃まで原稿二十枚をかく。これにて第二幕四十五
枚脱稿。

四時半頃に三橋が来て、六時頃まで話してゆく。入浴。

山田君が句集の校正刷をとゞけに来たので、俳句初校
十二ページ、漢詩初校廿四ページ校了。

読書。十一時就寝。

十一日（日曜）雨

午前八時起床。曉方から涼しくなつたので、今朝は拾
羽織をかさねる。けふは二百廿日であるといふ。

九時頃に森部が蝦を持参、隣家の近藤君から貰つたの
であるといふ。蝦は生きてゐるので、森部が調理。

朝から戯曲の第一幕と第二幕を訂正。案外に長くなつ
たので、少しく困つた。森部は午後二時頃に去る。

四時半頃に佐久間が来て、六時頃まで話してゆく。終
日雨やまず、をり／＼に大雨。

七時ごろ入浴。額田から郵書が来たので、返書。

読書。十時半就寝。

十二日（月曜）雨

午前七時半起床。

戯曲第三幕を書く。陰晴定まらず、をり／＼に雨。
岸井に病氣見舞の郵書を発送。

六時ごろ入浴。来月から大東京実現、目黒も市内に編
入されて目黒区となるに付、その祭日には軒提灯をかけ
るやうにと町会から云つて来た。提灯は一個七十銭。
読書。十一時就寝。

十三日（火曜）晴、雨

午前七時起床。

戯曲をかきつゞける。九時頃に森部が来たので、五月
から九月までの家屋税を町役場へ届けさせる。十三円六
十銭。

十時過る頃に額田が来た。佐久間は近来健康を害して
ゐるために、「舞台」の発送係を当分休みたいといふに
付、昼餐後、額田は森部同道で佐久間方へゆく。

をり／＼に驟雨、蒸暑い日である。一時頃に森部帰宅。
戯曲第一幕と第二幕の浄書を森部に頼む。森部は第一
幕の浄書を終りて、六時半頃に去る。

山田君が句集の再校四十八ページを届けて来たので、

直ぐに校了。

旭川の渡辺博からマユタケといふ松茸を送つて来たが、総て腐敗してゐたといふ。兎も角も返書を出して置く。

入浴。読書。十一時就寝。夜半大雨。

十四日（水曜）陰、晴

午前七時起床。

戯曲をかきつゞける。第三幕の終りが余り面白くないので困つた。

午後三時ごろ散歩。こゝらは氷川神社と八幡の祭礼で、軒ごとに提灯をかけ、空地に屋台などを作つて何か茶番等の催しもあるらしかつた。

六時ごろ入浴。八時頃までに兎も角も第三幕を脱稿、少しく疲れた気味である。

今夜は晴れて、旧暦八月十四日の月があざやかに昇つた。虫の声が頻りにきこえる。市内と違つて、こゝらの秋の夜は流石に迷寂である。

読書。十一時就寝。

十五日（木曜）陰、雨

午前七時起床。今朝は「■」〈又〉雨。九時頃に晴れたかと思ふと、又もや雷鳴、大雨。やがて晴れて又陰る。

十二時半頃におえいと森部が来た。二時頃から姉とおえい、森部と四人連れで近所を散歩。恰も氷川神社の神輿の渡御に逢つた。

夕から又もや雨。森部は戯曲の第三幕を浄書し終つて、七時半頃に帰る。

入浴。戯曲第二幕と第三幕を訂正。第一幕三十二枚、第二幕四十七枚、第三幕二十八枚、あはせて百七枚、題は「東京の昔話」

今夜は十五夜で、床の間には芒を生ける。おえいは観月のために来たのであるが、夕からの雨は遂に晴れず、折角の良夜もさん／＼であつた。

十一時就寝。

十六日（金曜）雨（七十二度）

午前七時起床。けさも雨、温度俄に降る。

おえい同道で帰宅することゝしたが、何分にも雨が強いので、電話で元園町の自動車呼びよせ、九時廿分ごろ帰宅。森部は額田から呼び寄せられて、早朝から出て行つたといふ。

不在中に二階の畳も替へ、襖も貼りかへ、私の書齋も綺麗になつてゐた。

十二時半頃に三橋が来て一時間ほど語る。そのあひだに松竹の牧野原君が来て「東京の昔話」の原稿をうけ取

つてゆく。

静岡の山本君から梨を送つて来たので、礼状を発送。演劇通話会の坂本君等から「佐々木高綱」を上演したいと云つて来たので、承諾の返書。寺田君、藤嶋君から郵便書が来てゐたので、返書。

畳屋が勘定を取りに来て、薄縁などを直してゆく。

甲字楼劇談七枚をかく。「舞台」の原稿である。

六時半ごろ入浴。読書。森部は八時半ごろ帰宅。佐久間が雑誌の発送を辞任したので、〈森部は〉その帳簿等の整理を手伝つて来たといふ。

読書。十時就寝。

十七日（土曜）雨、陰（七十度）

午前七時起床。

読書。午後一時半頃に額田が来て、甲字楼劇談の原稿をうけ取り、それから雑談中に佐久間が来た。額田は三時頃に去り、佐久間は三時四十分頃に去る。雨やんで陰る。

岸井から郵便書が来て、おひ／＼快方に向つてゐるといふ。返書。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。読書。

十時就寝。空は晴れかゝつて、をり／＼に月の光が洩れた。

十八日（日曜）晴、陰（七十一度）

午前七時起床。

十一時過る頃に本田君が来て越後のぜんまいを呉れ、一時過る頃まで話してゆく。本田君の老母は先頃銭湯で倒れて左手を挫折したさうである。老人の奇禍、気の毒である。

二時頃から町内の永田理髪店へ髪を刈にゆく。四時頃から細雨、間もよく止む。

木村富子から所作事「黒塚」の原稿を送つて来たので、返書。

晚餐後、散歩。七時ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

十九日（月曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

森部は慶応病院へ岸井の見舞にゆく。岸井はもう床の上に起き直つてゐたさうである。

十時半頃から森部同道で銀座の三越へゆき、冬帽子、置時計、その他雑品をかひ、食堂で昼餐、それから松屋へも廻つて午後一時頃帰宅。

やがて山下が来て、一時間ほど話してゆく。山下に木村富子の原稿を渡してやる。そのあひだに上松のおすじが来た。

名古屋の放送局から「時雨ふる夜」の放送料を郵送して来たので、返書。山形の本間君から郵書が来たので、返書。

木村富子から郵書が来て、「黒塚」は歌舞伎座十月興行に上演することになったといふ。返書。越後三条町の本田君老母に見舞状を発送。

そのあひだに佐久間が来て、森部の部屋で話してゆく。晩餐後、散歩。けふは申分のない秋日和であつた。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十日（火曜）晴（七十二度）

午前七時起床。

けふより秋の彼岸に入る。おえいは朝から青山へ墓参にゆく。

読書。十二時半頃に宮内君が市川鶴之助同道で来訪、先頃「権三と助十」を上演した挨拶である。三十分ほど話してゆく。

一時半頃におえいは姉同道で帰宅。青山から芝公園へ廻つて来たさうである。姉は二時頃に目黒へ帰る。

私もそれから四谷辺を散歩。三時ごろ帰宅すると、俵木が来て三十分余り語る。大野君方から鮎をくれた。

川上君に頼まれた短尺二枚と地紙一枚、越後の共風社から頼まれた短尺四枚に揮毫。

七時ごろ入浴。読書。九時半頃に九星舎の山田君が来て、句集の再校と三校をとめてゆく。
十時半就寝。

二十一日（水曜）晴（七十五度）

午前七時半起床。

口内炎がどうも捗々しくないので、けふは慶応病院へ行つて診察を受けることとし、森部は診察券を受取るために八時頃から出てゆく。私は八時半頃から行く。

九月、十月は患者の少い時季ださうであるが、それでも診察を待つ人がなか／＼混雑してゐた。私は内科の西野博士の診察を受けたが、別に内蔵に異常なく、やはり普通のアフター性口内炎であるとのことで、内服薬と塗布薬をくれた。

それから岸井の病室を見舞ふと、岸井もおひ／＼回復、殆ど平常の通りの元氣であつた。十五分ほど話して出る。天氣が好いので、帰途は森部同道で徒歩。十一時半ごろ帰宅。

留守中に松竹の木村君が来たといふ。十二時半頃に三橋が来て、四十分ほど話してゆく。けふも快晴。天候も漸く定まつたらしい。

句集の再校と三校あはせて六十ページを校了。
おえいは森部同道で、四時半頃から東京劇場見物にゆ

く。

五時頃に木村君が再び来て、「東京の昔話」上演について、第三幕を少しく訂正して貰ひたいとの相談あり。四十分ほど話してゆく。

六時半ごろ入浴。読書。額田から郵書が来た。

十時四十分頃におえい等帰宅。十一時半ごろ就寝。

夜半に雨の音。

二十二日（木曜）雨（七十度）

午前八時起床。細雨。

中島から郵書が来て、目下帰阪中であるといふ。竹柴梅松君から礼状が来た。先日三越から贈物を届けさせた挨拶である。浜村君からも郵書が来た。

読書。午後には喜劇五六枚をかいてみる。

五時半頃に松竹の小出君が来た。つゞいて又、同社の橘君が来た。いづれも「東京の昔話」宣伝の相談である。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（金曜）雨、陰（七十二度）

午前七時半起床。秋季皇霊祭。

風呂敷と手拭地を小包み便にして、静岡の山本君に発送。
信州の蕎麦の花吟社から短尺の揮毫をたのんで来た

ので、五枚を書く。川上君が来て、短尺を受取つてゆく。

読書。雨は午後から晴れて、又陰る。

中島の喜劇「彼と女掏摸」を編集。四時半頃に岡君が来た。岡君は「東京の昔話」の舞台監督をしてくれる筈で、それらの打合せに一時間ほど話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十四日（土曜）晴（七十四度）

午前八時半起床。

額田の細君が来て、強飯をくれ、一時間ほど話してゆく。午後に山田君が来て、句集の再校をとゞけ、装禎の相談などしてゆく。

直ぐに再校廿六ページ校了。午後二時頃から神田を散歩。古本二種と原稿紙など買つて、四時ごろ帰宅。留守中に読売新聞の村上君と俵木が来たといふ。額田から郵書が来た。

「東京の昔話」を訂正。舞台台の原稿である。

六時半入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（日曜）雨、陰（七十度）

午前八時起床。細雨、やがて晴れて又陰る。

山梨の河野君から郵書が来たので、返書。読売の村上君にも返書。中央公論社から原稿料を送つて来たので、

返書。

十一時半頃に小林が来て、三十分ほど話してゆく。

「東京の昔話」を訂正し終る。

午後四時頃に鈴木氏亨君が来て、菊池、久米、山本の諸君が発起となつて、来月十五日東京会館で私の還暦祝賀会を催したいといふ。それは五十回誕辰当時にも先例のあることではあるが、自分一個の私事のために多数の人々に迷惑をかけるのは心苦しいので、堅く辞退した。「い」のであるが、鈴木君が押返していふので、結局承諾。但し時節柄であるから、成るべく質素にして貰ひたいと頼む。鈴木君は一時間ほど話してゆく。

そのあひだに歌舞伎座の竹柴蟹助君が来て、第三幕の訂正について相談があつた。第三幕の銀座通りの場には百人以上も登場するさうである。

今夜は嫩会例会で、六時頃に大村が先づ来た。ついで額田、山崎、小林、山下、佐久間、三橋も来た。中島は大阪から今帰京したとて出席。岡田は欠席。劇談、雑談。九時四十分頃に九星舎から「舞台」の製本をとぐけて来た。

十時半散会。入浴。十二時就寝。

二十六日（月曜）晴（七十五度）

午前八時半起床。

おえいは九時半頃から大崎の津沢君方を訪問。

大村の戯曲「樋口一葉」を一読、その批評を添へて返送。舞台十月号を東儀、原田、高橋、難波、林の書家へ発送。

山田君が来て、句集の三校と再校を受取つてゆく。

午後二時半頃におえい帰宅。津沢の寿子や子供をつれて、目黒へまはつて来たといふ。

三時頃から四谷を散歩。四時ごろ帰宅。

五時頃に渡辺のあい子が来て、三十分ほど話してゆく。六時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（火曜）陰、雨（七数二度）

午前八時半起床。

森部は慶応病院へ薬取りにゆく。その節、岸井を見舞ふと、岸井はいよ／＼快方に向ひ、月末には退院すると云つたさうである。

芸術新聞社の内田君が私の還暦祝賀会について聞き合せに来たが、まだよく決定しないと答へて置く。芸術殿の大村君が私の写真を返しに来た。山田君が来て、句集の校正刷を受取つてゆく。

読書。森部は午後二時頃から九星社へ舞台十月号の発送を手伝ひにゆく。

松竹の橘君が時事新報の渡辺君同道で来訪、「東京の

昔話」の筋書を時事新報に掲載の件である。

六時半ごろ入浴。七時頃に森部帰宅。三橋も手伝ひに来て、雑誌の全部発送を終わったといふ。

読書。宵から雨の音。十時半就寝。

二十八日（水曜）雨（七十二度）

午前七時半起床。

原田君から還暦祝の郵書が来た。静岡の山本君から反物受取りの礼状が来た。

九時半頃に清見君が来て、目下の窮状について訴ふる所あり、四十分ほど話してゆく。

十時半頃からおえいと森部同道で日本橋の三越へ買物にゆく。冬着、裏地、茶箆筒、その他雑品を買つて、食堂で昼餐。十二時半ごろ帰宅。雨降りしきる。

中村孝子から郵書が来たので、返書。中村の祖母は白内障で失明したといふ。気の毒なことである。

読書。四時頃に山田君が来て、句集表紙の帛地をみせ、四十分ほど話してゆく。句集の印刷いまだ出来せず、遅延に遅延をかさねて実に閉口である。

六時半入浴。句集最後の廿六ページ三枚を終る。それから読書。

十時半就寝。

二十九日（木曜）雨、晴（七十三度）

午前七時起床。けふも雨。

九時半頃に山田君が来て、校正刷を受取つてゆく。大村から原稿うけ取りの返書が来た。

歌舞伎座から初日の入場券をとゞけて来て、一日の舞台稽古は午後六時頃から取りかゝるといふ。入場券三枚を三橋、山下、佐久間に発送。

岸井から郵書が来て、いよ／＼廿九日退院するといふので、返書。

十時過る頃から雨やんで晴れる。けふは朝から頭が痛むので、十二時半頃から公園付近を散歩。一時間ほどで帰宅。

やがて額田が来て蝦の鬼がら焼と家庭洋食をくれ、三時頃まで話してゆく。

頭痛激しく、感冒気味であるので、今夜は入浴を休む。読書。九時半就寝。

三十日（金曜）雨（七十一度）

午前七時起床。

けふも朝から雨。いよ／＼大東京出現で、明日から市内と旧郡部を通じて祝祭を挙行する筈であるのに、この雨天つきでは困つたものである。岸井の使が来て、退院の祝物をとゞける。

昭和七年十月

週刊朝日から原稿料を送って来たので、返書。旧作「人狼」と「荒木又右衛門」を訂正。

四時頃に山田君が来て、校正刷をうけ取り、あはせて額田から委託された戯曲三種をといてくれ、廿分ほど話してゆく。

右三種の戯曲のうちで、二宮君作「恐しき実験」を編集。

六時半ごろ入浴。終日雨やまず。

十時半就寝。十二時過る頃まで眠られなかった。

本月の仕事は東京の昔話（三幕、百六枚）ほかに句集の校正、舞台原稿の編集など。

（翻刻担当…赤井紀美）

一日（土曜）晴（七十六度）

午前七時起床。けふよりいよ／＼大東京実現、幸に朝来快晴。

新に市部に編入された町村ではそれ／＼の催しがありさうであるが、麹町区内には何の催しもなく、単に国旗を掲げるに過ぎない。

十時半頃に小村雪岱君が来て、歌舞伎座の舞台装置について打合せがあつた。

「恐しき実験」を編集し終る。一時半頃に目黒の姉が来た。

勝間田の額田次郎君から梨を送って来たので、礼状を発送。

歌舞伎座の舞台稽古で、五時半頃から出てゆくと、恰も「東京の昔話」の第一幕の道具を飾つてある所であつた。案外に稽古は捗取つて、十時頃までに三幕の稽古を終る。それから喫茶、雑談。十時五十分ごろ帰宅。

入浴。十二時就寝。

二日（日曜）晴、陰（七十七度）

午前八時起床。晴れてはゐるが、蒸暑い。

大村から郵書が来て、サンデー毎日の懸賞金を受取つ

たといふので、返書。岸井から郵書が来て、市内編入のために「国」碑文谷の住所は目黒区三谷町に改称されたといふ。これにも返書。

岸井以外にも市内編入のために地名変更の通知が八通来た。まだ続々来るであらう。当分は知人宿所帳の訂正が面倒である。私の目黒の宅も目黒「目」〈区〉上目黒一丁目に改まつたといふ。

十二時頃に横浜の高橋が来て、わたしの還暦祝として硯をくれた。高橋は四十分ほど話してゆく。

歌舞伎座初日で午後二時半ごろから出てゆく。山下、三橋、佐久間も来た。三時開演、第一「地震加藤」第二「黒塚」第三「出陣絵巻」第四「東京の昔話」を演了したのは、十時四十五分。こゝで知人諸君に逢つた。

十時十分ごろ帰宅。山梨の河野君から栗を送つて来た。入浴。十二時三十分就寝。

三日（月曜）「雨」〈晴〉、陰（七十二度）

午前八時起床。

早朝に植田の細君が来た。朝から頭が痛む。

十一時半頃から神田を散歩。古本、短尺など買つて、午後一時半ごろ帰宅。

二時過る頃に小林の細君が来て栗をくれ、一時間あまり話してゆく。

還暦自寿の俳句「鬼とあらず仏とならで人の秋」を短尺七枚に揮毫。その短尺一枚に他の短尺を添へて、山形の渡辺君に郵送。

読書。やはり頭が痛む。少々横になつてゐる。

六時半ごろ入浴。十時就寝。

四日（火曜）雨、陰（七十一度）

午前八時起床。

「芸術殿」の原稿をかく。十一時頃に黒川君が来て「東京の昔話」の上演料をくれ、一時間ほど話してゆく。

午後二時頃に額田君が来た。つゞいて佐久間が来た。額田は三時過る頃に去り、佐久間は三時半頃に去る。

松沢君が来て菓子をくれ、色紙と短尺の揮毫を頼んでゆく。山田君が来て、舞台十一月号の戯曲原稿を受取つてゆく。

大谷君の使が来て京都の松茸をとゞけてくれたので、大野君と小林君方へ分配。小林の細君は明日目黒へ行くと云つたさうである。

夕方までに原稿九枚をかく。六時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

五日（水曜）晴（七十二度）

午前八時起床。

おえいは小林の細君を誘つて目黒へゆくとして、九時頃から森部同道で出てゆく。

「芸術殿」の原稿三枚をかく。あはせて十二枚。「若葉会文士劇と東京毎日新聞演劇会」と題して、大村君に郵送。けふも頭が痛む。

午後一時四十分頃に渥美君が来て、時事新報に掲載すると私の談話を聴き、四時頃まで話してゆく。

五時近い頃に放送局の小林君が来て、九日の午後左団次が「修禪寺物語」を放送するといひ、三十分余り語る。そのあひだに佐久間が来た。つゞいて額田が来た。小林君が先づ去り、六時過る頃に額田と佐久間は去る。五時半頃におえいと森部帰宅。目黒の庭から芒とコスモスを折つて来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。今夜も午前三時頃まで眠られなかつた。

六日（木曜）晴（七十二度）

午前九時半起床。

十一時半頃に大村が来て、還暦の祝として座布団をくれ、あはせて懸賞当選祝の品をくれ、三十分ほど話してゆく。

松沢君にたのまれた色紙短尺十六枚をかく。一時半頃に岸井が来て退院の挨拶を述べ、一時間ほど話してゆく。

大村にも岸井にも還暦自寿の短尺をやる。

還暦自寿の短尺は他にも入用であるので、更に十枚ほど揮毫。

東京日日新聞の小野君が来て、サンデー毎日新年号に小説をかいてくれと頼んでゆく。

六時半ごろ入浴。読書。
十時半就寝。

七日（金曜）晴（七十五度）

午前七時起床。

大村の戯曲「たけくらべの作者」を訂正。

還暦祝賀会案内状発送を手伝ふために森部は午前から額田方へ出てゆく。その節、還暦自寿の短尺を持たせてやる。

けふも快晴。十一時半頃から四谷を散歩。午後一時半ごろ帰宅すると、津沢のひさ子が子供をつれて来てゐた。ひさ子に短尺と短尺掛を遣る。おえいは二時頃からひさ子同道で日比谷公園へゆく。

四時頃に林君が来て、五時半頃まで語る。そのあひだにおえい帰宅。佐久間方から祖母一週忌の配り物をとびけて来た。

六時頃に佐久間が来て、七時頃まで話してゆく。それから入浴。

八時頃に森部帰宅。案内状の印刷が間に合はないので、空しく帰つて来たといふ。

読書。九時過る頃に九星舎の山岡君が案内状をとゞけて来た。

何分にも印刷所が手薄であるので、急ぎの仕事は間に合はないとみえる。

十時半就寝。

八日(土曜)晴(七十二度)

午前七時起床。

明九日は英一の「七」〈十三〉回忌に相当するので、おおい同道で青山へ墓参にゆくと、姉は茶屋に来て待合せてゐた。

三人連れ立つて、墓前に香花に供へ、それから目黒へ行つて昼餐。目黒の庭は秋草が今や盛りであるので、鶏頭、百日草、コスモス、芒、万寿菊、サルビヤなどを剪つて、午後一時半頃に出る。二時ごろ帰宅。

留守中に額田と山梨の河野君が来たといふ。九星舎から「独吟」の製本六百五十部をとゞけて来た。七月末に原稿を渡して、今や漸く出来たのである。

三時頃に山田君が来て、製本代の内金を受取り、三十分ほど話してゆく。山田君の事情も察してゐるが、なにしろこんなに仕事が遅延しては困る。

松沢君の使が来て、揮毫の短尺を受取つてゆく。大村から郵書が来て、新歌舞伎座の二の替りに〈その作〉「白糸と主水」を上演することになったといふ。

左団次の細君が来て、明日午後「修禪寺物語」を送するに付、その挨拶に来たといひ、門口で話して去る。

森部は朝から祝賀会案内状の宛名を書く。私は夕方から「独吟」放送の宛名をかく。なか／＼忙がしい。

七時ごろ入浴。九時頃までに宛名百枚を書き終る。森部は二百三十枚をかって直ぐに郵送。

十時半就寝。

九日(日曜)晴(七十度)

午前七時起床。朝は陰、やがて晴れる。

森部は朝から「独吟」の発送にかゝる。私も手伝つて指図する。

けふは英一の十三忌命日に相当するので、床の間に写真をかざりて焼香。十時頃に目黒の姉が来て、これも焼香。

十一時頃に渡辺の愛子が来たので、姉と共に昼餐。姉は一時頃に去り、愛子は二時頃に去る。愛子に短尺と「独吟」をやる。

岡山の難波から還暦祝として菓子器を送つて来たので、礼状を発送。山形の渡辺君から〈も〉三越の商品券

を送つて来たので、同じく返書。

午後三時頃までに「独吟」百十部だけを発送し終る。
六時半ごろ入浴。読書。

夕刊を見ると、六日午後四時頃に大森の川崎第百銀行支店を襲つたギャング団の一人が逮捕されたといふ。

十時半就寝。

十日（月曜）晴（七十度）

午前七時起床。

還暦祝の返礼として、鯉節と菓子折、ほかに「独吟」五部を森部に持たせて、小石川の大村方へ届けさせる。新聞号外によれば、ギャングの余党二人も今晩四時ごろ芝公園で逮捕されたといふ。一丁目の細君から松茸をくれた。

十時頃に岸井が来たので「独吟」三部をやる。ついで陸軍省新聞班の大内君が来て、「つはもの」に何か寄稿してくれといふ。

午後十二時半頃に津沢の寿子が還暦祝として三越の商品券と菓子折を持参し、二時頃まで話してゆく。

一時半頃から四谷を散歩。三時ごろ帰宅。

けふは佐久間が「独吟」の出版届を出しに来る筈であるので、三時頃まで姿をみせないの、森部に納本二部を持たせて内務省へ出してやると、そのあと佐久間が

来て、これも森部のあとを追つてゆく。

四時頃に佐久間と森部打連れて帰宅。無事に出版届を済ませて来たといふ。佐久間に還暦祝賀会礼状の印刷をたのむ。そこへ九星舎の山田君が来て「独吟」印刷の残金全部を受取つてゆく。

そこへ又、読売新聞社の三宅正太郎君が来て、私の談話を筆記してゆく。

七時頃入浴。大阪の坂井から還暦祝の郵書が来た。読書。十時半就寝。

十一日（火曜）晴（六十八度）

午前七時起床。

九時半頃から町内の永田理髪店へゆく。

帰宅すると間もなく、渥美君が来て、来月の演舞場で前進座が「品川の台場」を上演したいといひ、一時間ほど話してゆく。ついで中島が来たので、「独吟」と短尺をやる。中島は今夜歌舞伎座を見物して茅ヶ崎へ帰るといひ、これも一時間ほど語つて去る。

連合通信社の三宅数正君に頼まれた原稿三枚をかく。篠田鉦造君から「女百話」を送つて来たので、返書。

大村から昨日の礼状が来た。松村君から還暦祝の郵書が来た。

二時半頃から近所を散歩。三時ごろ帰宅。大村の戯曲

「たけくらべの作者」を編集し終る。大村と松村君に返書。

六時半頃入浴。読書。森部は夕刻から友人の病氣見舞にゆきて、九時ごろ帰宅。

十時半就寝。

十二日（水曜）晴（六十六度）

午前七時半起床。

十一時頃に岸井が来て、十二時半頃まで話してゆく。

黒川君が来て、大谷君の祝ひ物をとどけて呉れる。市川松蔦も祝ひ物を持参。講談社の使が来て、野間君の祝ひ物をとどける。

午後二時頃から四谷を散歩。三時ごろ帰宅。やがて山下が来て、一時間ほど語る。山下にも「独吟」短尺をやる。

浦岡の細君が来て、祝ひ物をくれる。諸方に迷惑をかけて気の毒である。茗谷君からの句集「さゝら波」を送つて来たので、返書。

大阪の持井と堀から祝辞を送つて来た。山上から神戸の牛肉を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。佐久間が来て、先日依頼の印刷物をとどける。還暦賀筵の発企人及び来会者に送るべき札状である。佐久間は九時頃まで話してゆく。右印刷代十円

十六銭。

坪谷、武田、篠田、星野、森、（服部、）丸尾の諸君から「独吟」受取の返書が来た。

読書。十時半就寝。旧暦十三夜の月が冴えてゐた。

十三日（木曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。

「海坊主を観た話」五枚を陸軍省新聞社班へ発送。竹内初太郎君から郵書が来たので、返書。中村花秀君から還暦祝寿の短尺を送つて来たので、返書。

午後、四谷を散歩。秋晴が毎日つゞいて結構である。二時ごろ帰宅。還暦自寿の短尺十枚をかく。森部に命じて、その短尺一枚と「独吟」二部を小林君方へとどけさせる。

植村、小林覚太郎、勝峰、角田、岸井辰雄、俵木の諸君から「独吟」受取りの返書が来た。

東儀が来て、還暦の祝ひ物をとどけてゆく。大阪の和氣君から松茸一箱をとどけて来た。

森部に命じて、目白の鈴木君方へ牛肉の樽と「独吟」二部をとどけさせる。

午後六時頃に館山町の鈴木おながが突然たづねて来て、おえいに何か頼んでゆく。おなかは十五六年前に私の家に奉公してゐた女である。

八時ごろ入浴。読書。塩谷君から十五日不参の郵書が来た。

十時半就寝。

十四日（金曜）陰（七十二度）

午前七時半起床。

都新聞をみると、木村錦花氏胆石病に罹るとあるのに驚かされた。取りあへず速達便で富子氏に容態を問ひ合せてやる。

加納、秋庭、高木、高橋、三品、三木の諸君から「独吟」の受取りの返書が来た。鈴木君から昨日の礼状が来た。

十二時過る頃に福島石井が出て来た。石井は明夜の祝賀会に出席するために上京したので、みやげに梨の籠をくれた。ついで前橋の藤嶋君が来た。これも祝賀会出席のために上京したのであるといふ。

豊国社の高田君が来て、これも祝賀会に出席するといふ。二時頃に石井は去り、入れ代つて横浜の中村君が来て、還暦祝の花瓶をくれ、四十分ほど話してゆく。

額田が来て、明夜出席者は百三四十名に達するであらうといふ。そこへ又、東京朝日新聞記者が写真班同伴で来訪、還暦について私の談話を聴いてゆく。四時過る頃に額田は藤嶋君同道で去る。

ついで又、東京日日新聞記者が写真班同伴で来訪、おなじく私の談話を聴いてゆく。そのあひだに俵木が祝ひ物を持つて来た。

六時頃に渡辺の愛子が祝ひ物を持参、三十分ほど語る。なにしろ諸方に迷惑をかけて気の毒である。

加藤君、渡辺君から「独吟」の礼状が来た。伊原君から明夜不参の断り状が来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十五日（土曜）雨（七十度）

午前七時半起床。

けふは祝賀会当日であるのに、あひにくに朝から雨。

その雨を冒して、畑氏の未亡人が祝ひ物を持参。銀座の松屋から海野の祝ひ物をとどけて来た。

徳島の木下君から祝寿の短尺を送つて来た。静岡の山本君から祝電を送つて来た。ほかに大阪の小川、神戸の前田、伊勢の新井、東京の額田嘉晴、波多野、能村、石倉の人々から「独吟」受取りの礼状が来た。

丸尾君の細君が来て、祝ひ物をくれる。神戸の森田宅から松茸を送つて来た。函館の藤森登志子からも祝電を送つて来た。

石井に頼まれた短尺七枚と、藤嶋君に頼まれた色紙三枚に揮毫。午後二時頃に山崎が来た。ついで大村、岡

田、山下、小林、佐久間、石井、三橋、中島、額田が来た。岸井は写真師を連れて来たので、私とおえいと森部を加へて十四人、下座敷に列座して記念撮影を試み、四時十分頃から三台の自動車に分乗、ほかに「独吟」百五十部を積み込んで出る。

東京会館の二階が会場になつてゐるので、そこへ行き着くと、山形の本間八右衛門君が真先に来てゐたには少しく驚かされた。夕刻から雨はます／＼強くなつて来たにも拘らず、来会者は百三十一名。記念として「独吟」一部づつ進呈。

六時半頃から食堂に入つて、晚餐の後、発起人総代として久米正雄氏の挨拶があり、〈国民文芸界を代表して、長崎英造氏の祝文朗読あり。〉つゞいて大谷竹次郎、関直彦、山本実彦、山本久三郎、山崎紫紅、中村吉蔵、岸田国士、池田大佐、田村西男、松居松翁、長谷川伸の人々のテーブル・スピーチあり、嫩会総代として大村、額田の挨拶あり。右終つて九時ごろ散会。

嫩会員と鈴木君等はあとに残つて喫茶。十時頃帰宅。雨は依然として降りやまず、来会者諸君にはお気の毒であつた。

当夜、山本有三君と長谷川時雨女史は病気で不参。いづれも使を以つて花籠と花束を贈られた。水谷八重子からは人形を贈つて来た。ほかに祝電十二通到着した。

入浴。十二時就寝。

私の五十周年誕辰を帝国ホテルに開かれたのは、大正十年の今今夜で、十一年の昔である。その十一年の間に震災にも逢ひ、病氣にもかゝつたが、幸に今日まで生きて来て、さらに再び還暦の賀筵を開かれることになつたのは、私に取つては実に望外の幸と云はなければならぬ。いはゆる今昔の感に堪へずとはこれである。

十六日（日曜）雨（六十八度）

午前七時半起床。けふも雨。

森部に指図して、還暦祝賀会の発起人諸氏達に来会者諸君に礼状を発送。十一時頃に佐久間も来て手伝ふ。

町内の中川君から祝ひ物をとゞけて来た。ほかに祝電及び祝辞廿六通到着。中島は昨夜の挨拶を述べに来て、門口で帰る。

佐久間は午餐を喫して午後まで話してゐると、十二時半頃に石井が来た。一時過る頃に額田の細君が子供三人をつれ、小林の細君が子供（一人）をつれ、山下の細君と都合七人、打揃つておえいに祝辞を述べに来て、鯛、ひらめ、蝦などを盤台に入れたのを持参。中島の細君は病気で不参。

石井は一時半頃に去り、細君連はあとに残つて強飯などを食ひ、三時頃に去る。雨が強いので、自動車に乗せ

てやる。佐久間もそれに同乗して帰る。

又そのあとへ堀川肇子が来て祝ひ物をくれ、門口で話して帰る。

貰った魚全部は食ひ切れないので、大野君と中川君方へ分配。

昨夜の祝電と今日の祝電、祝辞に対して、答礼の書面をかく。四時半頃から始めて、八時過る頃までに「又」十二通、これには些か疲れた。そのあひだに晚餐、入浴。

読書。十時半頃「入」就寝。

十七日（月曜）晴（七十二度）

午前七時半起床。けふは神嘗祭。朝から快晴。

豊国社の高田君から菊の餅をとどけてくれた。

「独吟」発送洩れの人々へ小包み便にて発送。あはせて百五十七部である。

十時半頃に渡辺の愛子が来た。十一時頃に額田が来て、嫩会から還暦記念として石の五重塔を寄稿したいから、三越へ同行して下見をしてくれないかといふので、明夜十九日午前同行することに決める。額田は三十分ほど話してゆく。

十一時半頃に目黒の姉が祝物を持参。けふは自宅で還暦祝宴を開くことになってゐるので、一同昼餐。森部、おさき、おせんにも祝儀の金をやる。

午後二時頃から四谷を散歩。三時半頃帰宅すると、岸井が待つてゐた。姉と愛子は四時頃に去り、岸井は五時頃まで語る。

三越から清水虎雄君の祝物をとどけて来た。「独吟」受取りの返書廿六通到着。一々その名を記さない。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（火曜）晴（七十一度）

午前七時半起床。

高田君と清水君に昨日の礼状を発送。隣家の近藤君が祝物を持参、門口で挨拶をのべて去る。

十時過る頃に佐成しげ子が祝物を持参、一時間あまり話してゆく。兵庫の大江就三君から祝物として紀州名産といふ古谷石を送つて来たので、礼状を発送。横浜の高橋にも郵書。

大村がきて、甲州の葡萄と菓子をくれ、門口で帰る。午後二時頃に久永君が久しぶりに来訪、葡萄酒をくれて一時間あまり話してゆく。

真山君の使が来て祝物をとどけてくれたので、返書。市川三升君から団十郎追悼会の通知が出たので、出席の返書。

左団次一座の頭取中村松五郎君が先月九日死去したといふので、悔み状に香典を添へて発送。松五郎君は芝

居の人にめづらしい篤実の人物であつた。

還暦の祝辞と「独吟」受取りの返書。あはせて三十八通到着、祝辞に対する返書八通をかく。

四時頃から近所を散歩。空陰る。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十九日（水曜）陰（七十二度）

午前七時起床。

森部は慶応病院へ薬を取りにゆく。

十時四十分頃に岸井が来た。つゞいて額田が来たので、三人連れ立つて日本橋の三越へゆく。嫩会から祝物の五重の塔をくれないといふので、それを買ひにゆくのである。

その五重の塔がもう売れてしまつたので、更に雪見形の石燈籠を買ふこととし、直ぐに目黒へ運んで貰ふやうに頼む。今回の祝賀会については久米君を専ら煩はしたので、その礼物を贈ることを頼む。山本有三君、長谷川時（雨）女史からも祝物を貰つたので、その返礼の発送を頼む。

それから三人は銀座へ出て、ヤマトで昼餐。更に伊東屋へ行つて雑品を買ひ、こゝで額田と岸井に別れて二時半ごろ帰宅。

静岡の山本君から漆器の煙草盆を送つて来た。越後の加藤君から祝物の代りとして小為替を送つて来た。

おいと森部は三時半頃から歌舞伎座見物に出てゆく。

久米、山本、長谷川の三家へ送り状を発送。野間清治氏にも祝物の礼状を発送。「独吟」受取りの返書三十六通到着。

七時ごろ入浴。読書。

十時廿分ごろおい等帰宅。今夜は満洲の国賓謝介石氏（一行）の歌舞伎座見物があつたといふ。

十一時半就寝。

二十日（木曜）晴（七十二度）

午前七時半起床。

鯉節一箱を鉄道便に託して、静岡の山本君に発送。祝物の答礼である。森部に命じて、麻布の海野と四谷の丸尾君方へも祝物の答礼品をとゞけさせる。

宮森君から郵書が来て、「独吟」所載の俳句六句を英訳したいから参考までにその註釈を付してくれといふので、返書。服部耕石君から祝章の短尺を送つて来たので、返書。越後の加藤君から祝物を送つて来たので、返書。

午後には還暦自寿その他の俳句を短尺八枚に揮毫、山形の本間、芦屋の大江、番町の清水、淀橋の中村の四家へ発送。大阪朝日新聞から歳末同情週刊の揮毫をたのん

で来たので、色紙三枚をかく。額田にたのまれた大色紙一枚、岸井に頼まれた短尺四枚に揮毫。

三時頃から四谷辺を散歩。四時ごろ帰宅。

大森の竹内君から香典受取りの返書が来た。ほかに「独吟」受取りの返書四十三通到着。

利倉君、原君、有門君は「独吟」受取りの挨拶に来て、門口で帰る。林君も自作の原稿を持参。これも門口で帰る。

七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

二十一日（金曜）雨、陰（七十度）

午前七時半起床。

菓子器を小包み便にして、山形の渡辺君に発送。

還暦祝の郵書五通到着、みな未知の人々である。それ／＼に返書。丸尾君から昨日の礼状が来た。

三田村鳶魚君と日比谷図書館長今沢氏から還暦祝の漢詩を送つて来たので、それ／＼に答詩を送る。

芝神谷町の中西といふ人から門下にくれといふ依頼状が来たので、断りの返書。「独吟」受取の返書三十六通到着。

三時頃に宮森君が来て、一時間ほど話してゆく。俳句英訳の件である。大野君から菊の鉢をくれた。

読書。頭が少々痛む。夕より雨やんで陰る。

七時入浴。八時頃に大野君が来て、十時頃まで語る。十時半就寝。

二十二日（土曜）陰（六十八度）

午前七時半起床。

靖国神社秋季大祭、朝から花火の音がきこえる。

九時半頃に紀尾井町の小林君の細君が来て、小林君昨夜帰京したとて甲州の葡萄をくれ、併せて還暦祝の画幅をくれ、一時間ほど話してゆく。ついで中村孝子が来て、三十分ほど話してゆく。

未知の人々より還暦の賀状七通到着、その返書をかく。午後一時頃に山下が来て、二時頃まで語る。それから四谷辺を散歩。三時ごろ帰宅。

岡田禎子が来て、これから明治座を見物したいのであるが、満員であるといふから、どこへか這入れるやうに頼んでくれといふので、船越君宛に添書をかいてやる。

「独吟」受取りの返書十五通到着。六時頃から森部同道で二七不動の緑日にゆく。緑日の植木は小菊ばかりであつた。七時ごろ帰宅。

入浴。読書。十時半就寝。

二十三日（日曜）陰（六十八度）

午前七時半起床。

十一時に慶応の内田君が来て、同君の父が書いたといふ還暦祝の短尺をくれ、十二時半頃まで語る。そのあひだに朝鮮人曹正夫君が来て、富士五湖めぐりの土産物をくれ、短尺の揮毫をたのんで行く。

祝物を貰った人々に答礼品を贈るべく、その礼状十通をかく。

午後二時過る頃に森部同道で麴町三丁目の草花屋へゆき、チューリップ其他の球根三十個をかひ、それから四谷を散歩。杉浦喫茶店で喫茶。三時半ごろ帰宅。

曹正夫君に頼まれた短尺廿枚に揮毫。横浜の田島君が来て「独吟」寄贈の礼をのべ、門口で帰る。ほかに「独吟」の礼状十二通到着。

七時ごろ入浴。八時頃に三橋が来て、九時頃まで話してゆく。今月は印刷所の仕事がおくれたので、「舞台」十一月号は廿五日までに製本出来しまいとのである。読書。十時半就寝。

二十四日（月曜）晴（七十度）

午前七時半起床。

九時半頃からおえいと森部同道で日本橋の三越へゆき、小林、渡辺、津沢、佐成、中村、高田、東儀、俵木、堀川、真山の諸家へ贈るべき答礼品の発送をたのみ、更に近所の諸家へ贈るべき答礼品をかひ、食堂で昼餐、午

後一時ごろ帰宅。

留守中に栃木の鶴岡君が来て、祝物をくれた。

おえいは答礼品をたづさへて、町内の近藤、浦岡、中川、麴町一丁目の畑君方へ挨拶にゆく。

春陽堂から明治大正文学全集の書棚をとって来た。一時半頃に上松のおすゝが来て祝物をくれ、三時頃まで語る。つゞいて横浜の小島良子が来て祝物をくれ、一時間ほど話してゆく。そのあひだに三橋が来て、北海道の林檎をくれた。

鶴岡君に礼状を発送、あはせて「独吟」一部を郵送。

「独吟」受取りの返書七通到着。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十五日（火曜）晴（六十八度）

午前七時半起床。

おえいは森部同道で額田方へゆく。先日細君連から祝物を貰った答礼である。

埼玉県与野町の福島きよ子といふ婦人から門下生にしてくれといふ郵書が来たので、断りの返書。それと行き違ひに本人がたづねて来て、自作の戯曲の添削をたのみ、門口で帰る。

十二時半頃におえい等帰宅。一時半頃から四谷を散歩。山形の本間君から短尺の礼状が来た。ほかに「独吟」

受取りの返書六通。品川の山村耕花君から還暦祝の揮毫
大色紙を送つて来たので、返書。

築地のカク写真店から十五日撮影のふたば会員写真
をとびけて来たが、写真の出来があまり好くない。光線
の工合が悪かつたとみえる。

今夜は嫩会例会で、五時半頃に山崎が来た。ついで
大村、岸井、額田、中島、岡田、佐久間、小林、山下、
三橋が来た。岸井に「舞台」の戯曲六種を渡してやる。
おえいが山下、小林、中島に答礼の品を贈る。

在来の「舞台」印刷所は兎角緩慢であるので、更に他
の印刷所に変更する相談などあつて、九時半ごろ散会。
それから入浴。十二時就寝。

二十六日（水曜）晴、陰（六十八度）

午前七時半起床。

九時半頃からおえいと森部と三人連れで目黒へゆく。
コスモス、鶏頭など今が盛りで、庭一ぱいに咲き誇るさ
ま、まつたく眼が醒めるやうである。柵の糸瓜も見ごと
に伸びた。

森部に指図して、チューリップ、ヒヤシンスなどの球
根を花壇に栽え込む。

午後三時ごろに目黒を出て、三時半ごろ帰宅。目黒で
折つて来た糸瓜など草花を小林君その他近隣の家々に

配る。

渡辺、津沢、小林の諸家から内祝受取りの礼状が来た。
ほかに「独吟」受取りの返書五通到着。

読書。七時ごろ入浴。朝夕はやゝ肌寒く、漸く秋の深
きを覚えるやうになった。花田房子が祝物を持参、門口
で帰る。

十時半就寝。

二十七日（木曜）晴（六十四度）

午前七時半起床。

目黒で折つて来た大糸瓜を応接間にかける。

山崎から俳句を送つて来たので、添削返送、浅井龍勇
君から〈その父〉瓢箪君の遺稿を送つて来たので、返書。

朝から快晴。十二時頃から神田を散歩。古本、原稿紙
などを買つて二時半頃帰宅。留守中に岸井が来たといふ。
三時頃に深川の山本未亡人が来て、還暦の祝物をくれ、
一時間ほど話してゆく。

四時半頃に岸井が〈再び〉来て、「舞台」の印刷所は
いよ／＼芝区南佐久間町一丁目の研文社に決めたとい
ふ。在来の九星社よりも印刷代は少しく高いやうである
が、信用の出来る印刷所に依頼する方が安全である。岸
井は一時間あまり話してゆく。舞台誌友会も来月十三日
（日曜）午後三時から日比谷の三信ビル地下室で開会す

ることに決めた。

逗子の堀川、横浜の中村諸家から祝物の礼状が来た。ほかに「独吟」受取りの返書四通到着。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

目黒のおとくは二三日郷里へ帰りたいといふので、その代りにおさを遣ることとし、今朝おえいがおさを連れて目黒へゆく。おとくが帰るまではおさが目黒に泊つてゐる筈である。

二十八日（金曜）晴（六十五度）

午前八時起床。

大村弘毅君が来て、「芸術殿」十一月号をくれ、十分ほど話してゆく。つゞいて額田の細君が淹つる子同道で来訪、つる子は朝鮮から夫婦同道で上京、十日ほど滞在するといひ、一時間ほど話してゆく。

京都の竹下君から還暦祝として海老芋といふのを送つてくれたので、返書。ほかに「独吟」受取りの返書五通到着。

午後一時半ごろから散歩。四谷から市ヶ谷辺をまはつて二時半頃帰宅すると、岡田禎子が待つてゐて、明治の女優について聞き合せ、一時間あまり話してゆく。そのあひだに坂本医師が来て「独吟」の礼をいひ、門口で帰る。坂元氏の細君は先頃から腎盂炎で臥床中であるといふ。

ふ。

淀橋のおさだが赤児をつれて来た。今度の子供も女児であるといふ。おえいから祝物をやる。春陽堂から「半七捕物帳」の増版を頼んで来た。

五時頃に栃木町の鶴岡君が来た。東京日日新聞時代の旧友、震災以後初めての面会である。鶴岡君は晚餐を喫して、九時頃まで語る。

それから入浴。九星社（註）から「舞台」十一月号をとじて来て、明日午前十時頃から発送にかゝるといふ。

十一時就寝。

二十九日（土曜）陰（六十二度）

午前八時半起床。

九時半頃から森部同道で出る。森部は九星社（註）へ発送に行くとして渋谷で別れ、私は真直に目黒にゆく。

十時半頃に岸井がたづねて来て、三十分ほど話してゆく。

午頃に植木屋が来たので、嫩会寄贈の石燈籠の据え場所について相談、あはせて入口に植木二三本を植えるやうに頼む。植木屋は他の仕事の都合で来月七八日頃に来るといふ。

それから姉と近所を散歩。時雨めいた空ではあるが、幸に降らない。

一時半頃帰宅すると、森部がへ発送を済ませてゝ来てゐた。佐久間も来てゐた。佐久間は三十分ほど話して去る。

けふは別に用事もないので、森部と共に再び散歩。目黒川の上流四五町のところまで行つて引返す。市部に編入されたとは云ひながら、こちらにはまだ空地の草原が多い。

四時ごろにおとく帰宅。五時半頃に晚餐をすませて帰宅。森部とおさきも一緒に歸つて来た。

留守中に東儀が祝物の挨拶に来た。畑君も同じく挨拶に来た。山下と寺田君も来たといふ。

七時ごろ入浴。山形の秋葉君から還暦祝として、同地名産ののし梅を送つて来た。森ほのは君から「舞台」京都支部誌友会の景況を通知して来た。ほかに「独吟」の礼状五通到着。

読書。森部は宵から友人を訪問して、九時ごろ帰宅。十時半就寝。

三十日（日曜）陰、雨（六十二度）

午前八時起床。

昨日わたしの留守中に大京堂からへも「半七捕物帳」の増版を頼んで来た。春陽堂とは別種の製本である。森部に命じて捺印させる。

秋葉君に礼状を発送。森君にも返書。寺田君は来山の「女人形の記」を問ひ合せて来たので、森部にその全文を写させて郵送。

昨日おとくが郷里から干魚を沢山に持ち歸つたので、おえいは麹町一丁目の小川君方へ届けにゆく。その節、坂本医師方へ見舞にゆき、更に大野の細君をも見舞にゆく。いづれも菓子折を持参。

午後一時頃に森田の細君（三好栄子）が来た。細君は新声劇の一座に加はつて上京、浅草の昭和座に出演するといひ、三十分ほど話してゆく。

宮森君から私の作物について問合せが来たので、返書。山梨の河野君から柿を送つて来たので、返書。

四時頃に岸井と三橋が来て、いよ／＼舞台十二月号から芝南佐久間町一丁目七番地の研文社に印刷を頼むことにしたと云ひ、一時間あまり話してゆく。

「舞台」十一月号を東儀、原田、清水、難波、高橋、林の諸家へ発送。森部は誌友会の通知発送のために、六時頃から佐久間方へゆく。

七時ごろ入浴。読書。「独吟」の受取状三通到着。九時半頃に森部帰宅。宵から細雨。

十時半就寝。夜半に雨の音が強くきこえた。

三十一日（月曜）雨、晴（六十五度）

午前八時起床。

「甲字樓劇談」の続稿をかきつづける。東京日日新聞の小野君に郵書を送る。サンデー毎日の原稿の件である。宇治山田市の新井熊雄君から還暦祝として色紙掛けを送つて来たので、返書。色紙掛は伊勢神宮造宮の余材を以つて製作せる紀念品であるといふ。

午後から雨晴れる。一時頃から近所を散歩。二時頃帰宅すると、額田が待つてゐて、一時間ほど話してゆく。そのあひだにサンデ「サ」―毎日の小野君が来て、原稿は必ず十二日までに頼むと念を押してゆく。

岡山県の難波から干蝦を送つて来た。

七時ごろ入浴。佐久間が来て、又もや新しい縁談があり、明日見合をする筈であるといふ。たび／＼の縁談、とどこほりなく纏まつて呉れゝばよいと思ふ。佐久間は八時半頃まで話して去る。

読書。十時半就寝。

本月は還暦祝などの為にごた／＼して、殆ど何の仕事もしなかつた。来月は少しく勉強しなければなるまい。

（翻刻担当…勝倉明以）

昭和七年十一月

一日（火曜）晴（六十三度）

午前八時起床。

読売新聞から原稿料を送つて来たので、返書。難波にも干蝦の礼状を発送。

「甲字樓劇談」をかき終る、あはせて九枚。すぐに岸井に郵送。

畑氏の未亡人が来て、自宅の庭になつたといふ柿をくれ、門口で話して帰る。午後一時頃から四谷を散歩。二時ごろ帰宅。

豊田君と林君に郵書を送る、いづれも「舞台」の原稿の件である。大阪の森田にも郵書を送る。

真川君から北陸の産物といふ似鱈を送つて来た。名の如く、鱈に似た魚である。取りあへず礼状を出して置く。

中島から郵書が来て、甥死去のために帰阪したといふ。読書。七時ごろ入浴。

夕刊をみると、歌舞伎座の団十郎追善興行は大盛況で、けふの初日満員、空しく帰る観客が多数であつたといふ。団十郎の名声は今も人を惹くとみえる。十時就寝。

二日（水曜）陰、雨（六十一度）

午前八時起床。朝は五十八度。俄に冬らしくなつた。額田と岸井から郵書が来た。いづれも「舞台」の件である。今月から印刷所が変更したので、当分は仕事が少しくうるさいかとも思はれる。額田に返書。

還暦の祝物に対する答礼は先月下旬に済ませたのであるが、その後に祝物をくれた上松、小島、山本、鶴岡、池上、花田の諸家に対しても、近日答礼品を送らねばならないので、その送り状を書いて置く。

埼玉与野町の福島きよ子の戯曲を一読、その批評を添へて返送。ほかに「舞台」十一月号一部を郵送。

丸尾君に郵書を送る、宮森君にたのまれた仏画の件である。

サンデー毎日の原稿を書かなければならないので、その材料を調査。

陸軍新聞班「つはもの」所載の原稿料を送つて来たので、返書。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

三日（木曜）晴

午前八時起床。

十時頃に丸尾君来訪、彼の仏画の揮毫をたのむ。丸尾君は松坂屋の仏画展覧会に出品した俳句と仏画十余点

を持参、そのうちで気に入つたものがあらば進呈するといひ、一時間ほど話してゐると、渥美君が前進座の長十郎、亀松、国太郎等同道で来訪。

丸尾君は先づ去り、渥義君等は十二時半頃まで話してゆく。

つゞいて紀尾井町の小林君が鰻のかば焼を持つて来た。一茶庵の主人が生きた鰻をたづさへて来て、小林君の庭で焼いたのであるといふ。

丸尾君の俳句と仏画を一見、そのうちで私が三点、森部が一点を貰ひ受けることにしたが、その二点はまだ表装が出てゐないので、ついでに表装を頼むことにし、森部に命じて丸尾君方へとゞけさせる。

私も四谷を散歩。三時ごろ帰宅。「独吟」の受取状四通到着。岸井からも原稿うけ取りの返書が来た。

五時半頃に佐久間が来て、長谷川君に誌友会の講演を頼んで来たといひ、一時間あまり話してゆく。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

四日（金曜）雨、陰（六十二度）

午前八時起床。あかつきに大雨。

新聞をみると、昨日の明治節快晴のために近郊の汽車電車の乗客五十万人を越えたといふ。

おえいはおさきを連れて三越へ買物にゆく。還暦祝の

答礼品を買ふためである。

サンデー毎日の小説を起稿。小田切医師から葡萄をくれた。

午後一時半頃におえい等帰宅。雨やむ。

四時頃に改造社の徳広君が来て、十二月号に団十郎の追憶談をかくれといふ。五時頃に松竹の小出君が来て、沼津の柿をくれた。歌舞伎座の団十郎追遠興行は日々大入であるといふ。

夕方までに原稿十枚をかく。三橋から電話開通の通知が来た。ほかに「独吟」の受取状三通到着。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

五日（土曜）晴（六十六度）

午前八時起床。朝から快晴。

十時頃に丸尾君が来て、揮毫の色紙類をとどけてくれた。

サンデー毎日の原稿をかきつづける。福島きよ子が来て菓子くれたので、これを小田切医師へ持たせて遣る。

おえいは午後から森部同道で、丸尾君方へ挨拶にゆく。

二時半頃に目黒のおとくが来た。つづいておえい帰宅。おとくは今度本所に住む同郷人のもとへ縁付くことに決まつたので、本月廿日頃までに暇を貰ひたいといふ。

それは薄々承知してゐたので、勿論承諾。おとくは昭和

二年二月以来、あしかけ六年奉公してゐたのである。

海上火災保険の栗原君が来た。昭和八年度の保険金を受取つてゆく。一万円に対して四十七円、六七年前に比べれば殆ど半額である。

夕方までに原稿十枚。池「田」へ上君と花田房子から答礼品の礼状が来た。ほかに「独吟」受取りの返書二通到着。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半雷雨。

六日（日曜）陰、雨（六十五度）

午前八時起床。朝は晴れて又陰る。

森部に命じて、小石川の渥美君方へ〈洋〉酒を持たせて遣る。時事新報社から原稿料を送つて来たので、返書。

十時頃に鶴岡君が来て、十二時頃まで話してゆく。

大村から東劇の劇評を送つて来たので、一読、すぐに岸井に郵送。神戸の前田君から牛肉を送つて来たので、返書。柳下くら子からも菓子を送つて来た。

二時半頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆく。三時頃から雨。

丸尾君の仏画に俳句を揮毫。久保田金遷君から娘が結婚祝の句を頼まれたので、短尺に揮毫、いづれも郵送。サンデー毎日の原稿をかきつづけて、八時半頃までに

七枚。そのあひだに七時ごろ入浴。

十時半就寝。雨の音が強くきこえる。

七日（月曜）陰（六十四度）

午前八時起床。朝は晴れて又陰る。

サンデー毎日の原稿をかきつづける。午後、四谷辺を散歩。

四時頃に俵木が来て、浦岡君の使で塩鮭大小三尾をとけ、四十分余り話してゆく。柳下くら子に昨日の礼状を発送。

森部を吉岡医師方へ薬取りに遣ると、色紙と短尺の揮毫をたのまれて来た。

渥美君から昨日の礼状が来た。ほかに「独吟」の礼状二通到着。

五時半頃に竹柴梅松君が来て菓子をくれ、三十分余り話してゆく。ついで佐久間が来て、一時間あまり語る。

けふは原稿十一枚をかく。八時ごろ入浴。
読書。十時半就寝。

八日（火曜）晴（五十八度）

午前八時起床。晴れて俄に寒くなる。

改造社の原稿をかく。十二時頃に本田の細君が老母同道で来訪、老母は今春右手を挫いたといふのであるが、依然として元気がよく、三十分あまり話して去る。老母

はみやげに梨をくれた。

午後一時半頃に額田が来て、豊川の園義雄君から届けて来た柿を持参、一時間あまり話して去る。

宮森君の使が来て、短尺の揮毫をたのんでゆく。

夕方までに原稿十三枚。夕刊を見ると、今日は全国的に温度降下、俄に冬らしくなつたといふ。

「独吟」の礼状三通到着。

午後一時頃に姉が来たので、おえい同道で日比谷公園の菊（花大会）を観にゆく。その留守中に雇人請宿成田屋から新しい女中を連れて来た。

こちらの女中が三人になつたので、自分おせんを目黒へ遣はすこととし、午後四時頃から森部に連れられて目黒へ出てゆく。

七時ごろ入浴。読書。森部は四谷の初西へ廻つたとて、熊手などを買つて十時ごろ帰宅。

十時半就寝。暮れていよ／＼寒くなる。

九日（水曜）晴（六十度）

午前八時起床。

改造社の原稿をかきつづける。十時頃に改造社の徳広君が来て、原稿は十一日の午前中（まで）に間違ひなく書いてくれといふので、けふの午後三時頃までに出来すると答へて置く。

宮森君と久保田君から短尺揮毫の礼状が来た。

午後一時頃までに原稿六枚をかく。あはせて十九枚。

題は「団十郎を語る」といふ。

それから四谷辺を散歩。二時頃帰宅して、サンデー毎日の続稿三枚をかく。あはせて四十一枚。題は「鼠」といふ。

三時四十分頃に竹柴鐘三君が来て、猿之助が「小栗栖の長兵衛」を放送するといひ、四十分ほど話してゆく。入れ代つて、寺田君が来て、一時間半ほど話してゆく。そのあひだに鎌倉の三宮君が来て、鎌倉蝦一籠をくれた。〈徳広君が来て原稿を受取つてゆく。〉

六時半頃に岸井と三橋が来て、けふから十二月号の校正に取りかゝつたと云ひ、八時頃まで話してゆく。

それから入浴。読書。十時半就寝。

十日（木曜）晴（六十二度）

午前七時半起床。朝夕は日ごとに冬らしくなつて来た。

三宮君に蝦の礼状、園君に柿の礼状を発送。六文館の鹿島君から民話考を送つて来たので、これにも礼状を発送。

「鼠」を訂正、速達便で東京日日新聞社へ発送。

吉岡医師にたのまれた色紙二枚と短尺二枚に揮毫、森部に命じて届けさせる。宮森君に頼まれた短尺三枚に揮

毫して郵送。

午後二時頃から四谷を散歩。三時ごろ帰宅。

町内の永田理髪店の老主人一昨日死去。本日告別式を営むといふので、香典を持たせてやる。

結城人形劇場後援会の大橋三弥君が来て、四十分ほど話してゆく。

新しい女中はいよ／＼住み付くことゝなる。池田おはな、廿四歳、越後の者で、麴町五丁目がその宿元であるといふ。

大阪の伍東宏郎君から「独吟」をもう一部貰ひたいと云つて来たので、発送。それと入れちがひに、伍東君から還暦祝の座蒲団を送つて来た。目黒のおとくが来て、植木屋は十二月に来るといふ。

六時頃からおえいはおさきに野菜類を持たせて、紀尾井町の小林君方を訪問、それから四谷へ買物にまはつて八時ごろ帰宅。

七時ごろ入浴。読書。

十一時就寝。

十一日（金曜）晴、陰（六十度）

午前七時半起床。

伍東君に礼状を発送。武内君から郵書が来たので、返書。サンデー毎日の小野君から原稿うけ取りの返書が来

た。

午後一時頃に菅野君が柿を持参、二時半頃まで話してゆく。菅野君の娘は肋膜炎で三月ほど臥床してゐたといふ。

御蘭生君から名古屋城美術図録二巻を送つて来たので、礼状を発送。浦和の江口君から郵書が来たので、返書。

三時頃に正岡君が来て、一時間あまり話してゆく。

六時頃に武内桂舟君が来て、還暦祝の短尺掛と自身揮毫の短尺をくれ、門口で話して去る。つゞいて吉岡医師が来て、色紙揮毫の礼を述べてゆく。

南柯吟社から鳴雪翁の俳句三句の批評を求めて来たので、返書。あはせて同社の横山君に「独吟」一部を發送。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十二日（土曜）晴（六十二度）

午前七時半起床。

けふは目黒へ植木屋が来るといふので、九時半頃から森部同道で出てゆく。途中で一時雨、やがて又晴れに。

植木屋二人が来て、池のほとりに石燈籠を据え直し、ヒマラヤ杉を栽え、玄関の際にも木犀と夾竹桃を栽える。佐久間所有の空地に桜の樹があるので、これも移植する。

花壇の周囲は芝で囲んでゐたのであるが、芝が這ひ伸びて困るので、更に煉瓦に換へることゝし、森部が道玄坂まで買ひにゆく。煉瓦二百個で六円、その運賃四十銭であるといふ。

日が短いので、花壇の手入れは明日のことゝして、私は森部と共に四時半ごろ帰宅。

留守中に銀座のふたばから鴨の肉をといけて来た。篠田君から「女百話」後編を送つて来た。河野君からその戯曲「踏絵聖母」を送つて来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。夜半に風の音。おえいは感冒の気味で早く寝る。私も下痢で服薬。

十三日（日曜）陰（六十度）

午前八時半起床。昨夜の風の名残り、朝は寒い。

けふも目黒へ植木屋が来るので、森部は朝から出てゆく。

十時過ぎる頃に海野が来て、十二時頃まで話してゆく。つゞいて渡辺のあい子が来た。三橋が来て柿をくれ、又出直して来ると去る。

けふは舞台社誌友会でその以前に私の門前で嫩会員が撮影することになつてゐるので、十二時頃に小林が先づ来た。つゞいて山崎、額田、大村、岸井、山下、岡田、三橋、中島、佐久間が来た。

一時五十分ごろ強震。二時過る頃に写真師が来たので、私と共に一同は門前に出て撮影、それから三台の自動車に分乗して、会場の日比谷三信ビルディングの地下室に到着。誌友はもう五六人待ち受けてゐた。

四時開会。小林が開会の辞をのべ、私の「黙阿弥を語る」池田君の「元曲の話」北村君の「新劇二つ三つ」長谷川君の「やくざ渡世の話」川村君の「旗洗莊漫談」等の講演があつて、七時頃から食卓につき、それから雑談。けふの誌友来会者は六十余名、伊藤晴雨君は「独吟」の中から六十句を選んで、それ「から」へを画にかいた画帖一冊をくれた。多忙中よくも根氣よく描いたものと敬服のほかは無い。

八時半ごろ帰宅。入浴。江口君から返書が来た。南柯吟社からも原稿うけ取りの返書が来た。

森部は目黒から帰つて、更に新橋演舞場の前進座を見物にゆく、十時四十分ごろ帰宅。

十一時半就寝。

十四日（月曜）雨、風（六十度）

午前八時半起床。風まじりの雨。

十時頃に前進座の長十郎、翫右衛門、亀松、国太郎が文芸部の宮川君同道で来た。その用件は十二月の演舞場で「正雪の二代目」を上演したいといふのである。それ

は松竹でも上演するといふ話があつたので、一応聞き合せて上で挨拶すると答へて置く。一同は三十分あまり話してゆく。

丸尾君から郵書が来て、仏画の表装は二三日中に出来るといふので、出来の上は当方から受取りにゆくといふ返書を出して置く。篠田君に「女百話」の礼状を発送。伊藤君に画帖の礼状を発送。河野君に原稿受取りの返書。

河野君の戯曲「踏絵の聖母」を一読。

午後から風雨いよ／＼激しくなる。夕刊をみると、琉球方面より時ならぬ台風が襲来したといふ。

木村君に郵書を発して「正雪の二代目」の一件を問合せる。白田亜浪君から還暦祝の短尺を送つて来た。

七時ごろ入浴。読書。

九時頃から風雨猛烈、十時半頃から臥床に入つたが、風雨の声におどろかされて眠られない。十二時過る頃に裏手の塀が倒れて、隣家の近藤君方の庭に墜落したが、夜中であるからどうすることも出来ない。そのうちに二階の本部屋その他にも雨漏りがするといふので、家内一同が起きて防ぐ。

それから一同は紅茶を沸かして飲み、更に粥を焚（い）て食ひ、一先づ休息して二時頃から再び枕についたが、やはり眠られない。風雨は依然として暴れてゐる。それでも四時頃からやう／＼「就寝。」眠つた。

十五日（火曜）晴（六十四度）

午前八時半起床。風はまだ吹いてゐるが、快晴。

町内の仕事師が来て、裏手の塀を引起してゆく。おえいから祝儀をやる。近所の家々も塀を倒され、立木を折られ、相当の被害があつたらしい。新聞をみると、市内でも浸水家屋頗る多かつたといふ。

目黒の被害が心配はれるので、森部に電話をかけさせると、そこらには何の被害もなかつたといふ。西北に山を負つてゐるので、風を防いだとみえる。先づは仕合せであつた。

臼田君に短尺の礼状を発送。大村と額田に風雨見舞の郵書を送る。森部の兄から郵書が来たので、返書。

十時頃に山崎が来て、三十分あまり話してゆく。

午後一時ごろ近所を散歩すると、上二番町の某家の大きい檜の木が倒れて、歩道車道を塞いでゐた。一時半頃帰宅すると、やがて大村が風雨見舞に來た。

読書。四時頃に山下が風雨見舞に來て、一時間ほど語る。

七時ごろ入浴。新しい女中は暇を取つてゆく。

読書。十時就寝。

十六日（水曜）陰（六十度）

午前八時半起床。森部は慶応病院へ薬取りにゆく。

豊田君から原稿を送つて來たので、返書。横浜の高橋から風雨見舞の郵書が來たので、返書。

午後、四谷を散歩。一時半頃帰宅すると、松竹の牧野君が來てゐて、一昨日問合わけの「正雪の二代目」は近く左団次一座で再演の予定であるから、前進座に上演させることは見合せて貰ひたいと云ひ、三十分ほど話してゆく。取りあへず速達便で其旨を演舞場の長十郎に通知。篠田君から返事が來た。額田から風雨見舞の郵書が來た。

野間会から頼まれた原稿をかく。三時頃から雨、やがて止む。

四時半頃に岸井が弟の明君同道で來た。明君は京都をひき揚げて帰京したといひ、一時間ほど話してゆく。

雇人請宿から新しい女中を連れて來た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十七日（木曜）晴（六十四度）

午前八時起床。

おえい同道で午前九時半頃から目黒へゆく。風雨の被害を「見」〈検〉分の為である。こゝは西北に西郷山の高地を控へてゐるので、風雨の被害絶無といふべく、花壇の草花が少しく吹き倒されたに過ぎなかつた。おせんも無事に働いてゐた。

近所を散歩。環状線道路にはいまだ秋草の繁った空地が多い。市部に編入されても、当分発展の見込みも無さうである。

七時半頃におえいと共に帰途につき、渋谷駅の二幸楼上で喫茶。こゝは十月から開業したのであるが、なか／＼繁昌してゐた。

四時ごろ帰宅。留守中に雄山閣の長坂君と、慶応劇研究会の内田君が来たといふ。内田君は雑誌「浅黄幕」の創刊号をくれた。春陽堂のへ使が来て、半七捕物帳の増版捺印を求めてゆく。ゝ

四時半頃に佐久間が来て、一時間あまり話してゆく。静岡の山本君から風雨見舞の郵書が来た。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（金曜）雨、雪、陰（六十度）

午前八時半起床。恰も雨まじりの雪が五六分ほど降りつづけた。これがこの冬の初雪である。やがて雨も止んで陰る。

新しい女中の名はおえつ。廿四歳、埼玉県蔵在の者であるが、いよ／＼住み付くことゝなつたので、実家へ荷物を取りにゆくとして朝から出る。

「舞台」の印刷所変更と共に、市内特別郵便の發送局を中央郵便局に変更することゝし、森部は額田方へ行つ

て舞台社の印を受取り、更に中央局へ赴いたが、手続きが間違つてゐるといふので、空しく帰宅。午飯を食つて渋谷局へ行かうとする処へ、恰も岸井が来たので、万事の手続きを岸井に頼むことにする。岸井は一時間あまり話してゆく。その間に、森部は四谷の丸尾君方へ行つた。表装の仏画四幅を受取つて来た。

目黒からおせんが来て、自分の冬物などを取り出してゆく。

山本君に返書。三時半頃に新国劇の樋口君が来た。

つゞいて雄山閣の長坂君が来た。樋口君先づ去り、長坂君は四時半頃まで語る。雄山閣では今度更に歴史公論といふ雑誌を発行したので、私にも何か寄稿してくれといふのである。

五時半頃におえつ帰宅。七時ごろ入浴。

読書、十時半就寝。けふは寒い日であつた。

十九日（土曜）晴（五十六度）

午前八時半起床。

野間会の原稿をかく。あはせて九枚。「甲字楼筆記」と題して郵送。

額田にも郵書。

午後一時頃から四谷を散歩。二時頃帰宅。

山本未亡人から転居の通知が来たので、返書。文芸家

協会から年鑑編集について問合せが来たので、返書。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十日（日曜）陰、晴（五十七度）

午前九時起床。

早朝に研文社から舞台十二月号の製本をとどけて来たので、清水、原田、高橋、林、東儀の諸家へ発送。印刷所が变つて、印刷が抄取るやうになつたのは仕合せである。

「独吟」一節を稲田黄洋君に発送。還暦祝物の答礼品を買ふために、おえいは銀座の三越へ行つて午頃帰宅。武内君へ贈るべき答礼品は三越から配達、大阪の伍東君にあてた分は当方より郵送。

午後一時半頃から神田を散歩。四時頃帰宅。

福島石井と岡山の難波から郵書が来たので、返書。岸井にも郵書を送る。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十一日（月曜）晴（五十六度）

午前八時半起床。晴れて風吹く。

九時半頃に富山房の長谷川君が来て、還暦の祝物をくれ、門口で帰る。

「舞台」新年の辞をかく。年々同じことで新しい言葉

もない。

十二時半頃に岸井が来て、二時頃まで話してゆく。ついで山形の本間君が来て、博多人形の勧進帳をくれ、五十分ほど語る。本間君は十七日上京、明日帰郷するといふ。

目黒のおとくが来て、いよく縁談決定。二三日中に暇を貰ひたいといふので、おえいと私から祝物をやる。おとくは昭和二年二月から六年勤続、よく働いてくれた女であつた。

旧作「東京の昔話」を訂正。改造社から十二月号の原稿料を送つて来たので、返書。

読書。七時ごろ入浴。九時半頃に研文社の使が来て、「舞台」の誌友の発送先が不明であるといふ。その不明は八人であるが、私にもよく判らないので、明日当方から出向くと答へて置く。

森部は宵から下山君をたづねて、十時ごろ帰宅。誌友の件に付、明朝岸井方へ電報を発するやうに、森部に申聞かせて置く。何かと面倒である。

十一時就寝。

二十二日（火曜）晴（五十六度）

午前八時半起床。

十時頃に岸井が来たので、誌友発送の件を云ひ聞せる

と、岸井はこれから直ぐに印刷所へゆくとして去る。

流山の高梨君から短尺三枚を送つて来たので、揮毫返送。東京朝日新聞の同情週刊係からも大色紙二枚を送つて来たので、同じく揮毫返送。

十二時頃から四谷を散歩。一時半ごろ帰宅。杉原が来て、裏手の堀の寸法を取つてゆく。近日その修繕に来る筈である。

林君から郵書が来たので、返書。原田君から郵書が来たので、返書。

四時頃に中野が来て、一時間ほど語る。中野は十二月の歌舞伎座と新歌舞伎座を書いたさうである。

講談社から原稿の礼としてタオル一箱をとりけて来た。読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十三日（水曜）晴（五十八度）

午前九時起床。けふは新嘗祭。快晴。

おえいは山本未亡人の転居祝に行つて、午頃帰宅。長谷川福平君から郵書が来たので、返書。額田からも郵書が来た。

午後一時頃から四谷を散歩。二時過る頃帰宅。留守中に津沢の寿子が来たさうである。

藤嶋君の戯曲「雪の夜話」を訂正、舞台の原稿である。

六時過る頃に佐久間が来て、八時頃まで話してゆく。それから入浴。

読書。十時半就寝。

二十四日（木曜）陰（五十六度）

午前八時半起床。

大阪の中川君から還暦祝として南洋の鰐の剥製を送つて来たので、礼状を発送。三尺ぐらゐの小さい鰐で、柱掛けのやうに出来てゐるので、応接間の壁にかけて置く。

新井声風君から明治以降物故新派俳人伝第一集を送つて来たので、返書。あはせて「独吟」一部を発送。

午後一時頃におとくが母同道で来た。いよ／＼今日かざりで目黒を立去り、一旦帰郷した上で、来月早々に結婚式を挙げるといふ。縁付先は市内の本所であるから、此後も出入りが出来るのであるが、それでも何となく名残り惜しいやうに思はれる。

二時頃から四谷を散歩。三時ごろ帰宅。

旧作「後日の長兵衛」と「狐の戯れ」を訂正。八時ごろ入浴。

読書。十時半就寝。

二十五日（金曜）晴、陰（五十八度）

午前八時起床。

大工をブリツキ屋が裏手の塀を直しに来了。森部も手伝ふ。

「支那兵」八枚をかいて、文芸春秋社へ郵送。神戸の浦井君から還暦祝の菓子器を送つて来了ので、礼状を発送。中野から戯曲の原稿を送つて来了ので、返書。

武内君と大阪の佐東君から答礼品「目」の返書が来た。おとくの兄から礼状が来た。

三時頃に三橋が自作の「礼状」〈戯曲〉を持参、一時間ほど話してゆく。

今夜は嫩会で、五時半頃に三橋が出直して又来た。

ついでに額田、大村、中島、岸井、岡田、山下、小林、佐久間が来た。山崎は欠席。例に依て劇談、雑談、十時過る頃散会。

それから入浴。十二時「散会」就寝。

二十六日（土曜）陰、雨（六十度）

午前九時起床。けふも大工とブリツキ屋が来た。

横浜の高橋から郵書が来たので、返書。おとくの兄から郵書が来たので、返書。前橋の藤嶋君から郵書が来たので、これにも返書。

十二時半頃から四谷を散歩。恰も雨はら／＼と降り出

したので、杉浦喫茶店で休息。二時過るころ帰宅。森部が傘を持って来てくれたさうであるが、行きちがひになつて逢はなかつた。留守中に岸井君が来て、沢本君の童話劇の原稿を置いて行つた。

中野の戯曲と沢本君の童話劇を一読。をり／＼に雨。七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（日曜）陰（六十度）

午前九時起床。けふも大工とブリツキ屋が来た。

「屠蘇きげん」七枚をかいて、木太刀社に郵送。文芸春秋社から原稿うけ取りの返書が来た。

柳下くら子から自宅の庭の柿を送つてくれたので、返書。

三時半頃に松田青風君が来て、来月七日から三越で劇画の個人展覧会を開くに付、その披露文をかいとくれと云ひ、一時間ほど話してゆく。

読書。七時ごろ入浴。山形の本間君から郵書が来た。十時半就寝。

二十八日（月曜）陰（五十六度）

午前九時起床。

高梨君から短尺の礼状が来た。難波から返書が来た。松田君に頼まれた劇画の披露文二枚をかいて郵送。

午後一時頃に岸井が池田君の戯曲「九州の為朝」を持参。「舞台」も十二月号で満三年に相当するので、例年忘年会を拡張して、平素屢々寄稿をたのんでゐる人々をも招待することとし、岸井に日比谷間々亭の交渉をたのむ。岸井は一時間あまり話してゆく。

森部は午後から目黒にゆき、二時ごろ帰宅。

上野つぎ子の舞踊劇「飯盗人」と大隈俊雄の戯曲「裸の槍脇」を一読。おとくの郷里から礼状が来た。

けふは大工は来ず、ペンキ屋だけが来て塀を塗つてゆく。

読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。

二十九日（火曜）晴（六十度）

午前八時起床。けふは快晴。

九時半頃から森部同道で目黒へ出かけようとする処へ、小林蹴月君が来た。小林君は清水谷仏道場といふを発企するに付、私にも賛助員となつてくれ（と云ひ、）廿分ほど話してゆく。

それから目黒へゆく。先日 of 風雨で落葉がたまつてゐるので、森部は家根の掃除をする。糸瓜の棚を片付ける。花壇のダリヤ、カンナなどの球根をあげる。なか／＼忙がしい。それでも日当りが好いので、日中は汗ばむくらいであつた。

午後四時頃に目黒を出で、帰途渋谷の二幸で買物などして、五時ごろ帰宅。

留守中に福島きよ子が来て菓子をくれた。ほかに石岡君の使と黒川君が来たといふ。星野君と松田君から原稿の礼状が来た。

六時頃に佐久間が来た。つゞいて福島きよ子が再び来た。福島は三十分ほど話して去り、佐久間は七時半頃まで話して去る。佐久間は祖母の遺骨埋葬のために、来月二日大阪へ赴くといふ。

八時頃入浴。読書。十時半就寝。

三十日（水曜）晴（六十度）

午前八時半起床。

上野つぎ子の原稿を岸井に郵送。それと入れちがひに岸井から郵書が来て、陶々亭の会合は七日午後五時と決定して来たといふ。

十時半頃に額田が来て、これから印刷所へ支払ひにゆくといふ。今月は五十円ほどの赤字である。額田は一時間ほど話してゆく。

七日の宴会を嫩会員一同に通知。あはせて招待の人々へも案内状を発送。それは長谷川伸、川村花菱、渥美清太郎、松田青風、一二三淑夫、寺田鼎、松山崇、今村寅士の八氏である。

昭和七年十二月

午後一時半頃から四谷を散歩。二時半ごろ帰宅。留守中に豊田君が来て、京都みやげの蕪漬をくれた。

杉原が板塀の修繕料四十余円を受取りに来る。目黒の植木屋も廿六円を受取りに来る。いづれも過日の風雨の被害である。

三時半頃に三橋が来て、自作の戯曲を受取り、五時頃まで語る。

大久保の中村君から姉死去の通知が来た。山形の本間君からも郵書が来た。

七時入浴。読書。十時半就寝。

本月の仕事は団十郎を語る改造、十九枚)角(サンデー毎日、四十一枚)甲字倭筆記(報国、九枚)屠蘇きげん(木太刀、七枚)支那兵(文芸春秋、八枚)舞台原稿の編集など。

(翻刻担当…勝倉明以)

一日(木曜)陰、晴(五十六度)

午前八時起床。

おえいは目黒の煤掃きをするとして、おさきとおえつを連れて、十時頃から出てゆく。森部と私が留守番である。

大久保の中村君に悔み状を発送。豊田君に昨日の礼状を発送。本間君に返書。坂上君から郵書が来たので、返書。

小林君にたのまれた短尺五枚に俳句を揮毫。星野君から木太刀十句選をたのんで来たので、直ぐに選了。あはせて短尺十二枚に揮毫。

神戸の忍頂寺君から大口屋金翠の六十(賀)句集を送つて来たので、礼状を発送。浜松の土屋君から郵書が来たので、返書。雄山閣の長坂君から郵書が来て、八日午後五時から丸の内会館で歴史小説座談会を開くから出席してくれといふ。

四時半頃におえい等帰宅。森部に命じて、小林君方へ短尺をとだけさせる。

六時頃に額田が来て、大阪鮓と白魚をくれた。ついで佐久間が来た。佐久間は隣家を改築して、明治屋といふ菓子屋を開業するといふ。二人は七時過る頃まで話してゆく。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二日（金曜）晴（六十度）

午前九時起床。

机の抽斗や手箱を整理、兎角に反古がたまつて困る。晴れて風吹なく。陽気も暖いので、午後から銀座を散歩。十二月に入つてまだ日が浅いせゐか、流石の銀座も一向に歳晩らしい景氣をみせない。三越と伊東屋で雑貨と文房具をかひ、二時ごろ帰宅。

林君の戯曲「鉄槌王」を一読。五時半頃に岸井が来て、舞台新年号の戯曲原稿はすべて印刷所へまはしたと云ひ、一時間ほど語る。

大村、小林、中島から七日出席の返書が来た。招待の人々で出席の返書の来たのは、川村、渥美、寺田、一二三の四人、長谷川君は埼玉県旅行のために不参の返書が来た。

七時頃入浴。読書。十時半就寝。

三日（土曜）晴、陰（六十度）

午前九時起床。

紀尾井町の小林君から新宿一茶庵の広告を送つて来たので、額田に回送。正岡君から郵書が来たので、返書。星野君から十句選と短尺受取りの返書が来た。

林君の「鉄槌王」を編集し終る。

午後二時半頃、町内の永田理髪店へ髪刈りにゆくと、客が四五人も詰めかけてゐるので、引返して散歩。三時過る頃帰宅。

読書。四時頃に永田理髪店から迎ひが来たので、出てゆく。老主人死去について色々の話を聴く。私も若いときからの馴染であつただけに、今昔の感が深い。

おえいは森部と麹町三丁目の興農園支店へ行つて、クリスマス・ツリーの鉢植を買つて来た。

七時頃入浴。松田青風君から七日出席の返書が来た。読書。十時半就寝。

四日（日曜）雨、陰（六十度）

午前八時起床。細雨、やがて止んで陰る。

坂上君から郵書が来て、本日来訪のところ差支へができて参上しないといふ。

けふから思い立つて喜劇をかき始める。少しく暇が出来ると、やはり何か書いてみたいのである。をり／＼に晴れて、日光が洩れる。

午後一時頃に大村が歳暮の札に来て、森部や女中等にも歳暮品をくれ、三十分ほど話してゆく。市川猿之助、市川寿美蔵からも歳暮品をとゞけて来た。

森部に命じて大久保の長谷川君方へ先日の答礼品を

とゞけさせる。

一時半頃から四谷を散歩。二時半頃帰宅。

夕刻までに原稿十枚をかく。七時ごろ入浴。

八時頃に佐久間が長谷川〈君〉の戯曲原稿を持参、一時間ほど語る。佐久間は感冒のために大阪行を見合せたといふ。

読書。十時半就寝。

五日（月曜）雨、陰（六十度）

午前八時起床。細雨。

長谷川〈君〉の原稿を速達便で岸井に郵送。額田から郵書が来た。

青梅の斎藤君から「独吟」の礼状が来た。

森部は神楽坂で寺田君に落合ふ約束があるとして、十時頃から出てゆく。

喜劇をかきつゞける。十二時頃に木村君が来て、左団次一座春興行の二番目狂言に何か適当なものはないかといふので、舞台へ寄稿の長谷川君の戯曲のことを話すと木村君はそのゲラ刷を一度見せてくれと云ひ、五十分ほど話してゆく。右に付、岸井に郵書を発送。

一時頃に森部帰宅。寺田君同道で新潮社の佐藤俊夫君に面会して来たといふ。それから森部は四谷の丸尾君と赤坂の黒川君方へ歳暮品をとゞけにゆく。

雨は差しても降らず、終日陰る。ことしの歳晩は比較的に寒気が緩いやうである。

三時頃に中島が来て、一時間ほど語る。夕方までに原稿六枚。

七時ごろへ入浴。読書。十時半就寝。

六日（火曜）雨、陰（五十八度）

午前八時半起床。今朝も雨。

喜劇をかきつゞける。今村君から七日出席の返書が来た。

おえつがおせんと交代に目黒へ行くことになったので、午後から森部が送つてゆく。午後から雨やんで陰る。

額田と岸井から郵書が来た。夕方までに原稿十五枚。読書。七時ごろ入浴。十時半就寝。夜半に又もや雨の音。

七日（水曜）雨（五十二度）

午前九時起床。

十時過ぎ頃に、おせんは目黒から帰宅。夜半の雨やまず、今夜は陶々亭に舞台寄稿者を招待してあるので、この天気では困つたものであると思ふ。気候も俄に寒くなる。

喜劇をかきつゞけて、〈午後〉四時頃までに九枚。

四時半頃から日比谷の陶々亭へ出てゆく。雨はやまない。

来客は川村、渥美、松田、今村、一二三、寺田の六氏。

ふたば会は額田、大村、岸井、小林、山下、中島、岡田、三橋、佐久間、山崎の十名。六時頃から食卓に就て、私が挨拶を述べ、食後雑談。

十一時ごろ散会。岸井は「舞台」の誌友名簿を受取る
とて、私と同車して来た。

それから入浴。みやげの支那饅頭を〈家内〉一同に分配。

十二時三十分ごろ就寝。

八日（木曜）晴、陰

午前九時起床。けふも寒い。

サンデー毎日から原稿料を送つて来たので、返書。坂上君にも郵書。

十時半頃に上松のおすゞが来て、おえい同道で銀座へ出てゆく。

喜劇をかきつゞける。午後一時頃におえい帰宅。

三時頃に木村君が来て、東京劇場の春興行は左団次一座と決定、第一は「修禪寺物語」第三は「尾上伊太八」と内定したが、「尾上伊太八」は水平社問題が絡んでゐるので、多少訂正して貰ひたいといふ。就ては相談の上、

旧作に多少の訂正を加へ、更に第四幕を増補することに決めた。

夕方までに喜劇七枚をかく。今夜は「歴史新論」の座談会があるので、四時半頃から丸の内会館へ出てゆく。雄山閣の長坂君と池田君はもう来てゐた。つゞいて伊原君、中村君、笹川君が来た。以上六人、六時頃から食卓に就き、食後は史劇と史実とに関する座談あり。八時半頃散会。

九時ごろ帰宅。入浴。十一時就寝。

九日（金曜）晴

午前九時起床。

十時頃に長坂君が来て、昨夜の礼を述べ、門口で帰る。寺田君と松田君から一昨夜の礼状が来た。

十一時頃からおえいと森部同道で銀座の三越へゆき、鮭十箱を小林、渡辺、上松、北川、植田、山本、吉沢、額田、鈴木、菅野の十家へ配達をたのみ、自宅へも四箱をとどけて貰ふやうに頼む。更に小林、額田へ贈るべき歳暮品と、還暦答礼品などを買ひ、転じて松屋へ赴き、食堂で昼餐。こゝでも雑品数点をかひ、私の角袖外套をあつらへ、更に地下室で喫茶。二時ごろ帰宅。

留守中に大村が来て、おえいの胴着をくれ、三橋が来て歳暮品をくれ、黒川君が歳暮の礼に来たといふ。

大村と三橋に礼状を発送。大阪の中川君と神戸の浦井君に還暦祝の答礼品を発送。放送局の小林君にも歳暮品を発送。松田君と寺田君にも返書。

午後四時ごろ三越から鮭四箱をとどけて来たので、静岡の山本君、森部とおさきの実家へ発送。これにも送り状をかく。他の諸家へもそれ／＼に鮭の送り状をかく。少しく疲れた。

七時ごろ入浴。やがて佐久間が来て一時間あまり話してゆく。佐久間に年賀郵便七百枚の印刷をたのむ。

森部は額田方へ歳暮品をとどけに行き、九時ごろ帰宅。読書。十一時就寝。

十日（土曜）晴

午前九時起床。けふも快晴。

蒲田の渡辺君が来て、門口で帰る。

十一時頃からおえいと森部同道で目黒へゆく。私は四日滞任して「尾上伊太八」の追加を書きあげる積りである。

目黒の庭も冬枯れて、残りは枯尾花ばかりである。一本の山茶花が紅く咲いてゐた。

大工が来たので、過日の風雨に暴された家根瓦の修繕をたのむ。応接間の暖炉にも故障があるので、土田電機商会に修繕をたのむ。

森部と八幡通りへ出て、寒菊と水仙を買つて来る。こゝらの花屋は麴町辺に比べると頗る廉い。

四時過る頃におえいと森部は麴町へ帰る。入れちがひに佐久間が来て、門口で帰る。佐久間方ではいよ／＼十五日開店するといふ。

読書。六時半ごろ入浴。暮れて寒くなる。十時就寝。

十一日（日曜）晴

午前七時半起床。快晴。庭は一面の霜である。

九時から机にむかつて、「尾上伊太八」第四幕を起稿。

九時半頃に森部が来て、湯川君死去の通知をみせる。

湯川君は九日午後六時死去、今十一日午前十時から十一時までの間に、世田谷の自宅で告別式を営むといふので、森部に香典を持たせて遣る。知人のおひ／＼に零落するのは寂しい。

終日出でず、原稿をかきつゞける。晴れて風なく、而も寒い日である。晚餐までに原稿二十枚をかく。

土田電機商会員が来て、暖炉のメートルを明日取付けに来るといふ。

六時半ごろ入浴。読書。十時就寝。

十二日（月曜）晴、風

午前八時起床。西南の風強く、寒氣弛む。

「尾上伊太八」昨日起稿の分を訂正。午後三時頃までに更に八枚かく。大村から郵書が来た。

電気局員が来て、暖炉のメートルを取付けてゆく。風は止まない。

六時頃から驟雨、七時半頃まで降りつけて止む。

七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

十三日（火曜）晴

午前八時起床。風がやんで又寒くなる。

「尾上伊太八」を訂正しながら浄書。

午後二時頃から中目黒の大通りを散歩。晴れてはゐるが、寒い。こゝらも歳晚大売出しで景氣を付けてゐた。

三時頃帰宅。森部から郵書が来た。

六時頃に出火の警鐘が聞えたが、氣にも留めずに原稿をかきつけてゐると、大工と豆腐屋が近火見舞に來た。聞けば学校の傍であるといふ。驚いて出てみると、猿樂町の角谷といふ家からボヤを出したので、大事に至らずに消し止めたのであつた。兎も角も近火には相違ない。私等は些つともしらない「■」（かつたの）である。

七時頃入浴。八時頃までに浄書廿二枚、訂正しながら書くので、一向に抄取らない。

読書。十時半就寝。

十四日（水曜）晴

午前七時半起床。今朝も庭に霜が白い。

「尾上伊太八」の浄書八枚、あはせて三十枚。これで兎も角も脱稿。かうして出来上つてみると、やゝ蛇足の感が無いでもない。

午餐後、八幡通りを散歩。一時頃帰宅すると、やがて額田の細君が来て、一時間ほど話してゆく。つゞいて小林宗吉が来て、一時間ほど話してゆく。

「尾上伊太八」を再び訂正。どうも巧く行かない。七時ごろ入浴。読書。十時就寝。

十五日（木曜）晴（五十二度）

午前七時半起床。

けふは麹町へ帰る筈で、バスケットなどを整理してゐると、九時過る頃に森部が迎ひに來た。十時頃から目黒を出る。

佐久間の店は本日開業であるといふので、帰途に立寄ると、店飾りなどを綺麗にして景氣を付けてゐたが、何分にも場所が悪いので成績が危ぶまれた。兎も角も開業祝ひに菓子や缶詰などを買つて出る。

十一時過る頃帰宅。留守中に鈴木余志子、鈴木未亡人、

岸井等が歳暮の礼に來たといふ。諸家から鮭の礼状も來てゐた。

十一時半頃に丸尾の細君が歳暮に來て、三十分ほど話してゆく。品川の長谷川君から台灣のジャボン一籠をとどけて來た。

午後一時頃に津沢の寿子が歳暮に來た。岡田禎子が來て、内裏に借りて行つた「玉藻前」を返却、中野が來て歳暮の品をくれ、いづれも門口で歸る。寿子は二時半頃に去る。

留守中に到着の郵便廿余通。その返信八通をかく。小川君、大野君、浦岡君方へ歳暮の品を持たせてやる。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寢。

十六日（金曜）晴（五十度）

午前八時起床。

森部は朝から目黒へゆく。

福岡の大石君、小樽の増田君に頼まれた短尺十三枚、浜松の土屋君と北城新報から頼まれた色紙六枚に揮毫。

十二時頃に木村君が來て、「尾上伊太八」の原稿を受取り、三十分ほど話してゆく。浦岡の細君が來て歳暮の品をくれ、門口で歸る。つゞいて目黒の姉が來て、森部や女中達に歳暮をくれた。

午後二時頃に長谷川直蔵君が來た。震災後、一度逢つ

たざりで、久しぶりの対面である。長谷川君相変わらず元氣よく、一時間半ほど話してゆく。

そのあひだに岸井と鈴木余志子が來て、おえいを相手に話してゐた。長谷川君が去つて後、応接間に來て雑談。鈴木は京都を去つて、横浜の実家に歸つてゐるといふ。

鈴木は四時過る頃に去り、岸井は五時頃まで話してゆく。渡辺の愛子が來て、北海道の林檎をくれた。森部の実家から梨を送つて來た。銀座の松屋から岡田禎子の歳暮品をとどけて來た。

八時頃に大野君が來て蜜柑をくれ、十時廿分頃まで話してゆく。そのあひだに佐久間が來て、開店当日の成績は意外に好かつたと、おえいに話して行つたといふ。

それから入浴。十二時就寢。

本日前九時廿五分、日本橋の白木屋百貨店四階から発火、四階、五回、六階を焼失して、午後零時三十八分鎮火。死者十二人、重軽傷者百余人、近代の変事である。

十七日（木曜）晴（五十度）

午前九時起床。

森部に命じて、築地の池田君方へ歳暮の品をとどけさせる。

木村富子から舞踊劇「藤戸物語」の原稿を送つて來たので、返書。森部の実家、旭川の渡辺博、岡田等に礼状

を発送。山梨の河野君から郵書が来たので、返書。

十一時頃に正岡君が来て蜜柑をくれ、十二時半頃まで語る。

梨と林檎とへを浦岡君、近藤君方へ分配。おさきの父が来て大磯の魚をくれた。

午後二時半頃に植村君が来て、煙草をくれ、一時間あまり語る。ついで菅野へ君が来て歳暮の品をくれ、四時頃まで話してゆく。

銀座の松屋から過日注文の外套をとどけて来た。

木村富子の「藤戸物語」を編集。読書。額田から郵書が来て、鎌倉の甥はいよゝゝ危篤であるといふ。

八時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

十八日（日曜）晴（五十度）

午前八時起床。

「現代」から頼まれた百字文の原稿を発送。寺田君から郵書が来たので、返書。

十一時頃から神田を散歩。古本、原稿紙、帽子などを買つて、二時ごろ帰宅。晴れて風の無い日である。

川原小枝子から郵書が来たので、返書。石角君から戯曲集を送つて来たので、返書。

年賀ハガキの上書き——森部に書いて貰ったのが五百七十七枚、私の書いたのが廿三枚、併せて六百枚。

四時過る頃に林君が来て、一時間ほど話してゆく。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

十九日（月曜）晴（五十度）

午前八時起床。

「百貨店雜感」四枚をかいて、百貨店新聞社に郵送。井上良平君から還暦祝の服紗を送つて来たので、返書。おとくの実家から餅を送つて来たので、返書。

午後から森部は餅と干魚をたづさへて、目黒へゆく。私も一時頃から四谷辺を散歩。二時ごろ帰宅。

留守中に春陽堂の木呂子君が印税をとどけて来たので、受領証を発送。銀座のふたばから鶏肉をとどけて来た。

「舞台」二月号に「改訂尾上伊太八」の第四幕を掲載するので、その原稿を訂正。大野君に頼まれた短尺四枚と色紙一枚に揮毫。植村君に頼まれた短尺四枚に揮毫。細野多智子が歳暮に来て、門口で帰る。研文社から「舞台」新年号廿部をとどけて来た。

読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十日（火曜）晴（六十度）

午前八時起床。

研文社の使が来て、昨日とどけて来た「舞台」には広

告の組み違ひがあるといひ、改正の雑誌と取替へてゆく。
右新年号の雑誌を原田、東儀、高橋、池田、林、清水、
難波の諸家へ発送。

旧作の戯曲を訂正し終りて、更に旧作の小説類を訂正。
午後十二時半頃から四谷を散歩。この暮は好景氣といふことであるが、四谷の大通りもまだ一向に歳末らしい景色もみえない。

南風強く、寒氣俄に弛む。

三時半頃に小林が来て、一時間あまり話してゆく。
読書。八時ごろ入浴。十時半就寝。

二十一日（水曜）晴（五十度）

午前八時起床。きのふに引きかへて、今日の風は寒い。
額田から森部宛の郵便が来て、鎌倉の栄一は遂に十九日午後七時三十分死去したといふ。かねて覚悟のことではあるが、氣の毒であつた。

寺田君から郵便が来た。木村富子から郵便が来て、小説の原稿を一冊に取纏めてくれといふ。

森部は午後から額田方へゆく。おえいは目黒へゆく。
小説の原稿を訂正し終る。西瓜、鴛鴦鏡、白髮鬼、鷲、鰻に呪はれた男、くろん坊、妖婆、深川の老漁夫、怪談コント、五色蟹の十編、あはせて三百五十枚余、これにて読物集第六巻纏まる。

横浜の高橋から加賀の獅子頭を送つて来た。大谷君から歳暮品をとゞけて来た。鶴岡君から自宅の工場製造の織物をとゞけて来た。

三時半頃におえい帰宅。つゞいて岸井が来た。

雄山閣の湊元君が来て、私の写真を借りてゆく。つゞいて山下が来た。

森部から速達便が来て、額田の甥の告別式は明廿二日であるから、今夜は額田方に通夜するといふ。

国民新聞の中川君が来て、新年の思ひ出話を聴いてゆく。つゞいて佐久間が来た。それからそれへと来客がつゞいて、六時半頃に皆去る。

雄山閣の使が来て、先夜の座談会の速記原稿をとゞけて行つたので、直ぐに一読、訂正。

八時ごろ入浴。十時半頃に速記原稿を訂正し終る。
十一時廿分ごろ就寝。

二十二日（木曜）晴（五十八度）

午前八時起床。風がやんで暖い日である。冬至。

高橋に返書。あはせて依頼の短尺十枚に揮毫。

額田の甥の告別式参列するために、午後一時頃から阿佐ヶ谷の額田宅へ出てゆく。佐久間もあとから来た。ほかに額田側の親族廿余人列席。式は定刻よりおくれ、四時半頃に終る。

佐久間同道で帰途につき、阿佐ヶ谷駅前で喫茶。それから省線に乗って、新宿で佐久間に別れ、四谷で下車。五時半ごろ帰宅。留守中に三橋が来た。ほかに新潮社の奥村君が来たといふ。市川鶴之助も歳暮の礼に来た。おとくから郵書が来て、去る十五日郷里で結婚式を挙げて上京、本所区大平町一丁目におちついたと云ふので、返書。

七時半ごろ入浴。〈今夜は柚湯を焚く。〉読書。八時過る頃に森部帰宅。十時半就寝。

二十三日（金曜）晴（五十二度）

午前八時起床。

十時過る頃に額田の細君が昨日の挨拶に来て、一時間あまり話してゆく。額田の本家も相続人を亡つたので、その後始末がなか／＼面倒であるらしい。

午後一時頃に春陽堂の木呂子君が来て、読物集の原稿をうけ取り、一時間ほど話してゆく。

静岡の山本君と湯河原の西沢君から蜜柑を送つて来たので、いづれも返書。横浜の高橋に短尺を発送。

岸井から研文社の詫状を送つて来て、これを大村に廻してくれといふ。舞台新年後に掲載されてゐる大村の戯曲集の予告が黒枠めいた線に囲まれてゐたので、岸井は非常に不快を感じ、印刷所に対して嚴重に詰責した為で

ある。早速その詫状を大村に発送、岸井にも返書。

三時半頃に三橋が来た。これも舞台新年号の件である。つゞいて鶴岡君が来て、三十分あまり話してゆく。

読書。七時半ごろ入浴。松竹の小出君から原稿を郵送して来た。浜松の土屋君から揮毫の礼状が来た。目黒の植木屋が鉢植の梅を持つて来た。

森部、おさき、おせんにポーナスを遣る。
十時半就寝。

二十四日（土曜）晴、陰（五十度）

午前八時起床。

寺田君から郵書が来たので、返書。小出君にも返書。福島きよ子の戯曲に批評を添へて、返送。

午後二時頃から町内の永田理髪店へ髪刈りにゆき、主人と職人に歳暮の金をやる。陰つて寒い。

三時ごろ帰宅すると、一二三君が来て待受けてゐた。一二（三）君は大森の海苔をくれ、五時頃までに話してゆく。中島が歳暮に来て、門口で帰る。

読書。七時半ごろ入浴。十時半ごろ就寝。

二十五日（日曜）晴（五十度）

午前八時起床。

文芸春秋社から原稿料を送つて来たので、返書。

森部に命じて、銀座の平山君方へ歳暮品をとゞけさせる。海野の細君が歳暮品を持参、門口で帰る。町内の中川君からも歳暮品をとゞけて来た。

小山内君五週年追悼公演会を廿七日から築地小劇場で四日間開催するに付、その入場券の売捌方を頼んで来た。此際むやみに押売も出来ないもので、私がそれを買ひ取つて他へ分配するの外はない。それにしても、〈小〉山内君逝いて五年、月日の早いには今更おどろかれる。読書。四時頃に東儀が歳暮品を持参、三十分ほど話してゆく。

今夜は嫩会例会で、五時半頃に山下が来た。つゞいて岸井、大村、岡田、額田、中島、三橋、佐久間が来た。佐久間は歳暮品を持参、小林からは欠席の電報が来た。席上で小山内君追悼演劇の入場券を嫩会員に分配。例に依て劇談、雑談。

十時半ごろ散会。それから入浴。十二時半就寝。

二十六日（月曜）陰（四十八度）

午前九時起床。朝から陰つて寒い。

栃木の鶴岡君に歳暮品を発送。南柯吟社の横山君から硯屏、前橋の藤嶋君から真綿、福島 of 石井から菓子を送つて来たので、いづれも返書。

「東京の初午」三枚をかいて、武侠社に郵送。

三時半頃に俵木が歳暮品を持参、四十分ほど話してゆく。俵木は過日来痔疾に悩んでゐるといふ。隣家の近藤君から神戸の蒲鉾をくれた。

読書。七時過る頃に額田が啓三同道で来て、八時頃まで語る。

八時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十七日（火曜）雨、陰（五十度）

午前九時起床。朝から細雨。

横浜の高橋から短尺の礼状が来た。寺田君から返書が来た。

午後から雨やんで陰る。けふは餅搗。

誌友岡本薫君の戯曲「木枯」を訂正。三時頃に山下の細君が歳暮品を持参、三十分ほど話してゆく。

歳暮品を小包み便にして、奥田君に郵送。

夕刊に東京劇場の「尾上伊太八」の役割が出てゐるが、そのうちに私に無断で役割を変更したのがある。取りあへず木村君宛に詰問状を発送。

松屋から額田の名で紅梅の鉢植をとゞけて来た。

七時半ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十八日（水曜）陰（五十度）

午前八時半起床。

森部は目黒へゆく。

サンデー毎日の新妻君に郵書を送る。寺田君の紹介状である。

吉岡医師から還暦祝として、木彫の菓子器をとぎけて来た。隣家の近藤君からあま鯛をくれた。

午後、四谷を散歩。一時半ごろ帰宅。岡本君の「木枯」を編集し終る。町内の仕事師が来て門松を立てる。

三時頃に宮森君が来て、その著「英訳俳句」をくれ、一時間余り語る。ついで寺田君と塩谷君同道で来た。そのあひだに奥田君が来て、歳暮品をくれ、門口で帰る。奥田君は三輪と改姓したさうである。又そのあとへ岸井が来た。

宮森君去り、寺田君等去り、岸井はあとに残つて六時頃まで話してゆく。森部は目黒で門松を立てゝ来たさうである。

七時ごろ入浴。読書。十時半就寝。

二十九日（木曜）雨（四十八度）

午前八時半起床。

十時半頃に植村君が来て、私が揮毫の短尺を受取り、一時間ほど話してゆく。

大阪の森田が突然上京したとて、電話をかけて来て、今夜七時頃にたづねて来るといふ。横浜の高橋から京都

の昆布を送つて来たので、返書。

森部は築地小劇場の小山内君追悼演劇を見物にゆく。その途中、麻布の海の方へまはつて歳暮品をとぎさせる。

午後一時頃に木村君が来て、「尾上伊太八」の役割変更について釈明があつた。今更どうにもならないので、兎も角も聴いて置く。木村君は一時間ほど話して去る。雨をり／＼に止む。

三時頃に佐久間が来て、開店早々の歳末頗る多忙であるといひ、これも一時間ほど話してゆく。小林君から歳暮として醤油樽をとぎけて来た。

五時半頃に森部帰宅。森田上京を聴いて、山下等も来るといふ。六時半頃に山下、岸井、三橋が来た。七時過る頃に森田が来た。

東劇の潮崎君が来て、「尾上伊太八」の筋書を時事新報に連載したいと云ひ、門口で帰る。

森田が上京の用向きは、来春二月の大阪歌舞伎座で大村の「堂島繁昌記」を上演する件である。山下等と五人会談。森田は頗る元気が好く、午後九時四十五分の汽車に乗ると九時廿分頃に去る。山下等も共に出てゆく。

それから入浴。十一時半就寝。雨の音強く、風も吹き出した。

三十日（金曜）雨（五十度）

午前九時起床。

雨降りしきる。歳末に迫つて、この天気では諸人の難儀が思ひやられる。私も少しく感冒の気味である。

十時半頃に小林の細君が歳暮の挨拶に来て、森部と女中等に歳暮の金をくれ、一時間ほど話してゆく。

額田に郵書を発して、森田上京の件を報告。その件について大村からも郵書が来たので、返書。

午後二時頃に東京劇場から迎ひの自動車に来て、これから舞台稽古にかゝるとの事であつたが、感冒のために断る。

本月初旬起稿の戯曲を訂正。喜劇だか笑劇だか訳のわからぬものである。

三時過る頃に黒川君が来て、おえいに面会、「尾上伊太八」の役割の件について、頻りに諒解を求めて行つたさうである。

読書。福島きよ子から脚本うけ取りの礼状が来た。

八時ごろ入浴。十時半就寝。

三十一日（土曜）晴（五十八度）

午前八時半起床。朝から快晴、寒気も弛む。

戯曲を訂正、大坂の北村君から奈良漬を送つて来たので、返書。

午後十二時半頃から森部同道で四谷を散歩。カレンダー二種をかひ、晦日そばを食つて二時ごろ帰宅。

書齋の書棚を整理。相変らず古雑誌や反古が沢山に出る。四時頃に黒川君が来て、五時頃まで話してゆく。

おえいは晚餐後、おさきとおせんを連れて四谷へ買物にゆく。

読書。本年は目黒に控家を新築、十月は還暦の祝があり、先づは無事で目出たい一年であつた。春は中耳炎、夏は口内炎、私の病気は（年々のことで）已むを得ない。

九時過る頃におえい等帰宅。終日風無く、晴れて暖く、近年めづらしい大晦日であつた。インフレーションのために市中の景気もよいと云ふ。真川君から蒲鉾を送つて来た。

十時ごろ入浴。十二時半ごろ就寝。

おえいと私と、森部、おさき、おせん、一家五人めでたく年を送つた。目黒でも姉とおえいが無事に越年した筈である。

本月の仕事は尾上伊太八の追加一幕（東京劇場、三十枚）夢（戯曲、四十七枚）ほかに舞台の編集など。

（翻刻担当…赤井紀美）

書名 岡本綺堂日記 昭和六年一月～昭和七年十二月

岡本綺堂日記研究会編（横山泰子監修、赤井紀美編集）

早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点 二〇二四・二〇二五年度

公募研究課題「岡本綺堂旧蔵資料に関する基礎的研究」（代表：横山泰子）

発行日 二〇二五年七月三〇日

発行 早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点

代表 児玉竜一

〒一六九―八〇五〇

東京都新宿区西早稲田 一―六―一

早稲田大学早稲田キャンパス六号館

<https://prj-kyodo-enpaku.w.waseda.jp/index.html>

※本書にかかわる研究の一部はJSPS科研費23K12047の助成を受けたものである。

岡本綺堂日記研究会編
横山泰子監修、赤井紀美編集

